
ミッドナイトウルブス

石田 昌行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッドナイトウルブス

【Nコード】

N1254Z

【作者名】

石田 昌行

【あらすじ】

沢渡真琴は走り屋に憧れる女子高生。隣に住む歳の離れた兄貴分、壬生翔一郎の世話を焼きながら青春を謳歌している。ある日の夜、峠で知り合った尊敬する仲間、三澤倫子の下へ質の悪い男、芹沢聡が現れ、彼女自身を掛けたレースバトルを挑んできた。彼らとの因縁を断つためその勝負を受けた受けた倫子だが、卑劣な罠にはまり愛車を損傷、戦うことが不可能となってしまう。バトル当日、不戦敗という結末に憔悴する倫子をかばい芹沢に抗議する真琴だが、当たり前のように一顧だにされない。その時、真琴の隣にいた翔一

郎が突然代役を申し出る。「素人のオッサンが現役の走り屋と戦おうってのか」傍目にも無謀な行為に翔一郎を嘲笑う芹沢たち。しかし、彼らも、そして真琴たちも知らなかった。翔一郎がかつて「魔術師」とまで呼ばれた伝説の走り屋であったことを。アルファポリスとの重複投稿となります。さらに某所で晒し中。

序章

緩い高速コーナーが目前に迫る。右だ。

ヘッドライトに照らし出された白いガードレールが、限定された視野の中で急速にその面積を広げてくる。

この時の車速は、優に時速一〇〇kmを越えていた。

クルマに装備された速度センサーがそれを察して、耳障りなチャイムを打ち鳴らしている。

おのれの心臓が喉から飛び出しそうになるほどの恐怖感。

だが、俺の精神と肉体は、この時まだ機械のような冷静さを保っていた。

ステアリングを軽く右に切りつつフルブレーキ。

急激な荷重移動によって車体が前傾するのと同時に、後輪のグリップが喪失する。

直後、フロントガラス越しに見える光景すべてが高速で真横にぶっ飛んだ。

テールが横滑り^{スライド}を開始した。

その刹那を座席越しに腰骨で感じ取り、タイミングを見計らって四速^{フット}から三速^{サード}、二速^{セコ}へシフトチェンジ。

ギリギリのカウンター^{逆ハンドル}ステアで姿勢の変化を最小限に食い止める。もちろん、アクセルは全開だ。

ブレーキング・ドリフト。

高速で流れる車体を今度は若干のアクセルオフで立て直すと、高^パ回転域^{ワイド}を維持したまま、一気にコーナー出口を立ち上がる。

ふたたびトラクションを得た後輪が力強くアスファルトを蹴り上げ、俺の愛車、GA-61「セリカ^{ダブルエックス}XX」は、猛然とターゲットの尻を追った。

深夜の八神街道。下り。

スキール音の轟く空間内に人の気配はない。

1 G - G E U、二〇〇〇 c c D O H C エンジンが奏でる心地よい振動に、心臓の鼓動が重なり合った。

アドレナリンが体中を駆け巡る。

軽く左に反ったストレート。

ハチロク

一車身前を走る A E - 8 6 「トレノ」のテールランプが、見る見るうちに近付いてきた。

このほとんど直線に等しい区間だと、どうしても心臓エンジンの差が顕著になる。

いかに軽量ではあっても、所詮は一六〇〇 c c の排気量に見合った馬力しか持たない「ハチロク」にとって、まっすぐでの勝負は、大きな泣きどころのひとつであった。

速度の伸びを利用して、G A - 6 1 のノーズを、外側アウトから相手の右サイドへとためらうことなく突き入れる。

まもなく現れる右コーナーへ差し掛かるよりも早く A E - 8 6 の鼻面を押さえることが出来れば、俺の勝ちだ。

それは複雑な感触だった。

俺は本当にこの勝利を望んでいるのだろうか、と今更ながらに自問する。

俺は、ただ自らの想いに決別の鞭を入れるためだけに、奴との勝負を選んだはずではなかったのか。

だとしたら、この目前の勝利には、一体どのような価値があるのだろうか。

俺が勝負を挑んだ時に奴が見せた、なんとも表現のしがたい困惑の顔付きを思い出す。

だからと言って、手を抜くことなど俺には出来はしなかった。

奴だって、それぐらいのことは判っているに違いない。だが、しかし……

一瞬の逡巡が、頭の片隅にこびりつく。

強く頭を振って、その雑音を引き離れた。

その時だった。

何か黒い影が俺の前方を横切った。

イタチか何かか？

ドライバーの本能に従い、反射的に右足がブレーキペダルを踏み締める。

しまった、と思った時には、もうすでに手遅れだった。

不自然極まりない荷重の変化によって唐突に姿勢を乱したGA-61は、激しくテールを振りながら後落する。

AE-86との接触を免れたのが、奇跡としか言いようのないタイミングだった。

だが、ステアリングにしがみつくようにしてクルマの姿勢を立て直した直後、俺はその光景を見てしまった。

制御を失いスピンのしたAE-86が、左ガードレールに深々と突き刺さるのを。

声にならない何か、俺の喉からほとばしった。

一章：ロードレーサー（１）

「起きろ、翔兄しょうにい。起きろ！」

体を激しく揺さぶられたことで、壬生翔一郎みぶしやういちろうは夢の中から現実世界へと帰還を果たした。

低血圧気味なボケた頭が今日は非番日であることをかるうじて思い出し、その手が枕元の目覚まし時計を無造作につかみ取る。

針が指し示しているのは、午前七時三〇分。冗談じゃない。

「誰だよ、こんな朝っぱらから」

いかにも不機嫌そうに寝癖の付いた頭髪を引っ掻きつつ、安息の時間を無理矢理に奪い去った襲撃者を、半開きの左目で睨み付けた。最初に見えたのは、すらりと伸びた長い両脚だった。

柔らかな曲線を描く若い女性の大腿部。

瑞々しさがいつぱいに詰まった取れたての野菜を思わせる二本のそれに沿って視点を上げていくと、チェックのスカートに続いて白い半袖のブラウス、シンプルなワインレッドのネクタイで飾られた胸元へと行き着いた。

市内にある私立高校の制服だ。

「なんだ、真琴か」

制服の主が誰であるのかを迅速に察した翔一郎は、面倒臭そうに上体を起こして、ぐっと大きく伸びをうった。

ふぁー、と大きく生あくび。

デスクワークで凝り気味の肩を軽く回してから、不満げに口先をとがらせる。

「おまえな、日々の労働で疲労している俺のことを少しは思いやつて、休みの日ぐらいいは昼まで寝かせといてあげよう、なんて殊勝な気は起こさんのか？」

「翔兄い。まだ三〇代前半なのに、疲れてるうゝ、なんてオヤジ臭いこと言わないでよね。そのうち禿げるよ」

両手を腰にあっけらかんとそう言い放って見せたのは、壬生家の隣に住む三大家族、沢渡家のひとり娘、沢渡真琴だ。さわたりまこと

来年卒業の私立高校三年生。

いたずら猫のように好奇心いっぱい大きな瞳と人好きのする整った顔立ち。

少々跳ね返りの強い栗色がかった髪の毛を、頭の後ろでポニーテールにまとめている。

衆目を集めるという点ではいささかパンチ力に欠けるが、まずまずの美形だと言ってよからう。

少なくとも、同年代の男性が否定的見解を示すような容貌ではない。

壬生家と沢渡家との付き合いは古い。もう二〇年近くになる。

真琴が生まれた時、翔一郎は入学したばかりの県立高校生一年生で、共働きなうえに帰宅の遅い沢渡夫妻になり代わり、随分と長い間、幼い彼女の面倒を見続けてきた。

まあ、歳こそ大分離れているが、兄妹みたいな関係だと言っても間違いはあるまい。

そんな訳だから、翔一郎が真琴の“オンナ”を意識するようなことは、これまでほとんど言っていないほどなかったのであるが、ここ数年、あまりにも自分のテリトリー内に堂々と踏み込んでくる彼女の態度に対しては、少しばかり辟易しているのも事実だった。

俺も一応、“オトコ”なんだがな。

下着姿のまま布団の中から這い出て、流行とは縁遠いカジュアルなシャツに袖を通しながら、翔一郎は思った。

機会があれば、一度ガツンと言ってやらねばなるまい。

「終わった？」

翔一郎が服を着ている間、一旦部屋の外に出ていた真琴が、唐突にドアを開けて顔を出す。ノックがないのはいつものことだった。

翔一郎の朝は、大抵こんな感じでスタートする。

この後は、せきたてられるように顔を洗ってひげを剃り、きつか

り三分間の歯磨きが終わったら、順序は逆だが朝食の時間だ。

作るのは、襲来者である真琴の仕事。

パン屋を営む翔一郎の両親は、帰宅も早いが出勤も早い。

午前四時前には繁華街に構えた店の方へと向かうので、仮に彼女の存在がなかったとしたら、翔一郎の毎日から暖かい朝食というものは完全に消え失せてしまっていたことだろう。

「いただきます」

畳の上に胡座をかけた翔一郎が、食卓にのったお椀に向かい両手を合わせる。

何かと忙しい両親の分と、ひとり暮らしに近い翔一郎の分、微妙に違う二通りの食生活を年中管理しているせいなのか、見るからに行動的で活発そうな外見とは裏腹に、真琴が身に付けた料理の腕前は相当のものだ。

目の前に並べられた献立も、炊きたての白い御飯に豆腐の味噌汁、温泉卵に自家製の糠漬けというシンプル極まりない純和風メニューの定番なのに、不思議と舌を飽きさせない。

「ごちそうさん」

「どういたしまして」

と、夫婦のごとき会話を最後に、朝食は終了。

なお、翔一郎が箸を口へと運んでいる間、真琴の方はと言えば、それを楽しげに眺めているだけだ。

大分前にそのことを疑問に感じた翔一郎が、おまえは食べないのか、と問うたところ、もう済ませてきた、という明確な返答を受け取ったそう。

「八時か」

気が付けば、もうそんな時間。

読んでいた朝刊を脇に置き、エプロン姿で朝食の後片付けをしている真琴に向かって、翔一郎が声を掛ける。

「学校大丈夫か。いつもなら、もう出てる時間だぞ」

「送ってってよ、翔兄い」

振り向きざま、単刀直入に彼女は答えた。

「いや、実は朝起きたらミニバイクの後輪がパンクしちゃってさ。今からじゃ、電車に乗っても間に合わないし。にやはは」

「おい」

右手でこめかみを押さえて、翔一郎は不満の声をもらした。

「休日に叩き起こしに来るから何かと思えば、さては最初からそれが目的だったな」

「そだよ。悪い？」

「愛車の面倒ぐらい前もって見ておけと、あれほど」

「毎朝、御飯作ってあげてるんだからさ、たまには助けてくれてもいいじゃない。どうせ助手席に若い女の子乗せる機会なんて、翔兄にはないんだし」

「ほつといてくれ！」

実のところ、こうしたやりとりは過去に一度や二度の出来事ではない。

そして、最終的に意見を通すのは、いつでもどこでも真琴の側だ。本質的に根っからのお人好しである翔一郎は、口は悪いが押しが弱い。

従って、ナチュラルに強引極まりないこの歳の離れた妹分を、最後の最後で突き放すことが出来ないでいるのである。

数分後、翔一郎と真琴は、壬生家から数建隔てた月極駐車場に来ていた。

住宅と住宅の間に挟まれたその空間からは、すでにほとんどの車が朝の出勤などにより出払っており、今は翔一郎の愛車だけがぽつんと残されているような状況だった。

スバルBE-5「レガシィ・B4」
ビフォー

ハードトップ型の四ドアセダン。

フロントに搭載されたEJ-20、水平対向四気筒二〇〇〇ccエンジン+ツインターボが生み出すカタログ値二六〇馬力の高出力と、熟成されたフルタイム4WD、そして高レベルのセッティング

が施された足回りの三者によって確立された走行性能は、玄人筋からも評価が高い。
サスペンション
ブラックパールマイカ

色は光沢の入った黒。

昨晚のうちに降った雨が、ボンネット上部に開けられたエアインテーク周辺にいくばくかの水玉をこしらえていた。

先週末に塗ったばかりのカルナバワックスによる皮膜は、いまだ十分な効果を上げているようであった。

大学卒業まで乗っていた冴えないクーペを手放して以来、翔一郎が二代目の愛車であるこのクルマをずっと大事に扱ってきたことを、真琴はちゃんと知っていた。

昨年 of 年暮れに、左のサイドウインカー上部分を併走していた大型車からの飛び石で傷付けられ、時折みぞれの降る中、ひとりで修復作業に勤しんでいたのも、すっかりと目にしている。

もつとも、素人業の悲しさか、作業は見事に失敗し、今では補修跡を隠すため、その部分には市販の白いステッカーが貼られていた。くるりと丸で囲った、手書き風の“Boxer Inside”という文字。

ボクサー
Boxerとは、交互に水平移動するシリンダーがボクシング選手 of 手の攻防動作を思わせることから、水平対向エンジン全般に付けられたニックネームである。

それゆえ、このステッカーは水平対向エンジンを搭載しているクルマによく貼られている代物なのであるが、こんな場所に貼り付けてある個体は意外なほどに見当たらない。

そうこうしている間に、BE-5のハザードランプが二回点灯した。

翔一郎がエンジンキーに付いたりモコンで、ドアの施錠を解除したのだ。

「シートベルト、忘れるなよ」

「イエッサー」

翔一郎の言葉にさっと敬礼してみせた真琴が助手席に乗り込むの

と前後して、BE-5のエンジンが起床した。^{EJ-20}

車体が軽く身震いした直後から、ぼぼ、という独特の排気音が
耳朵に届く。

パツと見、翔一郎の「レガシィ・B4」は無改造に見えた。^{ノーマル} 少な
くとも、真琴の目にはそう映った。

リップスポイラーからリアのアンダースポイラーまでひととおり
装備してあるエアロパーツは新車購入時にオプションで取り付けた
純正のものだし、後になって取り付けたリアウイングも購入店^{ディーラー}で買
ったおとなしめのもの。

マフラーだけはかろうじて見栄えのいい大口径のスポーツタイプ
だが、テールエンド部分が青みがかって煤けているのを見る限り、
あまりたいしたものではないようだ。

せっかくハイパワー車買ったんだから、チューニングくらいした
らいいのに。

翔一郎のBE-5を見るたび、真琴は思う。

大体、運転席左右のダッシュボード上に都合四つもの追加メー
タを取り付けておきながら、クルマを長持ちさせるための状態管理
に使うんだ、とは一体全体どういう感性をしているのだろうか？

市役所の住民課で日々煩雑な事務仕事をこなしている翔一郎は、
いわゆる地方公務員である。

彼は、あくまでも真琴が知る限りではあるが、酒も煙草もやらな
いしパチンコなどのギャンブルもしない。

ましてや、夜の街に繰り出している気配など微塵もない。

趣味といえば、パソコンでインターネット^{サーフィン}を検索したり、週に何
度かスポーツジムで汗を流したりするぐらいで、お金はそれなりに
持っているともいいだろう。

「ねえ、翔兄い」

助手席側のドアをぱたんと閉じるなり、真琴は唐突に話を切り出
してみた。

どうせ駄目もとなんだし、言ってみて損はナイじゃん、とばかり

に。

「このクルマ、いじる気ないの？ いろいろパワーアップして夜の八神街道走ると、きつと気持ちいいよ。やろうよ、ね」

「おいおい、三十路になってから峠デビューするつもりは、俺にはないぜ」

何言つてやがる、とでも言い出しそうな表情で、翔一郎は答えた。
「大体、そんな気があったら、オートマ^{A/T}なんて乗ってないっての」
「ちえっ、駄目か」

流石に駄目もとを覚悟してただけあって、真琴はあっさり引き下がった。

ドライバーが手動でシフト位置を選択出来る^{スポーツシフト}SS-A/Tを搭載しているとはいえ、翔一郎のBE-5は間違いなくオートマ、つまりA/T車だ。

クラッチ操作がない分だけ便利と言えは便利だが、^{トルクコンバーター}湿式クラッチを介して駆動力を伝達するA/T車は、機械的にエンジンと直結出来るMT車と比較して出力の損失^{ロス}が大きく、アクセル操作に対する反^{レス}応も鈍い。

一般的には“峠を攻める”といったような激しいドライビングに向いていると思われていないし、事実そのとおりだろう。

「いい考えだと思ったんだけどな」

自分の思い付きにまだ未練があるのか、少しだけ口先をとがらせつつ左膝を持ち上げ靴紐を結びなおす真琴。

中学以来陸上部一筋の彼女は、履くもののフィット感については割と神経質な方だ。

愛車に対するそれとは異なって、流石に自分の“足回り”には気をつかうのだな、などと翔一郎は思う。

ただし、隣からの視線について彼女はどうも無関心なようで、普段はスカートの奥に隠されている脚の付け根から白い何かがちらりと見えた。

無防備にすぎるその存在に一瞬ドキリとした翔一郎は、心中を悟

られないよう、ルームミラーに手を伸ばす。

少しは恥じらえよな。

ひと回り以上も年代が違えば価値観も違うことぐらい翔一郎も理解はする。

理解はするが、それに慣れるかどうかはまた別の問題だった。深々とため息が出た。

「パンツ見えてるぞ」

暖気の間の手持ちぶさたを利用して、翔一郎は真琴に告げた。出来るだけさりげなく、されどこれ以上もなくストレートに。

「スケベ」

いたずらっぽく、にっと笑って真琴が言った。

両腕で抱えた左膝の上に頬をのせ、翔一郎の顔を下からのぞき込みながら、からかうようにささやいた。

「もつと見たかったら、条件しだいで見せてあげてもいいよ」

「勘弁してくれ」と言いつつも、翔一郎は哀しいかな、視線が時折横を向くのを止められない。

健康的な少女のナマ脚を前に、正常なオトコなら視線を注がずにはいられないものだ。

が、その視線が不意に一点で留まった。

真琴の右脚、正確には右膝の外側部分。そこに、まだ新しいすり傷の跡があることに翔一郎は気付いたのだった。

原因はわかっている。

この位置からは見えないが、左脚の同じ部分にも同様のすり傷があるはずだった。

ミニバイクでの転倒時に出来た傷である。

「まだ、やってるのか」

声のトーンをワンランク落として、翔一郎が言った。

「そのうち、そんなすり傷だけじゃ済まなくなるぞ」

「夏休みに四輪の免許取ったら、ミニバイクは引退するよ」

翔一郎の目がマジなのを察してか、真琴も真剣な表情でこれに返

した。

「でも、それは五〇ccのスピードに満足出来なくなってきたからで、走るのをやめる訳じゃないから。誤解のないよう、先に言っておくね」

はつらつとした印象に変わらず根っからの体育会系である真琴は、ブライバートでモータースポーツにハマっていた。

とは言っても、本格的にその道を目指そうとしている訳ではない。所詮は自己満足の延長が関の山である、“走り屋予備軍”レベルのものだ。

もつとも、元来一本気で凝り性の真琴は、そういった雰囲気だけで満足することには飽き足らず、我流ではあつたが、さまざまな方面から仕入れた雑多な知識を地道な努力で経験へと昇華させ、今ではそれなりの技術を身に付けるまでになっていた。

両脚のすり傷は、その過程で刻まれた彼女にとつての“勲章”である。

翔一郎がそのことを知ったのは、昨年の今頃であつた。

突然かかつてきた病院からの電話。

溜まっていた仕事を途中で放り出し、駆けつけた救急病院のベッドの上に、翔一郎は包帯姿の真琴を発見したのだつた。

転倒事故。

警察の話によると、八神街道の下り坂でミニバイクの性能を越えた無茶なコーナリングを仕掛けた彼女は、当然のごとくグリップを失った愛車ごとガードレールに激突し、救急車でここに運ばれてきたのだそうだ。

幸いにして命に別状はなく、後々に響くような大怪我でもなかったが、一歩間違えば大変なことになっていたかもしれないこの事故に、翔一郎だけでなく彼女の家族も仰天した。

大事なひとり娘がそんな危ない真似をしていることを初めて知り、彼女の両親はこぞつてその行為をやめさせようとした。

過去滅多なことでは用いたことのない親の権威を行使してまで、

真琴の行動を掣肘しようとした。

だが、それでも彼女は屈しなかった。

自分のやりたいことは自分で決める。

退院した後、密かに退学届けまで用意して両親と対峙した真琴は、その場できっぱりと宣言した。

ただし、自分の行為には責任を持つ。

そのことを皆に認めてもらうため学業の手は抜かないし、自分自身を厳しく律してみせる、とも言つてのけた。

結果として沢渡夫妻が愛娘の決意に屈した時、翔一郎は彼女に聞いた。

「何がおまえをそこまで強情にさせるんだ？」

その問いに真琴は、「普通のスポーツじゃ、オンナは絶対にオトコに勝てないから」と、答えた。

身体的能力で、女性は男性を押さえて頂点には立てない。並び立つことさえ出来ない。

だが、モータースポーツの世界でなら、その溝を埋めることが可能だ。

いや、確かに現実的には難しいのだろう。

しかし、不利ではあっても絶対に不可能だとも言えない。

少なくとも、身体的能力で真つ向から立ち向かうより、ずっと分があることだけは確実だった。

「悔しいんだよ。大会で、男女が分けられるのって。オンナじゃオトコと対等に競えないって、最初から言われてるようなものだもん」

その時、彼女が口にした言葉を思い出して、翔一郎はそれ以上の話題を続けようとはしなかった。

一旦こうと決めたら真琴は折れない。

そのことを生みの親よりも熟知している彼は、彼女との不毛な論争に突入する愚を早々に放棄したのである。

エンジン冷却水の温度を示す水温計メーターの針が四〇度に迫ってからようやく駐車場を後にしたB E - 5は、それなりに交通量の多い市街

地を効率よく抜け出し、時間にして二〇分ばかり走ったのち、真琴の通う高校へと到着した。

私立^{じんせい}尽生学園高等部。

県内でも有数のレベルを誇る進学校だ。

ただし、あくまでも中高一貫教育を基本としており、中学入学時の受験に合格さえしてしまえば、よほどのことがない限り高等部にはエスカレーター式に進学出来た。

校風も比較的反りべらるであり、学生間の人気も高い。

かつて、翔一郎がここの受験に見事玉砕したという事実は、今でも真琴には秘密だった。

ゆっくりと減速しながら、翔一郎は学校の敷地内にB E - 5を乗り入れさせた。

尽生学園高等部は地方鉄道が運営するバス路線の始点および終点となっており、校門を潜った敷地の中にバス停が存在する。

当然ながら登下校にこの路線を利用する生徒も多く、そのせいか、利用客など関係者以外の自動車が学校敷地内に乗り入れることに対し、学校側では比較的大目に見ている節があった。

それでも一応、鉄筋コンクリート三階建ての二階部分に位置する職員室からはなるべく目立たない場所に、翔一郎はB E - 5を停車させる。

「サンキュ、翔兄い」

ウサギのように助手席から飛び降りた真琴が、振り向きざまに礼を言った。

軽やかに、スカートの縁と後頭部の長い尻尾が弧を描く。

と、その直後。突然何かを思い出したのか、彼女はポンと柏手を打った。

それを見た翔一郎が頭上に疑問符^{クエスチョンマーク}を掲げるよりも一足早く、ふたたび助手席側のドアを勢いよく開けた真琴は、ズイと体ごと翔一郎の方に乗り出してくる。

彼女は言った。

「翔兄い、今晚ヒマ？」

「なんだよ、藪から棒に」

「なんでもいいから、答えてよ。今晚ヒマ？」

前後になんの脈絡もない質問に翔一郎は少なからず困惑したが、ここで嘘を言っても仕方がない。

彼は正直に、今晚の予定は、今のところ何も無い、と真琴に答えた。

それを聞いた彼女はさも満足そうにうなづくと、今夜一〇時頃、自分の予定に付き合ってもらいたい、と翔一郎に告げる。

「夜の一〇時だあ。随分な時間じゃないか」

時間帯を耳にして、翔一郎は口元を歪めた。

彼の世代の常識として、それは女子高生が気安く出歩いていい時間帯ではありえない。

「保護者同伴だから、問題ナツシングだよ」

右手の人差し指で翔一郎の頬を突きながら、真琴はさざりと言いつ切った。

保護者という単語に反応した翔一郎が思わず自分自身を指さし確認するのに対して、そのとおりとばかりに真琴はビシと親指を立てる。

強引極まりない展開に、翔一郎は返す言葉を失った。

「別に変なところに行こうって訳じゃないから、安心して」

翔一郎が拒絶しないのを受諾の意味だと一方的に受け取って、真琴は今度こそ学舎の方へと元気よく駆けて行った。

途中で体ごと振り返り、大きく右手を振ってみせる。

フロントガラス越しに軽く手を挙げることでそれに応えた翔一郎が半ば諦め顔で彼女の背を眺めていると、真琴は学生玄関の辺りで同級生と思われる複数の女子生徒と楽しそうにじゃれ合いを始めた。赤ん坊の頃からその成長を見てきた少女が学生生活を謳歌しているさまを目の当たりにして、翔一郎は少々の微笑ましさを実感する。そいつは一度社会人となれば到底得ることの叶わない楽しみだ。

今のうちにたつぷりと味わっておけよ。

「やれやれ、俺もオヤジになったもんだな」

そう呟くと、翔一郎はふたたび愛車を発進させた。

午前八時四〇分。今日という日は、まだ始まったばかりである。

一章：ロードレーサー（2）

「サワタリってさ、彼氏オトコでもいる訳？」

唐突に投げかけられた質問に、真琴はひょいと視線を上げた。

校舎の一階、三年二組の教室。時間帯は昼休み。

質問者は、同級生クラスメートの野々村早苗だ。

窓際にある机を境に向かい合って座っている彼女に向けて、真琴はさらりと言葉を返す。

「いないよ。それがどしたの？」

「いやさ、この間、四組の高山を袖にしたって話を耳にしたもんだから。もしかしたら、アタシの知らないうちに作っちまったか？と疑った訳よ」

早苗と真琴は中等部以来の腐れ縁で、どことなくウマが合うせい
か、学校内外を問わずふたりそろって行動していることが多かった。
客観的に見ても、まあ親友と言っていていい間柄だろう。

もつとも、いくらウマが合うからと言って、その性格や趣向まで
もが同一方向を指向しているという訳では当然ない。

体育会系で行動的な真琴とは対称的に、文芸部と新聞部とを掛け
持ちしている早苗の方は、眼鏡に三つ編みと言う地味な外見からく
る予想を裏切ることなく、完全無欠の文系だった。

ただし、その行動力となると、彼女への評価は、見た目のそれと
激しく異なる。

“学園のパパランチ”と自称する彼女が見せるスクープ記事への
情熱は、付き合いの長い真琴ですらを時として閉口させるほど、熱
く燃えあがることがあったからだ。

ちなみに、四組の高山こと高山正彦とは、インターハイ出場経験
を持つ陸上部短距離走のエースである。

引き締まった筋肉質の長身の上に端正な甘いマスクを載せたその
容貌は、数多くの女生徒を夢中にさせるだけの何かを、確かなレベ

ルで秘めていた。

事実、街中で不特定多数の女の子を連れて歩いている姿が、たびたび目撃されていたりする。

その高山が真琴に交際を申し込んだのは、今週初めの出来事だった。

夕方、部活動からの帰り道。

型どおりに校門付近で待ち伏せされた真琴は、彼自身の口からはつきりと今の気持ちを伝えられたのである。

沢渡、好きだ。俺と付き合ってくれ。

これに対する真琴の答えは、きっぱり一言、“ごめんね”であったと聞く。

それも、考える素振りも見せないほどの即答で。

もつとも、異性としての高山個人が真琴の琴線に触れえなかった、という訳ではどうもならないらしい。

おそらくは相手が誰であっても、この場面で彼女は同じ回答をしたはずだ——だって、あの娘には恋愛モードのオプションがないんだもの、とは、後に早苗がこの時の真琴に下したわかりやすい評価である。

「高山くんってモテるでしょ。だから、ボクみたいなのと付き合っても面白くないよ、って言ってあげただけだよ」

苦笑いした真琴は、そう言って手作りのサンドイッチにかじり付いた。

この話題はこれまでにしようという意思を言外に込めて、空いた右手をぱたぱたと振る。

「告られたのは事実だったか」

ニヤリと笑って早苗が茶化した。

相方の思いとは裏腹に、その瞳が好奇心でらんと輝いている。早苗が知る限り、真琴に告白して玉砕した男子生徒の数は、ここ数年で片手の指では収まらなかった。

好意を持つてはいても気持ちを伝えるに至らない連中を含めると、

その数はもつと多くを数えるだろう。

はつきり言って、真琴はモテた。

一六〇cmを優に超える上背に短距離走で鍛えたしなやかなプロポーション。

明朗快活で気さくな性格に加えて水準以上の容姿ルックスとくれば、男性諸君からの人気が出ない方がどうかしている。

これに同意しないのは、あるいは翔一郎ぐらいのものかもしれない。

ただし、当の本人は、他人から見た自分自身のそうした評価を“過大評価”と言い切って、一顧だにしていなかった。

しかも、うぬぼれからくる嫌みな謙遜ではなく、本当に心からそう思っていたのだから、周りにとってはかえって始末に負えなかったりする。

まあ、基本的には同年代の男性を異性として認識出来ていないのだろう、と早苗あたりは思っていた。

小学生中学年レベルの恋愛センス。

確かに端から見れば、なかなか面白い素材ではある。

早苗が得意とする学園三面記事を飾るにふさわしいネタを、あるいは提供してくれるかもしれない。

とはいえ、友人の話題を元に記事を書くことまでは、早苗の方も思っていなかった。

そんなことをすれば、流石の真琴も怒るだろう。

彼女も、クラスメートの多くがそうであるように、真琴の持つ陽性のキャラクターが好きだったのである。

「あーあ、誰かアタシに告白してくれないかなあ。ふたつ返事でOK出しちゃうのに」

そう言って不意に会話の方向性を切り替えてみせたのは、早苗が見せた真琴へのささやかな気配りだった。

両手を頭の後ろに組んで、椅子の背もたれに体重を乗せる。

時に容赦のない毒舌家としての面を垣間見せることがあっても、

一方でこういったさりげない配慮の出来る彼女は、自分が思っている以上に周囲からの評価が高い。

「容姿端麗、学力優秀、スポーツ万能なら、でしょ？」

向けられた矛先が逸れたことに乗じて、真琴が早苗の台詞に突っ込みを入れた。

その直前に彼女が見せた軽い安堵の表情を認めて少しだけサディスティックな快感を感じた早苗も、にぱつと笑ってそれに応じる。

「家がお金持ちつてのも付け加えて。やっぱ、男の決め手は財力よね」

「ぜいたくすぎ。ネタとしては聞いておいてあげるよ」

「何よ。あくまでも理想なんだから、言うだけだったら勝手じゃない」

「どうだか。早苗の場合、口だけじゃなさそうだしなあ」

「流石は我が級友。よくわかっていらつしやる」

そうした漫才のような掛けをこなしながら、同年代の女子としては割と多めの昼食をきれいに平らげた真琴は、昼休みも半ばに差しかかるうとした頃、おもむろに分厚い雑誌を鞆の中から取り出した。本当に厚い。電話帳クラスの厚さだ。

それは、格闘家との熱愛・結婚で話題を呼んだ某グラビアアイドルをイメージキャラクターへと配した、中古車情報誌だった。

「何よ、それ」

自分の住む世界とは明らかに一線を隔てた内容を持つ物体の出現に、早苗はあからさまに怪訝な表情を見せ、確認するように真琴へ問うた。

「サワタリ、アンタ、クルマでも買うつもりなの？」

「イエス」

簡潔に答えた真琴が、歯を見せて笑った。

趣味人が自らの守備範囲を他人から話題として取り上げられた時に見せる恍惚とした表情の片鱗が、はつきりと目元口元に現れている。

「夏休み中に普通免許取るから、それまでには決めとくつもり」

「ふうん」

明らかに楽しげな雰囲気、真琴とは対称的に、早苗の方は興味なさげなあいづちを打つ。

ただし、彼女の話題に付いて行けないという訳ではない。

確かに、クルマなんぞにはこれっぽっちも興味を持たない早苗ではあったが、そっち方面に御執心の真琴と長年付き合ってきた関係上、本人の意思とは無関係に、それなりの知識を習得する羽目に陥っていたからだ。

まだ時間もあることだし、とばかりに早苗は話を続ける。

なんだかんだと付き合いがいいのは、早苗の持つ強力な長所のひとつであった。

「ま、アンタのことだから、どうせ倫子のこさんの影響モロ受けなの選ぶんだろうけど、友達として、一応どんなのをターゲットにしているのかを聞いてだけおきましようかね」

「悪いなあ、なんだか催促しちゃったみたいで」

そんなしおらしい言葉の内容とは裏腹にまったく悪びれる様子もなく、真琴はぱつと雑誌のページを開く。

見ると、そこには既に橙色の枝折りが挟まれてあり、彼女があらかじめ購入対象を選別していたであろうことが伺えた。

おそらくは、最初から誰かに見せるのを目的としていたに違いない。

開かれたページには十数台分の販売車輛のデータが、それぞれ小さなカラー写真付きで掲載されてあった。

ページ自体は、販売店ごとに分けられてある感じた。

そして、肝心な車輛データは、車種・価格・年式といった基本的なもの他に、走行距離やグレード、駆動系の種類などが追記されている。

詳細はともかく、概要を把握するだけならば、まずは十分なデータ量だと思われた。

そのうちで真琴が指し示した一角を、あからさまにもつたい振った態度で早苗は覗き込む。

まるで、持ち込まれたお宝を検分する鑑定士のような面持ちだ。思ったよりも写真が小さかったのか、掛けている眼鏡をくいと動かして見入る。

五四一ページの左下の角。平べったくのつぺりとした感じの赤いクルマがそこには載っている。

記載されてあるクルマの名称を、早苗が反復した。

「CR-X?」

「ホンダEF-8『CR-X』!」

ここぞとばかりに、未記載のデータを真琴が補足する。

「見かけはちっちゃいけど、排気量一・六リッターで一六〇馬力も叩き出すB16Aってエンジンを積んだスッゴイクルマなんだよ。」

通称『サイバー』^{やま} 峠じゃいまだに現役バリバリだし。実は、今週末に実物を見に行くつもりなんだ」

「……サワタリ、アンタねえ」

まるで子供のような無邪気さで興奮気味に語る真琴に向けて、早苗はあきれかえったとばかりに両肩をすくめた。

わざとらしく、うつむき加減に頭を振る。

早苗がこうしたオーバーアクションを見せることの意味を、真琴は完全に理解していた。小姑娘モード開始の合図だ。

間を置かず、彼女は一気にまくし立てる。

「どうせホンダ車買うなら『フィット』みたいな可愛いコンパクトカーにしないよ。人も荷物もたくさん載るし燃費だって良好じゃない。いま時分、馬力でクルマ選んで何が楽しい訳? クルマってのは移動手段のひとつでしょ? 制限速度の何倍も出せるパワーなんて宝の持ち腐れ以外の何物でもないわ」

まさしく正論であった。

これに否定のヒの字を割り込ませることすら、理論派として“とおっていない”真琴にとっては、不可能ごとであったと言っている。

だが、ことはあくまでも個人的趣味の範疇に存在していた。

そこは、万人が納得出来る理屈が常時通用する領域では決してない。

だからこそ、早苗の勢いに気圧されることなく、真琴は自信を持ってこれに応じることが出来たのだった。

「それは早苗の価値観でしょ？」

突き付けられた人差し指を目の前にして、さらりと彼女は言うてのけた。

「ボクにとって、クルマは実用品じゃなくて嗜好品なんだから、コレでいいんだよ」

「マニアの指向ね」

脱力した早苗の口からため息がこぼれた。

一章：ロードレーサー（3）

その日の午前も終わりに近付いてきた一〇時すぎ。

一旦自宅に帰宅した翔一郎が足を運んだのは、一軒のチューニングショップであった。

「エム・スポーツ」と言う名を持つその店は、主要国道の沿線近くに広がる住宅地の一角に店舗を構えており、交通の便に関して恵まれているとは言い難かったが、店主の人脈が豊富なこともあってか、割と客の入りは上々だった。

客層は、おおよそ二種類に色分けされている。

もっぱらメンテナンス用品や消耗品などの小物を買求めに来る一般客と、足回りやエンジン周辺に手を加え、積極的に愛車の走行性能の向上を図りに来る“数奇者”^{ヘヴィユーザー}とに、だ。

ただし、身の丈にあった地元密着型ショップを目指す、と店主自ら^{オーナー}が公言する「エム・スポーツ」では、チューニングと言っても、雑誌に掲載されているような大手ショップが手掛けている仕事――

パーツの開発やクルマのコアな部分へおよぶ改造などを扱うことは少なく、どちらかと言えば実用的で間口の広い、市販パーツの^{チョイス}選択とその^{セッティング}取り付け・調整が主であった。

したがって、明らかに趣味的な層に属していると言える後者の数は、来客人数的に見ると圧倒的に少数派だった。

「あ、壬生さん。例の奴、来てますよ」

文字どおり、ふらりと入店してきた翔一郎を、この店の店主、水山^{やま}が出迎えた。

年齢は、見たところ、翔一郎とさほど変わらぬ三〇代前半から半ば。

体格は、170そこそこしかない翔一郎よりもひと回りは大きい。肩幅の広いがっしりした体躯を紺の繫ぎに押し込んだ彼は、どことなく見かけの印象と異なる愛想のよさで翔一郎に相對する。

「取り付けはすぐに出来ますけど、どうします？」

「お願いします。ついでに、デフォイルとA T Fの交換も」

財布の中から数枚の紙幣を取り出しながら、翔一郎は答えた。

水山店長の言う“例の奴”とは、中古のドライバースシートのことだった。

レカ口社製S R - ? ——汎用型のセミバケット・タイプである。

そもそもは、この店の常連が使っていた品物なのだが、これを購入してすぐ、もらい事故に遭って愛車が全損。

やむなくクルマを買い換える羽目となり、予算を捻出する関係上、渋々ながら手放したという経緯を持った代物だ。

だから、翔一郎に提示された売価は一、お悔やみ分を含め福沢諭吉一〇人分で、新品価格一二五、〇〇〇円よりも、ちょうど二割安かった。

加えて、このシートを装備する予定だったクルマが翔一郎の「レガシイ・B 4」^{シーリングフロン}から見た姉妹車、ワゴンタイプのB H - 5「レガシイ・T W」だったこともあって、車体への取り付けに必要なレールなどの部品を、そっくりそのまま流用出来たのが幸いした。

総合すると、翔一郎は通常価格の七割程度を支払うことで、これを手出来た形になる。

「この前付けた脚の調子はどうですか？」

翔一郎の手からB E - 5のキーを受け取りながら、水山店長が尋ねた。

「オーリンズのP C Vダンパーにスウィフトのバネを組んだんで、乗り心地は悪くないと思うんですけど」

「いいですよ。思った以上に」

翔一郎が即答する。

「少なくとも、助手席から文句が出たことはありませんね。ゴツゴツ感が消えて、しなやかなフィーリングになりましたから」

「純正のビルシュタインは、特に固めの味付けがしてありましたからね。オーリンズも基本的には固い脚なんですけど、サブピストン

でシリンダーのオイルを制御してますから、減衰特性はずっとスムーズになってるはずです。ちなみに車高を落とした分、コーナリング特性はもっと化けてますよ。壬生さん、ひよっとしてむかしの血が騒いでるんじゃないんですか？」

「よしてくださいよ。もう一〇年以上も前の話じゃないですか」

苦笑いを浮かべた翔一郎は、右手を振って店長の発言を否定した。「ブレーキを強化したのも車高調を入れたのも、基本は運転感覚^{ドライビングフィール}を向上させるためで、それ以上の意味はありませんから」

「ははは。まあ、そういうことにしますか」

人好きのする笑顔を浮かべて水山店長は、一旦会話を打ち切った。作業指示を出すために雇用している作業員の名を呼ぶ。

何度かこの店を訪れている翔一郎だったが、これまで聞いたことのない名前だ。

事務所に隣接するガレージから短い返事とともに姿を現したのは、上背のあるスマートな若い女性だった。

歳の頃は、せいぜい二〇代の前半といったところか。

さっぱりと短めにまとめた頭髪を軽く茶色に染めている以外には、まったく言っていないほど化粧つけが見られない。

にも関わらず、すつととおった鼻筋と切れ長の目尻が印象的な、なかなかの美人だ。

「壬生さんにはまだ紹介してませんでした、今週からウチで働いてもらってる三澤^{みさわのりこ}倫子さんです」

倫子と呼ばれたその女性は、店長から促されて軽く頭を下げた。

あまり愛想のいい方ではないらしい。

翔一郎の名前、壬生という姓が珍しかったためか、口の中で再度疑問符とともに繰り返した以外は無言だ。

釣られて翔一郎も一礼するが、こちらはきちんと名を名乗る。

このあたりは社会人としての経歴の差だろう。

その後、倫子は水山店長から言われるままに翔一郎のBE-5をガレージに入れ、黙々と作業を開始する。

ほとんど無駄口をたたかず、てきぱきと流れるように手を動かす彼女のさまは、まるでベテランの作業員を思わせた。

とても新人のそれには見えない。

店外に設置された自動販売機で購入した缶コーヒーを口にしながら、その様子を手持ち無沙汰気味に眺めていた翔一郎だが、時間がたつにつれ、暇を持て余すことに飽きたのか、唐突に倫子の背中へ声を掛けた。

「手慣れたものですね。以前どこか別のショップで働いておられたのですか？」

仕事柄、プライベートな面々以外には意図して丁寧語を用いる翔一郎の言葉づかいは、客の立場から発せられたものには聞こえない。妙な馴れ馴れしさを排除して、間に明確な一線を引いている翔一郎の問い掛けに、それまで他者の存在を無視するような熱心さで作業に没頭していた倫子が、肩越しに振り向いて答えた。

「趣味でよくクルマを触っていますから」

額の汗を拭いつつ、彼女は言った。

「変ですか？ 女なのにクルマが趣味だなんて」

どこことなく非難めいた口振りだった。

確かに機械整備という世界は、一般的には女性の存在が似合う世界だと思われていなかったし、それはまた、ある程度の実事ですらあった。

遭遇確率的には、ほぼ誤差の範疇だとすら言っているほどに数少ない女性整備士の姿が、この油臭い職業集団の中では明白な違和感を発するからである。

おそらく、彼女がこの道を自らの意志で積極的に選択した時、それをスムーズに受け入れた者は少数派であつたろう。

中には、明らかな拒否反応を示す連中もいたかもしれない。

仮に彼女に向けて好意的な態度をみせた面々であっても、その努力評価の先頭に“オンナの割には”という枕詞を付け加えていた者が大半だったはずだ。

そんな男世界の直中、倫子がどれだけの頑張りで自らの足下を踏み固めてきたかは、彼女の両手を見るだけでわかる。

同年代の女性たちには決して付かないであろういくつもの火傷や切り傷の跡が、その油に汚れた両手には、はつきりと残されていたからである。

だから、倫子の問いに翔一郎は軽く頭を振って返した。

「男だろうが女だろうが、好きなものは好き、でいいんじゃないですか」

見た目、少しのんびりした印象を与える翔一郎であつたが、しゃべるのは割と速い方だ。

普段から、言葉自体を短く切って使うか、適当な長さの台詞を一気に話す。

だが、なぜかせつかちな感じを周囲に与えることはなく、むしろ軽快なテンポが相手の緊張感を解きほぐすのに一役買う場合が多かつた。

あくまでも個人の趣向なんだから、あまり余所さまの目を気にしてばかりいても面白くないでしょう？

あ、ちなみに、僕の知人にも、そういうの好きな女の子がいるんですよ。

まあ、女の子と言うよりは小娘とでも言つた方がぴったりくるタイプなんですけどね、云々。

身振り手振りを加えながら、翔一郎は倫子に話す。

最初は、なんだコイツ、とでも言いたげな眼差しを向けていた倫子だったが、しばらくすると、徐々にではあつたが話の内容に耳を傾け出してきた。

わたしの知り合いにもいますよ、そういった娘。

気のせいかな、どこか恥ずかしげに倫子は言つた。

「まだ高校生なんですけど、ウチのグループによく遊びに来てるんです。見ているこっちが元気になりそうな、明るい娘ですよ」

「へえ」

まるで真琴のようだ、と内心で思いながら、翔一郎は相槌を打った。

「女子高生の間で密かにクルマが流行っているんですかね」

「さあ、どうでしょう」

ぱん、と膝を払って立ち上がり、倫子は翔一郎と正面から向き合った。

そのまま、他愛のない会話が続く。

気が付けば、彼女が最初に見せた取っ付きの悪さは、完全に影を潜めていた。

実に魅力的な女性だ。

これが彼女本来の顔なんだろうな、と翔一郎は確信したが、それをあえて口に出すような真似はしなかった。

そんな翔一郎の心中を知ってか知らずか、倫子が話題を切り替えた。

「ところで、壬生さんは地元のご出身なんですか？ このあたりでは随分と珍しい名字ですし」

唐突な問い掛けだった。少なくとも、クルマとはまったく関係がない。

質問に質問を重ねる形になったが、翔一郎はまっすぐに、これに答えた。

「県内には、他にない名字みたいですこのあたりね。子供の頃からよく言われます。でも、ウチーは祖父の代から武蔵ヶ丘このあたりですよ。それが何か？」

「いえ、そうであれば、ちよっとお尋ねしたいことがあったもので、軽く視線をそらし、わずかに考え込む仕草を見せた後で、意を決したように倫子は言った。

真夜中の群狼

「壬生さん。あなた、もしかして『ミッドナイトウルブス』の“ミブロー”さんなのではありませんか？」

一章：ロードレーサー（4）

このあたりで一般的に「八神街道」やがみかいどうというところ、武蔵ヶ丘市と桜野市との間に横たわる、標高の高い丘陵地帯を越えて走る旧国道周辺を指すことが多い。

さらに地域を限定するならば、それは武蔵ヶ丘方向から入る「八神口」がみぐちから桜野方面へと抜ける「九十九坂」つくもさかまで続く、信号のない区間のことだと言えよう。

この区間は、道路脇の避難帯の幅を広くとった片側一車線道路が連なっており、決してなだらかとは言えない地形を縫うようにしてそれらが敷かれていることによって、道筋は複雑なうねりを描いていた。

上空からこれを見ることが出来れば、それは丘陵地帯にのたうつ大蛇のごとく映るかもしれない。

制限速度は時速五〇km。

朝夕の通勤時間帯における車の通行量もそれなりに多い。

もともとは新興の産業都市として発展してきた桜野市と旧来の県庁所在地である武蔵ヶ丘市とを結ぶ主要街道として建設が進められたという経緯もあって、国から県へとその管轄が移管して以降も整備自体は良好に行われており、比較的真新しい黒々としたアスファルトを区間の各所で見る事が出来た。

その八神街道の名が県内外に知られるようになったのは、とある雑誌が原因だった。

走り屋
「ロードレーサー」

その名を持つ月刊の自動車情報誌が、ここに集まる一部のクルマ好きを連載記事の対象としたのは、来るべき世紀末が少し先の現実としてようやく実感出来るようになってきた、九〇年代も後半になつてのことだ。

冷え込む景気を反映してか、妙に冷め切った目を持つ少年少女が

町中を闊歩する世の中、その紙面の中に存在した若者たち——各々が手塩に掛けた愛車に乗り込み、深夜の公道を猛スピードで駆け抜ける走り屋どもの世界は、冷たい中にもいまだ熱い灯火を失っていないかった連中のハートを、ダイレクトにヒットした。

それ以降、太陽が沈み一般的な帰宅時刻もとくにすぎ去った深夜、ぱったりと人車の往来がなくなった八神街道は、その姿をあたかもサーキットのごとく変貌させるようになったのだった。

耳をつんざくタイヤの軋み。スキール音

重々しく轟く排気音。エキゾーストノート

漆黒の暗闇を切り裂くヘッドライトの輝き。

そして熱狂した観客たちの歓声と、それらが複雑に絡み合い重なり合う非日常。

あからさまに一種異様な危険さを孕んだ独特の世界が、間違いないそこにはあった。

夜一〇時。真琴と翔一郎がいるのは、そうした非日常の外縁部であつた。

八神口方向から上り坂を登つてくると、その頂上付近には武蔵野市街地を一望出来る駐車場《PA》が存在する。

コンクリート製の縁石によって車道と分離されたその場所には、二〇台程度の一般車輛が駐車可能だ。

本来は周囲に広がる丘陵地帯を散策する家族連れなどの利用を考慮して作られたそうなのだが、そうした用途にはほとんど使用されておらず、実際は若者たちの溜まり場として使われていることがもっぱらだと聞く。

そのような場所の一角に、明らかに場違いと思われるその明かりはあつた。

屋台ラーメンだった。

改造されたボックスカーから立ち上る湯気にそこはかとなく含まれるスープの香りが食欲をそそり、風に吹かれてかすかに揺れる古びた暖簾が、まるでおいでおいでをすることく客足を呼び込む。

「親父さん、チャーシューふたつね」

ボックスカーの側面に備えられた即席のカウンターに付いた真琴が、元気よく注文を発した。

その態度には、どこか常連客の趣さえ感じられる。

それを受けて、親父さんと呼ばれた髭面の大男が小声で「あいよ」と返事して、早速とばかりに麵をゆでにかかった。

見事なまでに慣れた手付きが、年期のほどをうかがわせる。

この屋台ラーメンは、「宗義」の名前で知られていた。

実は、知る人ぞ知る老舗のラーメン屋であるらしい。

腕前の方もかなりのもので、作るラーメン自体の評判はすごい。よい。

ただ、店主の親父が目立つことをとにかく嫌うらしく、ひとつところに腰を落ち着けない上、あろうことか常に辺鄙な場所で店を開くために、文字通りの知る人ぞ知る、つまりほとんどの人は知らない名店という位置から脱皮することが出来ないのだそう。

だから、という訳ではないのだろうが、この時間、カウンターに付いている客は真琴と、その隣で苦虫を噛み潰している翔一郎のふたりだけだ。

「おまえ、まさかラーメン食べるために、俺を脚代わりに使ったんじゃないだろうな？」

どこかウキウキした感じの真琴とは対照的に、翔一郎の全身からは不満のオーラが湧きあがっていた。無理もない。

一般的な社会人と学生との間には、無駄づかいしていい私的時間の量に、相応の差が存在するのだ。

「そついう訳じゃないよ」

軽くウインクして真琴が答えた。

「でも、とりあえずはラーメン食べよ。ここのチャーシューは絶品だよ」

翔一郎はムスツとして頬杖を突いた。

コイツは、こんな時間にオトコとふたりで出掛けることの意味を、

果たして理解しているのだろうか。

そう思いを巡らせているうちに彼の脳裏へと浮かび上がってきた光景は、つい先ほど、翔一郎が隣の沢渡家に真琴を迎えに行った際に繰り広げられたやりとりだった。

チャイムを押し、返事を待つてから玄関のドアを開けた翔一郎を待つていたのは、なぜか真琴本人ではなく、その両親であった。

平素から実直で穏和な人柄で知られている沢渡夫妻ではあったが、どういふ訳だかいつにも増して満面の笑みを浮かべている。

「いやあ、いつかはこんな日が来るとは思っていたんだが、嬉しいものだね」

何があつたんだ？、と翔一郎が訝しげるより先に真琴の父、沢渡さわたり哲朗てつろうが口を開いた。

「実を言つと、私たちは前から息子が欲しかつたんだよ、翔一郎君特に君のように堅実で真面目な息子をね」

「はあ」

「幸いにして、君の家とは古くからの付き合いでお互い気心も知れているし、君自身のことも大概のことは理解しているつもりだ。だから私たちにとつて、こんな良縁は願つてもないことなんだよ」

抑制された口調の中に押さえ切れない期待を包み、少々興奮気味に熱弁を振るう真琴父を前にして、翔一郎は、もう困惑するしかない。

そして、話が読めないんですけど、とかろうじて言葉を絞り出した直後、真琴父の手から直接渡された小さな物体を目にした時、それは一氣に頂点へと達した。

コンドーム
避妊具だった。

翔一郎の目が、瞬時にして点になる。

「翔一郎君。あの子はまだ高校生だから、悪いけど、もうしばらくの間はそれで我慢してくれたまえ。はっはっは」

真琴父は、とんでもないことを、当たり前のように笑顔で告げた。ちなみにいま、そのモノはズボンの右ポケットに突っ込んである。

もちろん、そんなやりとりがあつたことなど真琴は知らないし、翔一郎も暴露する気はない。出来る訳がない。

思い出す度に口元が引きつりそうになる出来事だ。

いくら若い男女——まあ翔一郎を“若い男”と呼ぶかどうかは微妙としても——が夜遅くふたりきりで外出するからといえ、なんでもいきなりそういう方向に考えが向くのだろうか。

完全な誤解もいいところだった。

そうこうしている間に、真琴オススメのチャーシュー麺が出来あがる。

お待ち、との声と同時にカウンターへ出されたどんぶりの中身を覗いてみると、スープは見るからに濃いめの醤油味。

太めのちぢれ麺の上に分厚い焼き豚がきっちり五枚並べられてある以外には、メンマとネギが乗せてあるだけのシンプルな造りである。

いただきます、と元気に告げて、真琴はさっそく割り箸を割った。スープを飲む前に胡椒を掛けるなどといった無粋な真似は一切せず、年頃の女の子とは思えないような勢いで、一気にちぢれ麺をすすりあげる。

そんな隣の女子高生を脇目で見つつ、翔一郎も渋々といった感じで目の前のどんぶりに箸を付けた。

元来、ラーメンを好物のひとつとする翔一郎である。仕草の見掛けとは裏腹に、少しばかりの期待を込めてスープと麺を口に運ぶ。

スープの出汁は豚骨を基本に複数の魚介類を使用したものと思われ、こってりしたコクの中にもどこかさっぱりしたキレのよさを感じられる。

加えて、腰の強い麺の存在感も濃い口スープのそれになんら負けることなく、舌の上、喉の奥で絶妙なコンビネーションを描ききっていた。

確かに美味い。絶品といっていいだろう。

もう少しいまの気分がよかったならば、このラーメンを味わうこ

ともっと集中出来たのかと思うと、真琴父の大胆発言を恨めしく思わざるをえない翔一郎だった。

駐車場に新手のクルマが進入してきたのは、真琴がどんぶりの中身をきれいさっぱり胃の中に収めきった、ちょうどその時であった。駐車場内を徐行してきた2台のクルマは、翔一郎のBE-5と向かい合う位置に並んで停まる。

黄色の塗装を施された先導車は、特徴ある四つの独立したリアランプを持つトヨタ製四ドアセダン「アルテツァ」

パールがかった緑色のもう一台は、同じくトヨタ製の三ドアハッチバック「スターレット・グランツァ」である。

「カナさんたちだ」

まるでそれらの来訪を事前に知っていたかのような反応を見せて、真琴はぱっと席を立った。

キュロットスカートのポケットから何かを取り出し、勢いよくどんぶりの側にそれを置く。自前分の勘定だ。

器を両手に濃厚なスープを堪能していた翔一郎も、真琴の背を追うようにして肩越しに振り向いた。

二台の車から降り立ってきたのは、クルマと同じ数の女性たちであつた。

周囲が暗いせいでこの距離からでは判然としないが、身なりから察するに、ふたりともそれなりに若い感じがする。

たまた、と小走りで彼女らに駆け寄っていった真琴と親しげに言葉を交わしているところを見ると、どうも三人は顔見知りの関係らしい。

やがて、真琴がこちらを向いて右手を挙げた。その手をぶんぶんと頭上で振りながら、翔一郎の名を呼ぶ。

やれやれ。

正直言つて気が乗らないことおびたらしい翔一郎だったが、仕方がないな、とばかりに重い腰を上げて真琴の要求に応えることとした。何がなんだか判らんが、一応の保護者役としては、ここで露骨に

知らんぷりを決め込む訳にもいくまい。

髭の親父に御代を払い、彼女らの下へ足を運ぶ。
初めまして、と元気よく翔一郎を出迎えたのは、予想どおり若い女性たちであった。

普通免許を持っているであろうことから真琴よりは年上だと思われるが、それでも翔一郎と比べると一〇歳近くは年齢差がありそうにうかがえる。

真琴を除く両名のうち、明らかにリーダーシップを取っているのは、眼鏡を掛けたおとなしそうな女性だった。

少し垂れ気味の優しい眼とうつすらと残るそばすが、なんとなく彼女の持つ素朴さを主張している。

「山本加奈子やまもとかなこです」と、彼女は名乗り会釈した。

おそらく真琴が“カナ”と呼んだのはこの娘のことだろうと、翔一郎は直感する。

彼女はその後、壬生さんですね、真琴ちゃんからあなたのことはうかがっていますわ、と笑顔で続けた。

優しいな外見からくる印象に違うことなく、その物腰はどこまでもおっとりしていて柔らかい。まるで、良家のお嬢さんだ。

それに前後するように、もうひとりの女性も口を開く。

相方よりも鋭い目尻が印象的な長髪ロングヘアのその娘は、長瀬ながせと名乗った。下の名前は“純じゅん”というらしい。

ファーストネームの方で呼んで欲しいと、自らの口で翔一郎に伝える。

こちらは加奈子とは対照的に、元気のよさを前面に押し出すタイプだ。

真琴とは随分と気が合うことだろうと、翔一郎には思われた。

「壬生です」

やはり軽く頭を垂れて、翔一郎は言った。

「失礼ですが、あなたがたは」

「チーム『ロスヴァイセ』の人たちだよ」

加奈子になり代わって、勢いよく真琴が答えた。

クルマを走らせるのが好きな女の子が集まって出来たサークルなんです、と真琴の言葉に補足を加えたのは、純と名乗った娘の方だ。見ると確かにふたりとも、お揃いの白いサマージャケットを羽織っている。

そして、その胸元と上腕の部分には“RoBweiBe”と赤く記された青地のワッペンが、さりげなく自己主張を果たしていた。ちなみにロスヴァイセとは、北欧神話に登場する主神オーディンの娘たち、戦乙女ワルキューレのひとりだ。

同じような意味を持たせるにしても、ストレートに英語でバルキリーとせず、二周りほど凝った言い回しでチーム名を付けるのは、どうにもこうにもマニアックな発想であるとも言える。

なるほど、な。

そんなチーム名の由来など知る由もなかった翔一郎だったが、何事かを察したかのようにうなづくと、腕組みしたままじろりと真琴の方を睨めつけた。

最近、やけにクルマのネタを振ってくると思ったら、こういう訳だったか。

要するに、真琴は自分と同等の価値観を共有する仲間を、ここ八神街道に見出したという訳なのだ。

しかも、それが歳も近い同性ともなれば、仲間意識もさらに格別。それらと時間をともにするだけで、ある種の快感をとまなうなんてことぐらいは、幾分堅物気味の翔一郎にだってわからない訳ではない。

彼自身が、いまとなってはよく思い出せない青春時代に一度以上はとおった道なのだから、それも当然といえば当然だった。

「チーム、なんて格好はつけてますけど、実はまだ三人しかメンバーがいないんです」

そんな翔一郎の心境を知ってか知らずか、やや照れ臭そうに加奈子が言う。

「だから、真琴ちゃんが免許を取ったら、是非とも加入してもらわないと、って思っているんですよ」

三人？ 翔一郎の頭上に疑問符が湧いた。

真琴を入れて三人じゃないんですか、と確認を入れる翔一郎に加奈子は、「真琴ちゃんは、まだ無免許ですから、流石に員数外ですわ」と、さらっと答えた。

当たり前といえば当たり前の、しごくまっとうな回答だ。

それに得心した翔一郎が大きくうなづいてみせる。

「ということは、後のひとりは欠席って訳ですか」

「いえ、もうすぐ上がってくると思います」

加奈子は、翔一郎を促すように視線を泳がすと、八神口から伸びてくる坂道へと向き直った。

誘いに乗った翔一郎も、彼女と同じ方向へ視線を延ばす。

見ると、下の方から二台分のヘッドライトが絡み合うようにして、頂上めがけて登ってくるのがわかった。

物凄い勢いだ。排気音^{エキゾースト}が八神の丘陵地帯に響き渡る。

バトル。

公道上での走り屋同士の競争を、当事者たちはそう呼ぶ。

そして、間もなく翔一郎たちの目前を通過するであろうあの二台も、まさしくそうした行為におよんでいるのだ。

翔一郎の背筋を、とうに忘れ去ったはずのしびれが、痛烈な勢いで駆け抜けていく。

「全開だな」

そんな感触を無理矢理振り払うように、翔一郎は口を開いた。

言葉自体に大きな意味を持たせたつもりはなかったのだが、そのつぶやきは加奈子の応答を引き出すには十分な音量で放たれたものだった。

「だってあの娘は、『ロスヴァイセ』^{わたしたち}のエースですもの」

自慢げに彼女が口を開いた直後、赤いスポーツカーが激しくタイヤを鳴らしつつ、翔一郎たちの視界に強行進入してきた。

日産の人気車種、S-15「シルヴィア」だ。

SR-20、直列四気筒二〇〇〇ccエンジンをターボで過給し二五〇馬力の最大出力を発揮する後輪駆動の二ドアクーペ。

「シルヴィア」系は、先々代S-13、先代S-14と続く素直な操縦性によつて、峠の走り屋どもから多くの支持を集めているクルマである。そして、いましがた山道を登ってきた一台も、ドアの前部に貼付けられたさまざまなステッカー類やトランクの上に取り付けられたカーボン製のGTウイングなどからみて、そういった支持者の一員が所持しているクルマであることは明白だった。

「早い」

翔一郎がつぶやく。

八神の頂上付近、つまり翔一郎たちがいまいる駐車場のあたりで、道路は少々強めのカーブを描いていた。

八神口から登ってくる方向からだ、進行方向が見えない右コーナーとなる。

当然、反対側から登ってくる対向車を視認することは、ほぼ不可能だ。

そのため、ほとんどのクルマは、このポイントでは十分な減速を行うことがセオリーとなっていた。

それは、時として中央車線センターラインを越えることを厭わない、キレた走り屋連中にとっても同様だった。

彼らにしたところで、事故を起こしてしまえば元も子もないからである。

だが逆に言えば、ここを十分な安全マージンを確保した上で、かつ許される最高の速度で駆け抜けることさえ出来れば、それは対戦相手に対する強力なアドバンテージになりえるのだとも言える。

ドリフト。

なんらかの手段を用いて走行中のクルマの後輪を滑らせ、その進行方向を強引に変化させるテクニクの総称だ。

S-15のドライバーは、直面したコーナーをクリアするのに際

して、そのテクニクを用いた。

コーナー進入直前、強いブレーキングによる前方への荷重移動を利用して、それまで遠心力に対抗していた後輪の接地力^{グリップ}を瞬時に奪い、結果として外側へ向けての強い横滑り^{スライド}を開始したクルマの後部を巧みな操作で制御しながら、ドライバーは愛車の鼻先を脱出方向へと向ける。

目一杯に道幅を使って振り子のようにコーナーを駆け抜けてゆくクルマが放つド派手なスキル音も含めて、あまりにも見事すぎるパフォーマンスだ。

だから、真琴は翔一郎がつぶやいた“早い”という言葉で“速い”と聞き違えた。

ちよつと前まで自分自身がそうだった峠初心者にとって、地元の常連たちが見せる強烈な走りの印象を言葉に表した際、それは真つ先に口を突いて出てくる言葉のひとつだったからである。間違えるのも無理はなかった。

驚くのはこれからだよ、翔兄い。

ちらつと翔一郎の表情を横目で確認した真琴が、内心で告げた。

その表情には、自ら仕掛けたいはずらの成果をウキウキしながら待ちわびる、おてんば娘のニヤニヤ笑いが浮かび上がっている。

そして、真琴の側に認識の誤りがあつたにもかかわらず、次の瞬間、ほぼ彼女の思惑どおりに翔一郎は、ぐつと息を飲み込む事態へと陥った。

激しいエキゾーストノートを引き連れ豪快に立ち上がろうとするS-15のまさにその直後に、新たな一台のクルマの影を見出したからである。

S-15よりも、かなり小振りな青色の車体。トヨタのミッドシップスポーツ、ZZW-30「MR-S」だ。

ターボによる過給を行うS-15と比べ、小排気量の自然吸気^{N/A}エンジンを心臓に持つ「MR-S」は、出力面で格段に劣る。

その差は、カタログスペック上で優に一〇〇馬力を上回っていた。

だが、その非力なはずの「MR-S」がS-15に食らい付いている。

いや、食らい付いているなどという段階では、もはやなかった。

道路外縁一杯にふくらんだS-15の右側、つまりコーナーのより内側に鼻先を突っ込んだ「MR-S」は、この時対戦相手を追い抜きつつあったのだ。

初めから座席をふたつしか持たない設計をなされた「MR-S」の車重は、わずかな軽量化でたちまち1tを割り込む。

後部座席を有しひと回り大柄なS-15と比較すると、上手くすれば二〇〇kg以上も軽く出来るのだ。

その自重の差が、コーナーへの進入速度という形になって如実に現れた。

軽量な「MR-S」は、重いS-15と比べて慣性力の発生が小さく、それゆえにより高速域でのコーナリングが可能となる。物理常識の基本だ。

しかも、ミッドシップ——すなわち座席後方にエンジンを配してある「MR-S」のようなレイアウトは、駆動輪である後輪に荷重がかかりやすいので、車体のフロント部分にエンジンを置くFR駆動のクルマと比較して、加速性能の面で勝る傾向がある。

「MR-S」のドライバーは、自らの愛機が持つその優位性^{アドバンテージ}を最大限に活用した。

凄まじい速度で接近する前走車の影は、後続車のドライバーに対して相当の恐怖心を煽ったことであろう。

しかし、「MR-S」の挙動には寸分の乱れも感じられない。

まさしく機械のような正確さと冷静さ。

それは、おびただしい数の走り込みを経て身に付ける、愛機の潜在能力^{ポテンシャル}と自己の技量^{テクニック}に対する絶対的な信頼がない限り、決して発揮出来ないレベルのものだ。驚くべき手練れである。

だが、それだけでは「MR-S」がS-15の前に出ることはありえない。

馬力で勝る敵機を撃墜するためには、もうひとつの勝機を確実に突くことが必要だった。

それは、S - 15のドライバーが犯した、ほんのわずかな失策だった。

おそらく、背後から迫る「MR - S」に心理的なプレッシャーを感じたのだろう。

焦りを覚えたS - 15のドライバーは、無意識のうちにブレーキングのタイミングを、自らにとってのベストタイミングより“早めて”しまったのである。

それは、瞬きする間もあろうかという一瞬の刹那ではあった。

しかしながら、そんな短い時間ではあっても、間違いなく、より手前でリアの荷重を失ったS - 15は、自然界の物理法則にしたがい本来ならドライバーが望むはずのない方向へとその挙動を変化させたのだった。

ドリフト中のクルマは、必ずその進行方向を旋回円の内側へと向けようとする。

そもそも、ドリフトと言うものが、荷重の掛かったフロント部分を軸にスピンモードへ突入しようとするクルマを、適切な駆動力^{トラクション}の配分によって制御しようとするテクニックである以上、それは確実に発生する。

そして、当然ながら、進行方向に対してのベクトルが大きくなればなるほど、その走行抵抗も飛躍的に増大する。

一度抵抗が増大したのなら、それが走行中のクルマの速度に悪影響をおよぼすこともまた、物理的な必然だった。

だからこそ、速く走ることを目指すドライバーは、可能な限り乗車をドリフト状態に置くことを避け、仮にそのような状態にあっても、その角度をなるべく浅くしようとする。

コーナリング中のS - 15が見せた望まない挙動とは、まさにこれであった。

ドライバーの焦りが早めの姿勢変化をもたらしたことにより、S

- 15 は大きな抵抗を受けつつ長めの距離を走行する羽目になった。ドリフト走行中、後輪駆動のクルマはその駆動力を姿勢制御のために喰われ、体勢が整うまで、まともな加速力を得ることが出来なくなってしまう。

「MR - S」のドライバーが見逃さなかった勝機とは、その双方によつてもたらされたS - 15の失速だったのである。

「MR - S」がS - 15のイン側へと鼻先を突っ込んだのは、ドライバーが対向車の有無を確認出来るギリギリの瞬間だった。

最小限のブレーキングから、滑り込むように「MR - S」の小柄なボディがS - 15の右側面へと張り付く。

強引なコーナーへの突っ込みと対戦相手の不用意な減速によつて獲得した、まさに一瞬だけの優速。

しかしそれは、相対的に非力な「MR - S」がS - 15の前へ踊り出るのには、必要十分なものだった。

道はこの後、緩やかにうねるような左コーナーへと変化する。

ターボによつて過給されたパワフルな心臓を持つS - 15のドライバーにとつて、それは、よだれが出るほどにアクセルを踏み込みたくなる光景であつたろう。

だがその願いは、右側から覆い被さるように車体を寄せてきた「MR - S」がS - 15の立ち上がり進路を押さえ込んだことによつて阻まれてしまう。

八神街道は、このあたりから下り坂中心の行程となる。
ダウンヒル

要するに、比較的マシンのパワー差を発揮出来ないコースになる、という訳だ。

むしろ、馬力よりはクルマの軽さが武器となる区域と断言していいなれば、馬力の優劣がまともに出る上り坂で得た優勢を瞬く間に奪い去られたS - 15のドライバーが、いまおのれの前を走る対戦相手をどうにか出来ると考えるのが間違ひであろう。決着は既に付いたのである。

翔一郎を除く三名の口から同時に黄色い歓声がほとばしった。

「翔兄い、見た？、いまの光景。凄かったでしょ」

興奮のあまり翔一郎の左腕を引っ張りながら、一息にまくし立てる真琴。

血がたぎるのか、両脚が地団駄を踏んでいる。

翔一郎の反応は、一瞬遅れて発せられた。

いかにも興味なさげな生返事。

だが、そんな態度とは裏腹に、翔一郎は身震いしていた。

全身の肌が総毛立つような、はらわたが引つかき回されるような、そんな感覚が続けざまに襲いかかってくる。武者震いだ。

両手の親指をズボンのポケットに引っかけて、翔一郎は軽くため息をついた。

「意外と忘れないものなんだな」

無意識のうちに発したその言葉を聞きつけた真琴が、ひょいと我に返って下から顔を覗き込むのを、薄笑いを浮かべつつ頭を振って制する翔一郎。

変なの。真琴が言った一言を、翔一郎は自虐的な気持ちで耳にした。

そして、その評価を自分自身で肯定する。

確かに変だな、俺らしくない。

「どうでした、いまの走り」

内側にこもりつつあった翔一郎の意識を、ふたたびこちら側に引っ張り出すことに成功したのは、「ロスヴァイセ」の元気な方、長瀬純の声だった。

「部外者として、是非とも感想を聞かせて下さい」

「感想あったてなあ」

困ったように頭を掻いて、翔一郎は口先をとがらせる。

「確かに凄いのはわかったけど、それ以上を求められても俺は専門家じゃないし」

それだけで十分です、と当たり障りなく翔一郎が濁したお茶にも、純は爆発しそうな勢いで応じた。

「女の子でも凄い走りが出来るんだって認めてくれる訳でしょ？
それってアタシたちがやってきたことが間違っていないって証明にな
るじゃないですか」

そうか、と純の言葉を聞いた翔一郎は得心した。

彼女らにとつてクルマで走るといふ行為は、あくまでも自己表現
の直接的な手段なのだ、と。

だから、その姿を誰かに見てもらいたいし、評価してもらいた
い。

しかし、そのパフォーマンスを演じるのが自分たちの集団を代表
する者でさえあれば、それが別に自分自身でなくても、なんの問題
もないのだらう。

夏の甲子園に出場した母校の選手をスタンドから声をからして応
援する補欠の野球部員みたいなものか。そこに強烈な自己主張は感
じられない。

その点からすると、彼女らは翔一郎の知る“走り屋”という人種
とは、少しだけ毛並みの違う種族に属しているようであった。

どちらかといえば観戦組ギャラーの方に近いかもしれない。

まあ、あの「MR-S」のドライバーがどうなのかはわからない
が。

と、そこまで思考を巡らせて翔一郎は、はたと気付いた。

あの「MR-S」のドライバーも“オンナ”なのだ。

それは翔一郎本人が決して認めたくない内心の偏見から来たもの
であつたが、確かに彼を心底感心させうる事象であつた。

たいしたもんだ。

加奈子や純を頭越しに飛び越えて、翔一郎はまだ見ぬ「MR-S」
のドライバーに、その言葉を心中で捧げた。

午前中に出会つた「エム・スポーツ」の倫子に続いて、あくまで
モクルマの世界は男のものだという自分の中に鎮座していた古臭い
固定観念を爽快に撃破してくれた女性へ向けて、心から賞賛を送り
たくなる。

やがて、本当の決着が付いたのであろう。あの青い「MR・S」がのんびりと路上を流しながら上がってくるのが見えた。

対戦相手のS-15とは麓で分かれたのだろうか、その姿を見ることは出来ない。

エンジンの回転数を落として駐車場へと進入してきた「MR・S」のたたずまいは、先ほどのバトルで見せた剽悍さがきれいさっぱりと消え失せていて、とてもあれだけの走りをこなした戦闘機と同じクルマとは思えなかった。

シャイニング・ザ・ブル
「『青い閃光』」

翔一郎のすぐ隣で真琴は彼にささやいた。

「最近はその呼ばれているんだよ。リンさんの『MR・S』」
「なるほどね」

翔一郎の脳裏に、「MR・S」がS-15を抜き去った瞬間の光景がフラッシュバックする。

「言い得て妙だな」
「でしょ」

翔一郎の言葉を受けて、我が意を得たりとばかりに真琴が表情をほころばせる。

その笑顔からは、彼女が「MR・S」のドライバーに対して並々ならぬ尊敬の念を抱いているであろうことが、素人目にもうかがい知れた。

そして、真琴が敬意の眼差しを隠そうともしない「MR・S」の乗り手がクルマから降り立ったのは、その直後であった。

エンジンを掛けたまま「MR・S」の運転席側ドアを開けて姿を見せたのは、すらりとした長身の若い女性。

さっぱりと短めに髪を揃えたその姿からは、見るからに競技者然アスリート
ファイターとした趣が感じられるが、あの荒々しい競り合いを制した闘技者としての雰囲気は微塵も放たれてはいない。

むしろ、夜の路上においてその印象は場違いでさえある。

しかし、その時翔一郎が驚きの声を上げたのは、そんな違和感が

らではなかった。

タイトなジーンズと「ロスヴァイセ」お揃いのサマージャケットに身を包んだ彼女、あの卓越した走行技術の持ち主を、あるうことが彼は既に見知っていたのである。

それは、三澤倫子その人であった。

一章：ロードレーサー（5）

「ひどいよ。ボクだけ除け者にしてさ」

文字どおり、ぷーっと頬をふくらませて真琴がぼやいた。

ふたりが顔見知りだったのなら前もって教えてくれてたつていいじゃない、と頭から湯気でも上がってきそうな口振りで翔一郎へと詰め寄り、まるで自棄酒を飲むようにして、両手で保持した炭酸飲料の中身を喉の奥へと流し込む。

「怒んなよ。顔見知りだったって、今朝がた会ったばかりだぜ」

負けじと缶コーヒをぐいっとやりつつ、翔一郎は言い返した。

見掛けの態度は同じようでも、年の功もあってか、こちらの方には相応の余裕といったものが明確にうかがえる。

「第一、お前が三澤さんと知り合いだなんて、俺が知ってる訳ないだろう」

違うか、と強い口調で畳み掛ける翔一郎の理屈は、完全無欠に正当だった。

だが困ったことに、世の中では正しい理屈が常に感情を制し得る訳ではない。

真琴は翔一郎の正論を前にとりあえずは沈黙してみせたが、ふくれっ面を素直に納めたりはしなかった。

言葉にならない不平不満を口の中で噛み殺しつつ、彼女は翔一郎に批判的な視線を投げかけ続ける。

そして、その態度を軽く受け流してみせる翔一郎。

下手をすれば親子ほどにも歳の離れた両者が見せる、そんな微笑ましいやりとりに、他の面々からクスクスという笑い声が湧きあがった。

「ロスヴァイセ」の集会——ミーティング——と言えるほどのものではないが——は、たいてい週末の晴れた夜、それも本気印の走り屋どもがいまだ集まって来ない、これぐらいの時間帯に行われているのだ、と翔一

郎は加奈子から聞いた。

ただし、わざわざ深夜に集まってまでしてやることはと言えば、こんな風に輪を作って色々な話題に華を咲かせるのがもっぱらなのだという。

正直、走り屋らしからぬ集会ではある。

だから、今宵のような出来事バトルは例外中の例外的なイベントで、普段はもつとのんびりと互いに時間を浪費して、日付が変わる頃には各々帰路についているらしい。

倫子ひとりを除いては。

もともと、彼女は八神街道では新参者であり、ニューカマー「ロスヴァイセ」との出会いも決して友好的なものではなかったようだ。

それは、「エム・スポーツ」で翔一郎に彼女が見せた取っ付きの悪さからも十分に想像がつく。

しかし、一度目にした彼女の走りにすっかり魅せられてしまった加奈子たちは、それこそ毎晩のように八神街道へと通い詰め、とうとう半ば根負けした倫子を仲間内へと引っ張り込むのに成功したのだった。

もつとも、倫子の側もいまでは「ロスヴァイセ」の一員であることにまったく抵抗はないようで、最近では他のメンバーにドライビングやセッティングの指導を行ったりしているとのことである。

とはいえ、それは倫子と他のふたりとが、根本的なクルマとの向き合い方を同方向に定めたということの意味している訳ではない。

加奈子や純があくまでも“観戦者”の側であるのに対して、倫子は確実に“当事者”たらんと望んでいるのが明白だったからである。

その逆は真なりとは言えど、少なくとも倫子にとって彼女らは、“仲間”ではあっても“同志”ではないのだ。

そのことを、彼女らと話しているうちに翔一郎は確信した。そうこうしている間に時は流れ、会話のネタもそろそろ尽きてきたように思われた頃合い、せっかく集まったのだから少し流しに行

きませんか？、という申し出が降って湧いたように提出された。

起案者は倫子である。

コースは、街道の九十九坂側出口にあって、この時間には既に閉店しているレストラン、「和食処やまぐち」の駐車場を折り返し点にして、ふたたびここに帰ってくるというもの。

激しく峠を攻めるといふのならばいささか長めの行程ではあるが、それなりにワインディングを楽しむレベルであれば、ちょうどいい距離だと言っていていいだろう。

「いいんですか？ 俺なんかが混じっても」

もとよりそんなつもりを持たない翔一郎が、思わず周囲の顔ぶれを見渡した。

突然の提案に困惑の色を隠せないその表情からは、あえて周囲からの拒絶を得ることによって不参加の権利を手に入れようとする、ある意味姑息な魂胆がうかがえた。

そりゃそうだ。

先ほどのことを根に持っている真琴は、意地の悪い笑顔を見せた。仮にも男の身であり、しかも、この中では最も長い運転歴を有しているであろう翔一郎にとって、若い女性陣とともにクルマを走らせその技量を比較されるというのは、少々気恥ずかしい行為である。

ましてや、そのことで彼女らよりも自分の運転技術が劣るなどという結果を得るのは、出来れば避けて通りたいに違いない。

付き合いの長い真琴には、翔一郎の“運転”^{ドライビング}を熟知しているという自負があった。

公務員という職種に対して世間一般が抱くイメージのとおり、翔一郎の運転は実に堅実で、危ない橋は絶対に渡ろうとしない。

確かに決められた法定速度を金科玉条のものとしていついかなる時も遵守しているという訳ではなかったが、前走車との車間距離も必要と思われる分はきっちり取るし、周囲の状況に対する安全確認もかなり神経質な方だ。

もちろん、免許証には優良ドライバーの証、金色の帯が標されている。

それは、本来賞されることではあっても非難される筋合いのないことだ。

しかし、意図的に法定速度を無視する、つまりは法を犯すことを前提としている公道レースの場において、その美点はむしろ欠点として評されるのが明白なのも事実であった。

だから、真琴は翔一郎が「ロスヴァイセ」のメンバーよりも“車を走らせるのが下手”であろうことに一切の疑いを持っていなかった。確信していたとすら言っていだろう。

「クルージングじゃ、一番遅い人が先頭を走るのがセオリーだね」わざとらしく明るい声を出しながら、翔一郎に真琴は言った。

「だったら、翔兄いが一番に出なきゃ」

あからさまな真琴の嫌味に、翔一郎の表情がムツとしたものへと変化する。

真琴としては、してやったりといった瞬間だ。

これで翔一郎が不戦敗を選択する可能性は消えたはずで、だとしたら彼はまもなく“ちよつとした”恥を搔くことになるだろう。

ささやかな意趣返しとしては十分な成果だ。

「決まりですね」

倫子が一言言って立ち上がった。

翔一郎が少しだけ眉間に皺を寄せた時、彼女がかすかにほくそ笑んでみせたことについて、他の面々は誰も気付いていない様子であった。

何はともあれ、それをきっかけとしてなし崩し的に隊列の順序が決定される。

セオリー？にしたがい、先頭に行く翔一郎のBE-5に続くのは、倫子の「MR-S」、加奈子の「アルテツァ」、純の「スターレット・グランツァ」という順番だ。

また、自分のクルマを持たない真琴は、所有者から直々にうなが

されて「MR・S」の助手席に座ることになった。

御邪魔します、と一言告げて真琴が乗り込んだ「MR・S」の車内は、翔一郎の「レガシィ・B4」とは明確に一線を引いたスパルタンな装いで彼女を迎えた。

そこは可能な限りの内装がはぎ取られ、至るところで無機質な金属の地肌がむき出しになっている。軽量化のためだ。

同様の理由からオーディオやエアコンなど、走行性能に関係ない装備のほとんどは取り外されているらしく、搭乗者の身体を高いGから保護する目的から運転席のシートも、軽量かつホールド性の高いブリッド社のフルバケットシートへと変更されていた。

さらに印象的なのは、頭上を囲い込むように組み上げられた六点式のロールケージだ。

これは通常の乗用車と異なり基本的には開放型の仕様を持つ「MR・S」の場合、搭乗者を横転など“もしもの場合”から守るため、競技に使用する際には必須とされている装備である。

もちろん、ボディの補強という目的があることは言うまでもない。一般的な快適性というものは、ほとんど無視されていた。

世間の大多数を占める走り屋以外の面々は、このクルマでドライブすることを間違いなく躊躇するであろう。

倫子と彼らとでは、クルマに求める価値観というものが完全な別次元に存在するのであるから、それはある意味仕方のないことでもあった。

ただし、真琴は思いのほか、この「MR・S」をお気に入りの子だった。

何かを得るために別の何かを犠牲にする。

その潔さが、何事にも一本気な彼女の琴線に触れたのかもしれない。

「正直、驚いたわ」

ウインカーを点灯させゆつくりと公道に出て行くBE-5に愛車を追従させつつ、倫子は左隣の真琴に言った。

「お店で会ったお客さんが、真琴ちゃんの言ってた“あの人”だったなんてね」

「リンさん、翔兄いには言わないで下さいよ。絶対ですからね！」
「約束するわ」

暗い「MR-S」の車内であつてもはつきりとわかるくらいに顔を真っ赤にする真琴の態度に可笑しさを覚えた倫子が、思わず笑い声を噛み殺す。

倫子のことを“リン”と呼ぶのは真琴だけではなく、「ロスヴァイセ」の面々に共通の行為であつた。

言うまでもないが、倫子という名前の“倫”を音読みにしたのがその由来だ。

倫子自身が自分の名前を教える際、倫理の倫と書いて云々と説明したことが発端だと、真琴は加奈子から聞いていた。

そんな会話を交えているうちに、先行する翔一郎の「レガシィ・B4」が速度を上げつつ最初のコーナーへと進入して行く。

見せてもらいましょうか。

真琴には聞こえないようにそうつぶやいて、倫子はBE-5のテールランプを凝視した。

軽い減速からターンイン。

失った速度をアクセルオンで回復させながら脱出。

速度域がさほどでないことを考慮に入れても、非常に安定したコーナーリングだ。

先行するBE-5の姿勢は小揺るぎもしていない。

実は、この走行がスタートする時点で、翔一郎から「ロスヴァイセ」のメンバーにひとつの条件が提出されていた。

それは、“絶対にセンターラインを割らないこと”である。

確かにその条件を満たしている限り、対向車を巻き込んだ大きな事故を防ぐことは出来そうだった。

後はスピードにさえ十分に気を配っていれば、何かでミスを犯しても精々ガードレールに車体を擦る程度で済まされるだろう。

公務員らしいと言えばそのとおりな、安全志向の提案だと言える。「へえ、翔兄いの癖に飛ばしてるじゃん」

いくつかのコーナーを抜けたあたりで真琴が感想を口にした。ただし、「MR-S」のフロントガラス越しに見えるBE-5の後ろ姿からは、峠を攻めるというイメージからもたらされる激しさなぞ微塵も感じられない。

むしろ、気楽にのんびり流しているかのようにさえうかがえる。その感触に、真っ先に違和感を感じたのは倫子であった。

「ロスヴァイセ」は今回のゲストである翔一郎の意向を汲んで、対向車線にはみ出ない安全走行を約束した。

翔一郎が夜の峠道とは縁遠い人種に見えたことによる、ちょっとした余裕も加奈子たちにはあったのかもしれない。

だが、倫子は違った。

彼女は、この“遊び”の中では是非とも確認したいひとつの疑念を抱いていたのである。

とうのむかしに脚を洗いましたよ、と本人は断言した。

もう、そういった類の話に興味はないんです——むかしむかしの錆びた刀に今更無理言わないで下さい、とまで言つてのけた。

だが、何かの本で読んだことがある。

本当に優れた刀は一見錆びついてなまくらになったように思えても、ひとたび研ぎを入れれば、たちまちのうちに切れ味が蘇る、とあんな言葉だけでは納得しない。

音に聞こえた名刀が本当に切れ味を失ったのかは、わたしが直に確かめてやる。

そして、そうした思いを抱いていたからこそ、彼女は気付くことが出来た。

先行するBE-5に続く自分の「MR-S」が、コーナーを抜ける都度、わずかだが、そうほんのわずかだが引き離されているという事実。

気のせい？ 最初は確かにそう思った。

だが、愛車の方がその思いを明確に否定する。

彼女の「MR-S」が搭載しているエンジンは、加奈子たちと“じゃれている”時の表情とは明らかに違う顔を覗かせ始めていた。

それは、堅気の「MR-S」が奏でるエンジン音ではない。

それもそのはず、倫子の「MR-S」は、その心臓部をノーマルのZZW-30が搭載している1ZZ-FEから、よりスポーティ性の高い2ZZ-GEへと換装していたのだ。

両者ともに直列四気筒のレイアウトを持つ一八〇〇ccエンジンではあるが、一四〇馬力を発揮する前者に比べて、本来ひと回り以上大型のZZT-231「セリカ」が搭載するエンジンである後者は、カタログ値で三割以上も高出力な一九〇馬力を絞り出す。

しかも、倫子の「MR-S」に載せてあるそれは、「TRD」がトヨタ・レーシング・ディベロップメント作成したパーツを用いたチューニングが施されており、競技用エンジン並みの一三・〇という圧縮比と八〇〇〇回転を軽く上回るレブリミットとを有していた。

非力なはずの「MR-S」が先ほどのバトルの序盤、登りの行程で対戦相手に追従出来た理由のひとつがこれだった。

車体重量の軽重を計算に入れると、立ち上がりでの遅れがBE-5との出力差に由縁するものだとはい底思えない。では、なぜ？

予想以上の横G。

予期せぬ挙動に、真琴の口から短い悲鳴が飛び出す。

「リンさん、ちょっと！」

「ごめん。黙ってて」

たちの悪いいたずらだと勘違いした真琴の抗議を一言で制して、

倫子は唇を真一文字に引き締めた。

隣の真琴が怪訝な表情を浮かべるのにも一顧だにしない。

中程度の左コーナー。

緩やかに減速し、何事もなかったかのようにクリアしていく翔一郎のBE-5。

倫子の「MR-S」がその後を追って進入する。

だが、先行する翔一郎の走行ラインに愛車をぴたりとトレースさせられない。

本能的に身体の方が反応し、ZZW-30はBE-5と異なる独自のラインを通ってコーナーを抜けていく。

MRと4WDという駆動方式の違いを考慮に入れても、それは山道を流す程度の速度域では考えられない現象だった。

そんなはずは、と咄嗟に速度計に目をやる倫子。

コーナーを脱出した直後のそれは、時速一〇〇kmを越える値を指していた。

確かに倫子にとってなら全力とは言い難い速度かもしれないが、片側の一車線だけを使用するという、走行ラインが限定された状況を考えると、そうそう素人が出せる速度域であるとも思えない。

事実、加奈子や純はこのペースに付いて来られていなかった。

ふたりの愛車ははるか遠くに引き離され、もはやバックミラーに映ってさえいない。

加えて、あれだけ破綻のないクルマの挙動は、ドライバーがそれだけの速度を決して無理矢理に絞り出していないという証左であるとも言えた。

間違いない。

自分の中のスイッチを切り替え、倫子は軽く息を飲んだ。

翔一郎は熟知しているのだ――八神の峠をどのように走るのかを。あるコーナーにおいて、自分の愛車がどの走行ラインを、どの程度の速度で走ることが可能なかを、彼は経験則で知っている。

だから怯えない、恐怖心がない。

当然だ。

それが“出来る”とあらかじめわかっているのだから、そんな負の感情が心中に芽生えようはずもない。

コーナーの立ち上がりでBE-5がZZW-30を引き離す理由もはつきりした。

翔一郎がとった走行ラインは、彼と彼の愛車にとってのベストラ

インであり、この速度域においては、他のクルマにとってのそれとイコールにはなりえなかったからだ。

やはり、走り込みの量と質が桁違いだ。

そうでなければ、こんな片側一車線などという限定された条件におけるベストラインなんて描けるはずない。

この切れ味。

誰が錆びた刀ですって？ とんでもない！

倫子はその事実を認識した瞬間、身体のコががかと熱くなるのを感じた。

先刻のS-15には感じようもなかった圧倒的な高揚感だ。

彼女は、麓の折り返し地点である「和食処やまぐち」の駐車場内で翔一郎の行く手を愛車の車体で遮った。

「いきなりどうしたんです、リンさん？」

突然のことに驚きを隠せない真琴を置き去りにしてコックピットから飛び出した倫子は、同様にクルマから降りて来た翔一郎に向けて、自らの意志をはっきりと伝えた。

壬生さん、わたしと張ってもらえませんか？

それは挑戦の表明に他ならなかった。

翔一郎の目が丸くなる。

「不躰な提案ですね」

少しだけむっとした表情とともに、翔一郎は腕組みをする。

「俺は走り屋じゃないんですよ」

「いまのあなたが走り屋じゃなかったら、一体誰が走り屋だっていうんですか、“ミブロー”さん？」

倫子は翔一郎を“ミブロー”と呼んだ。

それが「ミブ・ショウイチロー」を縮めた呼び名であることは明らかだったが、真琴はこれまで翔一郎の知人友人がその名で彼を呼ぶのを耳にしたことはなかった。

だが、そう呼ばれた翔一郎は、いかにも不愉快そうに顔をしかめてみせる。

それは、翔一郎がそんな呼び名で呼ばれていたことのある、何よりの証左であるように真琴には思えた。

「勝手に決めつけないでもらいたいな」

組んだ腕を解いて、翔一郎が前に出る。

本人も気付いていないのか、倫子に向けての言葉づかいがそれまでと異なっていた。

「むかしはむかし、いまはいま。そちらが俺のことをどう思おうとも自由だけど、いまの俺は――」

翔一郎は対峙する倫子に向けて何事かを言おうとした。声が一段階低かった。

いつもの彼とはどこか違う、ただならぬ雰囲気だった。

真琴の知らない翔一郎がそこにいた。

だが、倫子はそんな翔一郎の一面を知っているかのごとき態度をうかがわせている。

真琴の胸中にモヤモヤとした暗雲が湧きあがってきた。

自分の知らない翔一郎。

倫子の知っている翔一郎。

一体それはなんなのだろう？。

そして気が付いた時、彼女はふたりの間に身体ごと分け入っていた。

ストップ、と叫びながら両腕を大きく振り回す。

「いまのリンさん、ちょっと変です。翔兄いみたいなド素人にバトル挑むなんてどうかしてますよ！」

無意識のうちに翔一郎ではなく、倫子の方に抗議の矛先を向ける真琴。

ようやく追いついてきた加奈子と純も、すわ何事かとクルマを降りて駆け寄ってくる。

「そう、真琴ちゃん知らないかもね。どうやら壬生さんの方も教えてなかったみたいだし」

倫子は真琴と翔一郎の顔を交互に見やりながら、心底嬉しそうに

口元をほころばせた。

そして、への字口を隠しもしない翔一郎に向けて、興奮気味に言い放った。

「壬生さん、さっきのクルージング、見事でした。あなたがいくら否定しても、わたしはあれで確信しました。あなたはいまでも間違いないく現役の――」

しかし、会話はふたたび第三者によって遮られた。

周囲に爆音を轟かせながら、一〇台近い数のクルマが「和食処やまぐち」の駐車場へと傍若無人に雪崩れ込んできたからだ。

それは、まるで暴走族の一団のごとき連中だった。

煌々としたヘッドライトの流れが一带を明るく照らし、無闇に甲高い排気音が威嚇するかのようにあたりの空気を震わせた。

ロータリー・サウンド。

先頭に立つ銀色のクルマが放つ独特のエンジン音を耳にして、倫子が咄嗟に目を見開いた。

マツダFD-3S「RX-7」

日本を代表するピュア・スポーツカーだ。

生産年度からするといささか古びたイメージを持たれるかもしれないが、その妥協を知らない走行性能と曲線を主体とした美しいシルエットには、いまだに多くの人を魅了してやまないカリスマが感じられた。

その「RX-7」に従者のごとく付き従う複数のクルマたち。

巨大なリアウイングや車体側面に貼り付けられたステッカーの類が目立つ。

どれもこれもが走り屋のクルマらしく、これ見よがしに自らチュ改造車であることを強烈に主張している。

彼らは、まるで狙っていたかのように倫子たちのもとへと群がり寄って脚を止め、なかば取り囲むようにしてヘッドライトの光を浴びせ掛けた。

「『カイザー』だ」

各々のクルマに張ってあるチーム名のロゴを見て、真琴がつぶやく。

「大鳴の走り屋がなんで？」

そのつぶやきが終わらぬうちにFD-3Sのドアが開き、他のクルマからの光線をバツクにして背の高い遊び人風の男が姿を見せた。年齢は二〇台の前半だろう。

金色に染め上げた頭髮に派手なメッシュを入れ、鼻と耳には複数のピアスを通してている。

その男のことを倫子がよく知っていた。

せりざわさとし
芹沢聡。

県境にほど近い大鳴峠を本拠地とする走り屋チーム「皇帝」ホームグラウンド

その、規模と実力から県内屈指の知名度を誇る彼らを率いる男の名前がそれだった。

「夜の駐車場でおトコとオンナが何やら言い合ってると思つたら、おまえだったのかよ、倫子。随分と探したぜ」

膝上までしかないズボンのポケットに両手をつ込み、他者を見下すように顎をしゃくり上げて、芹沢は第一声を放った。

傍目には攻撃的な印象とは無縁に思える下がり気味の目尻が却って嫌味たらしく映るのは、彼の全身から放たれる不遜な雰囲気のせいであろうか。

「八神くんだりまでわざわざ脚を運んだ甲斐があつたってもんだ。

やつぱ、俺たちふたりにや“縁”って奴が有るんだろうぜ」

「お金持ちのドラ息子がなんの用？」

真琴と翔一郎を下がらせるように左腕を振り、倫子は毅然として芹沢と対峙した。

言葉からすると、どうやら両者は顔見知りの間柄らしい。

だが、それは双方の関係が友好的であることを意味する訳では当然なく、むしろ、その真逆の関係であるらしかった。

これまでになく倫子の視線が鋭い。

睨み付けていると言いかえてもいいだろう。

たちまちのうちに緊張感がみなぎる。

それはチームメイトであるはずの加奈子と純が、少し距離を置いたところから戸惑いながらも遠巻きに様子を窺うことしか出来ないほどのものだった。

「なんだ、この連中？」

状況を少しでも把握しようとして、翔一郎は真琴に聞いた。小声で。

翔一郎の方はこの状況下においても平常心を保っていた。

その声や姿勢に動揺の色は見られない。

社会人としての場数がものを言っている。

「『カイザー』っていう走り屋のチームだよ」

変わらない翔一郎の態度に安心してか、真琴の方も落ち着いて小声で答える。

「柄が悪いらしくって、地元でも評判がよくないんだ」

「確かにチンピラと同類にしか見えないな」

翔一郎が同意する。

続けて真琴が補足に入った。

「でも、速い走り屋だってことも確かなんだよ。特にあの芹沢って人は、近くのサーキットで上位のラップタイムを保持してるそうだから。でもなんで『カイザー』のトップがリンさんを……」

「さあな。そいつを知りたけりゃ、後で本人にでも聞くしかないんじゃないか？」

そんなふたりのやりとりなど眼中にはないかのように、芹沢は倫子との距離を縮めてニヤリと笑う。

邪悪と言えば言葉がすぎるが、それと間違いなく同方向に位置する何かを色濃く含んだ笑みだった。

「相変わらず気の強いこった。だが俺とお前の間柄でそういう言い方はないんじゃないか。そうだろ？」

ポケットから抜かれた右手が好色そうに倫子へ伸びる。

図に乗らないでよ、と倫子はその手をぱしりと払い除けた。

大袈裟に顔をしかめて、芹沢が叩かれた手をぶらぶらと振る。

「むかし仕事で付き合ってたあげたからって、いまでもあんたのオンナ扱いされたらたまらないわ!」と、嫌悪感をそのまま言葉の槍へと凝縮して、彼女は相手の胸元に突き付けた。

顔も見たくない、とばかりに口元を引き締める。

その態度に芹沢は、ひゅうと口笛を吹いておどけてみせた。

「俺も随分と嫌われたもんだな」

小刻みに肩を揺すりつつ彼は言った。

倫子と芹沢、あるいは「カイザー」との間には、明らかになんらかの因縁がある様子だった。

それも出来れば他者の介入を許したくない範囲でだ。

確かに壬生翔一郎個人としては、三澤倫子という魅力的な女性の過去にそれなりの好奇心を持たない訳でもなかった。

しかし、彼女自身があえて口を開くのならばともかく、このまま赤の他人が黙って聞き耳を立てているというのもどこことなくはばかれ、翔一郎は心配そうに身を乗り出す真琴を押し込むようにして、まずは加奈子たちと合流する路を選んだ。

ただし、いざとなったら倫子の身の安全を図らねばならない。

それがこちら側唯一の男性である自分が最低限やるべきことだと、翔一郎は自覚していた。

だが、幸いにして芹沢率いる「カイザー」は、倫子とそれ以上の摩擦を引き起こすことなく、数分後には続々とこの場を後にし夜の闇へと撤収していった。

「ごめんねみんな。不快な思いさせちゃって」

あらためて周りに集まってきた面々に向かって、倫子は憔悴したような声でそう言った。

事情を説明するのが筋なのは彼女の方もわかっていたらしい。

第三者にほどよく近い翔一郎があえて突っ込みを入れるよりも早く、倫子は芹沢との関係を手短かに語り出した。

倫子はしばらく前、夜の街でアルバイトをしていたことがあった

のだそうだ。

当時、自動車整備の知識と技術を学ぶために工業系の専門学校に通っていた彼女にとって、それが学費と生活費とを自分自身の手で稼ぐのに必要な選択肢のひとつであったということに、翔一郎たちも異論はない。

芹沢はそんな彼女が働いていた店の常連客だったのだ、と倫子は言う。

両親が地元でも有名な資産家である彼は、倫子のことによほど気に入ったのか彼女目当てにほぼ毎晩のように店を訪れては、二年に満たない短い期間内に高級車が新車で買えるほどの金を落としていたらしい。

そのせいなのかはわからないが、彼の倫子への執着はいまだに根深く続いているのだという。

「前にいた峠から、八神へと移ってきた理由のひとつがそれなの」
そう締め括ってから倫子は、俯き加減にため息をついた。

「でもみんなには迷惑は掛けないから。あいつとは決着をつける」
「決着って、なにをするつもりなの？」

聞き役に耐え切れなくなったのか、加奈子が倫子に詰め寄った。
「バトルよ」

その問いに彼女は答えた。

「来週の土曜日の夜、あいつとわたしが対戦するわ。八神の表コースだね」

八神には表と裏、ふたつのコースがある。

そのうち表コースというのが、いましがた翔一郎たちが走ってきたルートのことで、スタート後、若干の登りを経た後は延々と下りが続く中速コーナー主体のテクニカルな構成になっていた。

八神のメインコースと言っても過言ではなかった。

ちなみに裏コースというのは単純に表コースのスタートとゴールを入れ替えただけのものだが、高低の変化がまるで逆になるため、攻略面では別ルートと考えていい。

倫子が表コースを選んだ理由は、FD - 3SとZZW - 30とのパワー差を局限するためなのが明らかだった。

先のS - 15とのバトルがそうであったように、序盤を除けば下りの続く表コースならば相対的に非力なクルマでも十分に闘える。これが登り主体の裏コースならば、馬力の差を技術で補うのはかなり難しくなるであろう。

彼女の選択、それ自体に間違いはない。だが……

「あんなこと言ってたけど大丈夫かな？」

帰りの行程でBE - 5の助手席に座る真琴が不安気にこぼした。

「バトルで勝てば相手は手を引くって話だけど、それってつまり、負けたら相手の言い分を聞くってことでしょ」

「だろうな、と言葉短く翔一郎が答えると真琴は、理不尽だよ、と声を荒げる。

「リンさんがいくら上手くたって、芹沢の『RX - 7』と『MR - S』じゃクルマの差がありすぎる。噂じゃ、あのFD - 3Sは四〇〇馬力以上出てるって話だし、峠の下りが戦場だとしても、余りにも勝ち目が薄いよ。フェアじゃない！」

「でもな」

一時の真琴の爆発を最後まで受け止めて、翔一郎はドライに言い切った。

「その提案を彼女は受けたんだ。いまおまえが言った諸々の条件を承知の上でな。だから、卑怯もへつたくれもない。そいつが大人の世界って奴だ」

「冷たいね、いまの翔兄い」

反論出来ずにしゅんとする真琴の頭をぼんと叩いて翔一郎は一言だけ付け加えた。

「三澤さんを信じるんだな」

無言で真琴はうなづいた。

二章：ドッグファイト（1）

“最悪の事態は、常に最悪のタイミングで発生する
これは「マーフィーの法則」として知る人も多い一文だ。^{フレイズ}

ただし、その法則がいざ自分の身に降りかかってきた時、整然とそれに対処しうる人間は、この一文を知る人ほどには多くない。

「翔兄い、大変！ リンさんが」

いつものとおり、ほぼ定時で仕事を終えて帰宅したばかりの翔一郎目掛けて、血相を変えた真琴が自宅の玄関から飛び出してきた。何があつた？ と、驚いた翔一郎が尋ねるよりも早く、彼女の口からとんでもない現実がもたらされた。

あるうことか、倫子の駆る「MR-S」が事故を起こしたのだ。

それは、走り屋チーム「カイザー」を率いる芹沢聡とのバトルを明後日に控えた昨日の深夜。

場所は八神街道の頂上付近。

翔一郎たちが倫子とS-15との決闘^{シルヴィア}を観戦していた、まさにその周辺である。

真琴の方も加奈子からの伝聞らしく、詳しい状況は把握していない様子なのだが、倫子がいま病院に検査入院していることと、彼女の愛車、ZZW-30「MR-S」がかなりの損傷を被ったことだけは、はっきりしているようだった。

流石に翔一郎は真琴のように取り乱したりはしなかった。

ある程度彼女との付き合いがある真琴と違い、いまのところ彼にとつての倫子とは、行き付けの店で働く新人メカニックという位置付け以上の存在ではなかったからだ。

とはいえ、一応の顔見知りが発生したトラブルに対してあっさり他人事を決め込めるほどの薄情者にもなれなかった翔一郎は、半ばうろたえている真琴を助手席に積み込み、倫子が入院しているという県立病院へとBE-5を走らせたのだった。

既に午後六時をすぎており正規の面会時間というものはとうにすぎ去つてはいたが、幸いにして倫子のいる病室には特に問題を起こすことなく入ることが出来た。

そのことから、彼女の外傷がたいしたものではなさそうだと翔一郎には判断出来たのだが、幾分冷静さを失い気味の真琴は、病室内で倫子自身と直接対面するまで気が気ではなかったようだ。

「ごめんなさい。心配かけて」

いまにも泣き出しそうな顔をしている真琴の頭上にベッドの上から手をやって、倫子は心底済まなさそうに口を開いた。

上体を起こし本のページをめくっていた姿勢をやめ、ベッドの端に腰掛けるようにして翔一郎たちと向き合う。

その頭部には痛々しげに包帯が巻かれているが、それ以外には彼女の外見に負傷箇所のようなものは見受けられない。

倫子自身も、病院から支給されたそっけない寝間着に身を包んでいるとはいえ行動に支障を来している様子はうかがえず、検査入院というのは本当のこのようだった。

事故は自分の不注意のため、と倫子はきっぱりと言い切った。

状況を聞くと、その夜、いつものごとく八神の表ルートを攻めていた彼女は、普段なら難なくクリアしていたはずの頂上付近のブラインドコーナ―でクルマの操作を誤り、勢いよくガードレールに接触したのだそうだ。

その衝撃で「MR-S」はフロント部分を激しくヒット。

自走不可能な状態にまで足回りを損傷し、割れたフロントガラスが車内に飛び込んだことにより彼女も額を数針縫う怪我を負ったのだという。

魔が差したのかしらね、と自嘲気味に倫子は笑ったが、彼女らしくないと言えばらしくない、どこか奥歯にものが挟まったかのような物言いに翔一郎は引かかるものを感じた。

「何か、別に原因があつたんじゃないんですか？」

少しだけ鋭さを込めて翔一郎は問い質す。

「ただ単に“自分のミスだ”なんて聞いたって、その小娘は納得しやしませんよ」

軽く真琴の方に視線を振って倫子の回答を促すと、彼女はほんのわずかにため息をついてから重い口を開いた。

「頂上付近のブラインドコーナーをクリアしている最中、対向車にハイビーム上向きライトを浴びせられたの」

「対向車？」

真琴が言葉の一部を反芻する。

「見落とし、ですか」

「そうじゃない！」

倫子は叫んだ。

「あの時、間違いなく対向車のヘッドライトはなかった。あのライトは、わたしがコーナーに進入した直後に、いきなり現れたのよ」
感情が噴出する。

「警察は信じてくれなかった。目撃者もない。当然だわ。でも、わたし、嘘は言っていない。もちろん事故を起こしたのは、わたしの責任よ。それはいいの。だけど、あんなのがきつかけだなんて、わたし、納得がいかない！」

対向車のヘッドライトがなんの兆しもなく突如として眼前に出現する。

翔一郎もむかし、夜の八神を数え切れないほど走ったことがあるのでわかるのだが、あの場所でそれだけはないと断言出来る。なぜなら、対向車からのヘッドライトの光線は、必ずコーナー外側に設置されたカーブミラーに映り込むからだ。

だから、もし倫子の証言がそのとおりなのであれば、その重要な兆しを彼女が見落としたか、あるいは他の人為的な――

「リンさん」

倫子の感情が一段落したのを見計らうように、真琴が恐る恐る口を開いた。

「週末のバトルはどうなるんでしょう？」

「不戦敗、ってことになるでしょうね」

力無く倫子は応えた。

「相手が日時をあらためてくれるなら別でしょうけど、芹沢はそういったタイプのオトコじゃないわ。結果を得るためにはどんなことでもする」

言い終えると、倫子は無理矢理笑顔を形作ってみせた。

無言でそのやりとりを聞いていた翔一郎が、しばし目をつぶる。

口元を引き締め、難しい表情で何やら考えを巡らせているようだ。

「真琴、そろそろ帰るぞ」

ふたたびまぶたを上げた彼はそう言っ、ふたりの会話を断ち切った。

渋る真琴を引きずるようにして病院を後にした翔一郎は、しかし、その脚を直に自宅へと向けようとはしなかった。

「ちよつと、翔兄い、どこ行くつもり？」

訝る真琴を無視するように彼が向かったのは、倫子が事故を起こした現場であった。

「確かめたいことがある。付き合え」

有無を言わせぬ口調でそう告げた翔一郎は、付近の路肩にBE-5を停車させると、さつさとひとりで車を降り、倫子のZZW-30が突き刺さったと思われる損傷したガードレールの手前まで足早に歩み寄っていく。

「このあたりだな」

衝突の衝撃で無惨にひしゃげたガードレールには見向きもせず、

翔一郎はその場からうかがえる夜の峠道へと目をやった。

「なに見てるの？」

「当時の状況さ」

言われたとおりに後を追ってきた真琴の質問に対して翔一郎は、手振りを加えて解説を始める。

「ブラインドカーブに進入する際、三澤さんは対向車の存在をギリギリまで確認するため、こんな風にコーナーとの接点を奥の方に取

クリッピングポイント

ったはずだ」

真琴がうなづく。

「だとすれば、コーナーに進入するポイントはどこかこのあたりだろう。確かに、ここで操作ミスしたのなら、そこらへんにクルマが突っ込んだのも納得出来る」

「ふんふん」

「だが」

翔一郎は真琴の方に向き直って言い切った。

「この位置からなら、こここのミラーに映ったヘッドライトを見落とすなんて考えられない」

聞きようによっては倫子の発言に対する完全否定とも取れるその台詞に、彼女の崇拜者、その最右翼ともいえる真琴の顔色がさつと変わる。

「翔兄い、それって」

「まあ待て、話を最後まで聞け」

脊髓反射的に噛み付いてきた真琴を軽くいなし、翔一郎は言葉を続ける。

「俺もあの人が嘘を言っているとは思ってない。でも、状況はいま言ったとおりだ。余所見でもしていない限り、対向車のハイビームを見落とす訳がない。だったら答えはひとつだろ」

「？」

「ビームの方が突然現れたってことさ。どこの輩かは知らないが、誰かが仕組んだ質の悪いいたずらだよ」

方法は至って簡単。

コーナーの向こう側からは見えない位置にクルマ——この場合は二輪だつて構わない——を停めておいて、倫子の「MR-S」が顔を見せた時を見計らってタイミングよく、その鼻面にハイビームをお見舞いすれば片が付く。

「でも一体誰が」

翔一郎の説明を聞き終えるや、真琴の口から至極当然な疑問がこ

ばれ落ちる。

そして次の瞬間、彼女の耳朵に倫子が病室で発した言葉が鮮明に蘇った。

「芹沢はそういったタイプのオトコじゃないわ。結果を得るためにはどんなことでもする」

まさか。

倫子の言った“結果を得るためにはどんなことでもする”の部分に反応して、真琴は目を見開いた。

ヘッドライトの件もあいつらが仕組んだんじゃ——

真琴は、もはや彼女の中では確信に近いものに成長した推測を翔一郎にぶつけてみた。

「かもな。だが証拠がない」
さらりと翔一郎は言い放った。

「証拠がなければ公の組織は動かんよ。残念だがな」
突き放したかのような翔一郎の言葉に、真琴は沈黙した。
意外な反応だった。

いつもなら、彼女は咄嗟に反発してきたことだろう。

翔一郎も、真琴がそういった態度をみせるだろうことを予測して会話を続けるつもりだった。

だが、真琴はそうしなかった。

代わりに唇を噛み締め、うつすらと悔し涙さえ浮かべながら小刻みに両肩を震わせる。

彼女は叫んだ。

「悔しいよ、そんなのってないよ！」

真琴が感情を爆発させたのを目の当たりにして、翔一郎は、しまったとばかりに俯き無造作に髪の毛を引っ掻いた。

不覚にもこの件に感情移入してしまっている自分自身に気付いたからだった。

毒を食らわば皿まで、か。やれやれ。

翔一郎は決意した。

二章：ドッグファイト（2）

決戦当日。 二二時。

八神街道への入り口、「八神口」と呼ばれる場所へ翔一郎の「レガシイ・B4」が姿を見せたのは、ちょうどその時間帯だった。

八神口はもっぱら無人の倉庫が軒を連ねるような区域であり、周辺に民家らしい民家は存在しない。

そのため普段なら点在する街灯を除けば人工の明かりらしい明かりなぞまず見出せないのが、この時刻においてはしごく当たり前の風景だった。

だが、今晚に限って言えば、倉庫前に列をなすように停められた一〇台近くのクルマの存在が、そういった殺風景な空間を幾分なりとも打破していた。

アイドリングするエンジンの奏でる重低音が、重々しい響きとなつて周囲の空気を震わせている。

芹沢聡率いる「カイザー」の面々だ。

翔一郎は彼らからあえて距離を置いた一角にB E - 5を止め、助手席に乗せてきた真琴とともにクルマを降りた。

集団の中心に煙草をくわえる芹沢の得意気な表情があつた。

だが、倫子を始めとする「ロスヴァイセ」の姿は見られない。

どうやらバトル自体は、まだ開始されていない様子だった。

八神の表コースはほとんどの場合、ここを起点にして行われる。

ちょうど「カイザー」がたむろっているあたりに押しボタン式の信号機があり、わかりやすいそこがスタートラインとなっているのだ。

車から降りて数分、真琴も翔一郎も一言の言葉も発しなかった。

と言うより、まるで自分自身が追いつめられたかのように口元を引き締めている真琴の態度が、翔一郎に口を開かせなかったのだと言いかえた方がいい。

やがて、一台のクルマが市街地方向から八神口へと上ってきた。
黄色い「アルテツァ」 加奈子の愛車だ。

それは、ずっと翔一郎たちの前を通りすぎると、芹沢の愛車「R
X-7」の側で足を止める。

すぐさま助手席のドアが開き、三澤倫子が傍目にも沈んだ面持ち
を隠そうともせず降り立った。

あたかも死刑執行を待つ犯罪者のようだ。

続いて降りてきた加奈子が、心配そうに彼女の後に追従する。

「倫子、自慢のクルマは^{M.R.S}はどうしたい？」

嫌味たらしく芹沢が言った。

「まさか、事故でも起こしたっていうんじゃないだろうな」

「そうよ、悪かったわね」

力無く、それでも必死に虚勢を張って倫子は顔を上げる。

「だから今日、わたしは走れないわ」

芹沢の口元がはつきりと歪んだ。抑え切れずに思わずこぼした喜
色による変形だ。

「要するに、俺の不戦勝ってことだな」

芹沢が確認するように言うと、倫子はためらいがちに小さくうな
づいた。

両の拳は、いまにも震え出しそうなほど、ぎゅっと強く握りしめ
られている。

「待ちなさいよ！」

彼女から伝わってきた悔しさに触発されたのか、一声叫んだ真琴
が弾かれたように飛び出した。

加奈子の制止を振り払って、彼女はそのまま倫子の前に立ちはだ
かり、強い口調で芹沢に向けて抗議する。

「戦つてもいないのに結果を出すなんて絶対におかしい！ 日を改
めて決着を付けるのが筋なんじゃないの？」

「嬢ちゃん。アンタ馬鹿だろ」

必死の形相でいまにも噛み付かんばかりの真琴へと、見下した顔

付きで芹沢が告げた。

「例えばオリンピックでだ。ワタクシ怪我をしました、風邪をひきました、調子が悪いんです、だから日を改めてもう一度やらせて下さい、何て言い分が通ったことが一度でもあるかよ？ 日程に合わせてコンディションを整えるのも選手の仕事だろうが。倫子はそれを怠った。だから負けた。ちゃんと筋は通ってるぜ」

一氣にそれだけ続けると、芹沢はフンと鼻を鳴らした。完璧な正論だった。言い返せない悔しさに真琴の顔が真っ赤に染まる。

リンさんの事故はアンタたちが仕組んだ癖に！

真琴はそう言い放ちそうになって、ぐっと言葉を飲み込んだ。言ったところで証拠がない以上、それは単なる言いがかりにすぎないのだ。

歯を食いしばって爆発しそうな感情を無理矢理に抑え込んだ。目尻に涙が浮かんだ。

「ありがと、真琴ちゃん」

倫子が礼を言う。声の中に諦めに似た何かが色濃く含まれていた。「さ、これからわたしをどうする気？」

決意を定めて前に出た倫子を、芹沢が好色な目線でねめつける。「別に獲って食いやしないさ」

不躰に伸びてきた芹沢の手が、形のよい彼女の顎をくいと上げた。顔を近付けながらほくそ笑む。

「とりあえず、今晚は俺に付き合ってもらうがね」

だがその時、芹沢の台詞に割り込んだ発言があった。

「ちよつと待った」

発言者は翔一郎だ。彼は言った。

「代理を立てるってのは駄目かい？」

「代理だと」

「そうさ」

翔一郎は深刻さを微塵も感じさせない軽い口調で芹沢に告げる。

「『シャイニング・ザ・ブルー 青い閃光』と『カイザー 皇帝』のアタマが競るんだ。観戦組だって、けっこう来てるだろう。このまま誰も走らないなんて、いささか体裁が悪いんじゃないかい？」

この降って湧いたような提案に、芹沢と「カイザー」のメンバーだけでなく、真琴も加奈子も、当事者の片割れである倫子ですら、きよとした表情を一瞬浮かべる。

「オッサン、自分が何言ってるのかわかってるのか？」

「落しどころはそこだと思うがね」

威嚇するように眉毛の片方を吊り上げる芹沢にも動ぜず、翔一郎は続けた。

「そっちだって、あらぬ噂を立てられてチームの名前にケチが付くのは不本意だろ？」

あらぬ噂。そう言われて芹沢はかすかに渋い顔を見せた。

確かに倫子の「MR-S」が事故を起こしたタイミングは、勝負を控える芹沢にとって絶妙といっていいものであった。

もっともそれは、彼自身が末端のメンバーに指示をして引き起こさせた結果であつたのだから、タイミングが絶妙なのは当たり前だった。

真琴が抱いた推測は的中していたのである。

芹沢にとって倫子とのバトルは決して負けられない一戦だった。

もちろん勝つことで彼女をモノに出来るという個人的な欲求が大きかったのも理由のひとつだが、むしろ重要なのは、明らかに格下のクルマ、しかも女が運転したものに敗北を喫した場合、これまで築き上げてきた走り屋としての自分とチームの評判がガタ落ちになることを避けられそうもなかったからだった。

だからこそ策を講じた。

倫子がいかに凄腕だろうと問題にならない、“相手の不戦敗”という特等席の切符を手に入れるために。

まともに戦って後れを取るとは思わなかったが、それでも万が一ということもある。

それだけの実力を芹沢自身が認めざるをえない倫子ではあるが、そんな彼女であつてもクルマがなければ戦えない。

代わりのクルマで出たらいいい、と普通の人なら答えるだろう。その意見自体は決して間違つてはいない。

むしろ一般論であるといつてもいいだろう。

しかしながら、一見傍若無人なようにでいて走り屋という人種、それもどこか求道者の^{スティック}的な面を持つ古株は、他人のクルマで対戦することを潔しとはしないのだ。

そして予想どおり倫子は代車での戦いを選択せず、決して納得していないにしろおのれの敗北を受け入れた。

ここまではなんの問題もない。計算どおりである。

だが、間抜けにも翔一郎に指摘されるまで気にも留めなかったのが、余りに上手くいきすぎた計略がかえつて巷の邪推を呼び、無責任な風評が真実を直撃する可能性だった。

何せ、このままでは芹沢自身の実力が今夜の八神で知らしめられることはありえない訳だから、“勝てないことを悟ったから小細工をした”という噂が立つのを防ぐことなど出来ないだろう。確かにそれは美味しくない。

だったら、実際に八神街道を駆け抜けることでおのれの実力を衆目に見せ付けるべきだ。

問題は誰が倫子の代理で走るか、である。

芹沢は八神の常連をほとんど知らなかった。

もしかしたら自分の知らない実力者を当てられるかも知れず、そうした場合、せつかく手中におさめた不戦勝という甘味なパイがぼろりとこぼれ落ちかねない。

あえて是とも非とも断言せず、芹沢は翔一郎に尋ねた。

「代理たつて一体誰が走るつもりなのさ」

「俺だよ」

翔一郎は即答した。

余りに予想外な答えに真琴たちは、ぽかんと口を開ける他はない。

「ちょっと翔兄い、本気なの？」

真琴が素っ頓狂な声を上げた。

「ああ」

と、いつもの調子で翔一郎は答える。

「アルテツアやスターレットよりは俺のB4の方がパワーあるしな。適役だろ？」

「無責任なこと言わないでよお」

心底脱力したように両肩を落として真琴は言った。

「翔兄いのクルマ、ATオートマじゃない。とてもじゃないけど峠の本気バトルなんか走れないよ」

AT？ 真琴が発したその単語に反応して、「カイザー」の面々が爆笑した。

「オートマ車でバトルしようってのかよ。俺たちを笑い死にさせる気か？」

「可笑しいか？」

あたかも笑いの理由がわからないかのような態度を装い、翔一郎は芹沢に尋ねた。

「馬力の面じゃB4だって二六〇馬力だ。そっちのクルマと比べても、それほどの差はないと思うけどな」

「カタログじゃな」

笑いすぎで、ひいひいと呼吸を乱しながら、芹沢は答えた。

「だが、俺のFDは走りの性能にや一切の妥協がない、マツダの、いや日本の誇る戦闘機だ。サラブレッドアンタの乗ってる“走る実用車”スポーツセダンとは、もうクルマの作りが根本的に違ってるのさ。ましてやオートマ車。そんな代物でまともに立ち向かえるって思われてたなんて、ボクちゃん、ちょっと自信喪失しちゃうかも」

後半おどけて表情を崩した芹沢にに応じて、ふたたび笑いが湧き起こった。頭っから翔一郎を馬鹿にしきった笑いだ。

質の悪いあざけりを浴びせられ、体裁悪そうに顔を伏せた翔一郎が頭を掻いた。

「格好悪いよ、翔兄い」

情けなさそうに翔一郎を見やる真琴や加奈子の陰で、しかし倫子だけは見逃さなかった。

俯いた翔一郎の口元がその時、わずかにほくそ笑んでみせたのを。

「いいぜ、代役」

ひととおり笑い終えると、芹沢は倫子に言った。

「おまえが了承するのなら、このオッサンとバトルするわ。もちろんオッサンが勝てばこの勝負はそっちの勝ち。もっとも勝てりやあの話だな」

「受けるわ」

倫子は即答した。その答えに真琴と加奈子は当然のように声を上げて驚く。

しかし彼女は、さっきまでの焦燥しきった表情を一変させ、はつらつとしてふたりに告げた。

「どうせ負けるなら、ここは壬生さんに賭けてみましょう。壬生さんが勝てばよし。仮に負けても結果は同じよ」

当の本人にそう言われては真琴も加奈子も返す言葉がない。

倫子の代役としての翔一郎は、「カイザー」からの冷笑と倫子以外の身内からの不快感を背に愛車「レガシィ・B4」に乗り込むと、芹沢の「RX-7」よりも先にスタートラインに着く。

実は、ここまで同乗してきた真琴ですら気付いていなかったいくつかの変更点が、翔一郎のB4にはあった。

運転席側のシートはいつの間にかホールド性のいいセミバケット型に換装されており、ドライバーの体を保持するシートベルトも通常の三点保持式からスポーツ走行用の四点保持式に変わっていた。

そしていま翔一郎が手を伸ばしている機器、それまで彼のBE-5には付いていなかったはずの過給圧制御装置までもが車内に鎮座していたのだ。

芹沢がFD-3Sを隣に並べると同時に翔一郎は、よく使い込まれたドライバーズグローブに指を通す。指貫式のものではなく、ス

パルコ社の手袋型だ。

「一応、名前だけは聞いておくわ」

助手席側の窓を開け、芹沢が尋ねた。

「聞いても仕方ないだろ」

だが、翔一郎は答えない。

「俺は走り屋じゃないんだから」

「感じ悪いオッサンだぜ」

舌打ちして顔を背けた芹沢がクルマの中から指示を出す。発進のカウンタを行う者を呼び付けたのだ。

「カイザー」のメンバーがひとり、二台の前に駆け出してくる。

しかし、倫子がそれを制した。

彼女自身がカウンタを行うつもりらしい。

当事者として当然の権利、という言い分が聞こえてくる。

FD - 3 S と BE - 5、間隔を開けて左右に並ぶ二台の前に立つ倫子がまっすぐに右手を掲げる。

開かれた指がひとつずつ折り曲げられ、発進までの時間が告知されるのだ。

五……四……三……二……一……GO！

彼女の右腕が振り下ろされるや否や、二台のクルマはアスファルトを蹴り飛ばし、倫子の両脇を通過して脱兎のごとく前に出る。

スタートダッシュで頭を取ったのは芹沢のFD - 3 S だった。

後輪を激しく鳴らすほどの駆動力^{トラクション}で石弓のように弾き出された流線型の軽量ボディは、まるで翔一郎のBE - 5 がその場に停まっているのではないかとの錯覚を与えるくらいの勢いで八神の道を駆け上がっていく。

流石に四〇〇馬力をうたうだけのことはある。

翔一郎の「レガシイ・B4」との性能差は、圧倒的かつ決定的なものだと思われた。

と同時に、それは予想された現実以外の何物でもなかった。

この場にいる者たちで倫子以外のすべてが、そう真琴も加奈子も

含めて全員が翔一郎の勝利というものに対して否定的な結論を導き出していたのだから。

大体、その力量において衆目に知られている峠ロードレーサーの走り屋相手に、下界に住む一般人が戦いを挑むこと自体が間違いなのだ。

クルマの性能云々に関しては、もはやそういった段階にすらおよんでいない話である。

だが、この場において倫子だけはそう思わなかった。

彼女は既に確信していたのだ。

壬生翔一郎という男が持つ、もうひとつの顔について。

だから、言った。追うわよ、と。

加奈子の手から筆記取るように「アルテツァ」の鍵を借り受けると、倫子はそのまま運転席に滑り込んだ。

素早い動作でシートベルトを締めスターターを回す。

そして、何が何やら判然とせぬまま彼女に続いた加奈子と真琴がそれぞれ助手席と後席に乗り込むのを確認すると、先行する二台の後を追いかけ始めたのだった。

二章：ドッグファイト（3）

八神の表コースが下りに移る右コーナー付近。倫子が事故を起こした現場だ。

その場所を芹沢のFD-3Sが角度の大きい派手なドリフトを決めてクリアしていく。

ギャラリーへのアピールだろう。

クルマの性能が性能だけに絶対的な速度域が高いことに間違いはないのだろうが、それはタイムを削るための走り方では決してない。ドライバーが勝ちを意識していないことが、はるかに遅れた位置でその走りを見ているだけの翔一郎にもはつきりとわかった。

彼《芹沢》は、はなからこちらを意識などしていないのだ。

当然だな、と翔一郎は思う。

あちらは有名な走り屋で、乗っているのは金のかかったチューニングカー。

それに比べて、こちらは峠にすら似つかわしくないサラリーマンとAT車だ。

まさしくもって計算どおり。

翔一郎が、ふつと鼻で笑う。
若いな。

彼は自嘲気味に口の端をほころばせ、淡々とこうつぶやいた。

「さて、そろそろ小天狗の鼻でもへし折ってやるとしますかね」

ステアリングボスに設けられたパドルシフターを操作してギアを一段下げると同時に、翔一郎はアクセルペダルを大きく踏み込む。
フラットアウト

直後、回転計と過給圧計の針が弾かれるように振れ、BE-5は一気に増速！
タコメーター
ブーストメーター

一・四tの質量を持つ重量級ボディは、EJ-20水平対向エンジンの咆哮を轟かせつつ、とてつもないスピードで観戦者たちの前へその姿を現した。
ギャラリー

それは見ている者たちにとって、まったく信じられない光景だった。
クラッシュ

事故に対する恐怖心を微塵も感じさせない凄まじい勢いでのコナーへの飛び込みと、最短距離を大胆不敵にカットするギリギリの走行ライン。
ブレーキング

激しい減速によって生じた前方への荷重移動を最大限に利用しながらも、遠心力からくる後輪^{リア}の横滑りを限界近くまで押さえ込み、先ほどの芹沢の走りを数段上回る圧倒的な速度域でもって視界の外から突っ込んでくるBE-5。

逡巡も躊躇も、そこにはない。

だが、四つのタイヤは耳をつんざく悲鳴をあげながらも紙一重のところでグリップを失わず、クルマの挙動は破綻の色を見せようともしなかった。

そして、その現実離れたコーナリングが、さも当然の結果であるかのごとく、平然とクリッピングポイントを通過した翔一郎の「レガシィ・B4」は、その場にいる者すべての予想を根底から覆す爆発的な加速で立ち上がり、瞬間に闇夜の中へと消えていく。
ドリフト

荒々しい芹沢の走りが力づくで敵を両斬する蛮人の戦斧に例えられるなら、翔一郎のそれはまさしく達人が魅せる居合いのきらめきだった。

「見たか、いまのB4の走り！」

驚愕の表情を貼り付けたまま、ギャラリーのひとりが叫んだ。

「立ち上がりのラインなんて、ガードレールから一〇cmも離れてなかったぞ。なんであそこまでぎりぎりのラインがとれる？ ド素人なんじゃなかったのかよ！」

彼らは麓からの連絡を受け、芹沢の対戦相手が変更になったことを既に知っていた。

八神の「青い閃光」が見せるであろう本気の走りを楽しみにしていたギャラリーの面々は、だから芹沢と張るのが走り屋とは到底思えない三十路男の「レガシィ・B4」だと聞かされた時点で、FD

- 3Sの通過を機会として帰り支度を整え出したばかりだったのだ。しかし、そんな彼らの目前を疾駆していった黒いセダンの走りは、戦前の想像から余りにもかけ離れた代物だった。

明らかに素人が見せるそれではない。

いや、それどころか一線級の走り屋の中で一体全体どれだけの者がいまの走りを再現出来るというのだろうか。

異様なざわめきが彼らのうちから自然発生的に湧き起こる。

「いまの八神であんな速い奴は見たことねえ」

長い間常連の走りを見てきたことと思われるギャラリーのひとりが、大きく目を見開いたまま呆けたようにつぶやいた。

「あいつ、一体何者だ」

まったく美味しい話だぜ。

既にいくつかのコーナーを抜けてきた芹沢のFD-3Sが、それまでと同じように観戦者たちの前を通過する。

意図的に大きくテールを振り、自らの技量をアピールするかのようにして。

後輪があげる甲高い摩擦音とゴムの焼ける臭いが好き者どもの興奮心を煽が応にも高め、巻き起こった歓声がFD-3Sの後を追う。ブレーキング・ドリフト。

それは数日前に倫子と張ったS-15が見せたものと同じ技であったが、速度と安定性といった面で、芹沢の走りは完全にその一段上をいつていた。

芹沢聡という走り屋が持つ潜在能力と、^{ポテンシャル}“国産最高のコーナリングマシン”という称号で呼ばれ、コンパクトかつ軽量な13Bロータリーエンジンをより車体の中心部近くに設置出来たことで絶妙な重量バランスを確保したFD-3Sというクルマとが相乗効果を発揮することによって初めて見出される、高い完成度を有した路上の^{ストリートダンス}舞いだ。

だが、芹沢自身もわかっていた。

これが“見せるための走り”であり、“勝つための走り”では決してないという事実を。

それでも彼は、おのれの勝利を微塵たりとも疑ってはいない。

自身の側に負ける要素を寸分も見出すことが出来なかったからだ。標準のFD-3Sは段階式ツインターボシーケンシャルタービンを搭載している。

これは、ふたつある加給用の風車のうち、エンジンの回転が比較的低い領域からまず片方だけを作動させておき、高回転時になって改めてもう一個を追加作動させることで、加給の上昇に伴う出力の変化を滑らかなものにする効果を狙った機構である。

それまでの高回転型大出力ターボエンジンが持つ宿痾、加給の開始とともに発生する不自然な馬力の伸び、俗に言う“ドッカンターボ”に対する機械的な回答のひとつだ。

芹沢の愛車はこの機能を取り去り、本来なら大小ひとつずつある加給用のタービンを大容量のもの一個に換装していた。

シングルターボ化である。

このため彼のFD-3Sは、タービンの大型化に伴う加給量の増大によって高回転時における出力特性が扱い難いまでに過激なものへと変化した一方、最大出力の面では優に一〇〇馬力を超える大幅なパワーアップを成し遂げていた。

もちろん足回りや車体剛性も出力に応じたレベルへと強化されており、その戦闘力たるや峠の走り屋が使用するクルマの域を完全に超え、もはや競技車両レベルにあると断言してもいいほどだ。

あえてひとつだけ問題があるとすれば、それは足回りの設定であるだろうか。

本来サーキット走行を前提に堅く引き締められた足回りと路面とのマッチングが若干しっくりきていない。

スポーツ走行のために整備されてあるサーキットと異なり、公道である八神の道はクリーンとはいい難く、路面の細かな凹凸を拾った時にクルマが跳ね気味になるのだ。

当然だが、跳ねた足回りではタイヤが効率よく路面をグリップ出

来ない。

高度な運動性を誇る反面で安定性^{スタビリティ}については誉められたものではないFD-3Sの場合、それは安心してアクセルを踏めないことを意味している。

強くアクセルを踏むことによって駆動力を伝える後輪が路面への食い付きを失えば、旋回中の車体は一気にスピンする。

素直な回頭性と引き替えにスピનに入りやすいという後輪駆動車の特性をただでさえ色濃く持つFD-3Sにとって、それは余り好ましくない状況と言えた。

真剣勝負を前にして手を抜いていたと評されても致し方あるまい。ただし、芹沢はそれが自分の失点に繋がるなどとは欠片も思っていなかった。

確かに戦場に合わせた調整を自らの愛車に施してはいない。

倫子が相手なら、それは致命的な結果に結び付いたかもしれないだろう。

だが、いまの相手は彼女ではない。ズブのド素人が相手だ。

走り屋としての圧倒的な力量差と段違いなクルマの性能差とを前にして、少々の手抜きが一体全体どれほどの問題となり得ようか。

「戦いになってねえよ、オッサン」

芹沢はスタート直前に見た翔一郎の横顔を思い出しながらほくそ笑んだ。

「俺の実力をケツから眺めて、テメエの馬鹿さ加減って奴を噛み締めるこつた。もつとも、見える距離にいられたらの話だがな」

FD-3Sが幾分長めの直線に入った時、彼は何気なくバックミラーに目をやった。

まるつきり勝ち目のない勝負——少なくとも芹沢自身はそう確信していた——をあえて挑んできた身のほど知らずな中年男を馬鹿にする、ただそのためだけに。

しかし次の瞬間、その瞳が驚愕の余り凍り付いた。

ついいまほど自らが通過したばかりのコーナーの向こうから一台

のクルマ、翔一郎の駆る「レガシィ・B4」が滑るようにその姿を現したからだった。

二章：ドッグファイト（4）

倫子の駆る「アルテツツア」が八神の下りを疾駆する。

全開とは言い難いのかもれないが、それでもかなりの速度である。

後席の真琴は、身体が転がらぬよう姿勢を保つのに必死だ。

しかし、それでも彼女はフロントガラス越しに見える風景から目を離そうとはしなかった。

ひよつとしたら目の前のコーナーを越えた先で翔一郎のB4がクラッシュしているかもしれない。

そう考えると、とてもではないが余所見をしている暇などありはしなかった。

だが行程が進むにつれ、真琴は徐々に違和感を感じ始める。

翔一郎のB4が見えてこない。

そのことが真琴にとって、どこか不自然な現実として認識されたのだ。

体感できる横Gから想像出来るとおり、倫子は結構なハイペースで峠道を駆け抜けている。

にもかかわらず、先行しているBE-5のテールランプを視界の端にすら捕らえられないのはどうした訳だろう？

確かに加奈子の「アルテツツア」は、翔一郎の「レガシイ・B4」と比べると格段に非力だし、足回りもスポーツ走行に振ってであると相対的には言い難い。

だけどもいま「アルテツツア」を運転しているのは「青い閃光」、三澤倫子その人だ。

ド素人の代表格みたいな翔一郎とはドライバーとしての格が違う。クルマが持つ多少の性能差など問題にすらならないはずだった。

「やっぱり変だ。何かおかしい」

加奈子の携帯電話が着信メロディを奏でしたのは、真琴がそう

つぶやいた直後のことだった。

純からだわ、と加奈子は告げて電話を取る。

真琴は、それを聞くと驚いたようにビクリとその身を震わした。

バトルの開始地点には現れなかった「ロスヴァイセ」のメンバー、長瀬純はいま、ギャラリーの面々に混じってコースの中間行程付近に陣取っているはずだった。

仕事の都合でスタート時間に間に合わなかった彼女にその旨を依頼したのは、自分の代走に翔一郎が決まった直後の倫子である。

加奈子も真琴も、倫子がなぜ純にそんなことをさせるのか得心がいかなかったのであるが、その彼女からの不意打ちに近い連絡は「アルテツァ」の車内温度を確実に数度引き下げた。トラブル発生の予感である。

真琴は、翔一郎が事故を起こしたのでは、と息を飲む。

会話の途中で加奈子が驚きの声をあげたことで、彼女はその悪い予感的中したと思い込んだ。

コース途中からの緊急連絡なんて、他の理由からは考えられない。

「翔兄いが事故ったんですね」

最悪の状態も想定して、真琴はその身を乗り出した。

倫子が二台の後を追ったのもこうなることに対応するためだったのか、とひとりうなづく。

だが、加奈子はそんな真琴に向かって首を左右に振ってみせた。

仰天の余り感情を失ってしまった眼を眼鏡の奥に貼り付けたまま、機械的に彼女は言った。

「B4がFDの後ろを突つついてるって」

その言葉が一体何を意味するものなのか、真琴の頭脳が理解するのにたつぷり数秒の時間がかかった。

翔一郎のBE-5が芹沢のFD-3Sのすぐ後ろにいる。

それは両者の戦いが接戦になっているという事実には他ならない。

「うそぉ！」

頓狂な叫びが真琴の口から飛び出した。

それは彼女の中では、まったく完全無欠に想定外の出来事だったからだ。

真琴だけではない。

両の眼を丸く見開いたままの加奈子もそうなのだろう。そして、おそらくは報告を入れてきた純でさえも。

それほどまでに芹沢対翔一郎という対決の結末は一方的なもの、翔一郎の勝利どころか善戦すら微塵も考えられないものなのだと、味方である彼女らでさえ確信してしまっていたのだった。

希望的観測の入る余地などどこにもない、確実に訪れるはずの未来。

あろうことが、それが覆されたのである。

例えば猫がワンと吠えたところで、彼女らが受けたこの衝撃にはかなわないだろう。

だが倫子は、彼女だけはそうではなかった。

「当然よ」

倫子は驚きの余り軽いパニック状態へと陥っている同乗者たちに向かって、平然とそう言つてのけた。

「あの人は『ミッドナイトウルブス』の“ミブロー”なんだから」「ミッドナイトウルブス？」

真琴が掲げた疑問符へ答えるように、加奈子が言った。

「聞いたことがある。確か一〇年以上も前に八神にいた走り屋のチーム……」

「そうよ。その頃、向かうところ敵なしとまで言われた伝説の走り屋集団。そして、その中でも別格とまでうたわれた男。変幻自在の戦法で『八神の魔術師』と渾名されたチームの参号機が壬生さんよ、興奮気味に倫子は語る。

隠しきれない喜色が、彼女の表情にはあふれかえっていた。

「脚を洗った？ もう興味がない？ よく言えたものだわ。現役バリバリじゃない！ いまの走りがそれを証明してる！」

伝説の走り屋“ミブロー”

それが倫子を知っていて真琴が知らなかった翔一郎の持つもうひとつの顔だった。

真琴にとって、それは衝撃的な事実だ。

彼女が知る壬生翔一郎とは、付き合いがあることを他者に自慢げに語れる存在では決してなかった。

確かに馬鹿げた行為に手を染める人物ではなかったが、その反面、周囲をあつと驚かせるような快拳を成し遂げることもまた、これまでにあった試しがなかったのだ――少なくとも真琴が知る範囲においては。

「知らなかった。翔兄い、そんなことボクには一言だって……」

「誰にだって言いたくないことのひとつやふたつはあるものよ。例え、それが肉親同然に接してきた女の子に対してであってもね」

“ 壬生翔一郎を他の誰よりも知っている。いやむしろ、知らないことなんて何も無い ” と自負していたことが実は単なる思い込みにすぎなかったという現実を突き付けられ、見るからに複雑な表情を浮かべる真琴を思いやるように倫子が言った。

そして次の瞬間、彼女の眼差しは遠く前方を疾駆している翔一郎へと向けられる。

失われたはずの伝説がいまに蘇ったのだ。

体中の血液が沸騰寸前に思えるほど、おのれの中に闘争心が漲ってくるのを倫子は感じた。

知らず知らずのうちに饒舌となる。

「真琴ちゃん。八神の表コース、いまの区間記録ってどれくらいだったかおぼえてる？」

唐突に倫子が話題を切り替えた。

はっと顔を上げた真琴が少し考え込んでから答える。

「え」と、確か四分二六秒だったかな」

「そう、去年の夏、『ランサー・エボリューション？』が叩き出した四分二六秒台が公式的な最速記録よ」

真琴の回答に大きくうなづいて倫子は言った。

「でもね、『ミッドナイトウルブス』のミブローが出した非公式タイムは、四分二三秒台なんですって」

「に、二三秒台！」

具体的な数字を示されて真琴があんぐりと口を開けて絶句する。

それも当時のクルマとタイヤでね、という倫子の補足がそれに追いつきかけた。

当時——一〇年以上も前に現役だったクルマの走行性能なんて、
モンスター昨今の高性能車とは比べものにならない。

当時の走り屋どもを熱狂させ、いまでも一部ではカリスマ的な人気を誇るトヨタのA E - 8 6「レビンノトレノ」、通称「ハチロク」にしても、その心臓部が^{4AG}発揮する実馬力はせいぜい一〇〇馬力強がいいところ。

下手をすれば現行のファミリカーにすら劣る代物でしかなかったのだ。

しかも、タイヤの性能がいまと当時とでは、まさしくモノが違う。
隔世の差があるとさえ言っている。

現行のスポーツ用タイヤのグリップ性能は、
ハイグリップラジアル当時の競技用タイヤ
セミスリックにすら匹敵するのである。

そんな時代のクルマとタイヤで、現在でも一級品のエボリューション・モデルに三秒差を付けて勝利するとは、翔一郎が持つ技量は一体どれほどのものなのか。

何せ、三秒あれば六〇km/hで走るクルマですら五〇mの距離を走るのである。

疾走するクルマ同士の車間距離に直したなら、その差はまさに“ぶつちぎり”だ。

「『八神の魔術師』……」

いままで想像もしてこなかった翔一郎の隠された^{スペック}実力を思い浮かべて、真琴の喉がゴクリと鳴った。

加えて、翔一郎のB E - 5が見掛けどおりのクルマではないという^{こと}を、倫子は水山店長から聞いて知っていた。

翔一郎のBE-5は各所に相応の手が加えられ、走行性能の大幅な底上げが図られてあつたのだ。

確かに駆動系こそ純正のトルコンATではあつたが、エキゾーストマニホールドを含めた排気系は効率のよいメタルキャタライザー式の製品へと総交換されており、社外品のスポーツECUと立ち上がり重視に調整された過給圧制御装置によって絞り出される最大出力は、カタログ値を一割以上も上回る三〇〇馬力。

そして、それを受け止める足回りはラリーで鍛えられたオーリンズ製のダンパーを仕様変更したもので、峠道用、おそらくは八神街道向けのセッティングが施されてあつた。

車体の各部にもさまざまな補強や軽量化がなされており、サーキットを本気で走るマシンには到底およばないとはいえ、公道向けのクルマとしてはかなりの戦闘力を発揮するものと予想された。

少なくとも無改造車の比ではない。

もちろん芹沢のFD-3Sに真つ正面から立ち向かえるようなクルマでないことは、倫子にもわかつている。

しかし、そのハードウェアとしての実力が二〇年以上前に設計されたスポーツカーと比較して勝るとも劣らないレベルにあることも、彼女は現実として認識していた。

ならば、八神で翔一郎を相手に勝利するためには、現在の区間記録を塗り替える覚悟が必要となるであろう。

いかに芹沢聡が凄腕でその乗機の性能が高かろうとも、それは飛び込みに等しい余所者が容易く成し遂げられる快拳ではありえない。「芹沢の驚く顔が目に浮かぶわ」

まるで他人事のように倫子は笑った。

それは勝利を確信した者だけが見せる余裕の笑顔であつた。

二章：ドッグファイト（5）

そんな馬鹿な。

もう何度目になるだろう。

芹沢はうろたえたようにその言葉を口にした。

愛車FD-3Sに右足で鞭を入れつつ中速コーナーを抜けた直後、本来なら垣間見ることさえないであろうバックミラーへと視線を移す。

それは、とうのむかしに振り切っているはずの存在だった。

いや振り切るとか振り切らないとか、そういったステージにさえ立っていない相手のはずだった。

だが後続するヘッドライトの光源は、あいかわらずそこにいた。

翔一郎の駆るBE-5「レガシィ・B4」その姿を確認するたび、芹沢は血走った目で自問自答する。

クルマの性能では何ひとつ劣っていないはずだ。

パワーウェイトサスペンション

馬力、車重、足回り、どれをとっても金と時間を湯水のように注ぎ込んで作り上げた自分のFD-3Sが、奴のクルマに遅れをとっているとは思えない。

ならばどうして、どうして俺は奴を振り切れないのだ？

クルマにこれだけの性能差があってもまだおよばないほどに、俺の技量があのおッサンに劣っているとでもいうのか？

そんなことのあるはずが、あつていいはずがないんだ！

バトルの中盤から終盤に至る行程において、芹沢は序盤に稼いだ優勢を一気に吐き出してしまっていた。

ひとつひとつの区間に限定して見れば、確かに芹沢のFD-3Sは翔一郎のBE-5を圧倒しているようにうかがえる。

事実、彼の愛車は明らかに対戦相手よりも高い速度でコーナーに進入し、脱出の時点では確実に車間距離を広げているのだ。

しかし、どういう訳か翔一郎のBE-5は、次のコーナー手前に

到る頃には、あたかも背後霊のごとく自車の直後に張り付いているのである。

それは、いままでに芹沢が経験したことのない出来事だった。ヒトは未経験の現実^ニに直面した時、その精神に混乱をきたす。

精神面での混乱は冷静な判断力を奪い去り、一度喪失した冷静さはそうやすやすとは回復しない。

そして、そのことによって生じた失点は、限界域での運転という緻密な作業の場において、誰の目にも明らかな失策となって姿を現すのである。

それは、場数を踏んだ職業運転手^{プロドライバー}であつても例外ではない。

ましてや、それを生業としてすらいなかったあの“走り屋”であるならばなおさらのことだ。

腕はいいんだが、走り込みが足りないな。

立ち上がりでアクセルを踏みすぎたことで一瞬姿勢を崩しかけたFD・3Sを後ろから眺めつつ、翔一郎は相手の状況を冷静に観察するだけの余裕を保っていた。

翔一郎は、自車の前方を疾駆するスポーツカーの乗り手が人並み外れた運転技術^{ドライテク}の持ち主であることをはっきりと認識していた。

そうでなければ、卓越した運動性能と引き替えに乗用車としての安定を犠牲にしたFD・3Sのようなクルマを、あそこまで振り回す芸当など出来はしまい。

少なくとも自分には無理な芸当だ、と。

だが同時に、その高い技量を十分に発揮出来るだけの下地をいま現在の芹沢が保有していないであろうことも、翔一郎はここまでの彼の走りを見て確信していた。

おそらく芹沢は、ろくに八神街道を走り込むことなくしてこのバトルに臨んだに違いない。

コーナーとコーナーとを繋ぐ処理の連携が余りにも教科書どおりで、現状に沿っているようには見えないのだ。

もちろん、それはそれで素晴らしい走行技術ではある。

ただし、比較的平坦で路面もきれいなサーキットとは異なり、公道は時としてさまざまな顔色に変化する。

それは路面のアスファルトの新旧からくるグリップの違いかもしれないし、突如として現れる対向車の存在かもしれない。

そしてそれらに対応するには、モータースポーツの参考書を鵜呑みにするだけではなく、場合によって応用を利かせる必要が生じてくる。

すべてのコーナーの処理が常に最速である必要はないのだ。^{ベスト}

結果的に全体を短いタイムで走れるのなら、次のために“捨てる”コーナーだってあっていい。

だが、いまの芹沢にはそうした余裕がまったく失われている。精神面でも経験面でも。

八神における走り込みが不足していることで具体的なコース像が描けていない芹沢は、直面した状況に対して場当たりの応じ方しか出来ず、最終的な走行時間の無駄を生み出していた。

しかも背後に迫る翔一郎の存在に気を取られるためなのか、FD-3Sの挙動に“荒れ”が散見されるようになってきている。

勝ちを焦っているのだろう。

だったら開き直ってそれに徹すればいい。

ともかく先行しているのは自分なのだから、抜かれないことだけを考えて翔一郎の進路を完全に妨害しながら最後まで走り続ければ、どうあがいても先にゴールするのはFD-3Sの方だ。

自分ならそうするな——しかし、と翔一郎は続ける。

バトルの開始時、あそこまで馬鹿にしていた対戦相手にそういった姑息な手段を講じることは、走り屋としての自殺に等しい。

^{テクニック}技術で勝てなかったことを公言しているようなものだからだ。

これだけのギャラリーが見守る中、仮にそんな方法で勝利をつかんだとしても、それは“勝ち”とはみなされないであろう。

積み重ねてきた実績も名声も地に堕ちる。

どんな言い訳も、たちまち圧殺されるに違いない。

だからこそ、普通に勝ちを狙える限りにおいて、彼は真つ正直にこちらと競ってくれるはずだ。

そうなるようにあえて仕向けたのであるから、素直に乗ってきてもらわないと困る、と翔一郎は計算していた。

とはいえ、このまま後ろに付いていただけでは、こちらの勝利もありえない。

いかに芹沢がおのれの自尊^{プライド}心を勝利に優越させていたとしても、それが最後まで続く保証はどこにもないのだ。

追い詰められた彼が最終手段を講じる前に、勝負を賭ける必要があった。

もつとも、その勝負どころすら翔一郎にとっては、このバトルにおける既定事項のひとつにすぎなかったのであるが。

終盤戦。

なだらかな勾配が続く直線が現れる。

「コークスクリュー」

海外のサーキットコースにある名所にちなんで八神の走り屋たちが呼称する区間だ。

直線道路は、やがて緩やかな左カーブを描きつつS字コーナー手前のヘアピンへと続く。

ここで勾配が局所的にきつくなることが、その名の由来となっていた。

無論、芹沢もその存在は認知していたことだろう。

だが、いまの彼はそれをどうこうするだけの心理的余裕を持ち合わせてはいなかった。

直線で馬力にモノを言わせて差を広げようとアクセルを踏む芹沢翔一郎のBE-5は四〇〇馬力に抗しようも得ず、一気に後方へと引き離されていく。

バックミラーに映るBE-5のヘッドライトが小さくなるのを確認し、芹沢の心理に若干の余裕が発生した。

やはりパワーはこちらが上だ。この直線で稼げるだけのマージン

を稼いでやる。

逸る意識が知らず知らずのうちにアクセルの踏み代を深くしていく。

13Bロータリーエンジンの奏でる勇ましい行進曲に乗せられるがごとく、FD-3Sは疾駆する。

少しでも前に、少しでも前に。

FD-3Sが「コークスクリュー」の入り口に差し掛かったのは、まさにその瞬間であった。

後続するBE-5のヘッドライトが、バックミラーの中で瞬時に大きくなった。

驚愕する芹沢。

反射的に彼の視線がバックミラーに引き寄せられる。

車間距離が縮まっているだと？ そんなはずはない！

そのとおりだった。

ヘッドライトが大きく映った理由は、翔一郎が上向きハイビームライトを用いた結果だ。

それがある種の意趣返しであることに芹沢が気付くことはなかった。

だが咄嗟の確認は、芹沢の意識を一瞬、進行方向から引きはがすには十分であった。

視界を戻した芹沢の目の前に「コークスクリュー」が迫る。

その刹那、芹沢の心臓がその口から飛び出しそうになった。

注意力散漫のまま傾斜の付いたヘアピンに突入した彼は、愛車がこのままコーナーをクリアするには速度が付きすぎているという事実をはっきりと認識したのだ。

アンダーステアの発生。

コーナリングのラインが大きくふくらみ、FD-3Sの車体がコンクリートウォールへ向けてぐんぐんと接近していく。

ひ、と悲鳴にもならない声を漏らす間もあるつか、芹沢はステアリングを切りながら渾身の力でブレーキペダルを踏み締める。

それは運転技術がどうかという段階の話ではなかった。

本能的に危険を察知した肉体がドライバーの意識を飛び越えて行った回避行動であると言っているだろう。

サーキット向けに調整されたFD-3Sの制動システムはそれに応えた。

けたたましい悲鳴をあげながら慣性の法則に抵抗したブレーキとタイヤは立派に任務を果たし、FD-3Sは理想の走行ラインとは程遠い行程を描きながらも、ギリギリのところでコース内に踏み止まった。

スピンモードに入らなかったのは奇跡的と言えるかもしれない。

安堵の息を放ちつつも芹沢が次の瞬間視界に求めたのは、後方に引き離れた翔一郎のBE-5の姿であった。

その目が恐怖に見開かれた。

追突。

彼と付近の観衆とが意見を共有したのも無理はなかった。
ギャラリー

翔一郎のBE-5もFD-3Sの後を追うように、明らかなオーバースピードでコーナーへ進入しようとしていたからだ。

回避不能と思われた惨劇に観衆の間から悲鳴があがる。

「コークスクリュー」手前の左コーナーで、遠心力に振られたBE-5の後輪が外側に流れた。

もうブレーキングは間に合わない。

万事休す、か。

だが、現実には彼らの想像を完全に裏切った。

BE-5の車体は一端右側にブレークしようとした後輪をまるで魔法のように逆側に振り戻し、一気にその横腹を進行方向に向けながらヘアピン内に進入してきたのだ。

慣性ドリフト。

ブレーキングのみならず、ステアリング操作によるきつかけとアクセル操作による荷重移動をも用いて後輪をブレークさせる高等テクニク。

翔一郎はそうやって横に向けた車体そのものを抵抗に使って車速を調整。

一気に車間距離を詰め、アクセル全開のままFD-3Sの右脇へと張り付くように占位した。

一瞬だけ先に回復したタイヤのグリップを利して、BE-5の鼻^{ノーズ}面を相手の前へと捻り込む。

ヘアピン侵入時に姿勢を崩したことが芹沢のFD-3Sに災いした。

芹沢が慌ててアクセルペダルを踏み直そうにも、最大出力を重視して換装された大型タービンは一度落ち込んだ過給圧を復帰させるのに標準よりも時間がかかる。

そして過給圧が上がらないということは、ターボエンジンにとって出力が上がらないことと同じ意味を持っていた。

その立ち上がりにおけるわずかな隙が、この時翔一郎のB4に決定的な優勢を与えてしまったのだった。

被せるように幅寄せしてきた「レガシィ・B4」の黒い車体がFD-3Sの進路を塞いだ。

ドライバーの側にいかなる意思があろうとも、進行方向に空間がなければクルマは前に進めない。

この瞬間、四〇〇馬力を叩き出す13Bロータリーエンジンは、その持てる実力を発揮することを許されず、目の前の現実に屈服した。

そして、続く左コーナーのクリッピングポイントで対戦相手をそぎ落とすように前へ出た翔一郎の眼前、S字から脱出する右コーナー^{インアウト}で両者の内と外とが劇的なまでに入れ替わる！

まさに教科書どおりの追い抜きだった。

歯噛みする芹沢の視界にフル加速していくBE-5のテールランプが映る。

ここに至り、もはやいかなる手段も手遅れとなった。

「畜生！」

芹沢は叫んだ。

すべてを悟った彼にはそうすることしか出来なかったからだ。彼は知っていた。

ここからゴールまでの区間、もう双方の順序を入れ替えるだけの距離が存在しないということ。

勝敗は決した。

二章：ドッグファイト（6）

「教えてくれ。俺の何が足りなかったんだ」

約束の履行を求めに芹沢の下へ足を運んだ翔一郎に向けて、彼は絞り出すような声でそう尋ねた。

その表情は、信じられない結果を真つ正面から受け止められず、憔悴しきっているように見受けられる。

だが発せられた第一声を耳にした翔一郎は、その言葉が彼の走り屋として積み重ねてきた矜持の表れだと感じた。好ましい限りだ。

「君が俺に劣っているところなんて何もないよ」

あっさりと翔一郎は言い切った。

「腕前もクルマの性能も、間違いなくそっちの方が数段上だった」
それがある種の皮肉に感じられたのだろう。芹沢が激高する。

だったらなぜ、といまにも掴み掛からんばかりに翔一郎をにらみつけた。

負けん気の強さは競技者として大事な要素だ——ますますいい。

不思議と湧きあがってくる彼に対する好感を弄びながら、翔一郎は言葉を続けた。

「勝敗を決めたのは、そういうのが原因じゃないってことさ」

可能な限り感情を込めることなく、彼は語った。

バトルの開始前、そう、翔一郎が代役を申し出たその瞬間から、既に“戦い”は始まっていたのだと。

力量と性能の両面で勝る相手に勝つなんて、実際には不可能だ。

だったら、どうすればいいのかをまず考えなくてはいけない——
「こつちには地元の情報網があつてね。君のクルマが八神を走っていないかったのは耳に入ってきていたんだ。どうしてなのかは、あえて問わないけど。とにかく現地での走り込みが足りないだろう」とぐらいは容易に察することが出来た」

翔一郎は、一言一言を言い含めるよう芹沢に接した。

「ドライバーの腕が優れているのなら、それを発揮させなければいい。少なくとも君が自分の勝利に絶対の自信を持っていることは明白だったから、後はそれを裏付ける状況をこちらから与えてやればいいだけの話さ」

人間なんて単純なもので、勝ちが約束された争いごとに全力をつくす奴なんてほとんどいない。

もし、君がそうじゃない一握りの人間だったなら、不慣れなコースを舞台にして地元のベテラン相手に大勝負を挑むなんてことをする訳もない。

「君は俺が代役を申し出た時、目の前に無造作に出された情報からこのバトルは楽勝だと確信したはずだ。違うかい？　そして、こっちの予想どおり、全力を出すことなく遊んでくれた。実際に俺の走りを確認もしていなかったのにね」

芹沢は息を飲んだ。

翔一郎は、周囲から――味方からのものも含めて――嘲笑される屈辱を味わうことを許容してまで自分自身の情報を徹底して隠蔽し、対戦相手の油断を誘った上で、その隙を突いたと言うのだ。

そして、それはすべて計算づくで行われたのだと。

「序盤戦でぶつちぎられていたら、いくらなんでも逃げ切られただらうな。でも、君は遊んだ。真剣勝負で」

翔一郎が言葉を紡ぐ。

「君にとつては遊びだったんだろうけど、こっちにとつては負けられない戦いだった。手なんて寸分も拔けない。中盤戦で君に追いつけたのは、そういった意識の差だよ」

そして、それは君にとつては想定外な現実だったろう。

俺が君と“戦える”なんて、君はちっとも思っていなかっただろうからね。

「後続する対戦相手が想像以上の実力を持っていることを知った君は、初めてこれが“バトル”なんだって気付いた。勝敗がかかっているのだと」

にもかかわわらず、君には相手の実力がさっぱりわからない。

当然さ。君にとって、俺は単なる素人のオッサンだった訳だから。それが、自分の後ろを突っ付いてくるなんて、君の想像の範疇にはなかったはずだ。

「まあ、不意打ちの一種だね。そして、君は人間の心理に則って、俺の方に意識を向けるようになる。これも一般心理だよ。そうなることは、結構簡単に推測出来た」

ただでさえ八神に精通していない君は、後ろからくる俺の存在に気を取られ、次第に走行ラインが乱れていく。

それは君自身、自覚していたんじゃないのかい？

「そして、終盤戦——」

翔一郎は、ここで言葉を切った。

無言でたたずむ芹沢の脳裏に、あの「コークスクリュー」での出来事が鮮明に蘇ってきた。

速度の乗る直線で背後から浴びせられたハイビーム。

反射的に前方から引きはがされた注意力。

集中力の散漫が引き起こした空白の刹那。

そして、それによって誘発させられたコーナリングラインのふくらみ——アンダーステア——をあたかも予想していたかのように完璧に実施された慣性ドリフトからの追^{オーバーテイク}い抜き。

すべては——そうすべては、あの一瞬を呼び込むための布石だったのだ。

ビジネス誌に掲載されている心理戦・情報戦などという言葉が、まるで子供の戯言にすら聞こえるくらいに血の通った実戦の駆け引き。

それは、まるで高名な哲学者が論ずる人の世の生きた理のようですらあった。

芹沢も「カイザー」の面々も、そしていつの間にか彼らを取り囲むように集まっていた観衆も誰もが皆、一言も発することなく翔一郎の言葉に聞き入った。

ひとりとして、その言葉の本質を理解することは出来なかった。だが、すべてを納得せざるをえなかった。

目の前で起きた現実を強制的に受け入れなくてはならない状況。魔術。

そう、それはまさに魔術としか考えられないほどに恐るべき手管であつた。

なんてこつた。

壬生翔一郎という路上の魔術師から直々にトリックの種明かしを受けた芹沢は、奥歯を噛み締めながら文字どおり戦慄した。

確かに自分は、この男よりもいいクルマに乗り、技術面でも上かもしれない。

ひととおり語り終えた翔一郎が最後に告げた言葉——もう一度やれば君が勝つよ。もっとも真剣勝負に二度目はないけどね——を心の中で反芻しつつ、彼は思った。

だが、それだけだ。

自分がこの男に“走り屋”として勝っていた部分は、そのふたつだけだ。

確かにもう一度やれば今回のような敗れ方はしないであろう。しかしその場合、この男は別の勝因を用いてやはり自分を打ち破るに違いない。

クルマの性能や運転技術ではない。

走り屋としての力量、いや“格”が違っている。

自らがおよぶような低い場所にこの男はいないのだ。

「あんた……一体、何者なんだ」

呆然とする自我を鞭打ち、それだけの言葉を芹沢は口にした。単純明確な問いを掛けられて、答えに窮した翔一郎が頭を掻く。とりあえず名前ぐらいは名乗っておこうか、などと思ひ立つ。

「翔兄い！」

叩き付けるような歓喜とともに観衆たちを掻き分け、翔一郎の名を呼ぶ者がやって来たのは、その時だった。

その者——沢渡真琴は、まるで子供のように喜色満面な表情を隠そうともせず、翔一郎の胸の中にどすんと体を預けてくる。

真正面からタツクルを食らった格好となった翔一郎が、体勢を崩しつつも辛うじて踏み止まる。

そんな翔一郎の状況を意にも介せず、真琴は「凄い」と「勝った」を、自己確認するよう何度も何度も口にした。

やがて、背後にある芹沢の姿を認めたのであろう。

彼女は先ほどの意趣返しをするかのように振り向き、両の拳を胸元で握り締め、そして一気に言い放った。

「見たかあ！ 『ミッドナイトウルブス』 参号機の魔術を！」

その名が真琴の口から飛び出したことに翔一郎は心底仰天し、遅れて姿を見せた倫子へと責めるような視線を送る。

だが、本当に目を丸くしたのは翔一郎の方ではなかった。

ミッドナイトウルブス！

半ば伝説と化した存在を目の当たりにした観衆たちから、自然発生的なざわめきが起った。

それらは徐々に数を増し、やがてうねるような動揺へと成長を遂げる。

ミッドナイトウルブス！

歓声が爆発した。

頭上から降り注ぐ熱狂をともに浴びせられ、右手で顔を押さえたまま途方に暮れる翔一郎を、真琴はきよとした表情で見上げていた。

三章：ワインディング（1）

ポニーテールが風になびく。

ダッシュする真琴のカモシカのような四肢が躍動し、彼女自身を前に運ぶ。

夏も終わりに差し掛かり、部活動などとうのむかしに引退しているはずの真琴であつたが、習慣というものは実に恐ろしい。

気が付けば、これまでこなしていた基礎練習で汗をかかないと落ち着いて受験勉強も出来ない自分を、彼女は見出してしまったのだ。センパイ、センパイと慕ってくれる後輩たちの練習を見てやる傍ら、それこそ無駄に全力をつくしてグラウンドを走る真琴。

時に、年頃の女性としてはいささか無防備な一瞬を見せることもある。

だが、その姿に向けて熱い視線を注ぐ者が存在するという事実には、彼女はまったく気付いてはいなかった。

実のところ真琴には、自分という存在が男性にとって魅力的な異性であるという自覚が決定的に欠けていた。

そして、そうした心理がもたらす異性に対する気さくさが同年代の男子にとって心引かれる一因となつていることも、彼女の知るところではなかった。

「やつぱ、いいよなあ」

やはり後輩の指導に来ていたのであるうか、真琴たち女子部員から少し離れた位置でウォーミングアップをこなしている男子陸上部員が、ため息混じりにそうつぶやいた。

「沢渡のヤツ、彼氏いるんだろ^{オトコ}うな。何せ、お前を振ったくらいなんだから」

彼の側で同じメニューを消化していた別の男子生徒の動きが止まった。

しまったとばかりに発言の主は、あわてて右手で自分の口を覆う。

動きを止めた男子生徒の名は、高山正彦。

尽生学園陸上部、短距離走競技のエースであり、この夏のインターハイでも全国四位の結果を出した有数の実力者だ。

大学へはその力量を評価されて推薦での入学が約束されていたため、受験生にとっては大事な季節であるのにもかかわらず後進の指導に駆り出されている身であった。

ただし、学業が不得手という訳ではない。

むしろ彼は文武両道を地で行っている優秀な若者であり、その甘い容貌と相まって異性から受ける好意の総量は膨大なものであった。
マスク

同性からの受けもいい。

自分の高い能力を鼻に掛けることなく、誰にでも分け隔てなく面倒見のいい気性が高く評価されているのである。

その高山が真琴に“袖にされた”という事実は、意外のも多くの生徒が知るところとなっていた。

無論、真琴が話した訳ではないし高山自身が語った訳でもないが、どういう訳かそれは公然の秘密として多くの耳に届いていた。

高山に好意を向けていた一部の女生徒が、その一事をもって真琴への非難をあらわにしたことすらある。

「悪い……」

ばつが悪そうに、話を振った男子生徒——大森が謝罪する。

いいさ。事実だしな、と高山は答えたが、先ほどの言葉が彼の古傷を一撃したことは隠しようもなかった。

あからさまに彼の表情がかげりを見せる。

無意識から発せられた言葉の刃とは、それほどに鋭いものなのだ。「気にするなよ。お前ならいくらでも他にいいオンナが見付かるさ」そんな高山を見かねてか、別の男子生徒がふたりの会話に割って入った。

高山と同じクラスの安生という生徒だ。

厚めの唇を捻るようにして高山に告げる。

「それに実際、沢渡には付き合っているオトコがいるぜ。前に学校

までクルマで送ってもらってきてたの見たことがあるからさ。間違いない」

「なんだって？」

幾分うつむきがちに視線を落としていた高山が、驚いたように顔を上げた。

「それ、本当なのか？」

「ああ」

安生は高山の側に腰を下ろして、小さく数回うなづいた。

「運転していたのは俺らより大分年上だろうけど、親父さんって歳じゃなかったぜ。あいつ、確かひとりっ子だったろ？ 兄貴って訳でもなさそうだ。だとしたら、朝、家族以外のクルマで登校なんて沢渡もやることやってるんじゃないか」

少々悪意のこもった見方であったが、それもそのはず。

彼もかつて真琴を相手に見事玉砕してみせた面々にその名を連ねていたのであるから。

もっとも、それを根に持ったようにうかがえる言動には、若干底意地の悪さが感じられた。

「どんなヤツなんだろうな、そのオトコ」

大森が何げなくそう言った。

顎に手をやって小首を捻る。

「そういや、いつも沢渡と連んでる眼鏡なら何か知っているかもしれないな」

「誰なんだ、そいつ？」

急に噛み付くような迫り方をしてきた高山に対して、彼は答えた。

二組の野々村だよ。さっき保健室にいるのを見たぜ、と。

「そう、そんなことがあったの」

そう言って、学園の保健医を受け持つ河合理恵は微笑んでみせた。「そうなんですよ、先生。サワタリの奴、それ以降、いままで以上にクルマのことにはまり込んでやって。あれじゃ、オトコなしの青

春時代確定ですよ。もったいないったら、ありやしない」

理恵の向かいに座って、いつもながらの口振りで話すのは、真琴の親友、野々村早苗だ。

彼女が理恵に語っていたのは、真琴から聞いた八神街道での一連の出来事であった。

もちろん個人の名前は可能な限り伏せている早苗であったが、又聞きの間で聞かずにいながら、その中身からは突如として現れた“英雄”に対して真琴が抱く過剰なまでの賞賛と好意のほどが明確に聞き取れた。

英雄とは、真琴が姉のように慕う三澤倫子の危機をさっそうと救い、悪漢——こう呼ばれるといささか気の毒ではあるが——芹沢聡を打ち破った翔一郎のことだ。

早苗にとってそれまで真琴から聞いていた翔一郎という人物の印象は“放って置けない駄目兄貴”だった訳だから、このイメージの豹変にはかなり戸惑うところがあった。

「沢渡さん、その人のことが好きなのね」

理恵は、落ち着いた優しい口振りでそう言った。

「だから、その人が大活躍したことが、自分のことみたいに嬉しいのよ」

「そうですかね」

怪訝そうに腕組みをする早苗。

「あたしには、低俗な英雄崇拜に見えるんですけど」

「そういう見方もあるでしょうね」

あえて早苗を否定することなく、理恵は机の上のティーカップを手にとり口を付けた。

理恵は、保険医としてここ尽生学園に赴任してきて数年になる。

年齢は三十代の前半といったところか。

ほぼ翔一郎と同年代だ。

とりあえず独身ということは確認されている。

外見は実年齢よりも一回りは若く見えた。少し童顔と言えるかも

しない。

肩まで届かないさっぱりとしたボブカットがそれを強調している。確かに人目を引き付ける美形ではないが、まあ美人の一角に含めてもいいだろう。

背丈はさほどでない。

一五〇cm強のそれは、昨今の女子高生と比較するとむしろ小柄な部類に属する。

ただし白衣に包まれてなお隠すことの出来ない豊かな胸に代表される女性的な曲線が、年頃の男子諸氏の目にはかなり刺激的に映っている事実に疑いはなかった。

人気はある。それも、どちらかと言えば女生徒からだ。

難しい年齢を迎える彼女たちにとって、教師や親とは一線を画した最も身近な大人の女性ということで、色々と相談ごとを持ち込まれている聞く。

温厚な性格で聞き上手なもの、大いに関係しているのだろう。

“保健室マフィア”と呼ばれる集団が存在しているという噂もあった。

要するに、理恵を相談相手とする女生徒たちによる一種のファンクラブのようなものだ。

笑い話の類に等しいが、もし実在していたとしたら早苗こそはその最右翼に属する女生徒であつたらう。

大体において、夏休みにまでわざわざ登校してきて保健室で世間話に興じているなど、普通の生徒にはありえない行動選択だ。

保健室の扉がノックされたのは、そんな時だった。

はあいと理恵が温い声で返事を返すのと前後して、引き戸が開きひとりの男子生徒が姿を見せた。上下ともジャージ姿の長身だ。

高山正彦だった。

「すいません、河合先生」

高山は、申し訳なさそうに会釈して敷居をまたいだ。

「こちらに三年二組の野々村さんがうかがっていると聞いたのです

が」

「野々村はあたしだけど？」

若干の驚きを含んで早苗が答えた。

それはそうだろう。早苗と高山の接点など、これまでの学生生活において寸分たりとも存在していないのであるから。

思い返せば、まともに言葉を交わしたこともなかったような気がする。

もちろん早苗は高山という男子生徒を知っていた。

こと個人情報に関してなら、下手な高山ファンよりも詳しい可能性すらあった。

ただし、それは高山正彦という人物の持ついわば“データ”であって、彼女自身が体感した高山正彦の“キャラクター”でありはしない。

だから、早苗は変な誤解はしなかった。

高山が自分を訪ねてくるということは、明確に何かの目的があるからだ、と。

そして、それは——はなはだ残念なことながら——自分に対する好意を表明するためではないということも。

サワタリ関係だな。

ピンときた早苗であったが、それを自分の口から言い出したりはしない。

慎重に相手の出方をうかがった。

未来のジャーナリストを目指す彼女にとっての、それはいわば本能ですらあった。

「ちょっと聞きたいことがあるんだ。君と同じクラスの沢渡さんのことなんだけど」

ビンゴ！ いきなりきたか。

ど真ん中の直球勝負を好む競技者らしい物言いに、早苗は口端をほころばせた。

ここじゃあ言いにくそうね。場所変えようか。

早苗はそう高山をうながすと、理恵に一礼してから保健室を後にした。

ふたりがやって来たのは、校舎裏の非常階段付近だった。

確かに夏休み中のこの時期、わざわざこんな人気のない場所を居場所とする学生はいないだろう。

密談を交わすには絶好の場所と言えた。

「サワタリとの間を取り持ててなら、お門違いよ」

最初に釘を刺すよう、早苗は言った。

「他人の恋愛沙汰に首突っ込むほど、あたし野暮じゃないから」

「そんなことは言わない」

逆に驚いたような声を上げたのは高山だった。

ただ内心での後ろめたさがあるのだろうか、力なく、台詞の後に

「けど……」を付け加えた。

「俺が知りたいのは、沢渡が付き合ってる奴のことなんだ」

早苗とまともに視線を合わせられず、うつむきながら彼は尋ねる。

「クルマ持つてる年上のオトコって聞いたんだ。君なら何か知っているとって」

翔一郎のことだな、と早苗は察した。

おそらく真琴が翔一郎のクルマに乗っている光景を誰かが目撃して誤解したのだろう。

そう言えば、たまに学校まで送ってもらってきたこともあったよ
うな。

だとしたら、とんだ勘違いだ。

壬生翔一郎は、いわば真琴の保護者と同義語である人物だし、少なくとも早苗の知る限りにおいて、ふたりがそういう関係を築こうとした過去は一度もない。

むしろ翔一郎の方が真琴との距離を積極的に置こうとしている事実を、彼女はしっかりと認識していた。

「聞いてどうすんの？」

しかし早苗はそれを言わなかった。

わざわざ他人に教えてやる必要もないし、大体知りたければ直接本人に聞くべきだ。

こんなところだけ変化球投げてどうするのよ、と小一時間ほど高山を問い詰めたくなる。

早苗は毅然として言い切った。

「あたしは親友の個人情報売らないわよ」

だよな、と自嘲して高山は顔を上げた。

憑きものが落ちたような表情をしている。

おそらくは、自分がいかに恥ずかしい真似をしてしまったのかを察したのだろう。

素直に謝罪を口にする。

「馬鹿なこと聞いて済まなかった。忘れてくれたら嬉しい」
へえ、と早苗は感心した。

随分と素直じゃない。こりゃ、ミハー相手に人気が出るはずだわ、と納得する。

いたずら心半分の親切心が鎌首をもたげてきた。

悪い癖だと自覚しながら、早苗は高山へ声を掛ける。

「あんた、サワタリのこと諦められないの？」

「簡単に吹っ切れるほど俺は単純じゃないんだ」

怒ったように高山は答えた。

「女々しくないと言えば嘘になるけど……」

「でも、あんたモテモテじゃない？」

早苗が言った。

「サワタリ以外にも女の子は沢山いるでしょ」

例えばあたしとか、と冗談っぽくしなを作ってみせる。

高山がそれを見無視して話を続けた時、早苗がちよつとショックを受けたのは、この際秘密にしておこう。

「何かさ、沢渡は違うんだよ」

熱っぽく高山は言った。

「あいつは俺の上辺以外をちゃんと見た上で好きになってくれる気

がする。何て言うか、きちんと俺というオトコの本質を納得ずくで受け止めてくれると思うんだ。確かに俺の周りに女の子は沢山いる。でも、あの子たちにとって“俺”って存在はなんなんだろうって考えたら、多分簡単に換えの効くものなんじゃないかと思う。俺はそんなのじゃ嫌だ。上手く説明出来ないけど、とにかく嫌なんだ”

「要するに、サワタリならあんたを“独り占め”してくれるって思った訳だ”

腕組みして、早苗は何度もうなづいた。

態度がかなり芝居がかっている。

「わかったわ」

早苗は告げた。

「あんたの熱意に応えて、ヒントだけあげましょう。いまはそれで満足することね」

ゴメンね、サワタリ。と内心で謝罪しながら早苗は言った。

「多分、あんたが思っているオトコってのは、あたしの知ってる人よ」

早苗の言葉に高山が目を輝かせた。

身を乗り出すようにして彼は問う。

「どんな奴なんだ？」

慌てるな、とばかりに右手の人差し指を舌打ちと合わせて左右に幾度か振った後で彼女は、高山にこう答えた。

「その人は、八神街道の走り屋でね——」

三章：ワインディング（2）

なんでこんなことになったのだろう。

翔一郎は天を仰いで自問した。

雨でも降っていてくれれば断る理由にもなったのであろうが、どういう訳か上は満天の星空だ。

「よろしく願います」

目の前の少年が礼儀正しく頭を下げる。

体育会系の所属と聞いていたが、なるほど、その動きはきびきびしていて小気味よい。

その姿勢は翔一郎に好感を抱かせるのに十分なものであったが、だからといってそれが彼の身の上に降りかかった理不尽を緩和させ得た訳ではない。

なんでこんなことになったのだろう。

ふたたび翔一郎は嘆息し、過去へと思いを巡らせた。

ことは時間をさかのぼって「エム・スポーツ」に到り端を発する。翔一郎が同店を訪れた理由は、本当に暇を潰すためだけだった。

愛車のBE-5は快調そのものだし、改めてどこかを弄る予定も必要性も持ち合わせてはいなかった。

あえて言えば、最近の自分を巡る状況について、少々店主に愚痴りたくなっただけが原因とでもいえようか。

八神街道での一件以降、翔一郎のBE-5に絡んでくるクルマが著しく増加した。

「レガシイ・B4」などさして目立つクルマでもないだろうに、どうやって判別を付けているのかは知らないが、普通に街乗りをしているだけで若い連中が乗っているクルマ——走りのクルマだけでなくミニバンまでも——があたかも珍獣を見付けたかのように寄ってくる。

まあ、それぐらいなら許せましょう。

派手なバトルを演じてしまった自分自身の責任ともいえるからだ。しかしながら、中には明らかに真剣勝負を仕掛けてくる傍迷惑な連中もいた。

先日、真琴を横に乗せて、彼女が購入予定の中古車を見に行った時にもそんなクルマと出くわした。

片側二車線の信号待ち。

わざわざ翔一郎のBE-5と並べるように右側車線に停車した白色のクーペ、RPS-13「180SX」がクラクションを短く鳴らす。

恐る恐る視線を向けるとそこには、見るからに走り屋じみた容貌の若いドライバーが、にやにやしながら自らの力瘤を誇示していた。あからさまな挑発だった。

同乗している真琴は無責任にもこれを受けて立つようはやし立てたが、逆に翔一郎は同乗者がいることを相手に指し示して、穏便にこのトラブルを回避した。

真っ昼間の公道でシグナル・グランプリなどもっての外だった。

少しは常識という奴をわきまえてくれ、と嘆息せざるをえない。

「どの口がそんなこと言えるんだろ」

少し拗ねたように真琴は抗議したが、翔一郎にとって件のバトルは緊急避難的な覚悟をもって行った、いわゆる特例事項なのであった。

ゆえに、むかし取った杵柄は杵柄としてそれをいまになって筆笥の奥から引つ張り出すような意思は微塵も持ってはいなかった。

大体、「ミッドナイトウルブス」のメンバーだったことは、いまの翔一郎にとってむしろ恥ずかしい過去、言いかえれば若気の至りというべき黒歴史であって、他者に誇りを持って伝えられる事実ではない。

今更そんなことを評価されて知名度が上がるなど、心底勘弁して欲しいというのが本音であった。

愚痴のひとつも誰かに零さないとやってられない、と翔一郎が

思うのも無理はなかった。

「エム・スポーツ」のガレージに向かうと、翔一郎はそこに見慣れないクルマが停まっているのを発見した。

P-10「プリメーラ」

日産自動車が発売していた四ドアセダンだ。

色は銀色。^{シルバー}

アルミホイールこそそれっぽいスポーツタイプを奢ってはいるが、見た感じ使い込まれた走り屋の所有車には見えない。

第一、車体後部には、しっかりと若葉マークが張ってある。

初心者が来るとは珍しいな。

そんな感想を抱きつつ事務所に入ると、水山店長と倫子のふたりが初めて見る若い男と何やら難しそうな話をしている。

男は長身ではあるが、その表情にまだ幼さが残る。

どう見積もっても二十歳になったかならないかの年齢だ。

もちろん単に若作りである可能性も捨て切れないが、表にあった「プリメーラ」の持ち主であるのなら、予想と大きく離れてはいないと思われた。

「いや、いいところに来てくれました」

翔一郎の来店に気付いた水山店長が、まるで渡りに船とでも言わんばかりの表情を見せた。

そして、なんの話でしょう？、と探りを入れる翔一郎に、彼はとんでもない話を持ちかけてきたのだった。

「このコに走りを教えてやってくれませんか」

突然のことに言葉を失う翔一郎。

追い打ちをかけたのは、件の若い男が見せた態度であつた。

彼は跳ね上がるように席を立つと、翔一郎に向けて深々と頭を下げたのだ。

「お願いします。僕に八神街道の走り方を教えて下さい！」

飾り気も何もなしに、彼は言った。

その直球勝負ぶりに翔一郎はうろたえ、とりあえず初めから話を

聞かせてくれるように席を勧めた。

彼——驚いたことに、免許を取ったばかりの現役高校生だった——が語った内容は、大体次のごときものであった。

八神街道をホームにしている走り屋の中にどうしても戦いたい奴がいる。

出来れば、そいつに勝ちたい。

そのために必要な技術と経験を学ばせて欲しい。

「無茶だ」

単刀直入に翔一郎は言った。

「相手がどんな奴かは知らないけれど、免許取ったばかりの初心者が公道を攻めるなんて自殺行為だ」

「無理を承知でお願いします」

少年は言い切った。

「リスクなしに出来ることだなんて考えていません。最終的な責任は自分が取ります。本当に教えてくれるだけでいいんです」

駄目なものは駄目だ、と翔一郎は拒絶した。

最終的な責任を取るといったところで、その責任を本当に取れると思っっているのか？

他人を巻き込んで怪我をさせたりそれ以上のことになったら、一体どうやって責任を取るつもりなんだ？

「大体、峠の走り屋なんてろくな連中じゃないぞ。クルマが好きならサーキットでも走ったらどうだい？ それなら相談に乗ってくれる人も多いだろうし」

「駄目なら他を当たります」

寸分も引き下がることなく、少年は言った。

「僕は、“八神街道で”、そいつに勝つために走りたいんです」

翔一郎はため息をついた。

真琴もそうだが、なんでこの年頃の連中はこうも頑固なんだろう。「わかったよ」

根負けして翔一郎はうなづいた。

「ただし、無理をさせることは一切しない。戦う技術は教えるけれど公道バトルなんて論外だ。競いたいのであれば、そのお膳立てまではアドバイスしよう。そこまでを承知してくれるのなら、君の頼みを受けるよ」

「ありがとうございます！」

少年は勢いよく一礼した。

彼は、高山正彦と名乗った。

いざ依頼を承知した翔一郎は、直後から積極的にこの高山という少年と向き合った。

君が対戦を望む相手は一体全体どんな奴で、どんなクルマに乗っているのか。

それによって走り方は変わってくるから、対戦相手に関する情報はとても大事だ。

ほら、むかしから言うだろう？ 敵を知りおのれを知れば、って。しかし高山はクルマに関してはほとんど素人のようなもので、有益な情報を翔一郎に伝えることは出来なかった。

せいぜいわかっていることは、相手が凄腕の走り屋で4WDの使い手だということぐらいだ。

四駆か、と翔一郎は唸った。

走り屋が、それも頭に凄腕と付くような連中が駆る4WDといえば、三菱「ランサー・エボリューション」やスバル「インプレッサSTI」のようなハイパワー車ばかりだ。

そのどちらもありー競技で磨かれた“公道の戦闘機”であり、普通のクルマとは別格の走行性能を誇る。

高山の愛車は、やはり表に停めてあったP-10だった。

P-10系は九〇年代に日産が出したFFセダンの傑作だ。
サスペンション
かつちりと固められた足回りには賛否両論の評価があったが、それが保証するハンドリングについては、ほとんど非の打ちどころがないと言っている。

当時の日本車には珍しく、欧州での評価も高かった。

走りのベース車としても密かに人気がある。

ハードなチューニングを施し、サーキット専用にナンバーを外している猛者までもいるほどだ。

自然吸気のSR-20、二リッターエンジンは一六〇馬力を発揮する名器だし、運転して楽しさを味わえるクルマであること自体は間違いない。

ただし、先に挙げた化け物どもと競い合うには、その戦闘実力が不足していることも事実だった。

よほど腹のすわった改造を行わない限り、自重の軽さという一項目を除いて、それらに太刀打ち出来る性能を持たせられるとは思えない。

道具と腕の双方で差をつけられた相手にどのように立ち向かうか——と、そこまで考えてはたと何かに気付いた翔一郎は、ぶんぶんと頭を左右に振り熱を持った頭を正気に戻す。

いつの間にか、思考が戦闘モードに入ろうとしている。

先日、久方ぶりの実戦を経験してしまったことで、身体と心がむかしの興奮を思い出そうとしているのか？

いましがた公道バトルなど論外だ、と自分で公言したばかりではないか！

何を血迷っているのだ、俺は？

溜息をひとつつく。

その段階で、翔一郎は現実に戻った。

現実の彼が立つのは、八神街道沿いの駐車場。

時刻は午後九時。交通量はまばらであるが、街道の走り屋どもの姿はまだない。

いまここにある人影は、翔一郎と高山のふたつのみだった。

待ち合わせ時間どおりにやって来た少年と対峙する翔一郎は、正直不安でいっぱいだった。

走り方を教える、といったところで、一体全体何から教えればいいのやら。

俺は教習所の教官じゃないんだぞ、と心中でつぶやく。

なんだか水山店長と倫子に上手く厄介事を押し付けられたような気がする。

が、一旦引き受けた事柄については、きちんと責任を果たさなくてはならない。それが大人の責務というものだ。

なれば、この少年に伝えられる範囲で自分の経験を伝えよう。

翔一郎は気乗りしないながらも、とりあえずそう決意した。

後は行動に移すのみだ。

「クルマの運転技術向上に近道はない。まずはそれを肝に銘じてもらいたい」

翔一郎は、そう言つて高山に講義を始めた。セミナー

翌日になって土曜日の朝、翔一郎は真琴によつて叩き起こされた。毎度のことながら、彼女は翔一郎の部屋へ足を踏み入れることに遠慮しない。

もちろん今回もそうだ。

翔一郎の方も真琴の襲来が迷惑ならばそれに対する備えをしておけばいいものを、面倒なのかどうなのか自室に鍵のひとつも付けないのだから、彼女の手で意図しない目覚めを強いられる件に関しては半ば自業自得であるとも言える。

「ふが」と、とても年頃の女性相手には聴かせられない奇声を発して、翔一郎は目を覚ました。

寝癖でくしゃくしゃな頭髪と顔を出し始めた無精髭が、普段以上に情けない容貌を形作っている。

ぶつくさと不平を口にしながら翔一郎は、よつこらしよとばかりに半身を起こした。

このあたり、流石に年寄り臭いと思える動きだ。

少なくとも、はつらつとした朝にふさわしくはない。

そんな翔一郎に向けて、真琴は言った。

「忘れてたでしょ？ 今日、ボクの愛車が納車される日だよ」

言われてすぐに翔一郎は気付いた。なるほど、そう言えば今日は真琴のクルマが沢渡家にやって来る日だっけ。

赤色のホンダ「CR-X」

高校生活を通じて真琴自身がアルバイトで稼いだ金額のほとんどすべてを費やして買った、彼女ただひとりのための愛車。

それがとうとう自分の手元に訪れるのだ。

嬉しくないはずがない。

ただでさえどこか子供じみた精神構造メンタリティを持つ真琴が、遠足前の小
学生気分だったことぐらい容易に想像が付く。

よかったな、おめでとう。

いや待て、問題はそこではない。

起きがけの惚けた頭でも、翔一郎の頭脳はそう結論づけた。

真琴のクルマが納車されると、俺が朝っぱらから叩き起こされるのと、一体なんの因果関係があるのだ？

半分閉じたまぶたを擦りながら、翔一郎は真琴に問うた。

「そんなの決まってるじゃない」

まるでそれが誰にでも明白な事柄であるかのごとく、彼女は即答した。

「翔兄いがボクにドライビングを教えてくれるからだよ」

なんだって、と翔一郎は仰天した。

いつ俺がそんなことを言った？ 勝手に俺の都合を決め付けるな

！、と、ほとんど反射的に反論する。

「翔兄いじゃないと駄目なんだよ」

少し唇を尖らせて真琴が詰め寄る。

「ボクは、翔兄いのテクを翔兄い自身に教えてもらいたいんだもん」

「だから、なんで俺が」

「弟子に経験を伝えるのは師匠の役目でしょ？」

弟子？ 師匠？ 何を言っているんだ、コイツは。

翔一郎の思考が困惑するのを知ってか知らずか、畳み掛けるように真琴は告げた。

「はい。『ミッドナイトウルブス』三号機の弟子、第一号です」
右手を高々と上げて名乗りを上げる真琴の姿を目の当たりにして、
翔一郎は頭を抱える。

ああ、なんでこんなことになっちゃったのか。

真琴が一度言い出したことを翻さないのは重々承知していた。

それでも、これ以上面倒を抱え込みたくなかった翔一郎は、敢然
と彼女の意思を拒絶する方向で決意を固めていた。

しかし、ふとしたことで話を聞かれた真琴父から直々に依頼され
たとあつては、流石に彼としても断り切れなかった。

翔一郎君はむかしからクルマの運転が上手かったからね、云々。

思えば、この人には自分が峠の走り屋だった時分、朝から晩まで
クルマ漬けだった頃を知られているのだ。

それが単に“翔一郎君はクルマのことをよく知っている”程度の
印象であつたとしても、真琴父が、どうせ愛娘を預けるならば近し
い者に、という心情を抱くことは明白だった。

最も話を聞かせてはいけない人物に話を聞かせたことを心底後悔
する翔一郎であつた。

やれやれだ。

昼すぎに納車された赤い「CR-X」を前に翔一郎はため息をつ
いた。

「まったく、俺は教習所の教官じゃないぞ」

わざと聞こえるような愚痴をこぼしてから、翔一郎は真琴の運転
とやらを確認するために「CR-X」の助手席へと乗り込んだ。

見ると、真琴の方は初めての愛車に浮かれまくっている。

地に足が着いていない状況とは、まさにいまの彼女にふさわしい
表現だ。

まあ、その心情は理解出来るけどな。

翔一郎はむかしの自分を思い出して苦笑した。

もともと自分には師匠とやらいなかったし、持つつもりもなか
った。

ただ自分のクルマを所有してそれを自由に乗り回していることが何よりも楽しかったのだけは、いまでも強く印象に残っている。

そう思うと、真琴が見せる浮かれ具合も好ましく感じられてくるのだから実に不思議だ。

当時の自分といまの彼女とを、あるいはどこかで重ねているのかも知れない。

「まずは、近くをふらっとひと回りだな」

とりあえず心の底から気乗りしていない風体を装い、ぶっきらぼうに翔一郎は告げた。

「ドラテクどうこの話は、その後で聴こう」

了解しました、と敬礼した真琴は、早速エンジンのスターターを回す。

エンジンに火が入り、軽快な排気音が空気を揺らす。

始動は大丈夫だな。

エンジンのアイドリングにも異常はない。

古い車種だからそれなりにくたびれてはいるだろうが、まあいまのところは気にしないでもいいだろう。

オイル交換などなど、水もののメンテナンスに関してはいずれじつくりと講習するとして、まずは乗ってみて感触をつかむのが大事だ。

思えばろくに試乗もしないでこのクルマを買った訳だから、真琴も無茶なことをする。

確かに、欲しいクルマの方向性と財布の中身を吟味すれば、他に選択肢がなかったのも事実であつたろうが。

漠然とそんなことを考えつつ、翔一郎はシートベルトをロックした。

「座席の位置を調整しろ」

クルマの発進を前にして、翔一郎は真琴に言った。

「着座位置を自分の体に合わせるのは、ドライビングの基本だぞ」

これは高山にも最初に教えたことだった。

教習所では教えたりしない事柄かもしれないが、クルマという時には危険物にもなりえる機械を操ることに対して、運転者が取るべき初歩の心構えだと翔一郎は考えていた。

腰は深く沈める。背もたれは心持ち立て気味にして、ステアリングの上にまっすぐ伸ばした両腕の手首が乗るくらいの位置に座席をセツトするんだ、と具体的な指示を真琴に出す。

シートベルトの着用は、当然のごとくチェックポイントだ。

押忍です、師匠！、と元気はつらつ、彼女はそれにふたつ返事で従った。

いつもと違って妙に素直な真琴に少々違和感を感じながらも、続けて翔一郎は発車を命じる。

ただし、きちんと周囲を確認した上でのゆっくり発進である。

クラッチを踏む左足をゆっくりと離し、クルマが少し前に出ようとするタイミングを感じてからアクセルを軽く開けるよう、翔一郎は真琴に告げる。

彼女の発進は、初心者らしくとてもスムーズとは言えないものだったが、クラッチミートの失敗によるエンジンストールも起こさなかったし、まあ及第点を与えてやってもおかしくはあるまい。

その点では昨夜の高山も同様だった。

こう考えるといささか癪ではあるが、やはりスポーツをやっている人間はドライビングに必要なセンスも磨かれているのだろうか、とこの時翔一郎は思った。

「CR-X」が公道に出る。

真琴にとつては、自分のクルマでの初ドライブだ。

「翔兄い、次の指示は？」

心から楽しそうに真琴が尋ねる。

そこに若葉マーク特有の緊張感は微塵も見られない。翔一郎は彼女に言った。

「そつだな、とりあえず近くのコンビニで買い出しするか」

気の抜けた感じでそう告げた翔一郎に、真琴は不平の声を上げた。

どうせなら八神街道でも走ろうよ、と自分の意見をこぼしてみせる。

「まずは軽くひと回りだと言ったはずだぞ」

今度は鋭く翔一郎は言い切った。

「俺の指示に従えないなら、レッスンはなしだ」

はあい、と返事はしながらも、真琴はがつくりと肩を落とした。

そう言えば、高山も初めて俺が出した指示に肩を落として見せたっけ。

昨夜の個人講習会を思い出して、翔一郎はほんのわずかに口の端をほころばせた。

「まずは、制限速度をきっちり守って八神の表と裏を往復してみせろ」

翔一郎は高山に告げた。

初心者だからって馬鹿にしているんですか？、と抗議する高山に翔一郎は、「俺の指示に従えないなら、レッスンはなしだ」と、はつきり言い切った。

「ドライビングに近道はない、とさっき言っただけだな」

ですが、となおも食い付こうとする高山を翔一郎は片手で制する。

「文句があれば、終わった後で聞いてやる」

有無を言わせず彼は告げた。

「ただし、こいつが簡単に来ると考えているのなら大甘だぞ」

わかりました、と肩を落としてP-10に乗り込む高山に続いて翔一郎も助手席に乗り込んだ。

着座位置の調整とシートベルトの着用を確認し発進を命ずる。

八神街道の制限速度である時速五〇kmでのクルージング。

確かに傍目には誰だって出来る単純な走行に思える。

しかし、この時翔一郎が指示したのは“時速五〇km以下”での巡航ではなく、可能な限り“時速五〇kmを維持して”の巡航であった。

初心者である高山は、この最初のレッスンにおいて教官である翔一郎から完全な赤点を突き付けられた。

高山は、途中に何力所があるヘアピンはともかく、平均程度のコーナーでも時速五〇kmという巡航速度を維持出来ず、逆に下りの直線では重力に負けて速度が付きすぎるという失態を犯したのだ。た。

「初心者の走りなんて、こんなもんさ」

わざと挑発するように翔一郎は高山に言い放った。

当然だろ？ 君はまだクルマという乗り物に乗ったばかりの赤ん坊なんだから。

よちよち歩きがやつとの子供にスプリントの練習をやらせたって上手くなるはずがない。

と言うより、もとより出来るはずがない。それは自明の理だ。

「俺はまず、君に立って歩くことを教えるつもりだ。走る練習はその次」

理解してくれるかな、と続ける翔一郎に高山は、はい、よろしく願います、と頭を下げた。

さっきまで見え隠れしていた翔一郎に対しての不信感は払拭された様子だった。

それからの彼は翔一郎を伴って、八神街道を何往復もした。

長時間の緊張を持続出来るのは若さゆえの特権だろうか。

途中で強い疲労を感じた翔一郎だったが、結局深夜まで高山に付き合った。

初心者特有のガクガクとした加減速に頭を揺らされながら助手席での確な助言を送り続けられたのは——翔一郎本人にとっても意外なことだったが——それがなかなか楽しい時間だったからだ。

最後の締めは、八神街道を二本の足で歩くことだった。

ジムカーナ競技などではごく当たり前に行われている、完熟歩行という行為だ。

ゆっくりとコースを歩くことで、クルマでの走行中には見えてこ

ない舗装の継ぎ目や凹凸、道路の傾斜などが見えてくる。

区間を短く区切つてのこととは言え、経験からくる知識を体験談も交えながら語りつつ何kmも歩くと、流石に翔一郎の足腰が悲鳴をあげだした。

日頃からの不摂生が、こんなところに顔を出してくる。

日付が変わる時間になったので、翔一郎は高山を帰宅させた。

未成年を午前さま帰りにしてしまったことに対して、軽く謝罪の言葉を述べる。

「いえ、物凄く勉強になりました」

帰り際に高山は深々と、本当に深々と頭を下げた。

「こちらこそ、僕のわがままにお付き合いただいたいて、ご迷惑をお掛けしました」

「いいさ」

翔一郎は軽く右手を振って、それに応えた。

「若いうちはなんでも経験してみることが大事だよ。少しぐらい大人に寄りかかったからって気にするな」

それに、と翔一郎は続ける。

賢く行く道を選んで後から後悔するよりも、勢いだけで足を踏み出してずっこける方がはるかにマシさ。

失敗するつても、何かに挑んだ結果として初めて手にする勲章だと思えば、何ほどのことでもない。

君がこの件で何を得ようとしているのかは知らないけれど、ともかくにも勇氣をもって手を伸ばしたんだ。

それを説教臭く否定出来るほど、俺も人間が出来ちゃいない。

背伸び上等。頑張りな。

「ありがとうございます」

高山は、そう言つてふたたび頭を垂れた。

他人の好意に鈍感な翔一郎はまったく気付いていないようだったが、その時の高山の眼からは明白にある種の敬意が感じられた。

次回の講習は土曜日、つまり翌日の夜に決まった。

翔一郎としては可能な限りの密度で高山に付き合うことに異論はなかったが、流石に一社会人として仕事を持つ身、毎日という訳にはいかない。

とはいえ、鉄は熱いうちに打てという格言のとおり、短期間に来るだけの時間を投じてやろうという気になっていたのも事実であった。

まあ、週末ぐらいは身体を開けておいてやろう。

ヒマを持て余して昼寝しているよりは、何十倍もマシだろうしな。そう考えて心の準備をしていた矢先に起きた真琴の襲来だ。

翔一郎としては、一気にふたりの押し掛け弟子が出来た勘定だった。

思わずため息をつく。

ただし、彼の心情はむしろいま見せた態度とは真逆の方向へと動いていた。

助力を求められたことに對するやりがいとでも言おうか。

無意識のうちに、ある種の感情が腹の底から込み上げてきた。

ほころびかけた口の端を真琴に悟られぬよう、翔一郎は窓の外に顔を向けた。

気が付くと、真琴の運転する「CR-X」は近所のコンビニエンスストアに到着する寸前だった。

同乗者《翔一郎》の頭部が揺れる不自然なブレーキングを行い、真琴はコンビニの駐車場へ侵入を試みる。

「ブレーキを踏む時は、今後なるべく踏み代を一定にしてみろ」
待つてましたとばかりに翔一郎は注文を付けた。

「それで、きちんと目標位置で止まれるようにするんだ」

OK、と真琴は返事して、アスファルトの上に白線で表示された駐車位置へとクルマを向かわせる。

早速翔一郎のレクチャーに従ってか、ゆつくりと真琴の「CR-X」は停車した。

「思ったよりも緊張するね」

エンジンを切り、シートベルトを外すやいなや、真琴は第一声を放った。

「そりやそうさ」

翔一郎が応える。

「だから、初めは自分のクルマに慣れることから始めなきゃな。覚えることはたくさんあるぞ。街乗りだからって馬鹿に出来ないんだ」
言い終わると翔一郎はクルマを降り、ペットボトル飲料を二本買ってきた。

一本を運転席の真琴に手渡す。お茶だ。

翔一郎自身は甘いカフェオレを選んでおり、座席に腰を落ち着けるやいなやキャップを開けて、一口それを口にした。

「しかしな——」

唐突に翔一郎は嘆息した。

「なんで走り屋なんぞになりたがるかねえ。ろくなもんじやないのは、社会の評判からみてわかってるだろうに」

「翔兄いには言われたくないよ」

その発言にカチンときたのか、真琴がぷつと頬をふくります。

「その走り屋だったじゃない、翔兄い自身が」

「そりやそうだが」

真琴の舌鋒を軽くいなして、翔一郎は言った。

「走り屋だったからこそ見えてくる悪い面だってあるのさ」

雑誌や漫画では格好よく描かれちゃいるが、あれは負の面を描かないからな——

「負の面？」

「クルマは時には凶器になるってことだよ」

珍しく真顔になって翔一郎は告げる。

「無茶やって怪我するのが自分だけなら、それはあくまでも自己責任の範疇だ。けれど、クルマの場合、^{ドライバー}運転者の無茶は自己責任で済まない場合もある」

優れた運転技術や派手なパフォーマンスに目を取られて、運転の

基本を忘れたようなのが多いからな、走り屋は。

「運転の基本？」

「自分の技量の範囲内でクルマを制御することさ。コイツを逸脱して馬鹿な真似をすれば、クルマはあつという間に走る暴力装置に早変わりだ」

再びペットボトルを口に運び、翔一郎は真琴の方に目をやった。

「言っておくが、俺のレクチャーは地味だぞ。それでもいいのなら弟子入りを認めてやる」

「望むところだよ」

勢いよく真琴は答えた。

「要するに、基礎体力付けろってことでしょ？ 競技じゃそんなの当たり前じゃん。翔兄いは体育会系を舐めすぎだぞ！」

鼻息も荒く一氣にそう言い放った真琴を目の当たりにして、翔一郎は天を仰いだ。

いささか芝居がかってはいたが。

「ならば、行こうか。何はともあれ、実際にクルマを運転することから始めないとな」

翔一郎は真琴に告げた。

三章：ワインディング（3）

「壬生さんは、どうして走り屋なんかになったのですか？」

唐突に発せられた高山からの問い掛けに、翔一郎はどんぶりの中身に伸ばした箸を止め、続いてしばし考え込んだ。

土曜日の夜、高山と約束した教習レクチャーが一段落した後、空いた小腹を満たすため、翔一郎と高山は「宗義」のラーメンをすすっていた。

お代は翔一郎のおごりだった。

高山は、むしろ自分が支払う立場だ、それが駄目でもせめて自分の分は自分で払うと主張したのだが、翔一郎は「未成年は大人にたかるモノだ」と言つてのけて、彼に財布を開かせようとはしなかった。

昨晚もそうだったが、翔一郎の講習は実際にクルマを走らせて行うものと、まるで座学のように言葉でとうとうと語るものが交互にくる。

それは、走り屋という人種が持つ一種体育会系の印象とは、完全に一線を画したものだつた。

まるで科学実験のようだ、と高山は感じた。

経験に裏打ちされていない理屈は机上の空論にすぎないし、理屈で説明出来ない経験は自己満足に終わる場合が多々ある、と翔一郎は高山に語つた。

「まあ、要するに、だ。頭と身体をバランスよく鍛えろよつてことだね」

なるほど、とうなづく高山。

その表情からは、翔一郎から得られる限りのものを得ようとする、ある種の貪欲さまでもが垣間見える。

そして、彼の中に芽生えたその意欲は、問い掛けの言葉となつて翔一郎へと放たれた。

「じゃあ、壬生さんの理屈だとクルマで速く走るコツってどんなの

ですか？」

「そりゃ簡単だ」

高山の質問を予想していたかのように翔一郎はさりと答えた。

「短い距離を速いスピードで走ることだよ」

当たり前のことを当たり前のように言う翔一郎の魂胆を図りかねて、高山が言葉を失う。

それを確認した翔一郎は、軽く破顔して解説を続けた。

走行するクルマの速度を制限する理はふたつある、と翔一郎は述べた。

ひとつは物理的限界で、もうひとつは心理的限界だと。

「心理的限界、ですか」

「そうさ」

翔一郎の言う物理的限界というものは高山にもある程度 of 理解は出来た。

要するに、一定の行程を辿って走行出来るクルマの最高速度は物理法則を超えられないという、しごく当たり前の事象だ。

ただ、翔一郎が口にした物理的限界という言葉には、少々哲学めいた意味合いがあった。

彼は、ドライバーの技量というものを、ある側面で否定してのけたのだ。

翔一郎に言わせると、細かい操作の積み重ねによるタイム削減を別にすれば、クルマの性能が同じである限り最良のドライバーが走った行程を標準的なドライバーが追従出来ない“物理的な”制限など存在しないとのことだった。

「ドライバーの技量は物理法則を超えてクルマを制御出来る訳じゃないからね。プロが出来るのなら、それは必ず他の人にも出来るはずなんだ」

高山がうなづいた。

「でも、現実にはそうじゃない。つまり、上手い下手を分ける最たる要因は、行き着くところ、物理的なものじゃないということだ」

ここで翔一郎は、奇妙な質問を高山にした。

「地面に引いた幅三〇cmのラインを外さずに一〇〇m歩きつたら一〇万円あげる、と言われたら君はそれを拒絶するかい？」

いいえ、と高山は即答した。

その理由を尋ねた翔一郎に彼は、「そんな誰でも出来ることで大金がもらえるなら、やらない奴はいないと思います」と応じた。

それを聞いた上で、さらに翔一郎はこう言った。

「じゃあ、その三〇cm幅のラインが地上三〇〇mにある鉄骨だったら、どうだい？」

「え」

高山は絶句した。

「与えられた条件は何も変わらないよ」
「いたずらっぽく翔一郎が笑う。」

「幅三〇cmを外さずに一〇〇mを歩ききる。君がさっき言ったように、誰だって出来る簡単な行為だ。ためらう必要はどこにもないはずだけだね」

「でも、落ちたら死にます」

「それが心理的限界だよ」

翔一郎は言った。

「人間は能力的に可能な行為でも、そこにリスクがあったりすれば、自分の中で天井を造って“出来ないもの”と考えてしまう。それを取り除くには、地道な練習で自分自身の壁を崩す必要があるのさ」

君にも経験があるはずだ。

免許取り立ての頃といまの自分を比べて見るがいい。

当時は四〇km出すのも怖かったはずなのに、もう平気な顔してずっと速い速度も出せている――

「要するに“慣れ”ですね」

高山がうなづいて言った。

翔一郎がそれを肯定する。

「そうだ。そして、それは“自分を信じること”と言いかえてもいい

いだろうね」

先述した高山の問い掛けは、その過程で飛び出した一言だった。
「走り屋になった理由、か」

上手く言葉に出来ないのか、小さく唸りながら翔一郎は答えた。

「快感、だったからかな。走るのが」

「クルマで飛ばすのが、ですか？」

「いや、自分の中のハードルを越えるのが、だな」

「自分の中のハードル？」

翔一郎はうなづいた。

「こう見えて、俺も学生時代はスポーツをやっていたのさ。たいした成績でもなかったけど。それでも、膝を痛めて引退を強制されたのは結構ショックだった」

クルマに出会ったのはそんな時だった、と翔一郎は続ける。

「頑張つて練習して昨日の自分より速く走したこと、上手くクルマをコントロール制御出来たこと。そいつが楽しくて楽しくて仕方がなかった。気が付けば、変なふたつ名付けられて有名になっていたけど、正直な話、他人との競争なんて眼中になかったな」

いつだって戦う相手比べる相手は昨日の自分だったよ、と彼は結んだ。

その心理は高山にも理解出来た。

スポーツ運動競技を志す者は、多かれ少なかれそういった思いを胸に日々の練習に汗を流しているはずだ。

試合とは、書いて字のとおり“試し合い”のことであり、それまで鍛えてきた自分自身を試す場である。

対戦相手に勝利することは、そうした努力の結果確認にすぎない。頭ではわかっていても、実際には周りの大人が口にしない言葉を耳にして高山は、“壬生翔一郎”という人間に対し一種明確な尊崇の念を覚えた。

同時に、見たこともない対戦相手に“勝つ”ことを目標にしている自分は一体何を目的としているのだろう、と軽い自己嫌悪を感じ

てもいた。

日曜日の朝。真琴は極めて不機嫌だった。

その不機嫌さの理由となった翔一郎は、ひととおり大笑いした上で、きつちりとフォローを入れることを忘れなかった。

「いや、笑っちまったことは謝る。すまなかった」

傍らの「CR-X」を横目で見ながら、彼は言った。

「だが、ZCの『CR-X』も十分に名車だぞ。俺が保証する」

それは、早朝のことだった。

愛車の足回りがゴトゴトする、という真琴の訴えを聞いた翔一郎は、彼女を助手席に乗せて週末の八神街道に繰り出したのだ。

流石に日曜日ともなれば、明るい時間帯であってもクルマの通りはほとんどない。

見晴らしのいい直線区間で、翔一郎がぐつとアクセルを踏み込んだ時、それは判明した。

「おかしいな。カムが切り替わらない」

高回転時のエンジンフィールに違和感を感じた翔一郎は、大事を取って路肩にクルマを一時停止させた。

EF-8「CR-X」がボンネット下に搭載しているB-16A、直列四気筒一六〇〇ccエンジンは、ホンダが開発したV-TEC バイテック機構を装備していることでNAとは思えぬ大出力を発揮していた。

V-TEC機構とは、エンジンの低回転域と高回転域で吸気バルブの開閉時間およびリフト量を可変させ、それぞれで最良の効果が出るように調整を行う技術のことだ。

この調整は、エンジン回転数に応じたハイ/ロー2種類のカムを切り替えることで行われる。

そのためV-TEC機構を持つエンジンは、低回転域と高回転域で如実にエンジンフィールが変化するはずなのだ。

だが、真琴の「CR-X」には、それがなかった。

カムの切り替えがまったく感じられず、あたかも普通のエンジン

のように滑らかなフィーリングを発揮したのである。

さらに言っと、カタログ値から予想された感触よりもいささか力不足なようにも思える。

クルマが相当の年月を経ていることから、当初翔一郎はエンジン系のトラブルを予想した。

エンジンを止めずにボンネットを開け、エンジンルームを覗き込む。

翔一郎が爆笑したのは、その時だった。

何が起こったのかと助手席から飛び出してきた真琴に彼はエンジン本体を指し示し、「真琴。こいつはB-16AじゃなくてZCだ」と告げた。

ZCとは、ホンダがB-16Aを投入するまで同社のスポーツエンジン我代表していたDOHCエンジンのことで、トヨタの4A-G型エンジンの直接的なライバルとも言える。

EF型の「CR-X」にも初期に搭載されていた、時代を代表する名器だ。

ダッシュボードを開けて車検証を取り出した翔一郎は、それを真琴に提示してわかりやすく説明した。

この「CR-X」は、EF-8じゃなくてEF-7なんだ、と。

早い話が、彼女の愛車は彼女が考えていたものよりもひとつ前の型だったという訳だ。

これには流石の真琴もかなりの衝撃を受けたようだった。驚きの表情を浮かべたまま、身動きひとつしない。

まあ、それもやむをえない反応だろう。

一リッター毎一〇〇馬力を発揮するB-16Aと比較すると、いかに名器とはいえZCの最大出力はわずか一三〇馬力に留まる。

最大出力が三〇馬力も違えば、両者が与える走りの力強さには文字どおり雲泥の差があるはずだ。

それは、走りの性能を重視して愛車を選んだ真琴にとって極めて重大な相違点であると思われた。

所詮は中古車であるとはいえど、やはりクルマはクルマ。高い買い物なのだ。

ましてや真琴は現役の高校生。

金銭の重みは一般的な社会人の比ではない。

現実を認識するにつれ、彼女の顔に失望感がにじんできた。

いまにも膝から力が抜けそうな雰囲気だ。

このままでは、真琴が地面にへたり込むのも時間の問題であつたろう。

しかし翔一郎がそれを阻んだ。

彼はむしろEF-7の長所を高々とうたい、それを手に入れた真琴の幸運を本気で賞賛したのだった。

B-16Aは高回転域での出力に優れ、競技の場では確かにZCがおよぶものではない。

ただしZC型のエンジンは実用域でのトルクに勝り、ライディング峠道が舞台であれば優位な面も少なくない。

何よりも、EF-7はEF-8と比べると一〇〇kg程度軽量だ。
<ruby><rb>

峠の下り</rb><rp>(</rp><rt>ダウンヒル</rt><rp>)</rp></ruby>なら、この差は馬力差を十分に補えるメリットになる、などなど。

「本気でいい買い物したと思うぞ、真琴」

自信満々に翔一郎は断言した。

「こいつはAE-86と同じさ。走り屋が腕を磨くには最適のクルマだよ」

「そう、かな？」

それでもまだ不満げな顔付きの真琴に対して、翔一郎は畳み掛けるように告げる。

「使えない大馬力よりも、使い切れる低馬力さ。大体お前はまだ若葉マーク付きなんだ。四の五の言わず、このクルマでガンガン走り込んでみな。馬力云々はそれから考えても遅くはないぞ」

煮え切らない真琴を振り切るように翔一郎は「CR-X」の運転席に乗り込んだ。

足回りからの異音問題が未解決のまま残っているからだ。

真琴を助手席に乗せるやいなや、すぐさまクルマを発進させる。

この手の違和感を実際に発生させてみないと何が原因かわからないことが多い。実走で再現する必要があった。

原因はたちまち判明した。

スタビライザーの取り付けボルトが緩んでいたのだ。

過走行車なので、こういった部分のトラブルはある意味仕方ないと言える。

八神街道から帰還した翔一郎は、沢渡家前の往来を借り「CR-X」をジャッキアップして馬に掛け、手の届く範囲にあるボルトやナットを片っ端から締め上げていった。

「サンキュ、翔兄い」

作業終了を待っていたかのように、真琴が入れ立ての熱いコーヒーを持ってきた。

「翔兄いがいてくれて助かったよ。ボク独りじゃクルマ弄りなんて出来そうもないし」

「近いうちに信頼出来るショップを紹介してやるよ」

湯気の上がるコーヒーカップを口に運びながら翔一郎は言った。

「餅は餅屋、だからな。自分のクルマだから全部自分で手を掛けないといけないって訳じゃない。腕のいい店に任せるのも選択肢のひとつだ」

真琴は無言でうなづいた。

しばらく会話のない時間だけが過ぎていく。

やがて、コーヒーを飲み干した翔一郎が、思い出したように切り出した。

「こいつがV-TECじゃなくて不満か？ さっきも言ったが、こいつはこいつで十分以上に楽しめるクルマだと思うぞ」

「正直に言っと、そうだと思う」

隠し立てせず真琴は答えた。

「やっぱり走るクルマにはパワーが大事だよ。ボクはリンさんみたいに、“強い”走り屋になってみたいから」

“強く”なつてどうするんだよ、まったく」

呆れ顔で翔一郎は言った。

「走りなんて身の丈に合わせた自己満足で十分だと、俺は思っがね」
「うーん、よくわかんないや」

真琴は、翔一郎の発した言葉に自嘲気味な笑顔で応えた。

「でも、ボクは“走り”で高みを目指したいと思ってる。上手く言えないけど、“速い”走り屋じゃなくって、“強い”走り屋って呼ばれたい」

「強さ、ねえ」

仕方がない奴だ、とばかりに翔一郎は膝を払って立ち上がり、諭すように真琴へ告げた。

「それが望みなら出来ない責任をクルマに求めちゃ駄目だな。お前のEF-7が、実際どれだけ走れるのかを確認してやるから、今晚顔貸せ」

その夜、真琴を助手席に乗せて八神街道を訪れた翔一郎は、ほとんど手の加えられていない真琴のEF-7を駆って、地元の実力派が乗るホンダEK-9「シビック・タイプR」——戦闘力で圧倒的に勝る同系のクルマを八神の表コースで軽々とぶっちぎってみせた。それも真琴本人を助手席に乗せたままというハンデを背負って、でだ。

その後、真琴が自らの愛車に対して不満げな態度を示すことは二度となかった。

三章：ワインディング（4）

「大体こんな感じかな」

母校のグラウンドに隣接した芝生の斜面に腰を下ろし、高山は右足首をくいと左右に回してみた。

その傍らには、サーキットらしき場所を疾走するクルマを表紙に配した、一冊の雑誌が無造作にページを広げている。

「Over-Speed」

もっぱら走り屋御用達のチューニング情報が掲載されている月刊誌のひとつだ。

開かれたページに載っている記事は、“ヒール&トーをマスターしよう”という内容だった。

踵と爪先

ト

ヒール&トーとは、右足の爪先でブレーキペダルを踏み込みつつ踵でアクセルペダルを煽りエンジンの回転数を調整するという、基本的な競技用技術の名称である。

レーシングテクニック

マスター

この操作を会得すれば、アクセル操作によってエンジンの回転数を選択したギアの求めるそれに同調させ、変速ショックのない滑らかなシフトダウンをブレーキングと同時に行うことが可能となる。

もし、エンジンの回転数をギアと同調させることなくシフトダウンを行ったなら、車速が高ければ高いほど、そのクルマは大きな変速ショック——すなわち不自然なエンジンブレーキを得る羽目になってしまう。

モータースポーツ

タイムロス

それは一寸を争う自動車競技の場において無用な時間損失の一因となるばかりでなく、消耗品であるクラッチにも大きな負担を与える原因となり、はなはだ面白い。

従って、走行中にクルマがシフトダウンを行う場合、まずアクセルを踏み、落としたギアが必要とする回転数にまでエンジンを回してやるのが好ましいこととされていた。

しかし、人間には右足が一本しかない以上、アクセルペダルとブ

レーキペダルとを同時に操作する行為は一般的な運転技術ドライビングスキルとして認められてはいない。

ヒール&トーは、その“一般的には認められていない”運転技術のひとつだ。

つまり、ヒール&トーを行ってブレーキとアクセルとを同時に操作すれば、本来なら“ブレーキ操作による減速”と“低下した速度に最適なギアの選択”シフトチェンジの二段階に分かれているはずの行為アクションをひとつに短縮出来る訳である。

自動車競技を志す者であれば、是非とも身に付けておきたい技術テクニックの最たるものと言えるかもしれない。

ただし、翔一郎はその意見に否定的なことを言っていた。彼の言いはこうだ。

「いまの君自身が必要としていない技術をあえて練習することに、一体なんの意味があるんだい？」

翔一郎は高山にこう語った。

ヒール&トーは確かに基本的で、かつ効果的な競技技術ではあるけれど、決して必須の操作という類のものではない。

割り切つて言えば、なければならぬで結構どうにでもなってしまうテクニクなのだ。

だから、まずは焦らず順を追って、コーナー進入前にスムーズなシフトダウンを行い、その上で確実なブレーキングに繋げる、という操作をきつちりと身に付けるべきである。

そうしているうちに、ブレーキ操作中にアクセルを煽ってシフトダウンを行いたくなる時が必ず来る。

練習を始めるのはそれからでも決して遅くはないだろうし、実際にその行為を求めた上での鍛錬はより効果的で合理的なものとなっているはずだ。

手段と目的を混同してはいけない。

ヒール&トーに限らず競技技術の大半は、レーシングテクニク“走行タイムを削る”という目的を達成するために編み出され存在しているのだから。

あくまでも技術を会得するのは、目的を達成するための手段に他ならないのだ、と。

「手段の会得そのものが目的となってしまうてはいけないよ」

翔一郎は、こう言って話を締めくくった。

「あるテクニクを練習する時、必ず自問自答するべきだ。“この技術は本当にいまの自分が必要としているものなのか” ってね。そうやっていつも疑問を呈していれば、知識も深まるし、いざ本当に必要となった際、練習する時の手助けともなる」

高山がいま雑誌の記事からヒール&トーのイメージを獲得しようとしているのは、そうした翔一郎の意思を忠実に守っているからだ。彼は、その技術が本当に必要なものなのかどうかすらわからない自分自身をはつきりと認識しているがゆえに、とりあえずの予習として紙の媒体を利用しているのである。

翔一郎がこれを知れば、あるいは彼を刮目して見たかも知れない。自己を外側から客観的に見ようとする姿勢は、時に何物にも替えられない優れた資質のひとつであるからだった。

「押忍、高山くん。面白そうな本開いているね」

そんな高山の頭上から不意に声が掛けられた。明朗な女性の声だ。誰だろう？、と高山が顔を上げるのよりも早く、声の主は腰を折って立つたまま上から彼の顔を覗き込む。

ポニーテールが弧を描き、人好きのする明るい笑顔が高山へと向けられた。

「沢渡！」

驚いて声をあげる高山を尻目に、彼女——沢渡真琴は彼のすぐ隣に並ぶようすとんと腰を下ろしてみせた。

高山と同様に後輩たちの面倒を見ていたのであろう、白い運動服と紺のスパッツといういでたちだ。

彼女はそのまま高山の許しを得ることもせずに傍らの雑誌を手に取り、膝の上で無造作にページをめくった。

「高山くんもこういうの読むんだね」

心底嬉しそうに真琴は言った。

「免許取ったの？」

問われて高山は、ああ、と短く返事した。

思い人と言葉を交わすことを素直に嬉しく思える半面で、胸の奥にどしりと重いしこりが感じられる。

それが不快だった。半ば怒りに近い。

「沢渡」

「なあに？」

「おまえって、残酷だな」

彼は、思ったことをまっすぐな言葉で口にした。

「自分から交際断ったオトコに、なんでそんな風に自然体で声掛けられるんだ？」

「そういう考え方って嫌いだな」

高山の言葉を受け、真琴は彼を非難するような口振りで軽く眉根を寄せてみせる。

「男の子と女の子が仲良くするためにはふたりがお付き合いしてないといけない、なんてなんだか変。そう思わない？」

真面目な顔で真琴は言った。

「確かにあの時、ボクは君とお付き合い出来ないって言ったけど、別に君のことを嫌いになった訳じゃないよ。それとも高山くんはあの一件でボクのことを嫌いになったのかな？ だったら、ボクの方も君に気を遣わなきゃいけないけど」

嫌っていた訳ではない、という真琴の真意を知り、高山はふたりの今後の関係について、わずかに希望的観測を抱いた。

と同時に、その彼女の目に自分が交際対象として映っていないのだ、という厳しい現実をも思い知った。

意中の人から異性として認められていないというのは、一般的な感性を有する成人男女にとって、かなり大きな打撃となり得る。

そんなことならまだ意図的に避けられた方がマシ、とすら感じる者も多いだろう。

そして不幸なことに高山正彦も、その中のひとりであった。

そついつのを“残酷”って言うんだよ、沢渡。

湧き起こる思いを言葉に出して真琴に言えれば随分とすつきりするるのである。

しかし高山には出来なかった。

彼は、いかにもそんなことを言いそうだが、という感触を、この沢渡真琴という同級生からあらかじめ感じ取っていたからだ。

それも極めつけに濃厚な奴を。

明るく気さくで女性が持つ陰湿さとはまったく縁のない印象を持つ彼女《真琴》。

それが男女関係における小学生並の精神性メンタリティの裏表であることくらい、高山にだってわかつていた。

“純心”ヒュアと言いかえれば、その点も女性的な魅力となる。

少なくとも、高山は真琴が見せるそついつた一面を好意的に捉えることにやぶさかではない。

むしろ、彼女の持つそんな表情に惹かれたとさえ言ってもいいだろう。

とはいえ、いまこの瞬間に抱いた感情がいささか複雑なものであることもまた、衆目に隠し切れる存在ではなかった。

微妙な表情の変化が起きたことを明確に自覚する。

ただし幸いと言うべきか、いまのところそれは真琴に勘付かれていない様子であった。

「いや、そんなことないよ。いままでどおりに話掛けてきてくれている、全然構わないさ」

半ば無理矢理に笑顔を形作って、高山は真琴に告げた。

その言葉を受けて、よかった、と微笑み返す彼女のすべてがまぶしく見える。

そんな高山に真琴が言った。

「でも、高山くんに彼女が出来たらそついつ訳にもいらないか。その時には、ボクもきちんとTPOをわきまえないと、ね」

「彼女なんかいたら、君にあんなことは言わない！」

真琴の発言を余りに無神経だと感じた高山は、流石に抗議の言葉を口にした。

「沢渡こそ、彼氏がいるのに他のオトコと仲良くしてもいいのかよ」「やだなあ、高山くん。ボクに彼氏なんている訳ないじゃない」

からからと笑いながら真琴は言った。

その発言は高山にとって、驚き以上の何かとなって受け止められた。

彼は真琴に付き合っている異性がいるという情報を信じることで、ここしばらくの行動計画を立案していた訳であつたからだ。

その前提があつさりと崩れた。

加えて、沢渡真琴と交際している男性がいま現在存在していないという事実は、すなわち自分がその座を占める可能性がまだ残されているという現実にはならない。

えも言われぬ衝動が、喉元すぐにまで駆け上がってくる。

沢渡、それなら――

高山は思わず身を乗り出し、真琴に何事かを言おうとした。

が、続く彼女の発言が一瞬にしてその言葉を高山に飲み込ませてしまう。真琴は言った。

「彼女になってあげたい人はいるけどね」

出会い頭に強烈なカウンターパンチを受けた拳闘士ボクサーのような面持ちで、高山は動きを止めた。

衝撃の余り、一瞬で体中の力が抜けてしまいそうになる。

だが、彼のそうした心情を知ってか知らずか、真琴はまるで歌うような軽やかさで、その続きを語った。

隣に住んでるお兄ちゃんんだけど、それが全然格好よくないの。休みの日は昼まで寝ているし、部屋は片付けないし、服は脱ぎっぱなしだし。

加えて、口は悪いは、お洒落じゃないは、女の子にモテる要素なんてこれっぽっちも見当たらないの。

「だからね、せめてボクが好きになつてあげなくちゃいけないかな、って」

そんな真琴の言葉を、高山は表情ひとつ変えず、ただ呆然と聞いていた。

それは、いわゆる“恋愛感情”とは違うものなのではなからうか？
惚けた頭脳が、ひとつの結論を導き出す。

そして、ひと呼吸間を置くと彼は思わず吹き出し、次いで顔に手を当て天を仰いで笑い出した。

これを見て侮辱されたと思ったのか、今度は真琴の方が目を丸くする。

「あー、馬鹿にしたな。これでも結構本気なんだぞ」

ぷーっとふくれっ面になる彼女の顔を横目で眺め、高山は思った。
なるほど、沢渡らしいや、と。

ごめんごめんと短く謝罪を繰り返しながら、彼は自分がいかに愚かな真似をしていたのかをはつきりと認識した。

沢渡真琴という女性との距離を詰めること。

それは、男女の間に厳然と存在する壁を乗り越えることと等価イコールではない。

もつと単純に同じ時間を好ましく過ごすことこそが、同世代の少女たちよりも中性的な感性を有する彼女に受け入れられる最短距離であつたのだつた。

高山は自らの過ちを自覚した。

自分は何を焦っていたのだ。

思えばあの時、彼女に声を掛ける寸前まで、自分にはこの娘と親しく言葉を交わした時間がどれだけあつたらうか。

周りの女性からちやほやされて、自分の知名度を過大評価していたにもほどがある。

世間の評価などいま目の前にいる女性が一顧だにしないことぐらい、重々承知していたのではなかったか。

沢渡は、きつと自分自身の目で俺というひとりの“オトコ”を評

価してくれる。

そう確信したからこそ、まっすぐに思いを告げたのだから。ひとしきり笑い終わると高山は真琴と軽く言葉を交わし合い、共に下校する事をあっけなく約束出来た。

真琴が高山の愛車《P-10》に興味を抱いて、色々とクルマ談義を試みたい、と申し出たからであつた。

もちろん高山にも否はない。

普段ならミニバイクを利用して通学している真琴が、今日に限って電車を利用していたことも幸いした。

着替えるため一足先に更衣室へ向かつた真琴の後ろ姿を見送つた高山は、芝生の上に置かれたままの雑誌へと視線を落とした。

これがなければ沢渡が俺に声を掛けてくれることはなかつただろうな。

そう思えば、なんだか感慨深くもなる。

不意に翔一郎の人を食つたような笑顔が脳裏に浮かんた。

そうだ。もしあの人に出会っていなかったなら、自分が今日この日、クルマ雑誌を開いていることもなかつたはずだ。

今度会つたら礼を言つておこつ。

多分、翔一郎はなんのことやらわからないといった顔をするであろうが、そうしなくては自分の気持ちがおさまらない。

短い間ではあつたけど、あの人には随分と大事なことを教わつた気がする。

機会があれば沢渡にも紹介してあげよう。

きつと彼女も、彼のことを気に入ってくれるに違いない。

やや遅れて服を着替えた高山は、かつて彼が“振られた”因縁のある校門付近で真琴と合流し、最寄りの駅へと歩いて向かつた。

その間中、真琴は心底楽しそうに高山と言葉を交わした。

友達のこと。近況のこと。そして、クルマのこと。

年頃の女性らしい艶っぽい話題など、欠片も出てきはしなかつた。特にクルマの話が主体となつてからは、いまの彼女が夢中になつ

ているらしい峠攻めの話題ばかりがふたりの間を行き来している。

もし高山が翔一郎の教習を受けていなければ、とてもではないが理解出来た内容だとは思えなかった。

気が付くと高山はもっぱら聞き役に回らざるをえない立場になっていた。

もちろん真琴が高山を無視して一方的に喋り続けていたという訳ではない。

ただ、これまで高山の周囲にいた女性たちと異なつて、真琴は自分から積極的に胸襟を開こうとし高山もそれを受動的に受け入れたがゆえに、自然と発言の主導権が偏つていっただけのことであった。高山にとつて「八神街道の走り屋」――すなわち戦うべき相手と決めた男のことなど、もはやどうでもいい存在へと成り果てていた。やがて高山は自宅への帰投ルートを大きく外れ、郊外の商店街で真琴の買物に付き合う羽目になっていた。

真琴の側がどのように思っているのかを知る術はなかったが、それは高山にとつてデートに近い。

居心地は格別だった。

高山にとつて同年代の女性とは、自分というオトコに“ぶら下がってくる”だけの存在でしかなかった。

感覚的には、お仕着せのアクセサリーのようなものだと言っている。

同性の友人たちから非難されることを覚悟して本音を言つと、うつと正しいとさえ思っていた。

だが、真琴は高山に“ぶら下がろう”などと試みようとしなかった。

彼女は、ある時は高山を引き連れ、ある時はその左右を併走しながら、自分の足で道を歩んでいる。

まさに彼が望んだ伴侶の理想像そのものですらあった。

気分よさげに「トルコ行進曲」を口ずさみ、ポニーテールをひよこひよこ動かしながら元気よく商店街を往く真琴に向かって、彼

は言った。

「本当に楽しそうだな、沢渡」

高山は確認をしておきたかった。

彼女が自分と過ごす時間を、本当に楽しんでいるのかを。

「楽しいよ。楽しい！」

踵を軸にくるりと身体ごと振り向いて、真琴は見ている方が嬉しくなるほどの笑顔を振りまく。

「毎日が楽しいことばかりだよ。今日も楽しいし、きっと明日も楽しいに決まってる」

まったくもって根拠のない発言だったが、彼女がそう言い切ると、なんとなくだがそれも説得力を帯びてくるから不思議だ。

それを受けて高山も笑った。

加えて真琴が、「特に今日は、尽生学園全女生徒のアイドル、高山正彦に荷物持ちをさせているんだもの。鼻高々だよ」などと冗談めいて言うものだから、見せる笑顔も自然体に近くなる。

商店街で真琴はバラ肉とジャガイモ、それと豆腐をいくつか購入した。

個人商店の店主が見せた親しげな態度から察すると、彼女はいわゆる“むかしなじみ”の客らしい。

人気も相当あるようで、店の前でわざわざ声を掛けられるのもしばしばだった。

会話の流れで話を聞けば、今夜の献立は肉じゃがと豆腐の味噌汁にするそうなの。

高山はこの時、真琴が歴戦の家事職人であることを初めて知った。少なくとも学校で見ることの出来る彼女は、活発であるがゆえ、そういった面で達者であるとは思えなかったからである。

違った切り口で真琴を知ることの出来た高山は、それだけでも今日の収穫とするに十分だとさえ思っていた。

「せっかくだから、お茶でも飲んでいく？」

唐突に真琴が言った。

場所は商店街を少し離れた閑静な住宅街。

付近に若者が好んでたむろするような場所があるとは思えない。

「お茶って、どこで？」

疑問を呈する高山に、真琴は短く「ボクの家」と返答した。

彼女が指さしたのは、まさに目の前にある一軒の住宅であった。

広葉樹の生け垣に囲まれた二階建ての白い建物。

赤い煉瓦を積み重ねて形作られた正門の脇には、確かに「沢渡」と書かれた表札が掲げられている。

降って湧いた真琴の申し出に、高山は思わず二の足を踏んでみせた。

それはそうだろう。

交際している訳でもない女性の家に、いきなり招かれたのだ。

いかに女性の側が言い出したこととはいえ、下心のない普通の男性であればふたつ返事という訳にはいくはずもない。

「大丈夫だよ」

ためらいを隠さない高山を氣遣って、真琴は告げた。

「ウチの親、まだ帰ってくる時間じゃないから」

そっちの方がまずいのでは。

真琴の発言は高山の背中を押すどころか、まったく正反対の効果をおよぼした。

しかし当の発言者の方はしごくあっけらかんとした態度を崩すこともなく、すいすいっと自宅の玄関へと吸い込まれていく。

軽く息を飲みつつも、鉛のような両脚を引きずるように動かして、高山はおっとり刀でその後を追った。

きれいに掃除された玄関で靴を脱ぐと、彼は二階にある真琴の部屋へと通された。

八畳程度の広さであろうか。

室内にはベッドと箆笥、本棚、それと学習机とクローゼットがあるくらいで、どちらかと言えば質素な構成だ。

格好よく言いかえれば、質実剛健とさえ言えようか。

年頃の女性的な飾り付けはほとんど見られず、それがかえって沢

デコレーション

渡真琴という少女の性格を明確に表していた。

「飲み物持ってくるから、適当に座っていて」

カーペットを敷いた床の上に折りたたみ式の小さなテーブルを置き、真琴は部屋を出て小走りに階下へと降りていく。

独り残された形になった高山だが、実は女性の私室に足を踏み入れた回数はそんなに多くない。

ことに同年代ともなれば、皆無であると言ってよかった。

周囲からは女生徒との接点が多いように見られる彼であったが、意外なことに親しく話す女性の数は少ないのが現実だった。

彼に群がってくる女性たちは彼と接することで得られるある種の感情を満たす行為には積極的であったが、意図して自らの空間に彼を受け入れようとはしなかったからだ。

自然と心臓が高鳴ってくる。

落ち着かない心拍数をどうにも押さえ切れず、高山はせわしなく視線を動かし続けた。

ふと筆筒の上に置かれた写真立てに目がいった。

真琴が誰かと一緒に写ったもののようだ。

おもむろに立ち上がり、無造作にそれを手取る高山。

夏らしい季節の中、おそらくは近くの山へピクニックにでも出掛けた際に撮影されたのであろう。

透き通るような青空と瑞々しい緑の木々を背景に彼女らは写っていた。

写真の中で真琴は、ひと回り年上と見られる男性の首に真横から両腕を絡め、自らの胸元に引き付けるように抱き寄せている。

積極的なその姿勢に恥じらいの色は垣間見られなかった。

フォーカス

あたかも仲のいい恋人同士がじゃれ合っている光景を激写したかのごとき一枚の写真。

そう思えるのは、そこに写っている真琴の表情——真夏の日差しにも似たとびっきりの笑顔から、その瞬間に彼女が抱いていたであ

ろく歓喜のほどがありありとうかがえるからであつた。

だが、高山がその写真から衝撃を受けたとすれば、それはむしろ写真に写つた真琴の姿からでなく、彼女に抱きつかれて見るからに困惑した表情を浮かべている男性の方からであつた。

彼は、その男性を見知っていた。

「壬生さん……」

高山は、小さくつぶやいて絶句した。

真琴と共に写真の中にいたその男性は、週末限定ではあるが、彼が心から師事していた男、壬生翔一郎その人であつたのだつた。

どうということだ？ なぜ、あの人が沢渡と。

咄嗟に頭の中が混乱する。

そういえば沢渡が付き合っているという話だつた走り屋は、彼女より“ずっと年上”で“4WDの使い手”なのだと聞いている。

壬生さんも自分たちよりはるかに年長で、4WDのレガシイB4に乗っているから、その条件に合致しているのは確かだ。

でも、そんな偶然って本当にあり得るものなのだろうか。

慌てて壁に掛けてあるコルクボードに貼り付けられた他の写真にも目をやった。

そのほとんどに翔一郎が写っていた。

そして、その傍らには常に真琴自身の姿も。

どの写真の中においても、彼女はこれまでの高山が見たこともない生き生きとした素敵な顔を見せていた。

それは、ただ単なる好意の表現と捉えるには余りにもまぶしすぎた。

彼女の瞳には翔一郎に対する“全幅の信頼”とでも言うべき光が一杯に湛えられている。

不意にどす黒い感情が高山の胸の奥から込み上がった。嫉妬だつた。

高山は、それを無理にでも噛み殺そうと賢明に努力した。

だが、その努力が実を結ばないうちに部屋の主が軽快な足音と共に

に階段を上ってきてしまった。

「お待たせ」

明るく告げて、真琴はテーブルの上に持ってきたお盆を乗せる。彼女がお盆の上に乗せていたのは、急須と茶碗、そして数枚の醤油煎餅が入った木製の容器であった。

彼女は手際よくふたつの茶碗に緑茶を注ぐと、高山と向かい合うような位置に正座した。

左手を前に差し出して、どうぞどうぞ、とわざとらしく高山に席を勧める。

「ごめんね。ウチ、和食党だから、ジュースとか準備してないの。高山くんはコーヒーにケーキの方がよかったかな？」

「いや十分だよ。ありがとう」

勧められるがまま、高山は真琴の正面に腰を下ろした。

少しでも気分を落ち着かせようと、出されたお茶を軽くすする。少し熱めの温度だった。

「あ、もしかして熱いの駄目だった？」

わずかに顔をしかめた高山に、申し訳なさそうな声で真琴が問うた。

「ボクの周りは熱いの好きな人ばかりだから――」

それを聞いた高山は、翔一郎が何気なくもらした一言を思い出していた。

壬生さんも“日本茶は熱いのに限る”なんて言っていたっけ。

押し込めようとしていた感情が、ふたたび膨張を始める。

駄目だ。

必死の制止もおよばず、高山の中からその一端がこぼれ落ちた。それは悪魔の尻尾に近かった。

「なあ沢渡」

彼は言った。

「その写真の人なんだけど」

「ああ、その人がさっきお話しした“隣の家のお兄ちゃん”だよ」

高山の質問を先読みして、隠し立てすることなく真琴は答えた――この上もなく嬉しそうな表情で。

その人は役所勤めの公務員。

ウチとは家族ぐるみの付き合いで、ボクが生まれた頃から、ずっとお隣に住んでるの。

もちろん独身。

もっとも全然格好よくないから、きっとこれからも彼女なんて出来る訳ないと思う。

本当に世話の焼ける駄目アニキ。

もう三〇すぎているのに、ボクがいないと部屋の片付けひとつ満足に出来ないんだから。

彼女はそう言って、そして締め感慨深く一言を付け加えた。

「でも、ボクの“英雄”なの」

「英雄？」

「うん、“英雄”　ボクだけの」

そう言ってにこりと笑う真琴を目の当たりにした高山の中で、衝動を抑え込むべく張り巡らされた最後の命綱が音を立てて切れた。

心臓の鼓動が妙に大きく感じられ、音を立てて飲み込んだ唾液が渴いた喉を下っていく。

少しだけ開いた窓から微風が吹き込み、真琴がまとったかすかな体臭を高山の鼻腔へと運び込んだ。それが引き金となった。

「沢渡！」

理性ではなく、動物的な欲望が彼の肉体を突き動かした。

ひと声叫び床に置かれたテーブルを引っ繰り返すほどの勢いで立ち上がった高山は、迷うことなく最短距離を突進して真っ正面から真琴の身体を抱き締めた。

熱い緑茶の入った茶碗がカーペットの上に落下して、その中身を広範囲に撒き散らす。

そして自分の身に一体何が起こったのかわからず目を白黒させる彼女を、高山は身体ごとカーペットの上へと押し倒した。

自身よりもひと回り以上大きい男性の肉体に勢いよくのし掛かられ、押し潰された肺の中の空気が真琴の口から軽い音を立てて吐き出された。

一秒、二秒――

実際にどれぐらいの時間が経過したのであるうか。

高山は自らの腕の中に求める女を掻き抱いたまま、その体温と息吹、そして心音をじつくりと堪能した。

お互いの衣類を挟んで彼女の持つ胸のふくらみすらも実感出来る。利き手を真琴の後頭部へと回し、その豊かな頭髮をおのれの指で弄んだ。

達成感に近い何かが高山の胸中を満たしていく。

真琴からの抵抗はまったくなかった。

彼女の四肢、いやその身体中から力というものは完全に抜け落ちてしまっていた。

もちろん、その理由のほどは高山にもわからない。

しかし、いま彼女の肉体が高山自身を拒もうとしていないことだけは、紛れもない事実であった。

高山は、その無抵抗を真琴が表した受託の意思であると一方的に認識した。

達成感が強い征服欲へと変化する。

彼女の肩を荒々しく両手で押さえ付けながら、腕立てをするような姿勢で高山は上体を離れた。

一度受け入れられたのなら、速やかに次の行動へと移らなければならない。

それが男性側から見た余りにも自分勝手な義務感であるとわかってはいたが、いまの高山にはそれを止めることが出来なかった。

激しく脈打つ心拍と荒く乱れた呼吸とを気にも留めず、高山は真琴の双眸を覗き込んだ。

このオンナを俺だけのものにする。
しなければならぬ。

種族保存のためだけに与えられた本能が、彼のすべてを支配するのにもいまだ時間の問題であった。

それを辛うじて阻止したのは、高山の中に残ったひと握りの“思い”だった。

至近距離で高山の“獣”と対峙した真琴の瞳に、彼はいまにもあふれだしそうな大粒の涙を見出したのだった。

それがはらりとこぼれ落ち、彼女の頬をゆっくり伝い流れていく。真琴は彼の暴走を受け入れたがゆえに無抵抗だった訳ではなかった。

直面した現実が余りに衝撃的だったがため、一時的に思考停止状態に陥っていただけのことだったのだ。

凶暴な肉食獣を前にした子犬のように恐怖に震えおののく真琴の視線が自分のそれと絡まった時、ドライアイスで形成されたかのごとき氷点下の刃が幾本も高山の胸板を貫いた。

「沢渡……」

真琴の両肩をわしづかみにしている高山の手から、ずっと力が抜けていく。

彼は悟った。

自分はいま、この女性がおのれに委ねてくれた“信頼”という名の宝物を、自ら地の底へと投げ捨てしまったのだと。

怖気が背筋を走り、文字どおり音を立てて血の気が引いていく。身震いと共に胃の内容物が逆流しそうになった。

少年の中に生まれた邪欲という名の醜い獣は、それでもなお荒れ狂う津波のごとくそのわずかな“思い”目掛けて押し寄せた。

それは目の前の少女を力ずくで蹂躪し、そのすべてを征服しつくすことを彼自身に要求した。

だが高山は——沢渡真琴を好きになった高山正彦という少年は、きわどいところでその圧力を跳ねのけた。

それは、この少年が彼女に抱いた“恋心”が掛け値なしの“ホンモノ”であることを何よりも雄弁に物語っていた。

がっとう強く息を吐き、高山は激しく頭を左右に振った。

もう一度、真琴の顔を直視しようと試みる。

しかし、それは叶うことがなかった。

おのれそのものを否定したくなるほどの罪悪感が、彼にそれを許しはしなかったからだった。

「ゴメン！」

無理矢理に自分の身体を真琴から引き離し、高山は脱兎のごとく沢渡家から飛び出した。

逃げ出したと言ってもいい。

後を振り返ることなど出来るはずもなかった。

絶望と後悔とが身体中からあふれだし、彼は目的地もなくただ賢明に走り続けた。

途中で片方の靴が脱げてしまっていることにさえ気付かなかった。どれだけの距離を、どのような行程で走り続けたのかすらおぼえていない。

気が付いた時、彼は見知らぬ石橋の上で数m下を流れる暗い水面をただ呆然と眺めていた。

あたりは既に夜の帳が降りており、車道を走るクルマのヘッドライトが規則正しく高山の姿を照らし出しては消えていった。

取り返しの付かないことをしてしまった。

過去に経験したことのない凄まじい自責の念が彼をさいなみ、それはいつしか滂沱の涙となって累々とその頬を流れ落ちた。

涙だけではない。

鼻腔からも同様の液体があふれだし、多くの女生徒に好意を抱かせた高山の容貌を泣き叫ぶ幼児のごとき情けない代物へと変えてしまっていた。

出来ればこのまま消え失せてしまいたかった。

欄干の上で握り締められた両の拳が、高山の慟哭に合わせて小刻みに震える。

顔中から滴り落ちる液体がその甲に落下して小さな水溜まりをい

くつも作りあげていた。

自分が実力で沢渡真琴を強奪しようと試みた時、彼女が見せた震える瞳。

高山が、いやおそらくは真琴と接したところのある者の誰もがいまだ見たこともないであろう涙で歪んだその瞳。

あの絶望と恐怖とを奥底に閉じ込めた眼と部屋に張られた写真の中で壬生翔一郎に向けられていた真琴の眼とを無意識のうちに比べてしまう。

それがすべてであった。

もしかしたら自分は、真琴からあのまぶしい瞳を向けられることが出来たかもしれない。

あの栄誉を一身に受ける身に成り上がったかもしれない。

これは自惚れではない。

少なくとも忌まわしいあの瞬間まで、彼女は自分との距離を縮めようと努力してくれていたのだから。

それを崩したのは自分だ。

どす黒い感情に負けておのれを見失い、大切なあの娘を傷付けてしまったのはすべて自分の責任だ。

自分は沢渡真琴というひとりの女性と真つ正面から対峙する資格を永遠に失ってしまったのだ。

そう確信した時、高山の両膝から不意に力が失せ消えた。

がくつと垂直に崩落しそうになる身体を辛うじて持ち直すのが精一杯だった。

余りにも自分が情けなさすぎて、自然と口元がほころんでくる。

乾いた笑いが、その口元からあふれでた。

その時だった。

高山の脳裏に翔一郎の言葉が鮮明に蘇ってきた。

彼は敬意のこもった高山の眼差しを受けながら、気楽に、自然体のままこう語っていた。

賢く行く道を選んで後から後悔するよりも、勢いだけで足を踏み

出してずっとける方がはるかにマシさ。

失敗するつても、何かに挑んだ結果として初めて手にする勲章だと思えば、何ほどのことでもない。

心中に響いた彼の言葉は、崩壊寸前にあつた彼の自我を強力に支えた。

失敗すること、すなわち負けることだつて勲章だ。

その台詞を高山は何度も何度も噛み締めた。

「そう……そうですよ、壬生さん」

見失いかけていた何物かを辛うじてその手でつかみ、高山は右腕でぐいつと勢いよく涙を拭いた。

力を失いかけた両膝を掌で叩いて起こし、意識して背筋を伸ばす。だらしなく緩んでいた口元はいつの間にか真一文字に引き締まっていた。

そしてあたかも自分自身に言い聞かせるようなつぶやきがその口から漏れると同時に、少年は決然として天を仰いだ。

「僕にはやらなくてはならないことがありますものね。背を向けて逃げたままじゃ、負けることだつて出来やしないですから」

ひと呼吸置いて高山はポケットから自分の携帯電話を取り出した。震える手を意志の力で制御して、アドレスを参照しボタンを押す。連絡先には数度の呼び出しで繋がった。

ゆっくりと息を吸い込んで高山は名乗り、電話先の相手に向かって包み隠さずすべてを伝えた。

とある覚悟を胸中に抱いたままで。

三章：ワインディング（5）

見知らぬ橋の上で高山正彦が悲壮な覚悟を決めていた頃、真琴は自室のベッドに横たわったまま、もの言わぬ天井を身動きもせず見詰めていた。

部屋の明かりはつけていない。

窓の外から差し込む月明かり以外には、彼女の姿を照らし出すものは何もなかった。

高山がこの部屋を飛び出してから、どれぐらいの時間が経過しただろう。

既に時間の感覚は失われている。

日が没して随分とたつことを考えると、優に数時間はすぎ去ったものと思われた。

頭の中は、いまだに混乱している。

あの時、高山が自分に向けて取った行動は、すべてが白昼夢だったのではないかとすら思えるほどだ。

しかし両の肩に重々しく残る鈍い感触が、それが現実であったことをはつきりと主張していた。こぼれる涙が止まらなかった。

男性が女性を求めること。

そして、女性がそれに応えること。

友人たちの間で幾度か話題となったことがある。

既に親しい異性を有している同級生からは、もっと生々しい体験談を語られたこともある。

「サワタリも、いまのうちに覚悟決めておいた方がいいかもよ」

冗談めいて彼女は忠告し真琴はそれに軽口で応じたが、実際自分がそういう場面とは縁遠い人間だと、少なくともその時は心から信じていた。

もちろん真琴も年頃の女性であるから、いつかは誰かとそういう関係になるだろうな、と漠然とした感覚は持っていた。

同年代の異性から好意を抱かれることにさほどの関心は抱かなかったが、それでもその眼差しがまったく気にならなかったという訳でもない。

容姿を誉められれば素直に嬉しいし、嫌われるよりも好かれる方が精神衛生上よろしいに決まっている。

ただし具体的な話となると、全然その気が起きなかったのも事実だった。

真琴には、幼い頃に定めた目的地があった。

そこに辿り着くために、彼女は自分自身がきちんと評価されるよう日々頑張ってきた。

求める地へと到達するには、なんでもいい、自分の足で何かを成し遂げるその努力が必要なのだと常に自分自身を奮い立たせてきた。認められたい。

女性としてではなく、ひとりの人間として。

そうでなければ“あの場所”に立つ資格がない。

これまでの人生、真琴はずっとそればかりを考えてきたのだった。だからこそ、高山がそのたくましい双腕で真琴の身体を掻き抱いた時、彼女は激しい衝撃ショックを受けてしまった。

真琴にとって高山は尊敬の出来る運動選手であり、加えて親しみを感じる同級生のひとりでもあった。

正直な話、異性としての認識が薄かったことは否めない。

それが彼女の側に大きな隙を産んだのだと言えば、確かにそうだし、それは高山にとっての免罪符とはなりえない。

高山の大きな身体にのし掛かれ、その熱い呼吸を耳元で直接感じた時、真琴はある種の絶望感に襲われた。

高山くんは、ボクをセックスの対象とみなしている——そう確信した時、自然とその目から涙の雫があふれ出した。

認められていない。

ひとりの人間——沢渡真琴という存在として、いまの自分は必要とされていない。

彼にとって、自分は性的な欲求の対象ではない。

なぜ？ どうして？

どんなに頑張っても、ボクは“オンナ”としてしか存在してはいけないの？

真琴は、それが悔しくて、悲しくて、涙を流したのだった。

それはある種、絶対的な敗北感だと言い換えてもいい。

真琴にとり親しみの対象から自分自身の“女性”そのものを要求されたという現実、それまでの彼女を一切合切否定されたのと同じ意味を持っていた。

余りにおのれが情けなさすぎて、つい自嘲してしまいそうになる。

「翔兄い……」

無意識のうちに真琴は翔一郎の名をつぶやいた。

それが彼女のすぎる最後の藁であるかのように。

彼女の携帯電話が軽快な着信メロディを奏でしたのは、ちょうどその時であった。

それを耳にした真琴は、弾かれるようにベッドの上から飛び起きる。

それが翔一郎からの着信であったからだ。

そうでなければ、いまの彼女はその着信に居留守を決め込み無視していたに違いない。

まるで溺れる者のごとき慌ただしさで携帯電話に取り付いた真琴は、そこでいつもとまったく変わらない翔一郎の声を耳にした。

ただそれだけで他愛ない日常が心底実感出来る——真琴にとって、そんな思いすら湧き上がってくるような声であった。

先ほどとは別種の涙があふれそうになる。

電話の向こうで翔一郎は真琴に告げた。

『真琴。いまから八神に行くんだが、付き合わないか？』

「うん、行く！」

真琴は、翔一郎からの誘いを文字どおりのふたつ返事で了承した。翔一郎がいかなる理由で彼女を八神街道に誘ったのか寸分も考え

ようとはしなかった。

それが珍しい事象であるという認識すらなかった。

とにかく真琴はいまの状態から一刻も早く逃げ出したかったのだ。このままでは自分の中の大事な何かが壊れてしまう。

そう思った彼女は、その治療に必要とする薬剤を強く求めた。

そして沢渡真琴という少女は、おのれにとつてのそれが那邊に存在するものなのかを、幼少の頃から経験則的に知っていた。

いや言い直そう。

彼女はおのれにとつての薬箱に当たる存在が一体誰なのかを、幼少時より正確に認識し続けていたのだった。

あたふたとラフな私服に着替えた真琴は、翔一郎が待っていると、いう自宅の玄関先へと飛び出した。

玄関扉を開けて身を乗り出した時、勢いが余って空中でクロールを描きそうになる。

「お待たせ！」

意識して元気な声を出した真琴を前にした翔一郎は、その時なぜか怪訝そうな表情を浮かべた。

その変化を真琴が訝しめる間もなく踵を返して愛車の下へ戻った彼女は、その後部座席に置いてあったスポーツタオルを持ち出すと彼女にばいと投げ渡した。

「酷い面だな。とりあえず、それで拭いてだけおけよ」

翔一郎は、いつものごとくぶつきらぼうな口調で告げた。

彼が自分の何を目の当たりにしたのか気付いて、真琴は軽く赤面する。

思えば、相当な時間ずっと泣きとおしていたのだ。

きっと自分が思っていた以上に凄い顔になっていたのであろう。顔ぐらい洗ってくればよかった、と後悔するも後の祭りだった。

照れ隠し半分、受け取ったタオルでゴシゴシと顔を擦る。

気が付けば、不思議と先ほどまでの胸苦しさは軽減されていた。変わらない。

手の中のタオルをまじまじと見詰めながら真琴は思った。

翔兄いは、いつでもどこでもボクの翔兄いのままだ。

改めて真琴はそう確信する。

それが、救いに感じられた。

それが、嬉しく感じられた。

彼女がB E - 5の助手席に収まった後も、翔一郎は何も聞いてこようとはしなかった。

目の周りを腫らすほどに泣いていた訳だから、真琴に何かがあったことぐらい彼にはお見通しのはずだった。

しかし翔一郎は“真琴のよく知る”翔一郎らしく、決してそのことで彼女の主導権を奪おうとはしなかった。

いままでもそうだった。

翔一郎は、真琴に向けて助言はするが強制はしない。

いかなる重要議題でも、彼は真琴の判断と決断とを常に尊重してくれてきた。

それが例え無意識のものであったとしても、あるいは意識してのものであったとしても、それが真琴の望む「壬生翔一郎」の姿勢スタンスであることに変わりはない。

時に彼女を子供扱いすることはあっても、翔一郎が真琴を“一己の人間”として認めてきたことは明白であった。

でも――ふと、真琴の胸中に不安感が湧いた。

実際に彼は自分のことをどのように思っているのだろう。

妹？ 幼なじみ？ それともただの隣人？ 直接尋ねるには、やはり若干のためらいがあった。

しかし、先ほどの出来事による心理的な不安定からまだ回復出来ていなかった真琴は、ついそれを口にしてしまった。

「ねえ、翔兄い」

目的地に向かう最中、信号で停車した折を利用して真琴は翔一郎に問うた。

「翔兄いにとって、ボクって何？」

その言葉を口にした瞬間、真琴は即座に後悔した。

翔一郎からの返答が、まったく予想出来なかったからだった。

もし思いも寄らない答えが返ってきて衝撃を受けたら、と思うと、どうしても心臓の鼓動が激しくなってしまう。

結論を言つと、確かに翔一郎からの返答は、真琴の予想を越えていた。

彼は、ほぼ即答と言つてもいい反応速度でこう言い切ったのだつた。

「目覚まし時計」

これを聞いた真琴は、目を丸くするどころではなかった。

翔一郎が一体全体何を言いたいのかすら判別が付かなかったくらいだ。

絶句する真琴を尻目に、しかし翔一郎は畳み掛けるように言葉を放つ。

「それから、掃除機に、電子レンジに、洗濯機に、蛍光灯に、パソコンに、携帯電話、その他諸々だな。一息には言い切れん」

彼は言つた。

「早い話が、だ。いてもらわないと俺が困る。そんなところか」
いてもらわないと困る。

その台詞が耳に届いた時、真琴は思わず吹き出して、にやはは、と照れたように笑ってみせた。

座席の背もたれに身体を預け、両手を頭の後ろで組むようにして言い返す。

「そうか。そうだね。翔兄いはボクがいないと生活不適合者一直線だものね」

ちらりと翔一郎の横顔に目をやった真琴は、ふたたび正面へと視線を移し、深く満足げな顔をしてこう言つた。

「仕方がない。そうまで言われたら、ボクが責任もつて翔兄いの面倒をみてあげるよ。本当に駄目な兄貴なんだから。少しは進歩してみせてよね。まったく」

「うるせえ。偉そうに」

そう翔一郎が憎まれ口を叩いた時、真琴の中に重く滞留していた淀みは、ほぼ払拭されてしまっていた。

B 4が八神街道の頂上付近に辿り着いたのは、それから間もなくのことであつた。

路上にはまだ若干のクルマが行き来しているが、駐車場内には逆にクルマの影はない。

いや一台だけ先客がいた。

それはゆっくりと進入してきた翔一郎のB E - 5に反応してエンジンを始動、次いでひとりの男性をその運転席からはき出した。

「高山くん」

クルマから降り立ち、B E - 5のヘッドライトに照らされて浮かびあがるその男性の姿を見て、真琴は軽く息を飲んだ。

高山正彦であつた。

不意に先ほどの体験が真琴の中で鮮明に蘇る。

血走つた両目。荒々しい呼吸。

彼の両手にわしづかみにされた両肩にあの時の感覚が生々しく復活し、真琴は思わずその身を硬直させた。

翔一郎はB E - 5を規定の位置に停車させると、エンジンを切ることなくクルマを降りた。

目で促されて真琴も恐る恐る翔一郎の後を追つた。

無意識のうちに翔一郎を高山からの盾とする位置に身を置いてしまつた。

翔一郎はそんな真琴を顧みることせず、ずんずんと高山との距離を詰め、ほとんど一歩の位置でようやくその足を止めた。

「電話で大半の内容は聞いた」

まっすぐに立ちすくむ高山と真つ正面から対峙して、翔一郎は言い放つた。

厳しい口調であつた。

背後に立つ真琴からは確認出来なかったが、その眼差しも想像以

上に冷たく鋭い。

「君は男として、いや人としてどれほど恥ずかしい真似をしたのか自覚しているはずだ。そして、いま君自身が何をしなくてはならないのかも」

その会話は、初めて顔を合わせた人間同士で成り立つ類のもではなかった。

明らかに両者は顔見知りなのだ、と瞬時に真琴は察した。

そして、それは真琴にとっては極めて意外な展開だった。

彼女にとって彼らが接点を有していたことなどまったく思いも寄らない事実であつたからだ。

「なんで翔兄いが高山くんのことを知っているの？」

言葉を失った真琴が、すぐるような視線を翔一郎へと向けてくる。語尾がかすかに震えるのを押さえ切れない。

「シヨップの主人に頼まれてな」

真琴の疑問を先読みして翔一郎が答えた。

発言に合わせ肩越しに真琴の方を振り返る。

「ちよと前から彼に運転を教えていたのさ。言わばお前の兄弟子だな」

それを聞いた真琴がなんらかの反応を示すよりも早く、高山は行動を起こした。

叩き付けるような勢いで両膝を屈し、そのまま両手を地面に付ける。

深々と腰を折り、おのれの額を掌の高さにまで下ろしアスファルトの舗装面へと擦り付けた。

土下座であつた。言うまでもなく、日本文化において最上級の謝罪表現だ。

「沢渡、ゴメン！」

その姿勢を頑なに維持したまま、高山は真琴に言った。それはほとんど絶叫と言つていいほどの声量であつた。

彼はなおも謝罪の言葉を口にする。

「俺、どうかしてた。大事な君にあんなことをするなんて人間失格だ。だから許してくれなんて言わない。でもお願いだ。せめて謝ることだけは受け入れてくれ！」

高山が見せたそれら一連の行動に対し、真琴は一切の言葉を口にできなかった。

だが、彼の誠意がその心に寸分も届かなかったという訳ではない。むしろ彼があらわにしたその真摯な叫びは、真琴の胸を確実に揺り動かしていた。

ただ、真琴はそんな高山に向けていかなる態度でのぞめばいいのか、参考とすべき過去の経験をまったく有していなかった。

それゆえ、彼に向けてどんな言葉を掛けたいのかがわからなかったのだった。

目の当たりにした高山の謝罪に困惑しているという表現が正しいかもしれない。

「真琴」

そんな彼女を動かしたのは翔一郎のひと言であった。

彼は半歩退いて真琴の背を軽く叩くと、穏やかな口振りで彼女に告げた。

「大の男がここまでやっているんだ。勘弁してやれとまでは言わないが、何か言葉を掛けてやってもいいんじゃないか？」

「うん」

恐る恐るといった風情で小さくうなづいた真琴は地に額を付けたままの高山へと歩み寄り、自らもその場で膝を折った。

いささかよそよそしさは漂うが、それでもなんとか彼に向かって声を掛ける。

「高山くん。わかったからもういいよ」

そう告げて真琴は右手を伸ばした。

その指先が高山の手の甲にそっと触れる。

そしてわずかだが誰にでもわかるだけの笑顔を真琴は高山に向けて形作った。

「ボク、君に怒ってなんていないから。忘れよう。それがきつとお互いのためだよ」

「ゴメンよ、沢渡」

再度高山は謝罪の言葉を口にした。

しかしまだ顔は上げない。

小さくその肩が震えているのは彼が慟哭しているからなのだろうか。

高山がゆっくりと立ち上がったのは数秒の時をへてからのことだった。

彼は翔一郎の方に向き直り、今度は感謝の意を口にした。

礼儀正しく腰を曲げ頭を下げる。

翔一郎はなおも難しい顔を崩さないまま、高山の謝意を受け止めた。

そして一度だけわざとらしい咳払いをすると、半ば叱るような口振りでこう言い放った。

「物事って奴は謝ったからってすべてが終わる訳じゃない。そこるところを忘れるな」

そう言つてのける翔一郎の姿は、これまで高山を指導してきた教官役としての立場そのままであった。

明らかに芝居がかってすらいる。

あるいは、それを意識してやっているのかもしれない。翔一郎はさらに発言を続けた。

「反省は言葉じゃなく、これからの行動で示せ。真琴が許したから一件落着だなんて思っているようなら、君はそこまでのオトコだ。評価するに値しない」

頑張って精進しろよ、と彼は言葉を結んだ。

その一言には、高山に対する明らかな期待と優しさが込められていた。

少なくとも高山本人にはそう感じられた。思わず涙があふれそうになる。

「お手数をおかけしました」

その事実を隠すため、高山はふたたび頭を下げた。

そして今度は強い意志を込めた視線を目の前の翔一郎に向けてまっすぐに放つ。

それは、あのどこかわからない橋の上で決めたことを確実な形とするための宣言だった。彼は言った。

「壬生さん。恥の掻きついでにお願いがあります。僕と戦って下さい！」

それを聞いた翔一郎は無言で高山の双眸を見詰めた。

一目で彼は、そこに揺るぎない決意をはっきりと感じ取ることが出来た。

高山は本気だった。

翔一郎は瞬時にそれを悟る。

だから、彼は少年の意志を否定することなく、「理由は？」と彼に問い掛けることで応じた。

「最初にお話した“僕の倒したい相手”があなただからです」

単刀直入に高山は答えた。

そして彼は、自分がなぜ「八神街道の走り屋」を倒したいと願うようになったのかを蕩々と語った。

他人に伝えるにはいささか気恥ずかしい内容もそこにありはしたが、それでも彼は包み隠さずすべてを口にした。

それが翔一郎に対する最低限の礼儀であると高山は信じて疑わなかった。

真琴はかすかに息を飲んだ。

同級生のひとりとしか思っていなかったこの少年から、それほどの感情を抱かれていることを初めて実感したからだだった。

言葉だけの“告白”とは一線を画する“行為”をともなった想いの発露。

女性として素直に嬉しい。

しかしそれを理解することは出来なかった。

むしろ高山のその決意は、まったく無意味なものであるようにすら真琴には思えて仕方がなかった。

「そんなことで人の気持ちを動かせると思っているのか、君は？」
真琴の心境を代弁するかのように翔一郎が高山に尋ねた。

だが、それは彼の言動に呆れ果てた末に発せられた台詞ではない。確かな意志の確認を求めているものであった。

その静かな問い口は、傍らの真琴を驚かせるに十分な何かを秘めていた。

彼女の眼差しが高山を凝視する翔一郎へと向けられる。

「ケジメです」

首を左右に振り、高山はそう言い切った。

「もちろん最初は違っていました。でもいまは自分に対するケジメを付けるために、それだけのためにあなたと戦いたい」

その言葉に込められた高山の真剣が翔一郎の胸に深く突き刺さった。

はるかむかしに経験した光景が翔一郎の脳裏にまざまざと蘇ってくる。

一〇年以上も前。それは彼が忘れようとしても決して忘れることの出来ない、とある出来事に通じる一枚の扉であった。

同じだ、と翔一郎は思った。

いまの彼は、あの時の俺と同じだ。

あの時の俺もおのれ自身の想いと決別するために、あえておまえとの戦いを望んだ。

合理的な判断ではない。

そう、俺たちには“それ”しかなかったからだ。

あの時、おまえは困ったような、それでいてどこか嬉しそうな
んとも言い難い顔をしていたっけ。

比較していまの俺はどうなのだろう？

あの時のおまえと同じ顔をしているのだろうか。

教えてくれ、^{たかし}崇。

翔一郎は軽く目をつむった。

そして一呼吸置くと瞼を開け、「わかった。受けよう」と高山に告げた。

それは挑戦の承諾以外の何物でもありはしなかった。

「翔兄い！」

真琴の口から驚愕が声となつて飛び出してきた。当然だろう。

ミブローという渾名で知られる伝説の走り屋が、いまだ若葉マークの取れない駆け出しのドライバーとの対戦を受けたのだ。

勝敗など最初からわかり切っている。

確かに翔一郎が芹沢聡に挑んだ時も、周りは同様の感想を持ったことだろう。

しかしあの時とは完全に状況が異なる。

芹沢とのバトルにおいて、実のところ翔一郎の实力はまったくの未知数であつた。

それを周囲が低く評価していたのは、「八神の魔術師」としての壬生翔一郎を誰も知らなかったゆえの結果だ。

翻つて初心者ドライバーたる高山には、そういった“イレギュラー意外性”が存在していない。

想定をひっくり返すための要素など皆無に等しかった。

それはもはや弱い者いじめの範疇にすらない。

真琴は、翔一郎があえてそんなバトルに手を出す意味を理解出来なかった。

第一運転が未熟な初心者に公道バトルをさせるといふのは日頃から口にしていた台詞と矛盾しているではないか！

だが、そんな真琴の心情に気付くことなく、翔一郎は高山にバトルのルールを口頭で伝えた。それは俗に「先行・後追方式」と呼ばれるルールだった。

要するに、前を走るクルマに対しその直後を走るクルマが追従出来なくなつた時に勝敗が決するというルールだ。

後追側が振り切られてしまった場合はいうにおよばず、先行側と

の車間距離を著しく広げられてしまった場合にも、やはり追従出来なかったものと判断されるのが一般的であった。

翔一郎は、その基本を少々弄った形でのルールを高山に提示した。勝敗は一本で決定する。

使うのは八神の表ルート、その下り区間だ。ダウンヒル

先行は翔一郎が務める。

そしてその一本で高山が負けなければ翔一郎が自らの敗北を認めるという変則的な勝利条件が定められた。

加えて最大速度は法定速度以内。走行ラインは中央線を越えないことなど、細かい条件がその後続く。

一見して公平な条件ではない。フェア

圧倒的に翔一郎の側が不利だ。

というより、そこには初めから高山を互角の対戦相手と認めていない節すら認められる。

これを聞いて流石に高山が抗議の声をあげようとした。

自分は真剣な真つ向勝負を望んでいるのにハンディキャップマッチとは何事か、という訳だ。

しかし、翔一郎はまっすぐ正面に右手を突き出し、遮るように掌を広げて彼の発言を制止する。

「この条件が不公平にすぎると言うのなら、そいつは俺に対する明確な侮辱だ」

翔一郎は真剣な面持ちで高山に告げた。

その表情に上から見下ろす居丈高しさは微塵も感じられない。

高山はそれに気付き、喉元まで出かかっていた不満を辛うじてだぐ飲み込んだ。

その彼に向け、いささかも面相を崩すことなく翔一郎は続けた。

「これは俺と君との対戦がゲームとして成立するために必要な最低限の条件だ。正直これでもまだ俺が有利すぎると思っっているくらいなだけだな。それに――」

「それに？」

「こいつは俺にとって端っから競争^{バトル}じゃない」

有無を言わせない迫力をもって、翔一郎は断言した。

「どこかの本の受け売りだが、これは教習^{セミナー}だ。文句があるなら俺に勝って発言を訂正させてみせろ」

高山は無言で力強くうなづいた。

それが公正なルールでないにせよ、翔一郎が正当に雌雄を決する場を与えてくれたと悟ったのだ。

逆に言えば高山は、「勝ち目のない戦いだっただ。仕方がない」という言い訳をあらかじめ封じられた立場に追い込まれたのだとも言える。

翔一郎はこの戦いを“教習^{セミナー}”と呼んだ。

しかし、高山はその単語を脳内で“試練^{テスト}”と読み替えて認識した。敬意を抱ける人間は、その人生において決して多くはない。

少なくともそのうちのひとりから試練を与えられたのだ。いまはそれを誇らしくさえ思う。

翔一郎は高山がP-10の運転席に収まるのを確認した後、真琴をBE-5の助手席に呼び込んだ。

真琴は呼ばれるままにBE-5に乗り込むと運転席に着く翔一郎の横顔をちらちらと見やりながらシートベルトを着用する。

カチツと金具がロックしたことを示す音が、妙に大きく車内に響いた。

「ねえ翔兄い」

少し間を置いて彼女は尋ねた。

「高山くんの言ったケジメって何？ 翔兄いはそれを聞いたから、このバトルを受けたんでしょ」

言葉どおりに受け取れば「ケジメを付ける」とは「物事の区別をはっきりさせる」という意味になる。

もちろん「責任を取る」という側面もそこにはあるが、いまの高山が口にしたのは前者の意味合いを強く持つてのことだろう。

過去の自分と決別する——それが彼の示した意志だった。

翔一郎はそれを察し、ゆえにこそそれに応えた。

男気の発露とでも言い換えればわかりやすいか。

しかし翔一郎は、それを明解な言葉で彼女へ伝えることが出来なかった。

それが真つ当な理に則った代物ではなかったからだ。

男気などという非合理極まりない理由を口にしたところで、真琴がそれを理解出来ると翔一郎には思えなかった。

だからこの時、翔一郎は「わからないならそれでいい。いつかわかる時が来るからな」と真琴の問いを煙に巻いた。

それを聞いた真琴は小さく肩をすくめ翔一郎から視線を外した。

そして寂しげにふうと息をつき、引き寄せた両膝を抱え込む。

心なし彼女の存在がふた回りほど小さくなって見えた。

出所不明の疎外感が真琴の胸中に、木枯らしにも似た寒風を吹き込んでいく。

「それって、ボクが女の子なのが理由なのかな……」

膝の間に半分ばかり顔を埋め、誰に言うでもなく彼女はぼそりとつぶやいた。

「もしボクが男の子だったら、翔兄い理解出来たみたいに高山くんをわかってあげられたのかな……」

翔一郎はそれには答えず、ゆっくりとB E - 5を発進させた。

三章：ワインディング（6）

先行するBE-5がゆつくりと加速する。

おおよそ一車分程度の間隔を維持しつつ、高山は愛車P-10プリメーラをそれに追従させた。

速度はピタリ時速五〇km。

八神街道における法定速度ちょうどだ。

アクセルペダルに乗せた右足の筋肉が緊張で強張る。

踏み代を適度な量で維持したり爪先の力加減で微妙な調整を行うというのは、なかなかにしんどいし気を使う作業だ。

高山は翔一郎に教わったとおり全身をリラックスさせようと努力するが、肉体は精神が求めた要求を頑なに拒んでみせる。

スピードメーターの指針が不規則に振れた。

ペダルの操作が安定していない何よりの証左だ。

いま彼らが走行している区間は比較的傾斜も穏やかでコーナーの曲がりも緩い。

極端に繊細なアクセルワークが必要とされる区間とは言えなかった。

にも関わらずこのていたらくだ。

高山は改めて自らの技量未熟を情けなく思う。

いや本当に情けないのはいまの自分そのものだ、と高山は思い直す。

もとより確たる目的もなく「八神の走り屋」との戦いを望み、「思い人」との他愛ない逢瀬に舞いあがった果てにその人を傷付け、そしてそんな自分と決別すべく敬意を抱きつつあった「師匠」に無礼な挑戦状を叩き付けた。

すべてが自己中心、すべてが自分勝手。

これを恥ずかしいと言わずなんと言おう。

唯一の救いは「師匠」——壬生翔一郎が何も言わずに自分の挑戦

を受け入れてくれたことだった。

それだけでなく、未熟な自分にも勝利の可能性が垣間見えるルーをあえて提示してくれもした。

つべこべ言わず全力で勝ちにこい。

翔一郎がそんな風に言っているような気が高山にはした。

もちろん否はない。

そもそも自分がそれに文句を付けられる立場になどないことを、彼は強く自覚していた。

最初のヘアピンが目前に迫る。

速度による恐怖心はさほどではないが、やはりアクセルを軽く抜きP-10を減速させてしまう。

BE-5との車間距離がわずかに広がる。

履いているタイヤの性能差もあるのだろう、向こうの方が微妙に速い速度でコーナーを処理しているのだ。

糞、と悪態をつき高山はその後を追う。

トップスピード
最高速度が完全に同等である以上、加減速の効率によってのみ、その差は前後するはずだ。

であれば、P-10の相対的な軽量を利用し翔一郎のBE-5よりも制動距離を短くする、すなわちよりコーナーの奥まで突っ込めば彼に追いつがることも不可能ではない。

高山は素早くそのように判断し、それを勝利のための方策として定めた。

ドラテク
運転技術での優劣は余りにもはつきりしている。

端からこちらに勝ち目などない。

なれば精神面、つまり「度胸」を武器に立ち向かうしかない！

しかし、それでもなお彼のP-10は先行するBE-5との車間距離を詰めることが出来なかった。

むしろコーナーをひとつ抜けることにその差は次第に広がってすらいる。

全行程の半ばに達する頃には、それは誰の目にも明らかな規模に

育っていた。

ルールの中に「法定速度までしか出してはならない」という縛りが存在する以上、それはもう絶望的な状況だ。

なぜだ？、と高山は自問した。

翔一郎がルールを破って時速五〇kmを越える最高速度を出しているとは思えなかった。

もしそうなら、両者の距離は直線時においてこそ、より顕著な広がりを見せているはずだったからだ。

原因は他にある。それはなんだ？

速く走るコツは短い距離を速いスピードで走ることだよ——ふと、

翔一郎の言葉が高山の脳裏に浮かびあがってきた。

短い距離を速いスピードで。短い距離。短い……

「そうか！」と叫んで高山はすべてを察した。

翔一郎と自分との差。

それはつまり、文字どおり走行距離の差によって生じたものであったのだ。

高山は翔一郎と共に八神街道を慣熟歩行した折に聞いた彼の教える思い出した。

「走行ラインを選ぶ際、選択理由となる要素は大まかに分けてふたつある」

翔一郎は高山に語った。

「それは走行距離と走行時間だ。基本的には走行距離が短ければ走行時間も短縮されるけど、コーナリング速度の関係からそれが絶対という訳じゃない。正解は場合によっていくつもあるから、走り込みながらつかんでいけばいいよ」

彼の言葉を信じるなら、高山が翔一郎に遅れを取っている最大の理由は自身が最適な走行ラインを描いていないということに突き当たる。

片側一車線しか使えないこの条件下においてさえ、翔一郎の選択した走行ラインは高山が選んだそれよりも短く、そしてクルマがよ

り効率的に前進出来るものであったのだ。

一例を挙げるなら、高山が道なりに左右左とステアリングを切りながら進んでいたスラロームを翔一郎はもつと直線に近い行程で走り抜けていた。

上から見た左右への振り幅が少なければ当然クルマの進行方向への抵抗も小さくなるし、実際の走行距離も短縮される。

自明の理であった。

それは精神論とは最も遠い、合理的で計算高い戦略性の発露だ。単純ではあるがなんと奥深いのだろう。

ドライビングというものに秘められたその魅力をいま、高山はじつくりと味わっていた。噛み締めていた。

「凄い。やっぱり凄いです、壬生さん」

徐々に徐々に遠ざかっていくBE-5のテールランプを眺めながら、高山は感極まって独白した。

既に勝敗のことなど頭の中ではどうでもよくなっていた。

だが、勝利を諦め手を抜くような真似は決してしない。

むしろ、もつともつと戦っていたい。

可能ならば死力をつくして。

そんな心境がこの時の彼を——その精神と肉体とを歴然と突き動かしていた。

「高山ちゃんと付き合う気はないのか？」

不意に翔一郎は真琴に尋ねた。

BE-5の助手席に座る真琴は、思わず丸くした目を運転席の翔一郎に差し向けた。

それは高山とのバトルも終盤に差し掛かろうとした時のことだ。

高山のP-10はコーナーひとつ分ほど後落した位置にまで下がっており、勝敗自体は既に完全決着を見ていた。

ここからの逆転など、よほどのトラブルが発生しない限り物理的にありえなかった。

だが翔一郎はまったくその手を緩めない。

容赦なくすべての技術を動員してB E - 5を走らせる。

両者の距離は、いまこの瞬間にも縮むことなく広がり続けていた。それはあたかも兎を狩る獅子のごとくであった。

そんな彼が、ふとこぼしたひと言。

それは翔一郎が持つ精神的な余裕と冷静さとを端的に表すと同時に、彼が高山正彦という少年を好意的に捉えているのだと真琴に教えた。

場合によっては大事な妹分を託しても構わないと思っているほどに。

妹分——それを感じた真琴の瞳がわずかに曇った。

「翔兄いは、ボクが高山くんの彼女になった方がいいの？」

真琴は、翔一郎の問い掛けに同様の質問でもって答えた。言葉尻に少しだけ影の存在が見え隠れしていた。

「そういう訳じゃないが」と前置いて翔一郎は返答する。

「いい男だぞ、彼は。一時の気の迷いはあったようだが、間違いは誰にだってあるさ」

「それは認める。でもね」

翔一郎の高山評を素直に肯定しつつも、真琴は詰まらなそうにこと言った。

「高山くんはボクを必要としてくれていないから。そして、ボクはボクを必要としてくれない人を必要としていない。それがすべてだよ」

「こいつはまた、えらく哲学的な台詞だな」

「わからなければそれでいいよ。翔兄いにもいつかわかる時がくるから」

発言を茶化された仕返ししか、真琴は先ほどの翔一郎の台詞をほとんどそのままの形で言い返した。

拗ねたようにくちばしを尖らせる。

それに気付いた翔一郎は思わず苦笑するしかなかった。改めてド

ライビングに専念する。

目の前に「コークスクリュー」が現れた。

オーバーテイク

先日、翔一郎が芹沢聡に追い抜きを囓ました印象深いポイントだ。今回、翔一郎のB E - 5はきつちりと減速し、教科書どおりの「スローイン・ファストアウト」を決めながら、この難しいコーナーをクリアしていく。

その行程は驚くほどに滑らかで、かつ効率的だ。

「ロスヴァイセ」の面々の助手席で幾度もここを通過した経験を持つ真琴だが、やはり翔一郎のライビングは群を抜いて上手に思える。

比較する対象が倫子であっても、その評価は変わらない。

なぜならば、その操作のひとつひとつが極めつけに丁寧だからだ。動作にまったく無駄がない。そう言い換えることも出来る。

絶対的な安心感がそこにはあった。

安心感。

センチンス

その単語を思い浮かべた時、真琴はふといま自分が座っている場所について深く考えてしまった。

翔一郎の横。それが彼女の定位置だった。

これまではそうだったし、これからもそうだと信じ切っていた。揺るぎない椅子。それも極めつけの。

だが、本当にそうなのだろうか。

漠然とした不安が込み上げる。真琴は突然、翔一郎と自分との間に歴然と広がる大きな溝に気が付いたのだった。

「ミッドナイトウルブス」のミブロー。

ロードレーサー

八神街道に君臨した伝説の走り屋。

壬生翔一郎という極めて身近な男性が有する希有のカリスマ。

しかし、真琴がそれを知ったのは本当に最近になってのことだ。もし芹沢と倫子とのバトルに翔一郎が介入しなければ、いまでも知っていることは叶わなかったであろう。

自分の年齢と等しいだけの付き合いを經ていながら、彼女は翔一

郎が隠し持ったもうひとつの顔に気付けなかった。

彼の両親を除き、いや彼の両親をも凌ぐほどに「壬生翔一郎」を熟知していると自認していた身であるにもかかわらず、だ。

おそらく、真琴の知らない翔一郎は数多に存在しているのであるう。

少し考えれば極当たり前の話だった。

事実、職場での彼を真琴はまったく知らない。

翔一郎が誰と付き合い、どのような時をすごしているのか。周りからどのように思われ、評価されているのか。

そしていま、誰の事を憎からず、大切に思っているのか。

乾きにも似た思いが真琴の胸中を襲った。

それが独占欲に近い感情の裏表であることに真琴自身は気付いていない。

壬生翔一郎の傍らというおのれの特等席。

余りの居心地のよさに、その存在が当然のものと感じていたそれが、実のところ不確定な砂上の楼閣であるのだと知った彼女は、ある意味心底からそれに恐怖した。

翔一郎が自分の側にいない日常。

それは想像することすらはばかられる未来予想図であった。

本能的な衝動から真琴は小さくつぶやいた。

「翔兄いは、ずっとボクの側にいるよね」

「何か言ったか？」という翔一郎の確認にも上の空で、真琴はフロントガラスの向こうをただ呆然と眺めていた。

BE-5のヘッドライトが夜の闇を切り裂き、進むべき方向を照らしている。

まるで人生そのものみたいだ、と真琴は思った。

暗い夜道を走る時、ドライバーはヘッドライトの灯りによって確認出来る限定された空間を基に状況を判断し、自らの愛車を操作する。

当然、あやまちも多く発生するだろう。

すべてを見渡せる昼間であれば見落とす訳もないちょっとした障害も、そんな状況下では重大な問題発生原因となりえるからだ。

加えて、「見えない空間に何があるかわからない」という心理は、本当に些細なことで不安や恐怖へとすり替わり、支障なく進められるはずの両脚を無意味にすくめる材料ともなってしまう。

人の世も同じである。

神の視点を持たない「人間」という生きものは、やはり自分の認識出来る限られた世界のみを頼りとして生きている。

後知恵であればより優れた指針を口に出来る卓越した人々であっても、いざその現実直面した時、果たして同様の判断を下せるかどうかは極めて疑問だ。

「わからない」ということ、すなわち計算出来ないリスクの存在は大多数の人々を躊躇させる。

それを揚々と乗り越え、かつ後から顧みても正しかったとみなせる決断を行える人物は、もはや「衆を越えている」と評しても過言ではあるまい。

しかし、人のほとんどすべては文字どおり「衆」を越えない。

いかに自分の中の「理」が間違いないと背中を押しても、人はそれに全幅の信頼を寄せることが出来ない。我が身を委ねられない。

だからこそ、人々はかつて誰かが通った路をなぞろうとする。

前に行く誰かの後に追従しようとする。

そうすれば、自分が背負うリスクの量が減るからだ。

予期せぬあやまちが発生した折、自分が取るべき責任を少なく出来るからだ。

それは自己保身の本能だとも言えよう。

真琴は高山を少しだけ羨ましいと感じた。

彼は自らの現状に甘んじることなく、自分の意志で未知の可能性に足を踏み入れた。

あの日、下校時の校門に立っていた彼は誰かに促される形で“想い”を告げる対象を待っていた訳では決してない。

彼女から見て、それは明らかな“勇氣”の発露であつた。

顧みて、はつきりとそれがわかつた。

自分には真似の出来ない決断だ。

端からはそう思われていないことぐらい百も承知だったが、真琴自身は自分のことを“臆病者”だと信じていた。

普段から周囲に対して明け透けにものを言う態度を意識していたものの、その実、自分が抱く本当の“想い”とやらについて彼女はそれを言葉とすることをひたすらに拒んできた。

一度それを口にすることで、いままで築きあげてきた自分の立ち位置が崩れてしまうことを恐れたからだ。

もちろんそれを伝えなければ先へと進めないことぐらい、真琴にもわかつていた。

それゆえに彼女はおのれの心情をあえて心の奥底に仕舞い込み、嚴重に鍵を掛けたのだつた。

満足すべきいまこの瞬間をこそ、彼女にとって不動のものとするために。

ボクは翔兄いが“好き”なんだ。

親しみの延長である“好き”ではなく、明確にひとりの異性へと向けられた情熱的な“好き”

改めて真琴はそれを自覚した。

いやいままでも自覚していた。

ただ、それを表立って認めようとしなかったただけだ。

一旦それを自認してしまえば、今度はそれを実体のともなつた現実にしたくなる。

壬生翔一郎という男性を自分だけの伴侶とすること。

それは彼女にとって、余りに甘美な誘惑だつた。

しかし、そのために想定される掛け金、すなわち「彼に必要とされている妹分」という真琴にとって居心地のよすぎる指定席は、容易にその手から放す気の起きない大切な宝物でもあつた。

しかも、ギャンブルの成功率はまったくの未知数とくる。

不確定な「明日」より安定した「今日」を真琴が選択し続けてきたのも、まずはやむをえない判断であつたろう。

それが、当の本人にとって不本意極まるものであつたとしても、だ。

だがいま、その前提が崩れかけていた。

このまま何もしなければ、これまでと変わらぬ日常がこれからも続いていく――それを約束する材料が軒並み保証を失いつつあつた。翔一郎からの歩み寄りには期待出来ない。

当然だろう。

であるならば、自身が望む居場所へと向かう努力は、彼女自身が行わなくてはならなかつた。

長年に渡り決断を先送りした“つけ”が遂に回つてきたのだつた。真琴は困惑した。

おぼつない足取りでどちらへ踏み出せばいいのかがわからなかつた。

わからないならそれでもいい。

それならば、霧の中へおのれを投げ出す、いや投げ出さねばならない状況に追い込んでくれる切欠が欲しいと彼女は願つた。

洩る背中を力強く押してくれる決定的な何か。

他力本願なことは重々承知している。

だが、「理」と「情」とが複雑に絡み合い完全に煮詰まつてしまつた現状を打破するにはそんな天からの贈りものが必要なのだと真琴は真剣に思つていた。

「ボクにも、高山くんみたいな勇気があつたらよかったのに」

半ば諦観が混じつた表情で彼女はぼつりとつぶやいた。

傍らの翔一郎は、それに応じる言葉を発することはなかつた。

BE-5が終点に着く。

和食処「やまぐち」の駐車場には、他のクルマの影はない。

すつとスムーズに停車位置にクルマを進めた翔一郎は、一呼吸置

いてエンジンを止めシートベルトを外した。

それなりの緊張感に晒されていたのであろう、彼は快い開放感を軽い吐息で表した。

やや遅れて高山のP-10がやって来た。

それは翔一郎のBE-5と若干距離を置いた場所で足を停める。

ヘッドライトが消えエンジンが止まった。

P-10の主である高山正彦は速やかに愛車を離れ、足早に翔一郎の元へ訪れる。

翔一郎もそれに応えてクルマを降りた。

渋々といった感じを漂わせた真琴も彼の後に続く。

「不合格」

目の前で直立不動の姿勢を取る「弟子」に向かって、翔一郎はひと言告げた。

「赤点とまではいかないが、まだまだ基本的なことが出来ていない。走り込みが足りない証拠だな」

「ありがとうございます」

翔一郎の下した評価に、高山は深々と一礼して応えた。

垂れた頭をそのままに、湧きあがる感情を噛み締める。

それは悔しさではなかった。

そもそも勝敗など最初から明らかだ。

高山も、それは十二分にわかっていた。

だから、この戦いで勝利を掴めなかったことへの悔恨は、いまの彼の胸中にはない。

代わりに彼の背筋を這い上ってきたのは、正式に「敗者」となれたことによる、伏し難い充実感であった。

かつて何かの本で読んだことがある。

現世には三種類の人間がいるのだと。

それは、何はともあれ“戦い”に臨む勇気ある者たち——その勝者と敗者、そして現実から目を反らし勝敗から逃げ回る腰抜けども、少なくとも自分は望んでこの“戦い”に挑んだ。

敗れることを恐れずに戦場へ身を投じ、結果として敗れた。だが、敗れることで自分は新しい経験を得ることが出来た。

深夜の八神街道において壬生翔一郎が語った言葉のとおりに。いまは自分を誉めてやりたくて仕方がない。

ただ、同時にこれまで培ってきた「師」との縁が切れてしまうことが残念でならなかった。

もっと多くのことを教えて欲しかった。

もっと色々なことを学ばせてもらいたかった。

その機会が失われることは、いまの高山にとって痛恨の極みとさえ評してよかった。

思わず涙腺が決壊しそうになる。

彼は必死にそれを堪えた。

格好の悪い自分を翔一郎に見られなくなかったからだだった。

そんな高山の頭上から、思いも掛けぬ「師」の言葉が降ってきた。それは彼の後頭部を強かにノックし、伏せたままの顔を表に引き上げる効果をもたらした。

「今週からは、実走中心のメニューを組まなくちゃな」

驚愕の表情を浮かべる高山に向かって翔一郎は、まるで何事もなかったかのような面持ちでそう告げた。

「いまのままじゃ俺に勝つなんて夢のまた夢だ。八神の攻め方をもう一度基本からみっちり叩き込んでやるから、そのつもりでいるよ」

一瞬、高山は翔一郎が何を言っているのかわからなかった。言葉による反応が果たせずに、惚けたような目をおのが「師匠」に向けることしか出来ていない。

そんな高山の状況を素早く察して、翔一郎は軽く嘆息して言った。「今週末もここに来るんだろ？俺はそのつもりで予定を組んであるんだから、今更キャンセルするのはなしだぞ」

右手を腰にあて「困った奴だ」とでも言いたげな表情を見せる翔一郎を前にして、高山はぼろぼろと落涙した。

すべてを水に流す。翔一郎はそう言ってくれているのだ。

おのれそのものを真つ向から受け止められ、なおかつその無礼を許されるということがこれほど嬉しいものなのだと高山は初めて知った。

「よろしく願います！」と勢いよく叫んで、彼はふたたび頭を下げた。

このやりとりを半ば傍観者として眺めていた真琴の心中に、改めて羨望の念が湧きあがってきた。

少なくともいまの自分は翔一郎とこんな関係を築くことは出来ない。

その道を歩くのに必要とされるのとはまったく別の選択肢を、彼女は余りにも多く選びすぎていたからだった。

もちろん、それに対して悔いがある訳ではない。

しかし、そういった居場所を自分が獲得出来ていた可能性を考えると、いささか残念に思えることもまた事実であつた。

「お尋ねします。壬生さんには、いまお付き合ひしている女性はおられますか？」

高山が翔一郎に向かって、質問を投げ掛けたのはその時であつた。余りにも藪から棒な発言だつた。前後の脈絡がうかがえず、真琴はその目を丸くして、翔一郎は傍目にもわかるほどにうろたえた。

困惑を隠そうともせず理由の吐露を促す翔一郎に高山は、まっすぐな視線を送りながら再度同じ言葉を口にした。

引くつもりは毛ほどもないようだつた。

翔一郎は傍らに立つ真琴をちらりと見やった後で、いらついたがごとく頭を掻く。

「俺がオンナにもてるオトコに見えるか？」

ほとんどやけっぱちな風情で翔一郎は吐き捨てた。

「お前さんのようなイケメンとは違うんだぞ」と嫌味のひとつを投げ付ける。

それを聞いて、真琴は内心ほつと胸を撫で下ろした。

心のどこかで確認しておきたかった情報を本人の口から語らせる

ことが出来たからだった。

予想と言うよりは期待していたとおりの内容を耳にして、彼女は自身の翔一郎評が間違っていないかったことに安心する。

そうだよ、ボクの翔兄い彼女なんて作れる訳がない。

そんな真琴を、続く高山の言葉が痛打した。

ただし、それは彼女に向けて放たれた台詞ではない。

高山は翔一郎に対し、真琴との交際を懇願したのだった。

「だったら、沢渡と付き合ってやって下さい！」

叩き付けるような勢いで高山は言った。

突然のことに真琴本人はあんぐりと口を開けたまま立ちすくみ、次いで激しく両者の会話に割って入った。

「た、た、た、高山くん。なんてことを」

想定外の現状に直面して、真琴は理性的な対応を取ることが出来なかった。

幾度も舌を噛みながら辛うじて制止の言葉を口に出す。

高山がなぜにそのようなことを言い出したのかはわからない。

しかし、それが他愛のない冗談とは明確に異なることを彼女ははっきりと理解した。

それは、発言者たる高山の目が真剣そのものであったからに他ならない。

「理由は？」

おそらくそんな彼の姿勢を真琴よりも早く見抜いていたのである。翔一郎は、努めて冷静な口振りで短く問うた。

普段の彼ならば行ったであろう、いわゆる“御茶を濁す”ような言動はすっかり影を潜めている。

刹那の沈黙をもって回答を促された高山は、大きく息を吸い込んだ後、すつと背筋を伸ばして断言した。

「沢渡があなたを好きだからです」

誤解の余地がまったくない言葉を用いて高山は応えた。

翔一郎は顔色ひとつ変えずにそれを受け止め、真琴は思わず両手

を口元に運び、そのままの姿勢で沈黙した。

時がその歩みを停めたかのような数秒間が経過した。

硬直状態を最初に打破したのは、かすかに表情を崩した翔一郎である。

彼はまるで何事もなかったかのような素振りで見つめ、真琴の方へ顔を向け、「そうなのか？」と不躰な言葉を彼女に放った。

「……うん」

下方に視線を泳がせながら、真琴は小さくうなづいた。

赤くなった頬をわずかにふくらませ、もしもじと胸の前で両手を揉んでみせる。

なぜか高山の言葉を否定したり誤魔化したりする言葉は発しなかった。

咄嗟のことで思わず本心がこぼれただけだったのかもしれない。

つい先ほどまで自身の決断を促すために急激な事態の変化を熱望していたにもかかわらず、いざその場面に突入するや真琴はおのれがどんな態度を示せばいいのかを明確に決めかねていた。

ことここに至り現実を前に踵を返すつもりは毛頭なかったが、だからといって考えなしに猪突することもはばかられる。

優柔不断とは、まさにこのことだ、と真琴は自分自身を叱咤した。ほとんど自己嫌悪に近い。

結局のところ、混乱をきたした真琴の脳が下した判断は“待ち”の一手であった。

悪い考えではない。

翔一郎からの回答を確認し、改めてきちんとした身の振り方を考えようと試みる姿勢は、積極的ではないにしろ、まずまず合理的な選択のひとつではある。

しかし、真琴は間もなく突き付けられるであろう“翔一郎からの回答”を聞くのが心底恐ろしかった。

これまで築いてきた翔一郎との関係が壊れてしまうことを想像すると、胸の奥がギリギリと痛んだ。

知らず知らずのうちに心拍数が高まっていく。

ちらりと翔一郎の顔を見た。

まったくいつもどおりの彼だった。

わずかに口元をほころばせ、優しげな眼差しを向けてきてくれている。

いまにもその口から彼女に向けて普段と同じ軽口が放たれる――
そんな雰囲気すら漂っていた。

だが結果は残酷だった。

「そいつは出来ない相談だな」

さらりと翔一郎は言い切った。

その言葉を口にすることに悩む素振りは一切感じられなかった。

それはいかにも事務的で、とてもではないが重大事を相手に告げる、そんな態度に見えはしなかった。

誰が聞いても疑いようのない、明確すぎる拒絶の言葉。

それを直接耳にした真琴は一瞬大きく目を見開き、口元を真一文字に引き締める。

硬直し身動きひとつしない彼女の、しかしその膝だけがかすかに震えていた。

高山は、そんな真琴がいまにも倒れるのではないかと思った。

その姿が、彼の知る沢渡真琴という少女とは似ても似つかない、余りにも弱々しいものであったからだ。

高山も“失恋”という挫折の痛みは十分に理解している。

その生傷は癒える暇を与えられないまま、彼の心中深くいまも血を滲ませ続けていた。

だからこそ、という訳ではないが、高山は同じ痛みを真琴に感じてもらいたくはなかった。

彼女には、いつまでも明るい太陽のような存在でいて欲しかった。そうであつてこそ、自分は失恋の痛みから立ち直れると信じていたからだった。

もちろん具体的な根拠が存在している訳ではない。

だが、いかにも若者らしい彼の魂は、自らの想いを行動に移すことをためらったりはしなかった。

「なぜです？」

それが意味のないことだと薄々感じながらも、高山は翔一郎に噛み付いた。

それは理性ではなく感情の問題だった。

自分が惚れた相手からの好意を無碍にするのか、という不条理な怒りもその中には含まれる。

そこに計算が働いていない以上、彼の抗議は激烈だった。

いまにも翔一郎へ掴み掛からんばかりに足を踏み出す。

「納得出来る理由を答えて下さい。壬生さんは沢渡のどこが不満なのですか？」

「いや、不満なんてものはないぞ」

高山から発せられた感情の奔流を受け流すように翔一郎が応じる。ただし、彼の圧力に後退したりはしない。

真っ向から高山と目を合わせ、淡々とした口振りで彼に告げた。

「総合スペックで真琴を上回るオンナなんて世の中にそうはいないさ。俺の目から見ても問題点なんてひとつもない。口うるさいのは玉にきずだが、それは好みの問題だしな。あいつに認められて男女の付き合いの出来るオトコは実に幸せ者だ。本気でそう思うよ」

発せられた翔一郎の言葉は幾分要領を得ないものであった。

不満はないけど付き合えない。

それはいまだ一〇代の学生にすぎない高山にとって、易々と受け入れられる回答でありはしなかった。

だが当事者の片割れである真琴には、なんとなくだがそれを理解出来た。

やはり自分は翔一郎にとって「肉親」だったのだと。

それが自ら望んだ結果として得た立ち位置でなかったにしろ、これまでの長い年月は彼の認識をそのように固定させてしまっていたのだと真琴は判断した。

ひとりの独立した個性である「妹分」にすら満たない、「家族」という名の集団に属する「妹」としての椅子。

いかに異性として魅力的であつてもそれが「肉親」である以上、それに対して男女の好意を向けられる者は一般社会において皆無に等しい。

どつと肩の力が消失した。

いつの間にか笑いが込みあげてくる。

自嘲であつた。

これまでの自分が半ば道化に近い存在であつたこと、それがはつきりとしてしまったことが何よりも悲しかった。

思わず涙がこぼれそうになつたが、真琴はその衝動を必死に飲み込む。

翔一郎がこちらを向いていない隙を利用して、無理矢理元気を絞り出そうと試みた。

立ち直るには時間が掛かるだろうが、塞ぎ込む自分を翔一郎に見せたくはなかつた。

彼に責任の一端とて負わせたくはない。

すべてはおのれの独り善がりすぎなかつたのであるから。少なくとも真琴はそう判断し、それを信じた。

高山はなおも得心出来ず、激しく翔一郎に迫っている。

そんな彼を制そうと、真琴は静かに声を掛けた。いや掛けようとした。

だが彼女を襲つた本当の衝撃は、その次の瞬間に訪れた。

それは真琴が思い描いた生温い想像を粉々に打ち砕き、漆黒の闇の中へ根刮ぎ叩き込むほどの代物であつた。

「だが、“人殺し”が幸せになる訳にはいかんだろう？」

高山からの抗議をまとめて受け止めた翔一郎が、自嘲気味にそう告げた。

特に強い意志が込められた発言ではない。

しかし、そのひと言は高山の、そして真琴の精神を強かに殴打し

た。

息を飲ませる、とはまさにこのことだろう。

人殺し。

その短い言葉にはそれだけの衝撃度が内包されていた。

ふたりは自分の耳を疑わざるをえなかった。

そのひと言を口にした後、翔一郎は肩越しに真琴の方に目をやった。

こちらを見詰める彼女の視線と彼のそれとが複雑に絡み合う。

哀しい眼差しであった。

常に壬生翔一郎を見続けてきたと自認していた真琴が、これまで一度も見ることがないと確信したほどに絶望を秘めた眼差し。

翔一郎はふたたびその目を高山に向けると、呆然とするふたりの若者に向け、噛み締めるように告げた。

「軽蔑してくれても構わない。俺はむかし、“人を殺した”ことがあるんだ。オトコとして真琴から想われるのは光栄だが、それを受け入れる訳にはいかない。それが理由だ」

四章・ミッドナイト（１）

それは、“わたし”がまだ小さい女の子だった時のことだった。

“わたし”の家族とお隣に住む“おにいちゃん”の家族とは、むかしからずっと仲良しさんの関係。

よく一緒にごはんも食べたし、お互いの家を普通に行き来もしていた。

この時の“わたし”には、まるでひとつの家族みたいだなんて思えたものだ。

だからという訳ではないけれど、その週末は両家族そろって遠くの山へとピクニックに出掛けた。

クルマで一時間ちよつと走ってようやく到着したそこは、新緑のまぶしい、自然がたくさん残る本当にきれいな山野だった。

都会の近くにこんな場所が残っていたなんて、いまとなっては信じられない現実だ。

澄んだ空気はとてもとても美味しくて、流れる小川に足を浸すのも最高だった。

しかも兄弟のいないひとりっ子の“わたし”は大勢でのお出掛けが嬉しくて嬉しくて、周りを気にすることなく元気いっぱい緑の野原を駆け回った。

当時から“わたし”は随分とおてんばさんだったのだと思う。

そういえば、いつも膝小僧に擦り傷をいっぱい付けていたっけ。

あ、これはいまでも変わらないか。

とにかく、気が付くと“わたし”はひとりきりで草花と遊んでいた。

少なくとも、見える範囲にお父さんもお母さんもいなかった。

むろん、お隣のおじさんとおばさんも、だ。

でも不思議と不安は感じなかった。

なんでだろう？

きつと浮かれすぎて、その時の“わたし”はそこまで頭が回っていなかったのだと思う。

“わたし”が可愛らしい小さな花を見つけたのは、まさにそんな時のことだった。

花の種類はおぼえていない。

いまから思えば、スミレか何かだったような気がする。

薄紫色をした、小さく可憐で素敵なお花。

不意に湧きあがった“わたし”の好奇心は、“わたし”の周囲に対する警戒心をおろそかにさせた。

ようするに、“視野狭窄”という奴だ。

仕方がないという言い訳は通用しない。

なぜなら、その小さな花はかなり高さのある断崖の端っこ、本当にそのギリギリのところでひっそりと咲いていたからだった。

危険は誰の目にも明らかだった。

にもかかわらず、子供らしい歓喜に包まれた“わたし”は小走りで目標へと駆け寄っていった。

跳び付くようにその花へと手を伸ばす。

先日降った雨のせいで付近の地盤が緩んでいたことが“わたし”に災いした。

両手を突いた断崖の端が、“わたし”の体重を支え切れずにぼろっと崩れ落ちた。

そして、まだ大人の足腰を備えていなかった子供の“わたし”は、前のめりに倒れ込む自分の体を後ろに引き戻すことが出来なかった。小さな“わたし”は、文字どおり頭から下へと落下した。

悲鳴をあげる暇もなかった。

反射的に手を伸ばし、たまたま壁面に生えていた灌木の幹をつかむ。

辛うじて体重を支えきれぬ強度を、その灌木は持っていてくれた。宙吊り状態になった“わたし”は、両手に懇親の力を込め必死になつて上へ這い上がろうと試みる。

しかし、子供の“わたし”にとってそれは余りに難しすぎる挑戦だった。

両足は完全に浮き切っている。

下を見る勇氣などどこにもなかった。

凄まじい恐怖が襲ってきた。

生まれて初めて直面する死の予感。

悲鳴をあげ、泣き叫び、助けを呼んだ。

お父さん！、お母さん！、おじさん！、おばさん！

頭上から“わたし”に向けて救いの手が差し伸べられたのは、一体どれぐらいの時が経ってからのことだろうか。

涙でぐしゃぐしゃになった顔で見上げた“わたし”の目に映ったのは、お隣の“おにいちゃん”の姿だった。

透き通る青空を背にした“おにいちゃん”は、天空から降りてきてくれた神さまみたいに“わたし”には思えた。

何かを叫びながら、“おにいちゃん”は手を伸ばす。

限界まで身を乗り出し、“わたし”の身体をなんとかしてつかもうとする。

でもほんの少し、ほんの少しだけ指先からの距離が足りなかった。ふっと“わたし”の手から力が抜けた。

“おにいちゃん”の顔を見て安心してしまったからかもしれない。握っていた灌木からするりと手が離れ、重力に引かれて“わたし”の体が下方に引つ張られる。

血の気が引いた。

“わたし”の喉から甲高い悲鳴がほとばしる。

思考が完全に吹っ飛んで、いまの自分に何が起こっているのかも理解出来なかった。

怖い、怖いよ。死にたくないよ。

そんな根源的な感情だけが、“わたし”の心を支配していた。だから、“おにいちゃん”の手が、落ちていく“わたし”の身体を寸前でつかみ取ったことにもまったく気付かなかった。

長い距離を、“わたし”はひたすらに転がり落ちた。

ごろごろと、もの凄い勢いで何度も何度も上と下とが入れ替わった。

心から人生の最期を覚悟した。

子供の時にそんなことを体験出来る人間なんて、日本中を探したってそうはいないに違いない。

それは、まるで現実離れした経験だった。

人間って本当に死ぬ時には痛みも何も感じないんだな、なんて思ったりもした。

どすんという強い衝撃と共に、なんの前触れもなく落下が終了した。

自分の意識がしつかりしていることが、その時の“わたし”にはとても不思議だった。

またしても頭の中が混乱する。

乱れまくった“わたし”の頭を現実へと引き戻したのは、“おにいちゃん”から発せられた苦痛の呻きだった。

“おにいちゃん”？

おそろおそろまぶたを開いて“わたし”は見た。知った。

なぜだか、まったくの無傷である“わたし”の身体を。

そして、そんな“わたし”とは真逆に、全身傷だらけの血塗れで“わたし”の下に横たわる“おにいちゃん”の姿を。

その時、初めて“わたし”は悟った。

“わたし”は“おにいちゃん”の身体に抱え込まれるよう守られながら、この断崖を滑落したのだと。

“わたし”は“おにいちゃん”の献身によって命を救われたのだと。

“おにいちゃん”の身体に刻まれた無数の生傷は、本来なら“わたし”が受けなくてはならないものだった。

“おにいちゃん”は“わたし”の代わりに傷付き、そして血を流している。

それを幼い心で認識した“わたし”は、ぐったりと力なく横たわる“おにいちちゃん”にすがり付き、わんわんと声をあげて泣きわめいた。

それだけしか出来なかった。

“おにいちちゃん”の左足が、普通ではない方向に捻じ曲がっていた。

いまでもたまに夢に見る。

完全に骨折していたのだらうと思う。

“わたし”はいままで骨折の痛みを経験したことはないのだけれど、きつと信じられないくらい痛かったのだらうと思う。

でも、その時の“おにいちちゃん”は、“わたし”に向けてとびつきの笑顔を見せてくれた。

氣力を振り絞って苦痛に耐え、“わたし”に心配を掛けないよう顔中に脂汗を滲ませながら、それでもにつこりと笑って“わたし”の髪の毛を右手の指でくしゃくしゃやってしてくれた。

それは、“わたし”にとって絶対に忘れようがない笑顔だった。

振り返れば、“わたし”が“おにいちちゃん”を“おとこのひと”として意識しだしたのはそれが切欠だった。

随分とおませな女の子だったと言われても仕方がない。

自分でもそう思う。

でも、“おんなのこ”であれば、その時の“わたし”をきつと理解してくれると信じている。

“おにいちちゃん”は、“わたし”の人生に初めて現れた“英雄”^{ヒーロー}だったのだもの。

“わたし”は病院に入院した“おにいちちゃん”の側から片時も離れようとしなかった。

雨の日も風の日も、時間さえあればお母さんに駄々をこねて“おにいちちゃん”がいる病院におもむき、一日中“おにいちちゃん”の近くに身を置こうとした。

そして、当時の“わたし”が出来る訳なんて絶対になかったのに、

いろいろと“おにいちゃん”の世話を焼こうとまで試みた。

もちろん、まだまだ小さな“わたし”は失敗ばかりだ。

リンゴの皮をむこうとしてナイフで指を切ったり、“おにいちゃん”の着替えその他を無理矢理に手伝おうとして看護師さんを困らせたりもした。

でもしばらく経つ頃には、お父さんもお母さんも、そして“おにいちゃん”のお父さんとお母さんも、“わたし”の熱意に呆れ果てて何も言わなくなっていた。

時々お見舞いに来る“おにいちゃん”のお友だちだけが、“わたし”の存在に素直な感想を述べていた。

「壬生はロリコンだったんだな。結婚式はいつにするんだ？」

完全無欠な冗談を真に受けたような態度で、「馬鹿野郎」と“おにいちゃん”が拳を振り上げる。笑いながら。

もちろん、“おにいちゃん”もその言葉が本気でないことぐらいわかっていたのだ。

その発言を真に受けることが出来たのは、この世で多分“わたし”だけだったに違いない。

けっこん？

“わたし”が“おにいちゃん”のお嫁さんに？

小さい子供の考えることだ。

当たり前だけど、“オトコ”が“オンナ”がなんて具体的なことが、当時の“わたし”の心中にあった訳じゃない。

でも、それでも、“わたし”は“おにいちゃん”の隣で花嫁衣装を身にまとっている自分を想像——いやむしろ妄想か——して物凄く嬉しい気分浸ったことをはつきりとおぼえている。

恥ずかしながら、それが“初恋”だったと自覚したのは、実は随分と後になってからの話だった。

ある日のことだった。

少し目を離れた隙に病室からいなくなった“おにいちゃん”を探して病院内を駆けていた“わたし”は、周りに人気のない通路の窓

際で、いまにも雨粒が降ってきそうな鉛色の空を呆然と眺めている
“おにいちゃん”を発見した。

これまで“わたし”が見たことのない暗い沈んだ表情を、その時の
“おにいちゃん”ははつきりと浮かべていた。

それは、放っておいたらつい泣き出してしまふのをぐつと無理矢
理に我慢している、そんな表情だと“わたし”には思えた。

“わたし”の知っている“おにいちゃん”はいつでもにこにこと
笑っていて、子供の“わたし”が発するとりとめのない言葉をちゃ
んとまっすぐに受け止めてくれる人だった。

この時の“わたし”にとって、オトナの人と言えばお父さんでも
お母さんでもなく、お隣のおじさんおばさんでもなく、間違いなく
“おにいちゃん”その人のことだった。

“わたし”だけの、本当に“わたし”だけの“英雄”

その“英雄”が見せていた辛そうな姿に、さすがに子供の“わた
し”でも声を掛けることにためらいを感じてしまった。

後になってお父さんが話してくれた。

“おにいちゃん”は、通っている学校の代表として選ばれ、駅伝
の全国大会に出場する予定だったのだと。

そして、“おにいちゃん”は高校時代からずっとずっとそれだけ
を目指して頑張ってきたのだと。

でも“わたし”を助けることで受けた“おにいちゃん”の怪我が、
それを台無しにしてしまったのだと。

「残念ですが、もうもともとおりには走れないものと思われます」

担当のお医者さんがそう“おにいちゃん”の怪我を診断したこと
も、包み隠さずお父さんは教えてくれた。

「箱根には応援に来てくれよ、真琴」

毎朝の日課となっているランニングを終えた“おにいちゃん”が、
流れる汗を拭きながらそう言っていたことを思い出す。

「新年の箱根を走るのは、俺の“夢”だからな。それが現実となる
んだ。少しでも悔いの残る真似はしたくない」

でも、“おにいちゃん”はその“夢”を失った。永遠に。

何年も何年も懸命に積み重ねてきた努力の成果を、世に試す機会も与えられずに諦めるしかなかった。

“わたし”のせいだ。

“わたし”のせいだ。

それを聞いた“わたし”は、お父さんが見ている前で声をあげて泣いた。

次から次へと大きな涙があふれ出て、左右の目からこぼれ落ちた。

「おまえのせいじゃないよ」

お父さんは、泣き止もうとしない“わたし”をそう言って慰めてくれた。

でも、それが真実でないことぐらい子供の“わたし”でもわかっていていた。

大好きな“おにいちゃん”にあんな顔をさせているのは“わたし”なんだ。

大好きな“おにいちゃん”に悔しい思いをさせているのは“わたし”なんだ。

だから、子供心に“わたし”は誓った。

これから“わたし”は“ぼく”になる。

本当は“おれ”になればもつとよかったのだけど、きつとそこまでのことを“わたし”は出来ないだろうと思っていた。

だけど、“わたし”から“ぼく”になれば、いまよりももつと“おにいちゃん”の近くにいられるはずだ。

そして、そのままの場所で少しでも早く大きくなって、“ぼく”は“おにいちゃん”の役に立つ“おんなのこ”になる。

リンゴの皮だってむけるようになるし、お掃除だってお洗濯だって出来るようになる。

そうすれば、きつと“おにいちゃん”は喜んでくれる。微笑んでくれる。

あんな辛そうな顔は、この“ぼく”が二度とさせない。

“おにいちゃん”がなくした“夢”は、絶対に“ぼく”が取り戻してあげるよ。

その日から“ぼく”は、お母さんに色々なことを教えてもらった。お料理も、お掃除も、お洗濯も。

それまでお父さんお母さんと一緒におやすみしていた習慣もやめて、ひとりで眠るようになった。

必要とされ、求められて“おにいちゃん”の側にいること。

それが、“ぼく”にとって生涯かけての目標となった。

もちろん、いっぱいいっぱい失敗したし、火傷も切り傷も数え切れないくらいその手にに作った。

正直、凄く痛かった。

でも泣かなかった。

そんなことぐらいで泣くなんて、“ぼく”が“ぼく”自身に決して許しはしなかったからだった。

そのおかげなのかな。

気が付けば、“ぼく”は“おにいちゃん”の役に立っている自分自身を見出した。

当然だけど、大したことが出来ていた訳じゃない。

だけど、生まれて初めて“ぼく”が作った焦げ目だらけの目玉焼きを、“おにいちゃん”がとても美味しそうに全部平らげてくれた時の感動はいまでも忘れようがない。

いつの間にか、“ぼく”は“おにいちゃん”の役に立つことが嬉しくて楽しくて仕方がないようになっていた。

このままの時間がずっと続いていくのだと、なんとはなしに思っていた。

“おにいちゃん”は、“ぼく”の前ではいつも笑っていた。

時々不満そうな顔をすることはあったけど、終わってみれば、その表情は必ず最後に微笑みを浮かべていた。

その笑顔は“ぼく”だけのものだとしの底から信じていた。

少し考えれば、そんなはずがないことぐらいわかりそうなものだ。

ったのに。

やがて、“おにいちゃん”は自分のお友だちと一緒にいる時間が多くなっていた。

それはすなわち、“おにいちゃん”が“ぼく”と一緒にいる時間が少なくなるということに直結する。

寂しかった。

“おにいちゃん”の側にいていいのは“ぼく”だけなんだと本気で思っていた“ぼく”にとって、それは本当に辛い日々だった。

夕方になると決まって“おにいちゃん”をクルマで迎えに来るお友だち。

一度だけ「一緒に連れて行って」と強くお願いしたことがある。

でも“おにいちゃん”は「もっと大きくなったらな」と“ぼく”の髪の毛をくしゃくしゃやってしながら、優しく“ぼく”のお願いを拒絶した。

「どれくらい大きくなれば連れて行ってくれるの？」

曖昧な答えに納得出来なかった“ぼく”は、“おにいちゃん”に尋ねた。

それを受けて、「そうだな」と困ったように首を傾げた“おにいちゃん”は「真琴がクルマを運転出来るようになったら」と笑いなから“ぼく”に言った。

その時の“ぼく”は諦めるしかなかった。

“おにいちゃん”がお友だちと一緒に笑っていた。

“ぼく”にだけ向けてくれていた笑顔を、“おにいちゃん”はその人たちにも分け隔てなく見せていた。

もう“おにいちゃん”には“ぼく”が必要ないのかな。

そう思うだけで、自然と涙があふれてきた。

その夜は、ベッドの中で声を押し殺してひとりで泣いた。

でも、誓いの成就を諦めることだけは出来なかった。

“ぼく”は、いまの“ぼく”が“おにいちゃん”の横にいられない理由を必死になって考えた。

結論はすぐに出た。

それは“ぼく”がまだ“コドモ”だからだ。

自分の足で“おにいちゃん”の横に立つことの出来ない“コドモ”だからだ。

だったらどうすればいい？

簡単なことだ。“オトナ”になればいい。

“おにいちゃん”の横に並ぶためには、“おにいちゃん”の役に立つ“おんなのこ”になるだけじゃ駄目だ。

きちんと自分の足で世の中を歩ける、そう周りに認められる“オトナ”にならなくちゃ駄目なんだ。

“おにいちゃん”みたいに。

“ぼく”の大好きな“おにいちゃん”みたいに。

そんな日が何日も何日もすぎた。

ある日の夜のことだった。

それは随分と遅い時間だったと思う。

ふとベッドの上で目を覚ました“ぼく”は、とぼとぼとひとり歩いてどこかへお出掛けしていく“おにいちゃん”の姿を窓越しに発見した。

普通に考えれば、自動販売機に飲み物でも買いに行くのかなとも思っるのが当然だ。

だけど、その時の“ぼく”は、なぜだかそうは思わなかった。

理由などない。

素直に勘だとしか言いようがなかった。

無理矢理に理由をこじつけるなら、その時に見た“おにいちゃん”の背中が“ぼく”の知っている“おにいちゃん”の背中と明らかに違っていたからだ。

なんだろう。

嫌な予感がした。

“ぼく”は、深夜であるにもかかわらず二階にある寝室からパジャマ姿のまま階段を駆け下り、小さな足をフル回転させて“おにい

ちゃん”の後を追った。

“おにいちゃん”が向かったのは、近所に設けられた小さな児童公園であつた。

日中は小さな子供たちが遊び場としてよく使っている、実に日当たりのいい憩いの場だ。

その公園には、敷地の真ん中に大きなポプラの木がまっすぐに立っていた。

そのおかげで、“ぼく”たちはここを安直に「ポプラ公園」って名付けて呼んでいた。

“ぼく”が“おにいちゃん”に追い付いた時、“おにいちゃん”はその木に両手を付き、額を押し付け、立ったまま大声で吠えていた。

泣いているみたいだった。

苦しんでいるみたいだった。

そして“ぼく”が見ている前で“おにいちゃん”は、その両の拳をポプラの木の幹に勢いよく叩き付け始めたのだ。

ごっんごっんと鈍い音が夜の公園に響いた。

白い街灯が照らし出す“おにいちゃん”の拳骨が、見る見る間に真っ赤な血で染まっていく。

“ぼく”はそれを黙って見ていることが出来ず、なんとかして“おにいちゃん”の行為を止めようと弾かれるように飛び出した。

いや、正確には飛び出そうとして誰かの手に止められてしまった。それは、いつの間にか“ぼく”の後ろに立っていたお父さんの手だった。

「どうして止めるの？」

振り向いた“ぼく”は、感情的になつてお父さんに抗議した。

“おにいちゃん”、怪我をしているんだよ。止めないと駄目だよ。いま考えても、当時の“ぼく”の言葉は正論だったと思う。

でも、なぜだかその時のお父さんは、決して首を縦に振るうとはしなかった。

そして、お父さんは“ぼく”を諭すようにゆつくりと語り始めた。
“ぼく”は知った。

昨日、“おにいちゃん”の大切なお友だちが事故で亡くなったのだと。

そして、その責任の一端は明らかに“おにいちゃん”自身にあるのだと。

少なくとも、“おにいちゃん”は心の底からそう信じているのだと。

法律的には、その件で“おにいちゃん”に責任はないらしい。

“おにいちゃん”に罰を与えられる決まりごとはないのだそうだから、いやまさにそれだからこそ、いまの“おにいちゃん”はそんな自分が許せないに違いない、とお父さんは“ぼく”に言った。自らの犯したあやまちに対し、きちんとした罰を受けその罪を償うことを許されない“おにいちゃん”は、もしかしたら今後ずっとずっと自分自身を許せないままにいるのかもしれない。

そして、誰からも許されない罪人としての自分をこれから永遠に望み続けるのかもしれない、と。

それが、歪んだひとりよがりの“贖罪”であると知りながら。

「“ぼく”が許すよ」

自分でも覚えのないまま泣いていた“ぼく”は、無意識のうちにそう言っていた。

“おにいちゃん”がいけないことをして、例え世界中のみんなが“おにいちゃん”を許さないって言っても、“ぼく”だけは“おにいちゃん”を許す。

例え誰ひとりとして“おにいちゃん”の味方をしなくても、“ぼく”だけは絶対に“おにいちゃん”の側にいる。

だから“おにいちゃん”

泣かないで。

ひとりで泣いちゃ嫌だよ。

“おにいちゃん”が泣く時は、“ぼく”も一緒に泣いてあげるよ。

約束する。約束する。
だから、
笑って。いつもみたいに。
“ぼく”に笑顔を見せて。
“おにいちゃん”
“おにいちゃん”
“おにいちゃん”

四章・ミッドナイト(2)

「おにちゃん！」と一声叫んで、真琴は音を立てて跳ね起きた。バネ仕掛けの人形が飛び出すような勢いで一気に身体ごと立ち上がる。

ガタンと押しのけられた椅子が直後にある別の机に衝突し、耳障りな騒音をそれまで静かだった教室内に響かせた。

どんよりと淀みきっていた意識が瞬時にして覚醒し、「……夢か」というひと言が真琴の口からこぼれ出た。

右腕で額の汗を拭きながら、小さくため息をひとつつく。

だが、まだ周囲の状況に気を回せるほどの余裕はない。

「変な夢だったなあ」という思いと「夢でよかったなあ」という妙な安堵感が、その時の真琴の心理面を大部分において支配していた。

真琴が現実世界へと完全なる帰還を果たしたのは、彼女の後ろの席に着く早苗からの合図があつてからのことだった。

早苗は小声で真琴の名前を連呼しながら、突如として目前に立ち塞がった彼女の腰を筆記用具の先で数度に渡り突つついたのだ。

文字どおりお尻の部分に小さく刺激を受けた真琴は、無意識のうちに軽く肩越しに振り返った。

早苗に向けて抗議の声をあげるためである。

だが、その段階で彼女は気付いた。

何ごとかとばかりに、余すところなく真琴目掛けて集中している教室内の視線。

純粹な驚愕と好奇とに充ち満ちたまっすぐ極まりない眼差しに、

それらは一切の言語を用いることなく、いまの真琴が置かれた状況を強力に彼女自身へ知らしめている。

ようやくのことで真琴は悟った。

どうやら自分は、授業中に居眠りをしでかしていたらしいということ。

恐る恐る教壇の方向に目を向ける。

そこには強面で知られる石原という名の男性教師が、いまにも怒鳴り出しそうな雰囲気なみなみとたたえながらこちらをキツと睨んでいた。

尽生学園高等部、三年二組における午後一時すぎ。

平たく言えば、ちょうど五時間目の授業が始まったばかりの時刻に発生した出来事である。

科目は英語。

いささか乱暴に扉を開け大股で入室してきた石原が皆を前にして一礼し、それに応じることなく延々とたた寝を続けていた真琴に向けて、短くも強烈な一声を掛けた瞬間のことだった。

周囲からの注目を一身に受け、直立したまましばし凝固していた真琴はたちまちのうちに大混乱へと陥った。

あわてて机の中から適当な教科書を引っ張り出し、あたふたとページを開くなり体裁を整えるかのように該当箇所の内容を朗々と読みあげる。

だが完全なパニック状態に陥った人間が咄嗟に合理的行動を選択し、かつそれを速やかに実行出来る訳もない。

おたおたした真琴は、まったく完全なる発音で、あろうことか次の言葉を口にした。

七九四うぐいす平安京。
鳴くよ

残念ながら、彼女が手に持ったそれは選択科目である日本史の教科書だった。

一呼吸置いて二組に在籍する全生徒の口から突発的な笑い声が噴出し、教室内の空気を上下左右に激振させる。

まさしく爆笑とはこのことだった。

権威的かつ攻撃的な性格で大多数の教え子たちから怖がられる存在である石原までもが、思わず苦笑いを浮かべたほどだ。

それもやむを得まい。

何しろ直前に彼らが見せつけられたのは、まるでそれを狙っているのかと思われるほど、余りに“お約束”な反応なのであるから。今時ベタベタな学園コメディであってさえも、これほどのシーンはなかなかお目にかかれまい。

もし新人の脚本家が意図してそんなシーンを書いたなら、彼・彼女はその独自性のなさを非難の対象とされかねないだろう。

「顔洗ってこい、沢渡」

周りの反応にかえって毒気を抜かれた石原に促され、恥ずかしさに顔を真っ赤に染めあげた真琴はとぼとぼと足取りも重く教室を出ていった。

さすがにその背中からは、従来の彼女を象徴していた瑞々しい精気がまったくもって感じられない。

ある意味でクラスのムードメーカー的だったその存在感すらが、萎んで小さくなってしまったかのように思えてしまう。

重傷だわ、こりゃ。

親友のそうした姿をあらためて心配そうに眺めつつ、早苗は軽く頭を抱えた。

夏休みが終わり二学期が始まる九月。

他者の変化を見るに極めて鋭敏な感性を誇る早苗は、初日から真琴の様子がこれまでの彼女と明確に異なっていることに気が付いた。その表情全体に、見た目にもはつきりとわかる“陰”があるのだ。しかもいまの彼女は深刻な寝不足であることが明解なほどに疲れた目をして、陰鬱にため息をつく様子までもが散見されるようになっていた。

少なくともそれは、「沢渡真琴」という人物がこれまで他者に与えてきた“陽”の印象とは裏表な姿である。

彼女がこれまでの学生生活においてまず指摘されたことのない「居眠り」という行為についても、新学期に入って以降、担当の教師から警告を受けることはもう二度三度ではきかなかった。

夏休み明けのこの時期に、男子生徒からの人気が高い女子生徒があからさまに精神的な落ち込みを見せているというこの状況。

それは、たちまちのうちに学園内の水面下で根も葉もない邪推を生み出す元凶ともなった。

それらの大半は他愛もない下品な噂話の類であつたが、中には明らかに真琴自身の名誉に傷を付けかねないレベルのものまでもがまことしやかに語られていた。

とはいえ、どの噂にしたところでそこに確かな根拠がある訳でもなく、何より噂の対象である真琴本人が我関せず——実是对応する心の余裕がなかっただけなのだが——を貫いている以上、それについて周りが何か行動を起こすというところまでには到っていないのが実情だつた。

真琴について、いま現在わかっていることはただひとつ。

心底何かに悩んでいるのだな、ということのみである。

もちろん真琴と付き合いの長い早苗にはその内容がある程度深刻であることが確信出来はしたが、ここまであからさまな態度でそれを見せつけられるとかえつて言葉を掛け辛くもある。

しかしながら、早苗本人は否定するかもしれないが根っこの部分で芯から友人思いである彼女は、今回それを無視することもまた出来なかつた。

放課後、居眠りの件で石原に呼びつけられ厳しく説教を受けた真琴を、早苗は職員室の出入り口付近で待ち伏せして捕まえる。

「絞られちゃったよ、にやはは」

どこことなく無理矢理感が漂う笑顔で力なく笑つてみせる彼女に向け、彼女はまっすぐな言葉で駆け引きなく伝えた。

「サワタリ、何か悩んでるならアタシに相談しなよ。みずくさいじゃない」

何の前振りもないその直球勝負の発言に真琴は少し驚いたような表情をしてみせたが、次の瞬間にはふたたび影のある微笑みを浮かべて頭を左右に小さく振つた。真琴は告げる。

「大丈夫だよ。最近ちょっとダークなのは、早苗が心配するような理由じゃないから」

その台詞を聞いた早苗は、はつきりとその顔付きを曇らせた。それは、彼女の知る沢渡真琴が本当に大問題を抱えている場合にとる態度が、まさにいま早苗が目に行っている態度そのものであったからに他ならない。

真琴はどうでもいい問題ごとについては割と明け透けに他者に話すが、ことが重大であればあるほど自力解決を図ろうとする悪癖があった。

そのくせ、自らが問題を抱え込んでいること自体に関しては、それを周囲にわからないよう隠しとおすことが下手ときている。

放っておける訳などなかった。

「サワタリ……アタシは本気で——」

「わかってるよ。早苗は優しいもんね」

そう言つて、にっとふたたび笑顔を形作つた真琴は、「ちよつと屋上で頭冷やしてくる」と早苗に言い残し彼女と別れた。

心なし肩を落とすような姿勢でとぼとぼとこの場を去っていく真琴の背を黙つて見送りながら、早苗は心底まずいと思った。

自分の見立てが誤っていたことを、彼女はこの時はつきりと悟つたからだった。

真琴が陥つた状況は、もはや「重傷」という生やさしい段階ではない。「致命傷」だ。

ただでさえ彼女の周囲にはその存在を虎視眈々と狙う狼どもが多いというのに、あんな見え見えの精神状態のままでは何かの弾みにぱくつと捕食されてしまいかねない。

どうしよう。

早苗は必死に考えた。

これはもう、自分ひとりで背負いきれる案件ではない。

急いで、信頼出来る誰かに力を借りる必要がある。

しかし、自分たちのような真琴と同年代の者たちでは確実に力不

足だ。

そういった人間では、仮に真琴がその胸中を語ってくれたと仮定しても、彼女が納得しうる内容を説得力ある言葉で進言出来るとは思えなかった。

自分たちの世代よりもずっと豊かで深い人生経験を持ちつつ、沢渡真琴からの信頼、もしくはそれに近い感情をがっちり受け止められそうな人物。

早苗の脳裏に最初に浮かび上がったのは、彼女の中で真琴の保護者だと位置付けられていた男性、壬生翔一郎の姿であった。

確かに彼であれば真琴との物理的・精神的な距離は十分すぎるほど近いし、過去何度か早苗自身が会話した感触から察する限り無駄に歳を取ってきた軽い大人でもなさそうだった。

だとすれば素直に彼でもよさそうなものであったのだが、早苗はあえてその選択をしなかった。

なぜならば、翔一郎は直接の意味で自分との接点を持たない人物であつたし、何よりも彼はあくまで“オトコ”であるからだつた。

早苗は自らの直感から、自身の親友をいままさに押し潰そうとしているそれが男女関係の何かではないかと疑つたのである。

であるなら、真琴へ勧めるべき助言者は可能な限り同性であるべきだと彼女は考えていた。

結論は出た。

早苗はすぐさま踵を返すと、その足で脱兎のごとく保健室目指して走り出したのだつた。

尽生学園の校舎は三階建ての鉄筋建造物として造られてあつた。見掛けとしては、特に奇をてらつた構造ではない。

巷において普通に見られるであろう複数棟からなる施設である。もともとは水田が広がる郊外地のど真ん中に設けられた学校であるせいか、その周囲には同等以上の高さを持つ人工物が存在しない。そのおかげで、最上部たるその屋上では遮るものない心地よい

風を、特にまだ晩夏の趣を色濃く残すこの時期には存分すぎるほど体感することが可能だった。

今日は天気も晴れている。

気温は二〇度台の後半に達していた。

夕方から徐々に崩れてきて雨に変わるという予報も出てはいたが、少なくともいまの状況を見る限りとてもそうとは思えなかった。

真琴は、屋上の外縁部に設けられた金網のフェンスを背にして茫然と流れる雲を眺めていた。

ゆっくりと天空を進むそれらを何も考えずに目で追っていると、不思議と心のもやが薄れていくように感じられる。

ある意味でここは、独りで考えごとをするには“絶好の環境”なのだと言えるかもしれない。

その“絶好の環境”に包まれて真琴は、先ほど自分が夢に見た情景をぼんやりと反芻していた。

断片的な子供の頃の記憶。

それがモザイク状に組み合わせあった、なんとも形容のしがたい夢であつた。

全体像については多くの夢がそうであるように、完全に目覚めたいまとなつてはどうにもはつきりと思ひ出せない。

だが、そこで展開されていたたつたひとつの光景だけは彼女の脳裏にくつきりと刻み付けられ残されていた。

深夜の公園とそこで泣き叫ぶ翔一郎。

その彼に向かって必死に何かを訴える自分。

でも、その声は一向に翔一郎へ届きはしない。

許す、許すよ。ボクは許す。

夢の中の自分が、一体彼の何を許そうとしているのかがわからなかった。

実は同様の夢は、最近になつて幾度も見るようになっていた。

胸中に淀むもやもやした想いのせいでなかなか寝付けない夜に限定して言えば、それは毎晩のこととも言えるほどだ。

切欠は明白だった。

「軽蔑してくれて構わない。俺は人殺しなんだ」

あの日の夜、翔一郎から告げられたその言葉がそれである。
人殺し。

重い言葉であつた。

その発言は、真琴にとって自分の想いを彼に受け止めてもらえなかつたことを上回る圧倒的な衝撃となつて押し寄せてきた。

なぜなら、真琴には“あの”翔一郎が口からでまかせの適当な言い訳としてそんな発言をするとは到底思えなかつたからである。

確かに翔一郎は憎まれ口をよく叩く。

無理に悪人振ることだつてしばしばだ。

だがしかし、軽口を除く会話の中で質の悪い“嘘”をつくことだけは決してない。

もし“嘘”をつかねばならない状況に追いやられたなら、翔一郎はむしろ沈黙をもつてそれに対応するだろう。

真琴はそのことを熟知していた。

だから、「翔兄いの過去に何があつたんだろう」という薄暗い好奇心が胸中で鎌首をもたげてくるのを彼女は止められなかった。

しかし、ことの真相を直接彼自身に問い合わせること、いまの真琴には心底はばかられる行為であつた。

それが壬生翔一郎という一己の人間にとって痛みの残る“古傷”なのだと、それもまだかさぶたすら張つていない深い深い“古傷”なのだと本能的に察することが出来たからだつた。

あの時、彼女の目に映つた見た翔一郎の哀しい眼差し。

それが、何よりも雄弁に彼の痛みを物語つていた。

「翔兄い……」

不意に涙がこぼれそうになつて、真琴は思わず天を仰いだ。

自分が心底情けなかつた。

ほんの数ヶ月前まで、自分は翔一郎にとって唯一無二の存在なのだと思つていた。

その人物というものについて知らないことなど何も無い。

そのことを確信していたのだと言ってもいい。

しかし、現実とは違っていた。

自分は、実のところ壬生翔一郎という人間のことを何も知らないに等しかったのだと痛烈に思い知らされた。

伝説の走り屋。

八神の魔術師。

「ミッドナイトウルブス」のミブロー。

彼が積み重ねてきたそれらの“逸話”

しかし、その物語の中に「沢渡真琴」という存在は一文たりとも記されてはいなかった。

それは、真琴の知らない翔一郎が、真琴の知らない世界の中で築きあげてきた物語であった。

その文中に語られる彼の呼び名に、先日新しいひとつが加わった。
殺人者・壬生翔一郎。

むろん、それは現実に裏打ちされた呼称ではなかった。もとより根拠たるべきものが何もない。

ゆえにそれは、翔一郎本人の口から放たれた“自称”、あるいは“戯れ言”に近いと言い換えても構わないくらいだ。

だが、翔一郎がその名で呼ばれるべき行為を犯したのかどうかは、いまの真琴にとってさほど重要ではなかった。

問題は、彼女の中で記憶された翔一郎の別名にその一項が加えられたことで、これまでの真琴をある意味で支えてきた主柱が大きく揺らぎ始めたことだった。

翔一郎が自らを“殺人者”と称したこと。

もしもそれが現実であったとしたら、そんな重大事をすら知ることのなかった自分とは、一体彼にとってのなんなのであろう。

何よりも、彼が名乗った自身の恥部を確実な言葉で否定出来なかった自分は、これまで壬生翔一郎の一体何を見てきたのであろう。

真琴にとっての壬生翔一郎とは、自らの知る彼こそが確実に「主」

であり、いかにその名が伝説に語られようと、自らの知らない彼の方があくまでも「従」としての存在であつた。

これまでの真琴は、その認識をこそすべての基準として人生を送つてきた。

彼女が成し遂げたさまざまな努力も、彼女が思い描いたさまざまな未来も、その認識があればこそ成立していたのだと言える。

だが、真実がその逆であつたなら。

すなわち、真琴の知る翔一郎こそが彼自身にとっての「従」であり、その「主」たる姿が別所にあるのだとすれば――

そこまで想像して、真琴は一瞬身震いした。

もしそうであるなら、いままでの自分は完全な道化^{ヒョロ}であつたことになる。

自らがその役に立ちたいと熱望し、常にその傍らにいたいとまで思い詰めた相手が実はおのれが勝手に思い描いた偶像だったなどと、真琴には認めることが出来なかつた。

出来るはずもなかつた。

ふと無意味な光景が脳裏をよぎる。

それは、おそらくいまから数年後の未来。

翔一郎が近所の路上で偶然出くわした真琴に向かって親しげに声を掛ける。

「よお、真琴。元気にしていたか？」

微笑みながらそう言つた彼の側に、幼子を抱いた女性がひとり、寄り添うように立っていた。

顔の見えないその女性。

しかし、彼女が翔一郎の選んだ大切な大切な伴侶であることは誰の目から見ても明らかであつた。

そして、たおやかな彼女の胸でぐずつてみせるふたりの愛の結晶を幸せそうにあやしなから、翔一郎は真琴の前を微笑みながら去っていく。

真琴の方を振り返りもせず。

それは、彼が“真琴の知らない場所”で出会い、そして“真琴の知らない場所”で育んできた彼自身の人生を見事なまでに見せつけていた。

ぞっとした。

いまの真琴には、それが非現実的な未来だなどとは思えなくなっていたからだった。

いやむしろ、このままではそうなっていつても不思議ではないと確信出来る自分をすら感じるようになっていた。

「やだよ……」

誰に言うまでもなく真琴はつぶやく。

「でも、どうすればいいんだろう」

真琴の名を呼ぶものが登場したのは、ちょうどその時であった。聞き覚えのある男性の声。

つぶやきを聞かれたかと思った真琴は咄嗟に目尻に貯まった涙を拭い、声の主へと顔を向けた。

高山正彦であった。

「押忍」

努めて気楽な態度をこしらえて、真琴は軽く右手をあげた。

「どしたの？　こんなところに来たりして」

「グラウンドから君の姿が見えたから」

いかにも心配そうな表情を隠し立てせず、高山は真琴に告げた。そして、間を置くことなく問い掛ける。

「あれから壬生さんとはどうなっているの？」

「いつもと変わらないよ」

単刀直入に真琴は答えた。

それは事実であった。

本人から直接伝えた訳ではないにしろ、それまでじつと隠し持っていた自らの想いを真琴が翔一郎に知られてしまっただけなら経つが、彼女から見た彼の態度に特別な変化は見られない。

あいかわらず朝は真琴に叩き起こされ、真琴の作った朝食を黙々

と食べ、いままでどおりに軽口を叩く翔一郎。

真琴としては、正直拍子抜けしたようにも感じられる日々が続いている。

昨日と同じ今日が延々と継続する毎日。

それはある意味で真琴が望んでいた日常そのものはずではあった。

しかしいまとなつては、むしろそれが重みにすら感じられてならない。

それだけ自分の存在価値が翔一郎にとって軽いものであったのだろうか。

ある人に「好きです」と伝えて、すぐさま「ごめんよ」と応えられ、その直後に「ところで今日の晩飯何？」と続けられること。

時間が経つにつれ、じわじわと心の奥に効いてくるダメージだ。

ボディブローに近い。

だが完璧に拒まれた方がマシかと言われたなら、それもまた違うような気がする。

実は今月になってすぐ、翔一郎の部屋に内側から掛けられる鍵が付いたのだった。

なんだかんだ言いながらそれまでフリーパスであつた彼の部屋を閉ざす小さな金具。

もしかしたら彼の側に深い意味などなかったのかもしれないが、真琴にとってこのタイミングで設けられたそれは、翔一郎から提示された明確な拒絶の証であるように思えてしまう。

感情の精算が終わっていない状況でのそうした変化は、また別の意味で真琴の心情に暗い淀みを形成する原因となっていた。

最近の真琴が色濃く見せている“陰”の正体について、高山はある程度正確に把握していた。

もちろん、彼も当事者の片割れとしてあの夜あの場所で翔一郎の発言を直接耳にした訳だから、それも当然なことだと言える。

だから、彼は少年らしい素直な責任感から、前置きなく真琴に向

けて頭を下げた。

「ゴメン。俺のせいだ」

彼は言った。

「俺が早まってあんなことを言わなければ……」

「そんなことないよ。どうせいつかはボクが言わなきゃいけなかったことだし」

まっすぐに高山の目を見て真琴は答えた。

「それよりも、ボクの方が高山くんに謝らないといけないね」

「え？」

真琴の意表を突いた申し出に、高山は驚いたような表情を浮かべた。

それに構わず真琴は続ける。

「好きな人に好きだって言って、でも断られて、それなのにその人は平然とそれまでどおりに接してくる……それが結構ヘヴィだなあって実感したの。そしたら思った訳。ああ、これってボクが高山くんにしていたのと同じ態度だなんて」

「沢渡……」

高山は言葉に詰まった。

もつとも、真琴の方でもいまの台詞に応答を求めている訳ではないらしい。

彼女は両手を腰の後ろで組んで、くるりと回れ右をした。

ポニーテールが弧を描く。

そしてそのまま大きく天を見上げ、今度は全身で伸びを打つように左右の拳をまっすぐ空に突き上げた。

「あーあ、こんな気持ちになるくらいなら、あの時高山くんの告白にオッケーしていればよかったよ」

どこことなく自分自身に言い聞かせるような口振りで真琴は言った。その瞬間に彼女が浮かべた表情は、高山の側からうかがい知ることが出来なかった。

そしてひと呼吸置いた真琴はふたたび高山の方に向き直ると、や

や腰を屈め下方から見上げるような格好で彼に問うた。

「高山くんは、まだボクとお付き合いしたい？」

「えっ？」

高山にとり、それは不意打ちにすら近い言葉の襲来であった。

鷗越の奇襲を受けた平家の軍勢に匹敵する混乱にまで一気に陥った高山の頭脳が的確な対応をその肉体に命じられず、彼に刹那の沈黙を強いてしまう。

「だったら、ここでちゅーしてくれる？　ボクのファーストキスでよかったら、だけど。もししてくれたなら、その時からボクが高山くんの彼女になってあげるよ」

そんな高山の状況を一顧だにせず、真琴は畳み掛けるようにそう告げた。

間に一歩だけの距離を残し、向かい合うような格好で彼とまっすぐ対峙する。

そして何やら思い詰めたような表情で小さく頷いてみせた直後、その細い顎をはっきりとあげ両眼をつぶった。

あからさまに高山は狼狽した。

過程こそまっとうではないが、かつて自らが希望した状況の入り口が目の前に大きく扉を広げているのである。

おいおい、今度は相手の方から誘っているんだぜ。一体何を拒む必要があるんだい？

高山の中に棲む小さな悪魔が、ふたたびその耳元で囁き始めた。

だが、彼はその甘美な誘惑を完璧なまでに一蹴した。

「止めるよ沢渡！　俺の知っている沢渡は、自暴自棄になってそんな真似をする女じゃない！」

真琴の両肩をがっしりとその手で掴んで高山は断言した。

高山にはわかっていた。

それが彼女の本心でなどないということ。

もちろん、それを承知で真琴の身体を抱き締めることも出来たであろうし、いまなら真琴もその現実を受け入れたかもしれない。

それはそれで、きっと素敵な未来には違いあるまいと思う。

しかし、欲望の赴くままそんな行為におよぶほど、いまの高山は“少年”のままであることが出来なかった。

いま真琴は無理矢理自分を誰かに押し付けて、その庇護を受けることによって自らの想いに封をする道を選択したのだ。

高山正彦という個人は、その対象に選ばれただけにすぎない。逃げ道。

真琴の立場から言えば、そう言い換えることも可能だ。

そして高山は、断じて自らがそうありたいとは思わなかった。

自身の思い人は、決して目の前の障害から逃げ出したりする女性ではない。^{真琴}

彼は、そう信じていた。

仮に力およばず撃退されることがあっても、それを唯諾々と受け入れるほど諦めのいい女性ではない。

考えられるすべての方策を試しくし、その上でしぶしぶ了承するのでない限りは。

彼はそう確信しているがゆえに、真琴から消極的な理由で向けられる好意をかしこまって受諾するつもりなど一切なかった。

高山の目には、沢渡真琴という女性がいつもまぶしいほど自分の足で人生を歩んでいるように映っていた。

一心に目的地を見据え、脇目も振らずまっしぐらにその道を行く。その姿勢を羨ましいとすら思っていた。

だからこそ、その“想い”を欲した。

その存在を自分だけのものとしたかった。

打ち棄てられたそれをただ単に拾うなど、彼自身の自尊心^{プライド}が許しはしなかった。

ましてや、彼女が本当にその心を寄せている存在^{翔一郎}を知り、それに向け明白な敬意をすら覚えているいまとなつては。

「沢渡は疲れているんだ」

高山は真琴に言った。

ほら、どんなコースだって、いつもエンジン全開で走っているだけじゃ速く走ることなんて出来やしないだろ？

コースにはコーナーもあるし、それが公道だったりしたら信号や何かでこちらの意志とはまったく別に止められてしまったりもする。素早く目的^{ゴール}地向かうにはきちんと速度調整することも必要だし、場合によっては燃料を補給したり、疲れた身体を休ませたりする必要だってある。

人生だって同じさ。

きつと沢渡は、いつだってアクセルを踏みっぱなしで生きてきたんだと思う。

だから、多分いろいろなところが疲れてしまっているんだよ。

ブレーキを踏んでもいいじゃないか。

休憩をとってもいいじゃないか。

休むことだって立派な努力のひとつだよ。

必死な強行軍だけが「ひと」の生き方じゃないんだから。

そう熱く言い放った高山に目を丸くしながら、真琴は「……かつこいい」とつぶやいた。

「ちよつと感動しちゃった」とまで付け加える。真顔で。

真剣な眼差しでそう言われた高山は、しかしいささか体裁悪そうに頭を掻くと、苦笑しながら真実を真琴に告げた。

「ゴメン。そう言ってもらえるのは嬉しいんだけど、実はこの台詞、別の人の受け売りなんだ」

「誰？ そんな臭い台詞吐く人って。ボクの知っている人？」

純粹な好奇心に駆られて高山に問うた真琴に向けて、彼は若干ためらいながら「……壬生さん」と短く答えた。

「翔兄いかぁ」

あはは、と声をあげて真琴は笑った。

なんとも言いようのない複雑な印象を与える笑いであつた。笑いながら真琴は語る。

「翔兄いはね、ボクの前だといつでもどこでも駄目兄貴なんだよ。」

それなのに、どうして他の人の前だと凄い人になれちゃうんだろ。それって、ボクに正体を知られたくないってことだね。改めて実感したよ」

真琴の笑顔に段々と別の感情が忍び寄ってくるのが高山にもわかった。

それはある種の絶望だったように見えた。

異変を察した高山が真琴に声を掛ける暇もなく、ものの数秒のうちに彼女の表情はぐしゃぐしゃな泣き笑いへと変化する。

誰に向けてでもなく、真琴の口から押さえきれない何かが言語となつて漏れだした。

「やっぱり、翔兄いは“ボクの”翔兄いじゃなかったんだ……」

唐突に制御出来なくなつたおのれ自身を持て余し、真琴はコードモのように大粒の涙をこぼしながら、高山の手前なのか、それでも必死に笑つてみせようと尽力した。

それを目の当たりにした高山は、しかし具体的には何もすることが出来なかった。

文字どおり混乱の極みにある女性を落ち着かせるために何が必要かを、彼のこれまでの経験は教えてはくれなかったからだ。

いまの高山が出来ることと言えば、真琴が顔を埋める胸板を黙って貸してやることくらいだった。

彼は自分の無力さを心底呪った。

こういう時、壬生さんならどうしただろう。

思つても詮なき疑問が頭をよぎる。

そんなふたりのもとに新たな来訪者が出現したのは、それから一〇秒も経たないうちのことだった。

軋む扉を開けて唐突に屋上の空間へ侵入してきたその人影は、重なり合う真琴と高山の影を認めるやいなや、のんびりした口調で「あら？ ひよつとしてお邪魔だったかしら」と場違いにも聞こえる台詞を投げ掛けてきた。

それは、実におつとりと優しげな女性の声であつた。

突然背後に現れた第三者の存在に思わず身体を震わせた高山と、顔全体を涙と鼻水とにまみれさせ悲惨な表情を形成した真琴の視線とが、次の瞬間には発言の主を捕捉する。

それは、尽生学園の保険医を受け持つ河合理恵の姿であった。

理恵は一見してただならぬ関係に映ったはずのふたりの現況には一切触れず、ただ真琴に向けてだけ包み込むような温い声で次のように告げた。

「沢渡さん。もしよかったら、これから先生のドライブに付き合ってくださいらない？」

微笑みながら小さく上げた理恵の左手には、キーホルダーを付けたクルマの鍵が無造作にぶら下がっていた。

四章・ミッドナイト(3)

それは、心からそう思えるほど“優雅”なドライビングであった。同じ女性でありながら、初心者である自分のように“稚拙”なそれではなく、だからといって求道者めいた倫子のように“鋭利”な訳でもない。

もちろん、あの芹沢聡に代表される愛車の限界を真底まで振り絞った男らしい“豪腕”でもなければ、一般的な女性ドライバーのごとくクルマの性能に乘せられているだけの頼りない走りでもない。あえて真琴の知っている範囲で誰かに例えるのであれば、それは「八神の魔術師」、壬生翔一郎の走りに似ていると言えようか。

実に無駄なく滑らかで、決して何かに無理を強いることなくクルマを前へ前へと進ませるその技術^{テクニック}。

仮にそれを評する表現があるとすると、それはただひたすらに“上手い”——彼女の助手席に座る真琴には、そのひと言だけしか思い付かなかった。

それは、今日という日がちょうど夕方と呼ばれる時間帯に差し掛かるうとしていた午後四時頃のこと。

やや唐突ともとれる理恵の願いを何となく断り切れなかった真琴は、彼女の言葉どおりその愛車の助手席に身を収め、まだ日中とも言える時間帯の八神街道へと向かっていた。

ダイハツL880K「コペン」

軽自動車規格に則ったふたり乗りのオープンカー^{ロードスター}である。

名前の由来は「コンパクト^{compact}」と「オープンカー^{open car}」の組み合わせからという話だ。

駆動方式は前輪駆動^{FF}。

八〇〇kg台前半の車体重量をカタログ値六四馬力を発生させる過給機付JB-DET六六〇ccDOHCエンジンで引っ張る同車は、AT全盛期が続く日本の軽自動車市場において、珍しく五速M

Ｔが設定されていることが特徴だった。

それはつまり「コペン」を開発したダイハツの技術者^{エンジニア}が、同車をあくまで運転そのものを楽しむための「スポーツカー」として作り上げたことの明白な証左であると思われる。

もちろん、その「コペン」が持つ“速さ”それ自体は大したものではない。

いかに規定いっぱい出力を振り絞っているとはいえ、所詮は排気量六六〇ccにすぎない軽自動車規格の心臓である。

それほど軽量な車体に積まれていたとしても、それがいささか力不足であること自体は誰の目にも明らかであつた。

それゆえに「コペン」は、一般的な“^{モータースポーツ}競技”の場においてその実力が注目されるようなクルマでありはしなかつた。

だが、そのステージがワインディングともなると話は随分と異なる。

その場において最重視されるのは、絶対的な速さではなく人馬一体感が織りなす運転の楽しさ。

なればこそ「コペン」が持つじっくり煮詰められた足回りは、その軽量なボディとも相まって真に軽快なハンドリングをステアリングを握る運転者へと提供して止まなかつた。

それに魅せられた固定ファンも多い。

小さくて非力でも、自らの手足のごとく操ることの出来る四輪の馬。

理恵が所有しているクルマも、そんなクルマの一台であつた。

黄色い塗装が施された丸く愛らしい外見。

車体後部に電動で収納可能な折りたたみ式の屋根を持つ彼女の愛車は、俗に「アルティメットエディション」と称される特別仕様車であり、ビルシュタイン社製のショックアブソーバーに代表される専用パーツが奢られた走りに振った形式である。

^{ダイハツ自動車}メーカー自体によってチューンされたと言ってもいいその仕様は、「コペン」というクルマが生まれ持った特性をさらに色濃く^{ドライバー}運転手

へと主張する。

そんな「コペン」という乗馬を駆り、理恵は軽やかに公道を駆け
た。

さして速度を出しているという訳ではない。

それは、せいぜい法定速度に毛が生えた程度であっただろう。

しかし、開閉式の屋根を車体後部に仕舞い込みオープンカーとし
ての状態で風を切る「コペン」の乗り味は、深夜の街道を疾駆する
倫子の「MR-S」とはまた別種の快楽を間違いない助手席の真琴
へと伝えていた。

適度な強さで吹き込んでくる峠^{やま}の大気が、優しくその顔を撫でて
いく。

それは、あたかも真琴の心中にどんよりと溜まっていた淀みまで
もを軽やかに吹き飛ばしてしまうかのようなのであった。

真琴はこの時、本当のドライブというものを初めて体感したよう
に感じた。

楽に目的地に到着するための手段としてではなく、それでいて競
技のように自身の力量を確かめるためにでもなく、純粹に楽しむこ
とを目的とした運転^{ファン・トゥー・ドライブ}。

真琴は、自らの目から鱗が落ちたと大袈裟ではなく心底からそ
う思った。

文字どおり自分の世界が広がったのだと本心からそう思った。

それはある意味で感動にすら近い。

だからこそ、彼女はつい先ほどまで自分自身を押し潰そうとして
いた暗い闇の存在を一時的にしる忘却した。

その表情に顔をのぞかせていた“陰”が、いずこへともなく姿を
隠す。

「どう？ 気持ちいいでしょう。こうやってオープンカーで走るの
って」

まるでその時を見計らっていたかのように、理恵は真琴に声を掛
けた。

彼女の運転する「コペン」は、既に八神街道のふもと、「八神口」と呼ばれるあたりに到達していた。

やや急な上り坂。

眼前に現れる右コーナーを、彼女と「コペン」は難なくクリアしていく。

ほとんどシフトショックを発生させることなく、オーバートップアップ五速、四速、三速へとシフトダウン。

この年代の女性としては珍しく愛車にマニュアルシフトのクルマを選んだ理恵は、その操作を何ら苦にしてなどいないように見受けられる。

いや、それはもう苦にしていけないというレベルではあるまい。

彼女は下手な走り屋が裸足で逃げ出すほど巧みなアクセル操作をもつて、見事なまでに正確なシフトダウン時におけるエンジン回転数の同調を実行してみせたのである。

もはや驚きをはるかに通り越した感を漂わせながら、真琴は理恵に敬意のこもった眼差しを送った。彼女は言った。

「先生、運転上手すぎです。どうやってそんな技術テクニックを手に入れたんですか？」

それは、先に提示された理恵からの質問に対する回答でありはしなかった。

筋から言えば、いささか順序を間違えた発言になるのかもしれない。

だがそのことを気にせず、理恵はまったくいつもの彼女と変わらない適温のカフェオレを連想させる口振りでその問い掛けに答えた。「先生ね、とんまだから。いっぱい失敗して、その回数と同じだけ自分を修正してきたの。いま沢渡さんから誉められたのも、それが原因なのかもしれないわね」

真琴からするといささか要領を得ない回答をあたりまえのように告げて、彼女は小さく舌を出した。

真琴はこの時、自分が理恵の「コペン」に同乗して以降、初めて

彼女とまともに会話した内容がこれであつたと自覚した。

急に出所不明な恥ずかしさが湧き上がってきて、無意識のうちに視線を落とし小さく肩をすぼめてしまう。

だから彼女は、その時やんわりと理恵が浮かべた慈愛に満ちた笑顔を、その目で確認することが出来なかった。

上り坂を越えて、理恵の運転する「コペン」は八神街道頂上の駐車場^{PA}へゆつくりと進入を果たした。

これまで度々この場所を訪れていた真琴であつたが、思い返すとそのほとんどすべてが夜間のことであつたと気付く。

なぜなら、この見慣れたはずの風景がいまの彼女にはまったく初めて足を踏み入れた空間のようにさえ感じられたからだ。

舗装面に白線で指定された駐車スペースに前進して愛車を停めた理恵は、真琴に向かって「そのベンチでお話ししましょ」と告げると、自らはPA内に設置された自動販売機へ向かつて歩いていった。

理恵が自販機でふたり分の清涼飲料を購入している短い時間、真琴は普段から指定席のように使用しているFRP製のベンチに腰を下ろして空を見ていた。

一応夕方に該当する時間帯であるとはいえ、まだ空の端に赤みなど差していない。

先ほど屋上から見上げていた空と比較してやや雲量が増えたかなという気がするくらいで、その総面積に掛かる青色の面積は十分過半数以上を占めていた。

「沢渡さんは、甘いのと苦いのとどっちがお好みかしら？」

両手にそれぞれ缶コーヒーを持った理恵がいつの間にかやって来ていて真琴に問うた。

そして真琴が苦い方、つまりブラックを即決すると嬉しそうに口元を綻ばせ、「よかった。先生、もう歳だから甘いじゃないと身体が受け付けないの」などと言った。

まあ幾分本音が混じっていたのだとしても、おそらくそれは冗談

の類なのであろう。

真琴はその発言に深い突っ込みをすることはせず、理恵もそのままでの表情を崩さないまま真琴の隣に腰を下ろした。

真琴と同年代の皆々は言うにおよばず、彼女たちより若干年上である「ロスヴァイセ」の面々とも明白に一線を画す品のある仕草で、だ。

なんて素敵な大人の女性なんだろうとちょっとだけ真琴は感嘆し、そんな人と隣り合って座ることを何となく気恥ずかしく感じた。

思い返せば、この河合理恵という保険担当医の女性に対して真琴はほとんど接触経験を持たなかった。

もちろん学園内ではかなりの知名度を誇る人物であるから、彼女がどんな女性であるのかを真琴も漠然と認識してはいる。

しかし、少なくとも親しげに言葉を交わすことが当たり前に感じられるほどの交流期間を彼女との間に築きあげてきたという認識は持っていないのが実情だった。

にもかかわらず、なぜか理恵の存在を真琴は抵抗なく受け入れることが出来た。

その理由について思いを巡らせた真琴は「河合先生はボクがよく知る誰かさんに似ているんだ」と断定した。

その人物とは、彼女が抱える心理的負担の元凶である「壬生翔一郎」に他ならなかった。

だが、その具体的な部分を真琴は一切思い付くことが出来ずにいた。

雰囲気、態度、言葉遣い。

どれを取っても理恵と翔一郎には重なる点を見出せない。

無理矢理に共通箇所をこじつけるなら、それは三〇代半ば付近という年代ぐらいしか存在しないのではなからうか。

どうしてだろう、と真琴は思う。

そして、ほんの数十分前の出来事を頭の中で反芻した。

あの時なんの前触れもなく屋上に現れた理恵は、ほとんど抱き合

つていたかに等しい距離にいた真琴と高山の関係を邪推せず、まっすぐ真琴だけに向けて語り掛けてきた。

そして、「沢渡さん。そんな酷い顔をしていたら、学園の人気者が台なしよ」と告げながらきれいなハンカチを差し出してきた彼女はその一方、軽く目配せをしただけで高山を階下に追いやることに成功した。

たぶん、高山も彼女の眼差しに何か信頼出来るものを感じたのであろう。

小さく会釈しただけで、彼は後のことを理恵に委ねたかのごとくその場を足早に去っていった。

理恵は、残された真琴に向かって優しく顔を洗うように促すと自らは素早く愛車「コペン」を正門付近にまで回し、有無を言わせることなく彼女をその助手席へと積み込んだ。

その後の経過は言わずもがな、である。

だからこそ、いま自分はこの場所で缶コーヒ^{デジャブ}ーを手にしているのだから。

その瞬間、真琴はここまで続く一連の流れになぜか既視感^{デジャブ}のような感覚を覚えた。

そして、これまた唐突にその理由について思い至る。

それは、過去一時間程度の間に起こった出来事が、自分が衝撃的な言葉を翔一郎から告げられたあの夜とよく似ているという事実であつた。

あの夜も、激しく精神的に落ち込んでいた自分を翔一郎が八神街道まで連れ出した。

今回は、その翔一郎の役柄を理恵が代わって行っているだけのことだ。

昼夜の違いはあるけれど、奇しくも目的地はこのPAだった。

泣いて泣いて自分が酷い顔をしていたことだって同じだった。

そして、自分をこの地に運び込んだ運転手^{ドライバー}の卓越した技量^{テクニック}まで。

真琴の脳裏に、屋上で浮かんだ忌まわしい光景が再来した。

幼子を抱いた女性と並ぶ翔一郎の図。

だが今回浮かびあがったその女性は顔を持たないのっぺらぼうのままではなく、明らかに河合理恵の姿形を有していた。

なんで？ どうして？

それが根拠のない妄想だと頭の中で理解しながら、真琴は果てしない混乱の中に再度陥ろうとしていた。

それを寸前ですくい上げたのは、理恵が放った温く甘ったるい声だった。

「先生ね。悩んだり落ち込んだ時には必ずここに来ることにしているの」

その声と同じくらいの糖度を含んだミルクコーヒーを口にしながら、彼女は唐突に独り語りを始めた。

ここに来ると、不思議と心が落ち着くから。

きつと楽しかったことも辛かったこともひっくり返して、いろいろな思い出がたくさんこの場所に眠っているせいね。

格好いい言葉で言えば、この駐車場こそが先生の“聖地”と言えるのかもしれないわ。

理恵の口から発せられたそれらの台詞は、実に大真面目な雰囲気を持っていた。

少なくとも、意図して“作られた”語り口でないことだけは確かであった。

真琴が思わず「え？」と疑問符を掲げてしまうほどに。

なぜならば、それまで真琴が早苗から側聞していた河合理恵とは、どこか浮世離れた雰囲気濃厚に漂わす女性であり自分たちのように些細なことで悩んだり落ち込んだりする俗っぱさとはいささか縁遠い人間であるように思われたからである。

だから真琴は、つい彼女に向けて非礼とも取れる言葉を発してしまった。

「河合先生もそんな感情持ったりするんですか？」と。
「あら心外ね」

まるで投げ掛けられた軽口にも対応するような口振りで理恵が応えた。

「先生だって、人並みに苦しんだり傷付いたりすることもあるのよ」
例えば、と前置いてから彼女が語った内容は、職場である尽生学園においての出来事だった。

その日、理恵の上司である学園の教頭が提出書類に問題があることを口実にして実に半時余りもねちねちと彼女に説教を食らわしたそうだった。

ただし、その内容は合理的なものではなかったらしい。

それは実につまらない揚げ足取りと嫌味とに終始し、本来なればひと言ふた言で済むはずのお小言を延々続く言葉のリンチへと変貌させていったのだと。

要するにストレス発散の材料にされたんでしょうね、と理恵はそうした教頭の行為を評定した。

「だから先生、クルマでこの道を走りながら叫んでやったの。『教頭のハゲー！』って」

言い回しも何もない直接的な罵倒の言葉に、真琴は思わず吹き出した。

ついつい声をあげて笑ってしまう。

真琴はこの時、親友である野々村早苗が理恵という女性を心底慕っている理由をなんとなくだが理解した。

「やっと笑ってくれたわね」

そんな真琴の様子を見て、理恵は心から嬉しそうにそう言った。

「男の子たちから聞いてはいたけど、沢渡さんの笑顔って本当に素敵。ずっと見ていたいくらい」

「そ、そんなことないですよ」

真顔でその表情を誉められた真琴は、顔を赤くしつつ慌ててそれを否定した。

いわゆる謙遜という奴だ。

「そんなことあるわよ」

理恵が、ひと言の下にその謙遜を却下する。

「最近あなたが笑わなくなっただって心配している人、思っている以上に多いのよ。例えば野々村さんとか」

「早苗が？」

「そう」

理恵は小さくうなづいた。

「今日、あの子から相談を受けたの。沢渡さんが“辛い恋”で悩んでるみたいだから、なんとか力になってあげてくれって」

ゆつくりと諭すような口振りでそう告げられて、真琴は「うつ」と口をつぐんだ。

先ほど冷たく振り払ってしまった親友が、本当にこんな自分を見詰めていてくれたことを今更のように実感したからだった。

だから続けて放たれた理恵の台詞、「いいお友だちを持ったわね」にも真琴は素直に肯定の意志を表することが出来た。

理恵は、そんな真琴を眺めながらゆつくりと言葉を続けた。

「ごめんなさい」

それは謝罪の言葉から始まった。

「野々村さんをお願いされた後ね、先生いろいろと沢渡さんにお話しする内容を考えたのだけど、やっぱり先生莫迦だから何も思い浮かばなかったの」

だからせめて、これからのあなたが参考に出来るよう、先生が経験した“辛い恋”のお話しをしてあげる。

もし差し支えなければ、沢渡さんの大事な時間を少しわたしに割いてくれないかしら。

無言で眼差しを送ってくる真琴の顔をのぞき込んだ理恵は、そこまで彼女に言ってから白雲の流れる大空へ向かって視線を投げた。

「あれは先生がまだ大学生の時、先生にはA君という同じ歳の幼なじみがいたの」

淡々とした口調で彼女は語り始める。

「A君とわたしは子供の頃から仲がよくって、お互い違う大学に進

んでからもよくこの場所で遊んでいたわ。同じ趣味を持つ仲間たちと一緒にね。いま思い出しても、本当に楽しい時間だった」

「でも」と真琴が口を挟んだ。

「このあたりに学生が遊べる場所なんて何もないんじゃない——」

「普通ならね」

理恵がそれに答えた。

「でも先生たちは普通じゃなかったから。先生たちね、“走り屋”だったの」

余りに意外すぎる告白を耳にして、真琴は思わず絶句した。なぜならそれは、いまの理恵からは想像も出来ない過去であったからだだった。

しかしその反応をある程度予想していたのであろうか、彼女は楽しげに頬を緩ませさらに言葉を続けていく。

A君は、ここに集まるみんなの中ではリーダー格のひとりだった。彼が自分たちだけのチームを立ち上げると、A君を慕う人たちがたちまちのうちに仲間入りをしてきたわ。

その頃の先生はね、A君のことを憎からず思っていた。

でも、それは“好き”という感情とは少し違っていたかな。

例えるのなら“尊敬”と言った方が近かったかもしれない。

「先生がそれを実感したのは、A君がチームを立ち上げてしばらく経ってからのこと。A君は、B君という男の人を連れてきて先生たちに紹介したの」

B君はA君と同じ高校の出身で、彼の親友とでも言うべき人だった。

これまでずっとスポーツに打ち込んできた人で、正直な話、先生たちとは全然接点がないような感じの男性だったわ。

でもその時A君は、訝しがる先生たちにこう言ったの。

こいつは怪我のせいで頑張ってきたスポーツを引退しなくてはいいけなくなつた。

さぞかし無念だったろう。

さぞかし残念だったろう。

俺は親友として、こいつが落ち込んでいる姿を見ていらなかった。

こいつはクルマに関しては素人同然だが、もし何かあったら俺がすべて責任を持つ。

だからみんな、仲よくしてやってくれ。

「リーダーのA君にそこまで言われたら、先生たちも受け入れるしかなかったわ。内心でどう思っけていてもね」

「嫌だったんですか？」

真琴が問うた。

「そのBさんが先生たちの仲間入りをすること」

「だって」と苦笑しながら理恵は答えた。

「彼ったらクルマどころか免許すら持っていなかったのよ」

でも、ひとたび免許を取って自分のクルマを持った後のB君は、先生たちがびつくりするくらいの速度で上達していったの。

チームの古株たちも瞬く間について行けなくなって、あつというまに彼はA君に並ぶだけの存在に駆け上がったわ。

「B君は、男らしくて積極的なA君とは対称的に理性的で落ち着いた感じの人だった。A君が大将なら、B君は参謀といったところかしらね」

そして、ちょっとわがままなところのあるA君よりもB君の方が周りに気を遣うことが出来たから、チームのメンバーもB君を頼りにすることが多くなっていったの。

先生もその中のひとりだった。

お互いに学生だし、悩みごとにも相談ごとにもそれなりにあったわ。

そういった話を真剣に聞いてくれるB君のことを、先生はいつの間にか好きになってしまっていたの。

「気持ちを伝えたのは先生の方からだった」

興味津々な真琴の視線を一身に受けながら、理恵はちょっとだけ頬を赤らめた。

「そしてこの場所、そうこのベンチに座って初めてのキスをした。気持ちが伝わったのが凄く嬉しかった。きっとこの幸せが続いていくものだ」と心から信じていた」

「違って……いたんですか？」

無言で理恵はうなづいた。

「沢渡さんたち現役世代と違って、先生たちが学生だった頃は彼女が出来ることを少し恥ずかしく思ってしまう世代だったの」

だから、先生とB君もふたりが付き合い出したってことを仲間内には知らせていなかった。

先生もB君もその点では経験不足だったから、積極的にお互いを求めようとしなかったしね。

多分、先生たちの交際に気付いた人間は誰もいなかったのだと思う。

「A君がわたしに告白してきたのはそんな時だった」

それもみんなが集まっているこの場所で、と付け加えて理恵はゆっくりと目を瞑る。

「A君らしく大胆で、まっすぐで、男らしい告白だった。女の子なら誰だって心が揺れてしまいそう、そんなひと言……」

だけど、先生にはB君がいた。

公にはしていなかったけど、ちゃんとした彼氏だと先生は思っていた。

「先生ね、この時大きな間違いを犯したの」

「間違い？」

「そう……本当なら、そのことをA君に告げて断らなくてはいいなかったのに、その時先生は『考えさせて』って答えてしまったの……その場にはB君もいたのに」

仲間たちの前でA君に恥をかかせられないって思いが先生の中にあっただと思う。

だけど、それにしただけでいい言葉だった。

「先生の発言にB君が哀しそうな目をしたのを覚えている。でも彼

は何も言わなかった。責められても仕方のないことだったのに。その後すぐ、先生はふたつめの間違いを犯すことになるの」

A君の告白を断らなかつた先生は、罪悪感に苛まれたわ。

どうしてあんな返事をしてしまったのだらうって。

頭の中が混乱してた。

そして、よりによって先生は、そのことをB君に相談してしまつた。

「絶対にしてはならない相談だった。最低なオナナだったと自分でも思う。自分の彼氏に向かつて、『他の男性から告白されたけどどうすればいい？』なんて聞いたのだから」

口に出してすぐ自己嫌悪に襲われたわ。

普通の人になら怒鳴りつけられていたかもしれない。

でもB君は、静かに、落ち着いていた声で「理恵の好きにしたらいいよ。俺はそれを応援するから」って先生に言つたの。

呆れられたんだって、その時先生は思った。

当然の結末だとも思った。

自分の馬鹿さ加減に泣きそうになつたけど、自業自得だと我慢したわ。

そして、先生はA君と公認の仲になつた。

その時B君から送られた言葉が、先生への信頼から出てきた言葉だと知つたのは随分後になってからのことだった。

もう、すべてが後戻り出来なくなつてからのこと。

「先生はB君からの信頼を裏切つたんだってわかつた時、本当の意味で死にたくなつた。B君は、そんな先生を決して責めたりしなかつたから。それどころか、本当に先生とA君のことを祝福してくれた」

胸が痛かつたわ。

時々そのことを思い出して、ひとりきりで泣いたこともある。いまからでも遅くない、B君とやりなおそう、なんて思ったこともあつたけど、「卒業したら理恵と結婚するんだ」って盛りあがつ

ているA君を前に、そんな話を切り出すことも出来なかった。

「……そして、その日がやって来た」

「その日？」

「A君が死んだの。交通事故で」

短く事実のみを告げられた真琴が、一瞬驚愕の表情を貼り付けた。理恵がかすかに鼻をすする。

そして、真琴から顔を背けるように上を向き、ふたたび言葉を紡いでいく。

「場所はここ、八神街道だった。A君はバトル……要するにクルマ同士で競争している最中にハンドル操作を誤ってガードレールに突っ込んだの」

即死だった。

警察も単なる自損事故として見なしたわ。

事件性はまったくないって。

当時、走り屋の絡む事故なんて当たり前のように起きていたから、それも当然の対応だった。

仲間たちもそれはわかっていた。

峠^{やま}を走る以上、すべてが自己責任。

一緒に走っていた対戦相手を責めるのは筋違いだって。

もちろん、先生だって走り屋の端くれだったから、そのことは理解していたつもりよ。

でも、先生はA君のお通夜に現れたその人に向かって酷い言葉を投げ付けてしまった……「人殺し！ A君を返して」って。

理恵はここで言葉に詰まる。

徐々にあふれ出る感情を必死に抑えているかのようにだ。

「でもそれは仕方のないことなんじゃ——」

短い沈黙にいたたまれなくなった真琴が助け船を出した。

「ボクでも、そう言ってしまうと思うから」

「そう、仕方のないこと。そう思っていたら、きっと先生も幸せだったと思う」

それを受けた理恵はあたかも何かに耐えているような面持ちを浮かべた。

そして喉の奥から絞り出すように決定的なひと言を真琴に告げた。「でもその人は…… A君と対戦していたその人はB君だったのよ」目尻に浮かんだ涙を拭い、彼女は大きく天を仰ぐ。

「感情のおもむくまま先生に責められたB君は、そのまま先生たちの前から姿を消したわ。もう峠^{やま}に現れることもなかった。そして、A君とB君を同時に失った先生たちも、櫛の歯が抜けるみたいにひとりまたひとりと走るのを止めていった」

その段階になって先生は気付いたわ。

わたしは、B君のことが本当に好きだったんだって。

B君の存在が、わたしにとっては必要不可欠なものだったんだって。

だから、先生はあのお通夜の晩、何がなんでもB君を放してはならなかったのよ。

あの時先生がするべきだったのは彼を面罵することじゃなく、本当の意味で彼を“許す”ことだった。

そして、目の前で起きた親友の死に叩きのめされた彼の魂をずっとこの手で支えることだった。

でも、そのことを確信した時には、もうすべてが終わってしまっていた……

「これが、先生の犯した三つ目の、そして最大の間違い」

持ち直した感情を軽く肩を落とすことで表した理恵は、改めて真琴の顔に目をやった。

「B君とは、それ以降一度も会っていないわ。そして、先生はこの歳まで独り身が続けることとなりましたとさ。お・し・ま・い」

少しは参考になればいいけど、という言葉で長い語りを締め括った彼女が目にした真琴は、しかし何かを深く考え込むような表情でひと言もそれに応じようとはしなかった。

数秒経って、ようやく真琴は口を開く。

「質問があります」

らしからぬほどに重々しい口調で、彼女は理恵に問い掛けた。

「河合先生は、いまでもBさんのことが好きなんですか？」

「そうねえ」

右手の人差し指を口元に運びながら理恵は答えた。

「もう十何年も前の話だから、いまでも好きなのかといわれたら違うと思う。でも……」

「でも？」

「もし街中で彼とばったり再会して、その時彼の横に奥さん子供がいたりしたら、先生泣いちゃうかもしれないわね」

理恵の返答は、終わりの方で少し冗談めいて語られた。

それが意図して作られた口振りなのは明らかだった。

おそらく彼女は、ふたりの間に漂う重苦しい雰囲気をなんとかして断ち切りたかったのだろう。

しかし、真琴の姿勢はそんなことでは小揺るぎもなかった。

真琴は言った。真顔で。

「先生はBさんに会うべきだと思います」

その発言に理恵の表情が変わった。

穏和な微笑みが一瞬だけ消失する。

「どうしたのよ、急に」

たしなめるように彼女は言った。

「もしかして、わたしのむかし語りに感情移入しちゃったのかしら」

「ボク、いま聞いた河合先生のお話に感じるものがありました」

理恵の語りかけを完全に無視して真琴は一方的に話を続ける。

「だけど、それが一体何なのか。そして、それを一体どうすればいいのか全然わからないんです。せつかく胸の奥に掴んだヒントを具体的な形に出来なくて、それがもどかしくて、悔しくて……」

だから、いまの先生がBさんと会うことが出来たら——「つつん、先生とBさんが会うことのお手伝いをボクが務めることが出来たら、きつとそこに何かを見付けることが出来る気が、そんな気がするん

です！

「言っていることが滅茶苦茶なのは百も承知です！」

叩き付けるように真琴は吠えた。

「いまボクには現役の走り屋に知り合いが何人もいます。もし当時先生がいたチームの名前がわかったら、多分Bさんについての情報も何か掴めると思うんです」

だから先生、無理を承知でお願いします。

ボクに道標をください。

聞きようによつては、いやそうでなくても真琴の言い分は理屈立つてはいなかった。

確実に理不尽であるとさえ言えるだろう。

しかし、理恵は彼女の願いを快諾した。

最初驚きの表情を浮かべ、次いでその感情を受け止めるだけの役割に徹していた感のある彼女は、保健室にたむろする学園生徒が魅せられる慈愛をそのまま形にしたような微笑みで真琴に伝えた。

「それが、沢渡さんの前進に必要な糧となるのなら、先生あなたのお願いを拒んだりしないわ」

言いながら理恵は真琴の頭部をその豊かな胸元へと抱き寄せる。

彼女は告げた。

だって、わたしはあなたたちの“先生”だし、あなたはわたしの大切な“教え子”なんだもの。

「だけど沢渡さん。その代わり、いまから言うことだけはここで先生と約束して欲しいの」

優しい保険医の豊かな胸に半分顔を埋めながら、真琴はさっと視線を上げた。

自分に向けられた教え子の目をまっすぐに捕らえた理恵は、誤解のしようもないほどわかりやすい言葉で真琴に言った。

明日からは、いままでどおり明るく笑ってすごすこと。

それが、理恵の真琴へ送った要求だった。

「いいわね？」と押された念に真琴ははつきりとうなづいて応え

た。

「じゃあ、先生のいたチームの名前を教えるわね。一度しか言わないから、よく聞くのよ。先生のいたチームの名前は――」

理恵の唇がその名を紡いだ。

センチンス

それはたちまち短い単語を形作り、真琴の耳へと進入を果たす。

刹那、真琴の双眸が驚愕の余り皿のように見開かれた。

間違いなく彼女は言った。

「ミッドナイトウルブス」っていうのよ、と

四章：ミッドナイト（４）

翔一郎のBE-5は、ほとんど無駄な切り返しを行うことなく指定された駐車スペースへと進入した。後退で、バックだ。

左右の白線から車体までの距離はそれぞれほぼ同等であり、それは運転手が指定位置の中央に愛車をピタリと到達させた何よりの証拠であると言える。

そして、後輪がタイヤ止めに接したことを軽い衝撃をもって確認すると同時にブレーキを踏みシフトレバーをRからPの位置へ移動させた翔一郎は、そのまま愛車のエンジンを切って運転席から外に出た。

午後六時。

この季節だと空の端はまだ赤くなつてはいないが、そろそろ夕食を迎える家庭は数多かろう。

そしてそれは、仕事を終えて職場から帰宅する翔一郎が借用している月極駐車場へと到着する平均的な時間帯だった。

ばたと片手でドアを閉め小さくその場で伸びを打った翔一郎は、ふと些細な違和感を感じ、周囲に対して目を配った。

そして次の瞬間、幾分見慣れかけていた存在が定位置にないことを見て取る。

違和感の原因はこれかとひとりうなづき、翔一郎は主のいない空の駐車スペースに何となくだが視線を留めた。

その場所は、いつもなら真琴の愛車、EF-7「CR-X」が停まっているはずの空間であった。

言うまでもないが、借り主の名義は沢渡家となっている。

実のところ沢渡家には屋根付きの立派なガレージが隣接して存在し、普段は一家の首長である哲朗氏真琴父が所有する古びたセダンクラウンがその中に収められていた。

ただ残念なことに、そのガレージには二台のクルマを駐車するだ

けの空間的余裕がなく、真琴が自家用車を購入する際に車庫としてその場を登録することが不可能だった。

聞くところによると、子煩悩であることについては並ぶ者などいない哲朗氏はこのガレージの主である自己の愛車を屋外駐車場へと移し代わりに愛娘の「CR-X」を迎えようとしたらしいのだが、この時は流石に真琴の方からその提案を固辞したようだ。

ゆえに、沢渡家は改めて近隣の月極駐車場で一台分の空間を契約し、ひとり娘の新たな“脚”をその場にて保管する旨を決定した。

その場所が翔一郎が借りている駐車場と同一であったことは、地理的条件からしてごくあたりまえのことであった。

その「CR-X」が、どこにも見当たらなかった。

盗難にあったという薄い可能性を除外すれば、同車の所有者たる真琴本人がいずこかへ乗り出して行ったことに間違いはない。

こんな時間にお出掛けとは珍しいこともあるものだ、と翔一郎はそれを内心で訝しんだ。

真琴の通う尽生学園は、同校の生徒に対し自身の運転による自家用車通学を許可してはいない。

まあ仮に学園側が許可を出していたとしてもそれを堂々と実行するだけの強者がそうそういるとは思えなかったが、とにかく学校と自宅との往復に愛車を使用する学生など同校には存在していないことだけは確実だった。

事実、自分だけのクルマを手に入れた真琴ですら、いまだに通学は原付と電車との併用に留まっていた。

そんな真琴の相棒が^{CR-X}この場にいないということは、彼女は一旦学舎からの帰宅を果たしてからふたたびどこかへ出掛けたという計算が成立する。

大概なら夕食の準備に追われているであろうこの時刻に真琴が炊事場から離れるなど、翔一郎はここ何年も見たことがない。

何か急用でもあったか、それとも――

不意に出所不明の不安感に襲われ、彼は思わず自らの携帯電話の

画面を開いた。

幸いなことに、不在着信の形跡や未開封の電子メールなどはひとつも見当たらなかった。

少なくとも自分の知らない緊急事態が発生した訳ではなかったのだと軽い安堵を覚えつつ、同時に翔一郎は真琴の外出先についてふっと思いを巡らした。

多分「ロスヴァイセ」の誰かと会うために出掛けたのであろう、と翔一郎は直感した。

それも、おそらくは倫子のところじゃなかるうか、とまで当たりを付ける。

むろん、そこに確信があった訳ではない。

ほとんど彼自身による思い込みの世界だと断言しても構わなかった。

しかしその時、翔一郎は自らが思い浮かべた杜撰な推測を、いかなる理由からか欠片も疑ってみたりはしなかった。

いつもの彼からはまったく考えられもしない、実に穴だらけでいかげんな論理展開である。

もしかしたら彼の中にある「そうあってほしい」という願望に近い何かが、この時の翔一郎にそうした姿勢を強いていたのかもしれないかった。

少なくとも、そう疑うにたるポイントは随所に見受けられた。

そもそも壬生翔一郎という人物は、沢渡真琴という個人について「内圧を高めるだけ高めて自爆するタイプ」であると認識していた。もっとも、その認識内容が事実であるという何かしらの根拠を翔一郎が握っていた訳ではない。

しかし、これまでの彼がそのことを念頭に置きつつ、隣に住むひと回り以上年下の娘との関係ままごとを継続してきたことは紛れもない現実であった。

それは、時に自らを道化とすることも厭わず、翔一郎が適度に真琴のガス抜きを繰り返し返してきた歴史だと言い換えてもいい。

もちろん真琴の側がその経緯をどのように考えていたのかは定かでないが、少なくとも人間関係の主導権を実質的に翔一郎の側が掌握していたことは確かであった。

そして、そういった微妙な繋がりが一気に綻びかけたのがあの八神街道における出来事だった。

あの晩、翔一郎はそれまで隠しとおしていた自身の醜惡な過去を一部暴露してまで彼女の好意を受け取ろうとはしなかった。

それは、真琴にとって余りに大きな衝撃であったのだろう。

むろん、翔一郎にもそれは理解出来た。

老若男女にかかわらず、自らが捧げた想いを相手に拒否されるということは限りなく重い現実に違いない。

だが、翔一郎はその行為が彼女にもたらす震度について完全に目測を誤っていた。

よもや“あの”真琴がここまで陰を引き摺る羽目に陥ろうなどと、彼は想像してすらいなかったのである。

これまでならば問答無用でその重荷を半分担いでいたであろう翔一郎も、流石に自分自身がその原因となれば軽々に手を差し伸べる訳にもいかなかった。

それは、自らが真琴に与えた打撲傷に新たな打撃を加える結果になりかねないと判断したからだ。

さらに翔一郎の計算が狂った理由を挙げるなら、それは極めて社会的な存在であると彼が心から信じていた妹分真琴が、実は意外なほどに他者への依存を嫌っていたという想定外の実事だった。

早い話、真琴は翔一郎以外の人間に対して自分の弱みを見せようとしないのである。

そして、彼女の見せたその態度こそ翔一郎自身が喝破した「内圧を高めて自爆する」彼女の本質を何よりも確かに物語っているという事実、今更ながら彼は危機感を覚えたという訳だ。

改めて顧みれば、こうなることはあらかじめ予想出来てしかるべきものだった。

翔一郎はそのことを悔やみ、日々密かに悩んですらいた。

彼が真琴の前でこれまでどおりの言動を心掛けていたのは、実は本件がある程度沈静化するまで彼女を刺激しないようにとの気配りからであつた。

そしてそれは、抱え込んだストレスで圧壊した真琴が一体どんな行動に移るのかを翔一郎がまったく予測出来なかつたことから、いまでは悪い意味で徹底したものへとなつていた。

不幸なことに、それが完全な逆効果となつていたことを彼が知るのは、もう少し時が経つてからのことだつた。

そんな訳だから、真琴が「親しい他者への積極的な接触」といういままでにない選択をした可能性に直面した翔一郎が、ある種の希望的観測に支配されたのも致し方のないことだと言える。

彼の本心を言葉にして表せば、「ようやく自分以外の誰かを頼つてくれたか」といつたところになるうか。

あからさまに“濃い”趣味によつて結ばれた遊び仲間たちとの交流は、心理的問題を解消するために効果的な道筋のひとつである。

自らが没頭する遊びを周囲から理解されないものひとつとして認識している彼らは、その同志たる同好の輩に対し人間的な利害得失を度外視するほどの親密さをもたらすことが多かつたからだ。

例えば悪いが、最近流行の「動物による癒し」アニマルセラピーとやらに極めて近い。

そして、翔一郎は実体験としてそのことをよく知つていた。

彼が交流した「峠やまの走り屋」という人種は、端から見れば非難の対象となる「交通ルールの無視」をある意味確信犯的に行つている関係上、共犯者同士が抱く同調思考によつて新しい仲間を懐深く受け入れる傾向が強かつた。

それはある種の選民思想だとも言える。

確かに、それが一歩間違えば独善的な集団心理に陥りかねない危険性をはらんでいることに翔一郎も異論はない。

莫迦をやつて司法の世話になる走り屋どもが後を絶たないという

現実が、見事にそれを証明している。

しかし、そこに存在する「おのれそのものが無条件に受け入れられている」という安心感が、何ものにも代え難い喜びであるという事実まで否定させはしない。

翔一郎がもし熱弁を振るう立場にあったなら、間違いなくそのように叫んで拳を上げたことだろう。

事実、大学時代に膝を負傷したことで重篤な挫折を味わい、自ら深淵に向かって歩きだそうとしていた翔一郎を救ってくれたのは、高校時代から続く彼の親友、長谷部崇が率いる走り屋集団、「ミッドナイトウルブス」の面々であった。

あのきさくな連中が次々と投げ掛けてくる無遠慮だが駆け引きのない仲間意識に、当時の翔一郎がどれほど救われたことが。

だから、自分の予想どおり真琴が倫子たち八神街道の仲間に背負った重荷を微少でいいから委ねる決断をしてくれたのなら、それは実に歓迎すべき事柄だと翔一郎は思っていた。

そしてなるうことなら、真琴にとつての「ロスヴァイセ」が自分にとつての「ミッドナイトウルブス」と同じ存在となってもらいたいものだ狼どもと心の底から祈った。

いや、あの三澤倫子シャイニング・ザ・ブルがいる限り、決してその期待を裏切ることはないだろうと思いなおす。

彼女からは、かつて自らを支えてくれた大切な仲間と似かよった空気が感じられるからだった。

羨ましいな。

率直に彼はそう思った。

と同時に、まったく別の疑問符が翔一郎の脳裏へと浮かびあがる。そして彼は、無意識のうちに自分自身へと問い掛けた。

なぜそれが“羨ましい”なのだ？ “懐かしい”ではなく――

『何をわかりきったことを』

唐突に彼の前へと現れたもうひとりの翔一郎が嘲るように言い放った。

『そんなのは決まっているだろう。おまえの中に、まだたつぷりと未練が残っているからさ』

未練か。なるほど、確かにそうだ。

その侮辱に近い言われ方にも動じず、翔一郎は深く得心した。

「走り屋」として鳴らしていたあの頃。

いまからは想像も出来ないほどエネルギーギッシュだったはずの自分は、本来ならあり得ていたはずの可能性におのずから背を向けた。

競技者としての未来を失った自分の眼前に突如として現れた新しい門。^{ランナー}
^{ゲート}

親友に手を引かれてそこを潜った自分が見たものは、無限に広がっているかのようにさえ感じられる非日常の世界であった。

若かった自分は、文字どおり夢中になってその地を駆けた。

ありとあらゆる空気を貪欲に吸い込み、おのれの中で燃焼させ、それを血肉として結果という新たな歴史を刻み付ける。

もし人生に最良の“時”というものがあるのなら、あの“時”こそが自分にとってのそれなのだ。翔一郎は改めて確信した。

未練。

そうだ。間違いなく自分は、あの瞬間を激しく燃え盛りながらすごしていた。

その事実疑いなど微塵もない。

ではなぜ、いまになって俺はあの頃に未練などを覚えているのだろう。

あれ以上の“時”は俺の人生にはない。

決して。そう、決してだ。

そう言い切ることにやぶさかではないにもかかわらず、なぜ俺は

『本当にそうか？』

ふたたびもうひとりの翔一郎が茶々を入れた。彼は腕組みしながら口元を歪ませる。

『では聞くが、おまえはあそこで本当に“燃えつきた”と言えるの

か？ 目の前に立ちはだかった壁にぶちあたり、尻尾を巻いて逃げ出したへたれ野郎が、心の底からそう断言出来るのか？」

そうおのれの分身に罵られた翔一郎は、あえてその言葉に反論することなく、ずっと愛車BE-5のボンネットへ右手を置いた。

「わかつているさ」

うつむきながら彼はつぶやいた。

「自分がへたれ野郎だなんてことは」

そうだ。そのとおりだ。

「“走り”から脚を洗った」「そんなものに興味などない」なんて嘘っぱちだ。

それは、このBE-5のありようが見事なまでに証明している。

見るがいい、この手の入れ具合を。
チューニング
ドライビングフィール

「運転感覚を向上させるため」なんて言い訳をかましているが、

その本質は走行性能を底上げするための改造以外の何ものでもない。特に足回りの調整については、何度も何度も自ら八神街道を走り、そしてこだわった、徹底的なまでのセッティングが施してある。

そんなこんなで、これまで投入してきた金額は、BE-5こいつを新車でもう一台買えるほどになっているはずだ。

俺はあの時、間違はなく、夜の峠俺の戦場”から逃げ出した。

そして、自らそれを振り返ることのないよう、自分自身に嘘をつきながらこれまでの人生を生きてきた。

あの場所でやり残したままのことなんて、それこそ山のようにある。

逃げ出したことを後悔していないなんて言い訳は、口が裂けたつて言えるものじゃない。

もし出来るものなら、もう一度あの生命そのものを燃料とした真っ青な炎でこの身を焦がしてすらみたい。

そう、出来るものならいますぐにでも。

それが本音だった。

それが本心だった。

いままでの自分は嘘つきだったとはつきり認めてしまえば、随分と楽になるのだろう。

そして、真正銘自らの思いを実行に移すことが出来たなら、充実感すらも覚えるのだろう。

それを想像することは余りにも容易い。

口ではいろいろばやいていたが、高山や真琴ドライビングに運転を教授している時間は本当に楽しかった。

芹沢聡が駆るFD-3S「RX-7」を相手に久方ぶりのバトルにおよんだ瞬間は、まさに身震いするほどの快感が背筋を駆け抜けていた。

忘れない。忘れたくない。

ひとたび走り屋としての感覚を思い出してしまった心身が、再度それらを忘却することを必死になって拒んでいた。

だが、翔一郎がとある一線を越えようとすると、決まってあの光景が彼の意識へ割り込んでくるのだった。

それは、ガードレールに頭から突っ込んだ白いAE-86の姿。

完全に大破したその運転席側のドアを勢いよく開けた瞬間、彼の眼に飛び込んできた血塗れの親友の姿。

そして、必死で感情を抑え沈黙する翔一郎に向かって、泣きながら感情を叩き付けてくる黒衣の女性の姿。

彼女の叫びが耳の奥から離れない。

「人殺し！ 祟を返して！」

その声が耳の奥に木霊する度、翔一郎の中から新たな一步を踏み出す勇氣という二文字が雲散して消えていく。

『よくわかっていないじゃないか』

もうひとりの翔一郎は、改めて彼のことを嘲った。

『彼女の言っていることは間違っちゃいない。おまえは人殺しさ。

人殺しは、大人しくこの世の薄暗がりを背中を丸めながら歩くものだ。もうおまえを照らす光なんてものはこの世に存在しないんだよ』

「だよな……」

そうつぶやいて、翔一郎は小さく肩を落とした。

「他人の輝きを羨む権利なんて、俺にはすぎた贅沢だ」

気が付けば結構な時間が経過していた。

いささかうつの入った精神を無理矢理に叩き起こし、翔一郎は自宅に向かって歩き出した。

見ると、その玄関先の路上に一台の愛らしいクルマが停まっている。黄色い軽のオープンカーだ。

「コペンか。ここいらじゃ見ないクルマだよな」と感想を述べつつ、我関せずとばかりに彼はそのまま歩を進めた。

「コペン」の運転手がたおやかな仕草で愛車から降り立ったのは、翔一郎が一〇m程度の距離にまで近付いたその時だった。

翔一郎の脚がぴたりと止まった。

その双眸が驚愕の色に染まる。

それは、彼と同年代であろうと推測されるひとりの女性であった。地味な落ち着いた衣装で上下をまとめた彼女は、翔一郎の姿を認めるやいなや、すべての者を魅了する素敵な笑顔を浮かべてみせた。さつとその場に吹き込んできた微風が、その肩まである黒髪をさらりと小さくなびかせる。

刹那の後、重々しい沈黙がふたりの間を支配した。

呆然と立ち竦む翔一郎の口がやつのことと言葉を紡いだのは、それから数秒が経過してからのことであった。

彼は、信じられないものを目の当たりにしたかのような表情を貼り付け、そしてこうつぶやいたのだった。

「理恵……なのか？」

「ひさしぶりね。ミブロー」

そんな翔一郎に対し、彼女——尽生学園にて保険医を務める河合理恵は、まるで旧友に会うがごとき気楽さで第一声を放った。

四章：ミッドナイト（5）

河合理恵。

それは、壬生翔一郎という人物にとって決して忘れることの出来ない女性であつた。

いやむしろ、それはもう忘れることの許されない存在として、彼の心中深く克明に刻み付けられていたのだと言つていい。

翔一郎が彼女の持つそのたおやかな姿を目にするのは、もう十年ぶりのことになるだろうか。

十数年という年月。

それは、ある者が大切な思い出を忘れ去つたとしても他者がそれを責められはしない、長い長い時の流れであつた。

だが彼は、あの日の夜、この女性が初めて見せた激情とおのれ目掛けて叩き付けてきた負の感情とを、いまなおはつきりとおぼえていた。

闇よりも黒い喪服に身を包んだその時の理恵は、これまで見せてきた彼女の印象からは想像も付かないほどに取り乱し、眼前の翔一郎目掛けてまっしぐらに噛み付いてきたのであつた。

渾身の力で彼の両襟を掴みあげた彼女は、文字どおり声をからさんばかりにして絶叫した。

「人殺し！ 祟を返して！」

滂沱の涙がその眼からあふれ、なだらかな彼女の頬を伝つて滴り落ちていく。

翔一郎はそんな彼女を目の当たりにし、ただひたすらぐつと奥歯を噛み締めているしかなかった。

そうしなくては、きっと彼自身が落涙してしまうであらうからだった。

それは、理恵の幼なじみであり同時に翔一郎にとって掛け替えのない友人であつた長谷部崇を送る通夜の晩に起きた小さな出来事で

あつた。

崇は、自らが引き起こした交通事故により、愛車A E - 86と共にこの世を去った。

それは、公道における走り屋同士の競争、すなわちバトルの場において発生した痛ましい事故であつた。

その時、彼と一緒に八神街道を駆けていた翔一郎は、目の前で起きた惨劇、その一部始終をただ黙って静観していることしか出来なかった。

やむを得ないことであつた。

激しく制御を失った他者のクルマをおのれの手でどうにか出来るなどという存在は、もはや人の身を越えた神仏以外にはありえないであろうからだ。

彼の死因は頭蓋骨骨折による脳挫傷。

ほぼ即死と言える状態だつた。

クラッシュした彼の愛車へと駆け寄り、強引にひしゃげたドアを引き開けた翔一郎は、一瞬にしてそれを察した。

理性というものがあつというまに弾け飛び、吹き出した感情が彼の肉体を突き動かした。

そして、既に事切れているであろう友人の次第に冷たくなっていく身体を必死になって揺さ振りながら、翔一郎は後悔の余り泣き叫んだ。

なぜなら、崇を死に誘った八神街道でのバトル——それを彼に挑んだ者こそ、他ならぬ翔一郎自身であつたからだつた。

「大学を卒業して就職したら、俺は理恵と結婚する」

深夜のPAで大好物の缶コーヒを飲みながら、崇は傍らの翔一郎に向かっていつもそんなことを言っていた。

明らかな惚気であつた。

そして翔一郎は、彼から放たれる幸福の余韻をいつも複雑な心境で受け止めていた。

それは、崇の愛した女性である河合理恵が、ほんの少し前まで翔

一郎のすぐ横で微笑んでいてくれた大切な女性こいびとであったからだ。

自らが彼女に送った愛情が崇に劣っていたなどと、翔一郎は微塵も思っていないかった。

もちろん、理恵によって両天秤に掛けられたのだとも考えてはいない。

だが、彼女理恵は最後の最後に優柔不断をあらわにした頼りない自分ではなく、この男気あふれる人物崇を自らの伴侶として選択した。負けたな。

そう思う痛烈な悔しさがある反面、こいつが相手なら仕方がないか、などと妙に納得する自分自身も彼の中には存在していた。

崇も理恵も、いまの自分にとって欠かすことの出来ない唯一無二の存在だ。

もし、理恵を巡って崇と争えば、よくて片方、最悪なら両方との関係を失うだけの覚悟が必要だった。

だったらどうすればいい？

簡単だ。俺ひとりが黙って身を引けばすべてが丸く収まるじゃないか。

そうさ。“いま”を満足させるためなら、むしろ喜んでそうすべきた。

翔一郎は、そう無理矢理な理屈を自分自身に言い聞かせ、心の奥底でうごめく暗い淀みを力ずくで押さえ付けた。

だが、その決断を確固たる現実にするためには、何かおのれに対してケジメとなるような一件が必要であると翔一郎には感じられた。だからこそ、彼はそれまで一度も牙をむいたことのない親友に対し、ひとりの走り屋として挑戦状を叩き付けたのであった。

勝ち負けなどどうでもよかった。

ただ、自分が惚れたオンナを委ねるオトコと一度でいいから駆け引きなしの真っ向勝負を試みたかった。

むろん、それが余りに自己中心的な理由であることは百も承知であった。

そして、ある意味でそれが極めて理不尽な動機を発端としていることも、自分自身でわかりすぎるほどにわかっていた。

それゆえに、翔一郎は崇を事故に導いたのは自分の責任なのだと一方的に思い込んだ。

莫迦な真似をした俺に罰が当たったんだ。

彼は心の底から自らを責めた。

本来、事故で死なねばならなかったのは愚かな真似を企てた俺の方だ。

崇は、俺の親友は、この俺が受けるべき罰の巻き添えを食らったのだ。

あいつがたったひとつしかないおのれの人生を失ったのは、この俺の身代わりとなったからに他ならない。

あいつには、あいつにはなんの落ち度もありはしなかったのに――全部、俺のせいだ。

そう……全部、俺のせいだ！

その時の翔一郎を襲ったもの、それは理屈ではなく感情の問題であつた。

「俺にはあいつが必要なんだ。だから、俺はあいつを守ってみせる。誰にも譲りはしない。それが例えお前であつてもな」

無邪気に笑う崇の顔が、鮮明にまぶたの奥で浮かんでは消える。

どすんと鳩尾に一撃を食らったような重々しい嘔吐感が胸中全体に込みあげてきた。

改めて翔一郎は、眼前で泣き崩れる女性の姿に目を向けた。

心から信頼し、そして愛していたであろうパートナーを唐突に奪い去られた理恵の心情を思いやった翔一郎は、もうただのひと言も発することが出来なかった。

彼女が放つ恨み辛みも何もかも、例えそれがどれほど痛烈な言葉の刃であるとも、彼はすべてをその身で受け止める覚悟を決めてここに来た。

いわゆる自己満足の範疇であつたとしても、それが自らの行える償

いのひとつであるのなら自分にはそれを実行する義務がある。

そう心から信じて、翔一郎はこの場へと足を運んだ。

だが、その決意ももろいものだった。

崇の親戚や知人、八神街道の仲間たちが見守るなか、両脇を抱えられるように斎場の奥へ消えていく理恵の背中を見送った後、いたたまれなくなつた翔一郎は黙つてその場を後にした。

そして気が付いた時、彼は近所にある児童公園でまっすぐに立つポプラの大樹を前にしていた。

誰もいない深夜の公園。

次から次へと湧き上がる感情を抑えきれず、翔一郎は獣のように吠えた。

そして、そんなことをしてもなんにもならないということを熟知しながら、自らの拳を眼前にある硬い大樹の幹へ向け何度も何度も叩き付けた。

鈍い音がして拳に激痛が走った。

皮がむけ血が滲み、下手をすれば骨まで砕けたのではなからうかという痛みのなか、それでも翔一郎はその愚かしい行為を止めなかった。止められなかった。

その対象となつたポプラの木は、それから十数年が経過するいまでもこの公園のシンボルとして健在だ。

あいかわらず大きな掌に似た緑の葉をたくさん茂らせ、この場所で遊ぶ子供たちを見守るかのごとく長い枝を周囲に伸ばしている。

そんな大きな存在を半ば呆けたように眺めながら、翔一郎と理恵は左右に並んだブランコの上でその身を揺れるにまかせたまま、互いに口を開こうともしなかった。

いささか秋の臭いを携えた涼風がふたりの間を駆け抜けていく。どれぐらいの時間がすぎたのだろうか。

そんな気まずい沈黙を打ち破つたのは翔一郎の放ったひと言だった。

「元氣そうだな」

そうぼつりと彼は言った。

「まだ……ひとりなのか？」

「そうみたいね」

まるで他人ごとのように理恵が応じる。

「でも、それはお互いさまだと思うけど」

「まったく、世の男どもはオンナを見る目がなっちゃいないな」

苦笑いする翔一郎がそうばやいた。

「君ほどの優良物件に食い付かないなんて、草食系にもほどがある
つてもんだ」

そして、小さくつぶやくように、こう言葉を付け加えた。

「俺のせい、だな……」と。

その言葉の裏にある意味を、この時理恵は誤解することなく感じ
取った。

それは、「彼女がいまだ独り身である理由は、自分がそのパート
ナーをこの世から奪ってしまったからだ」というあからさまな罪悪
感であった。

ここで彼の言葉を否定して首を左右に振ることは、あるいはいま
の理恵にとって簡単な行為であったかもしれない。

しかし彼女はあえてそうすることなく、翔一郎の発言を素直に肯
定することで応えた。

「そう、あなたのせいよ」

どこか寂しそうな微笑みを浮かべて、理恵は翔一郎にまっすぐ告
げた。

「だって、あの時からこれまでの間、当時のあなたたちほどの男性
に、わたしまだ出会えていないのだから」

少し驚いたような顔をして翔一郎は理恵を見た。

彼女の方もまた、翔一郎へ視線を向けていてくれた。

改めて苦笑いを浮かべた翔一郎が、いささか自嘲気味に理恵へ問
うた。

「それは、“誉められた”と受け取っていいのかな」

「莫迦なことを言わないで」

思わず相好を崩しながら理恵は否定の言葉を放った。

そして彼をからかうような口振りで「絶賛しているのよ。わからなかった？」と続けてみせる。

軽く翔一郎が吹き出した。

「変わらないな、理恵は」

すつと背筋を伸ばし翔一郎は言った。

「で、今日は一体どうしたんだ？」

「実は、ある人とちよつとした約束をしたの」

こちらにも応じて姿勢を正し、彼女は答えた。

「その人との取引で、わたしがむかし付き合っていた人ともう一度会いなさいってことになった訳。そうなると、わたしが付き合ったことのある男の人って、もうこの世にはあなたしかいないから」

「済まなかった」

その台詞を自分に対する非難のそれだと受け止めた翔一郎は、咄嗟に謝罪の言葉を口にした。

それはあの通夜の晩、悲しみに暮れる理恵に告げようとして彼が果たせなかった、悔いの残るひと言であった。

はつきりと陰の認められる表情で翔一郎はなおも続ける。

「あの時、俺が^崇あいつをバトルなんかに誘わなければ、いまごろ君たちは……」

「事故よ」

落ち込んだように暗く肩を落とす翔一郎とは対称的に理恵は明るくそう言つと、いきなりブランコの上に立ち上がった。

そして、自らを見上げてくる翔一郎の視線を尻目にゆっくりとそれを前後に漕ぎながら、彼女は淡々と言葉を紡いでいく。

「あれはあくまでも不幸な事故。あなたに責任なんてありはしない。そう、最初からありはしなかったのよ」

「理恵……」

「もしあの一件であなたに責任を取ってもらうことがあったとした

ら、それはあなたがわたしたちの前からいなくなってしまったことかしらね」

だって、あなたは自分自身の後始末もせず、すべてを投げ出し逃げていつてしまったのだから。敵前逃亡よ、それって。

だから、残された仲間たちが一体どんな思いであなたの足跡を見ていたのか、あなたは全然知らないのでしょうか？

あの「ミッドナイトウルブス」参号機、「八神の魔術師」とまで言われたオトコが、どうしてそれが“責任逃れ”なのだと気付かなかったのかしらね。

「もつとも」

不意にうつむいて理恵は自嘲した。

「あの時のあなたにそれを強いたのはわたしだったのかもしれないから、それを責める権利はわたしにはないか」

「俺を責めないのか？」

話の筋を折るような唐突さで翔一郎は理恵に問うた。

「俺は、さっき君が目の前に現れた時、どんな風に罵られても甘んじて受け止めよう、そう覚悟を決めていたんだが」

「そうね」

翔一郎の問いを受けた理恵は、まるで世間話でもしているかのような口振りでそれに応じると、次いで空の彼方に視線を投げた。

彼女は告げた。

「あなたが結婚していて、奥さん子供と一緒にいるところに出くわしたなら、包丁でぐさつとやっていたかもね」

後半部分は完全な冗談であつたのだろう。

理恵の明るい表情も、それを明確に裏付けていた。

しかし、翔一郎は彼女にならそうされてもよかったと思っていた。そうされることで自分の贖罪が果たされるのであれば、それも納得出来る終わり方だと考えてすらいいた。

「残念、だったな」

だがそんな心中をおくびに出すこともなく、翔一郎は軽口を返し

た。

「俺は、あいかわらず俺のままだ」

「本気でそう思っているの？」

真顔で理恵が否定した。

「自分がむかしのままだなんて」

「違うのか？」

翔一郎の確認に、彼女は大きくうなづくことで返答した。彼女は告げた。

「本当はね。今日、あなたの顔を見ることが出来たら、それでおしまいにしようと思っていたの。それでも一応相手との約束は果たせる訳だし。でも——」

「でも？」

「いざ、あなたの姿を目の当たりにしたらそうも言っていられなくなつて」

「懐かしい顔だからな。それも仕方がないさ」

「違うわ」

理恵は哀しそうに、そう本当に哀しそうに小さく首を左右に振る。そして、少しの間唇を閉ざすと、意を決したようにゆっくりと、ひと言ひと言を噛み締めながら彼に言った。

「あなたが……余りにも変わり果てていたから」

翔一郎の動きがぴたりと止まった。

刹那の沈黙のなか、ブランコの金具が小さく耳障りな音を立てる。ずっしりと重々しい空気が、しばしふたりの間を支配した。

「変わり果てた……か」

大きく天を仰ぎながら、翔一郎はそれに応えた。

「理恵の言うとおりなのかもしれないな」

「ええ」

理恵がその後の言葉を引き継ぐ。

「あなたが後ろばかり見て生きてきたことがはっきりとわかったわ。わたし、自分の目を疑った。そして改めて後悔した。あなたをそん

な道に追いやったのは、わたしなんだって」

「でもね、ミブロー」と彼女は言った。

「いまのあなたには、いまのあなたを見てくれている人が必ずいると思うの。もうお互い、過去に縛られる生き方は止めましょう」
返答に窮する翔一郎を顧みず、理恵はぱつと勢いよくブランコから飛び降りた。

「とおつ」という場違いな掛け声その口から放たれ、彼女は両手を広げて着地する。

そして、その手を腰の後ろで組んだまま、理恵はくるりと振り返りふたたび翔一郎と視線を合わせた。

「わたし——」

彼女は決然と宣言した。

「今日を境に崇のことは忘れるわ。わたしを好きだと言っておきながら、ぷいっと天国に逝ってしまった自分勝手なオトコなんかに、もうこたわってなんていられないもの」

そして、一緒にあなたのことも忘れることにする。

そうしないと、わたしだけでなく、きつとあなたも前に進めないでしょうから。

「本当は、もっと早くこうしていればよかったのよね」

心なしか潤んだような瞳を見せて、理恵は翔一郎に歩み寄った。

彼女は言った。

「そうしていれば、わたしもあなたも、もっと違った現在いまを迎えられていたでしょうに」

「君は、それでいいのか？」

顔を上げた翔一郎が尋ねる。

「俺のことはともかく、あいつのこと……崇のことを忘れても、それでも君は——」

「構わないわ」

その台詞に割り込む形で理恵は断言した。

「好きだった人を忘れるのは凄く辛い。それは事実よ。でも、いま

のわたしには好きな人が苦しんでいるのを見る方が何倍も辛いの」ほろり、と何か小さい光の粒が彼女の目尻からこぼれ落ちた。

だが、理恵はそれを無視して蕩々と翔一郎に向かって語り続ける。まるで、彼女がこれまで貯めていた想いを一気に吐き出すかのよう。

そして、翔一郎はただ黙ってそれを聞いていた。

自身が犯した若さゆえの過ち。

それそのものを胸の奥で何度も何度も繰り返して後悔しながら。

「ミブロー」

長かった言葉の終わりに、理恵は翔一郎に向かって呼び掛けた。

いつの間にかその口調が落ちていたものへと変わっていた。彼女は言った。

「最後にひとつ約束して欲しいことがあるの。もし、ほんの少しでいい、いまでもわたしのことを想っていてくれるのなら、この場でわたしに誓って欲しいことが」

翔一郎はうなづいた。

言葉で是という意思表示はしない。

だが、理恵はそれこそが彼一流の真剣極まる受託表現であることを知っていた。

変わっていない。

理恵の胸中に、甘酸っぱい懐かしさが怒濤のごとく込みあげてきた。

彼の本質はまるで変わっていない。

むかしの、あの頃の翔一郎のままで。

もしかしたら、という希望が一瞬彼女の心根を揺り動かした。

いま彼自身を束縛する強靱な鎖を自らが断ち切ってあげられたなら、あの時の続きをふたたび彼と共に演じられるかもしれない、と。

だが、彼女はそんな自分にだけ都合のいい願望を即座にどこかへ投げ捨てた。

もう、すべてが遅いのだ。

翔一郎には、彼を本当に必要とする存在が側にいる。

まさかあの頃、翔一郎の後ろをちょこちょこと付いて回っていた幼子が彼にとつての道標になるなどとは思ってすらなかった。

十数年。

小さな女の子が大人の階段を登り始めるまでの長くて短い月日の経過。

その時間は自分と彼との間に出来た些細な溝を、いまや巨大な烈溝へと変えてしまっていたのであった。

人は決して神にはなれない。

ゆえに、ひとたび過ぎ去った時間を巻き戻すことなど不可能なのだ。

人の身に出来ることは、文字どおりいまこの瞬間を生きることしかない。

だからこそ、自分はいまの自分に出来ることを行わなくてはならなかった。

そしてそれは、彼の魂を拘束している戒めをいくらかでも寸断し、「壬生翔一郎」という男性をその未来へ向かって解放してあげるにとだけだ。

理恵はそう考えて口を開いた。

あるいは、そう自分自身を信じ込ませて彼に願った。

「もし、あなたの前にあなたを導いてくれる人が現れたなら、その導きを受け入れるにしろ拒むにしろどちらでもいいから、その“想い”だけは真剣に受け止めてあげて欲しいの」と。

「よろしくて？」

そう念を押す理恵に向かい、翔一郎ははっきり「わかった」と言葉を返した。

それをしかと耳にした理恵は満足げに微笑み、大きく天に向かって両手を伸ばした。

「あゝすっきりした」

ぐっと全身で伸びを打ち、誰に言うでもなく晴れ晴れとした表情

で彼女は宣した。

「これで少しは肩の荷が下りたかな。ミブローはどう？　少しでも楽になったかしら」

「正直言つてわからないな」

翔一郎は率直にそう告げる。

その回答を受けた理恵は短く「それでいいのよ」と応えた。彼女は言つた。

「仮にいまわからないことがあつても、きっと近いうちにわかる時がくるわ。わたしはそう信じている。あなたのことを信じている」
そしてひと呼吸置いた彼女は、すつと背筋を伸ばし、かつて本気で愛していたオトコに向かって別れの言葉を口にした。

さようなら、翔一郎。

わたし、これであなただけのことを忘れるけど、でもそれでも、わたしは「壬生翔一郎」を絶対に忘れない。忘れないわ。

だからもし次に会う機会があつたなら、その時こそお互い新しい道を歩き出した者同士としてむかし話をしようね。

四章・ミッドナイト（6）

「エム・スポーツ」での仕事を終えた倫子が自宅に帰ったのは、夜の八時を幾分すぎてからのことだ。

日が昇っているうちは十分晴天であると言えた今日の天候もその頃までには徐々にぐずつき、いまでは時折雨粒を滴らせるまでになつていた。

「嫌な天気」

ぱらぱらと水滴を降らす曇り空を恨めしそうに見上げ思わずそうつぶやいた倫子は、買い物袋を左脇に抱えたまま足早に軒下目掛けて歩を進めた。

いま現在彼女が居住しているのは、武蔵ヶ丘市郊外に建つ古びた^{アパート}共同住宅であつた。

木造モルタル二階建て。風呂なし。トイレは共同という、いまの世にまだこんなアパートがあつたのかと目を疑うほどの物件だ。

建てられてからは余裕で数十年が経過する。

その分家賃は激安であり、基本的には貧乏な学生向けに提供されるべき賃貸であると言っても過言ではあるまい。

事実、ここを住み処とする皆々の大半は、比較的近所にある国立^{キャンパス}大学へと通う苦学生たちであつた。

しかも、その全員が見るからにむさ苦しい男性諸氏ときている。

確かにわざわざこんなボロアパートを住居に選ぶ若い独身女性が存在するなどとは思えなかったから、それもまたやむを得ない事態ではあつたろう。

だからこそ、そんな環境下における倫子の存在は、あたかも時代錯誤遺物のごとき輝きを放っていた。

「掃き溜めに鶴」とは、まさにこのことを評する言葉以外の何ものでもあるまい。

そんな彼女がアパートの入り口である共同玄関を潜り靴を脱ぐと、

その目の前には黒光りする板張りの廊下がまっすぐに伸びていた。廊下の突き当たりには共同トイレの、そして左右にはそれぞれ三つずつの扉が設けられてある。

左右の扉は、すべてアパートの住人が居住する部屋への入り口だ。そして二階に昇るための階段は廊下の突き当たりを左に曲がったところに設けられ、玄関先からは直接見ることは出来なかった。

倫子は、廊下の左右にある都合六つの扉を無視したまま廊下を進んで階段を昇り、まっすぐ二階にある自室へと向かった。

彼女が借りている部屋は「二〇一室」と呼ばれていた。

それは二階の一番奥、ちょうど建物の西側角の部分に位置している。

風通しこそ良好なものの夕方には低い西日が強く差し込み、正直なところ余りいい環境であるとは言えない部屋であった。

とはいえ、並の男性をはるかに凌駕するほどに質実剛健を好む倫子にとって、そのコストパフォーマンスのよさは何ものにも代え難い魅力があった。

そんな「自分だけの城」に向かって軽快な足取りで階段を昇りきった倫子は、一階と同じくすんだ板張りの廊下へと到達した。

顔を右に向け廊下の先に視線を延ばす。

そこで彼女は、自室の前で膝を抱えて座り込むひとりの少女を発見した。

見るからに動きやすさを重視したシンプルな服装とポニーテールにまとめた髪の毛。

その少女が有する外見は、明らかに倫子の知るとある人物が持つそれであった。

「あら、真琴ちゃん」

まったく予想だにしていなかった来客の存在に、倫子は思わずその名を呼んだ。

声の中に驚きの成分が濃厚に含まれているのがはっきりとわかる。「どうしたの？ こんな時間に」

そう彼女に呼び掛けられた少女——沢渡真琴という名前を持つその娘は倫子の姿を認めるやいなやすくと立ち上がり、まるで立ち会いに臨んだ剣士のようにまっすぐな視線を向けてきた。

そして、その眼差しと同様に疑いような真剣さを秘めた言葉でもって彼女は告げた。

「ボクに、リンさんの強さを分けてください！」

倫子は真琴の全身から放たれた空気からただごとではない雰囲気を感じ取り、ひとまず彼女を自室の中へと招き入れた。

倫子が借りている部屋は畳敷きの六畳一間。

簡単な炊事場がある以外、そこにはほとんど設備らしきものが存在しない。

室内に目立つ家具などはパイプ式のベッドと小さなテーブル、それと古臭い箆笥ぐらいのものであり、普段から「女子力が欠乏している」と早苗に酷評されていた真琴の私室を圧倒するほど生活臭の感じられない空間であった。

おそらく倫子は、端からこの部屋に人を招き入れることなど考えてもいないのだろう。

とりあえず住めればいい。

そんな彼女の本音がいまにも聞こえてきそうな気配すらこの場には漂っていた。

そのせいなのであろうか。倫子はあたふたと慌てたような彼女らしからぬ素振りでテーブルを置きなおし、その上にふたり分の番茶を用意した。

来客向けの湯飲みをそもそも持たなかったものか、自身の分をコーヒークップで代用しているのが倫子らしいと言えば倫子らしいやり方であった。

その間、真琴は畳の上に正座したままじつと背筋を伸ばし、部屋の主が対座するのを待っていた。

足下に座布団がないことなど、まるで気にしていない様子であった。

「夜分、突然お邪魔して申し訳ありません」

ようやく真正面に着座した倫子は何ごとかを口にするよりも早く、真琴はそう告げてぺこりと小さく頭を下げた。

「今日は、リンさんにお話を聞いてもらいたくてここに来ました。よかつたらボクにリンさんの時間を少しください」

「それは構わないけど」

一方的な真琴のペースに飲まれまいとしてか、倫子はこの妹めいた女子高生に向かつてたしなめるようにこう言った。

「何かあつたのなら、それに関する詳しい話は聞かせてもらえるんでしょうね」

「それをいまからお話します」

既に意は決してあつたかのごとく、真琴は淡々と語り始めた。

それは高山と翔一郎との実戦教習があつた夜以降これまでの間に起きた出来事と、自身が先ほど理恵から聞いたむかし語りの内容すべてであつた。

意図した嘘や偽りなど、そこにはひと欠片も存在しなかった。

もちろん真琴も人間であるから、その語りたいこと語るべきことを残さず言葉に出来た訳ではなかつたのだらう。

しかし、それでも彼女は自らの記憶と表現力とを総動員して、向かい合う倫子に対し包み隠さずそれらを伝えた。

およそ語り部の感情や感想などは、そこに見出すことなど出来なかつた。

それは、例えるなら事実のみを上司に報告する官僚文書のような口振りだと言つていい。

倫子にとり、いささか羨望の念を抱かせるほど色彩豊かな感情を持つ沢渡真琴という少女が見せたその態度。

直面したそれに明らかな戸惑いを感じた倫子ではあつたが、それでも顔色を変えることなく彼女は黙つて真琴の言葉を聞いていた。

おかしいな、と倫子が違和感を覚えたのは真琴の語りが中盤を迎えたあたりのことだつた。

真琴は、本当に事実のみを告げている。

普通なら、そこには相手に望む助言なり慰めなりを求める言葉が含まれていてもいいはずだ。

だがそのような物言いは、ここまでひとつたりとも彼女の口から放たれてはいない。

なぜだろう？

この目の前に座る少女は、自分に対して一体何をして欲しいがためにこんな真似をしているのだろうか？

体感したもののよりもはるかに短い現実時間を要しただけで真琴の発言は終了した。

その言葉の最後に到るまで、やはり彼女自身の感情の発露やこの件に関する意見の要求などがその口から放たれることはなかった。

倫子は思わず対応に窮した。

いま真琴が語った内容に対して意見を述べよと言うのならそうするし、助言を与えよと言うのならそうしよう。

でもそれらを真琴自身から求められていないこの状況下で、自分は一体全体何を話せばいいのやら。

倫子が困惑してしまうのも、まずは無理からぬ話であった。

「で、真琴ちゃん」

結局、倫子は最も妥当であると思われる言動でお茶を濁すこととした。

彼女は、発言者である真琴に向けてはつきりと問い質したのである。

倫子は言った。

「それをわたしに話して、あなたはわたしに何をして欲しい訳？」

「何をして欲しい訳でもありません」

それを受けた真琴が断言した。

「ただ、知っただけです」

それは、とても冗談を言っているように思えない口振りだった。改めて当惑の色を見せながら、倫子は小さく息をついた。それは

当然の反応であろう。

「悪いけど、それ愚痴にすらなっていないから」と、あきれ顔で倫子は告げる。

「どんなリアクション取ればいいのか判断に困るんだけどな」

尊敬の対象である倫子から面と向かってそう言われた瞬間、真琴は思わずうつと息をのんだ。

おそらく、ここで見せた自らの言動が他者からすると不整合の極みであったことを、ようやくこの時点で認識したのであろう。

「そうですね。言われてみれば、そのとおりでした」

あからさまな照れ笑いを浮かべて、真琴は思わず頭を掻いた。

その“頭を掻く”という仕草が翔一郎のそれと瓜ふたつであったことに、彼女はまったく気付いていない。

にやはは、いつものように歯を見せて笑った真琴はきちんと姿勢を正し、今度は明確な内容をもって倫子に問うた。

「リンさんがボクの立場なら、いまの状況を前にどんな行動を取りますか？」

「それは、今後真琴ちゃんが壬生さんにどう対処したらいいのかアドバイスをもらいたいってことかしら？」

「そう捉えてもらっても構いません」

「そうね」

小首を捻って倫子は告げた。

「わたしなら、そんな面倒臭いオトコ翔一郎のことはさっさと忘れて新しいパートナーを見付けなさいって勧めるけど」

「嫌です」

自ら求めたはずのその助言を、真琴はひと言の下に切って捨てた。「絶対に嫌です」

その揺るぐ余地などどこにもなさそうな真琴の発言を耳にして、たちどころに倫子は悟った。

そうか、これは「背水の陣」なのだ、と。

そう考えれば、今宵の真琴が見せているどこか奇妙な態度にもお

およその説明が付く。

この娘は自分の下を訪れるよりもひと足早く、多分河合理恵とかいう保険医から翔一郎の過去について話を聞き終えた時点で、もう自分が進むべき方向を明確に定めていたに違いない。

では、なぜいま彼女はこの場で自分と対峙しているのか。

それは、不退転の決意を胸にした真琴なりのケジメなのだ。

そして、彼女が一体全体誰に向かってそのケジメを付けようとしているのかと問えば、それはもちろん自分自身に対してだと答えるしかない。

そもそも「背水の陣」とは、「自らを後に引けないぎりぎりの状況に置き、決死の覚悟で全力をつくす」という意味合いを持つ。

その全力をつくすべき物事が具体的になんなのかを倫子は知り得る立場になかったが、それでも彼女はこの目の前にいる少女がある種の“戦い”に臨む意志を固めているのだと理解した。

断じて負けられない。

そういった凛々たる気迫が、彼女の瞳にみなぎって見える。

なるほど。真琴にとっていまの自分はそのために背負わねばならぬ“大河”なのだ、と倫子は断じた。

自らの退路、すなわち自分への甘えを断つために必要な明確極まりない“大河”

真琴は、彼女らしく不器用で、それでいてなんとも一直線な方法を用いていま自分自身を追い詰めようとしているのだ。

“勝つため”に。

そう、文字どおり“勝つため”にである。

そのことを確信した倫子は、思わず相好を崩し真琴の目を見た。
「なによそれ」

瞬時にして自らがすべきことを得心した倫子は、軽く笑いながら真琴に告げる。

「最初からわたしの意見なんて必要なかつたんじゃないの」
「やっぱりそうですか」

こちらもまた笑顔を返して真琴が言った。

「実はそうなんじゃないかって、自分でも思っていたんです」
「あきれた」

なで気味の倫子の肩が、脱力の余りすんと落ちる。

「それって、もう自分の中で決めていたことを、わざわざわたしに宣言しに来たってことよね」と言いながら、彼女は楽しそうに笑い低いテーブルの上に頬杖を付いた。

「まあ、真琴ちゃんらしいと言えば、真琴ちゃんらしいアクションだけ」

「すいません」

肩をすくめて真琴が謝罪を口にする。

倫子が突然話題を切り替えたのは、ちょうどその時であった。真琴に向かつて彼女は問うた。

「真琴ちゃんは、わたしが愛車に『MR-S』を選んだ理由って知っていたかしら？」

「いいえ」と答えて真琴は頭を左右に振る。

そして「ミッドシップレイアウトのライトウェイトスポーツだからですか？」と倫子に向けて聞き返した。

台車に重い荷物を積む際、前や後ろに寄せるより中央に載せたほうが安定するというのは、多くの人が経験則で知っていると思う。

その理屈にのっとり、クルマを構成する部品の中で最も重いエンジンを出来るだけ車体中央に配置することを目的として生まれたのがMR、すなわち「ミッドシップレイアウト」の思想だ。

広義の意味で「ミッドシップ」と言うと、それは前輪と後輪の間にエンジンが搭載されている形式を指すが、実際は運転席と後輪との間にそれが配されている場合がほとんどであった。

エンジンを居住スペース後方に持ってきたことで車内空間を大きく取れないMR車は、実用性という面で他の駆動方式に対し一歩も二歩も譲ってしまう。

しかしその一方で、フォーミュラマシンのすべてがミッドシップ

であることが物語るとおり、MRという形式はその優れた重量配分から極めてシャープなステアリングと高い限界領域とを同時にもちあわせてくれるのだ。

数寄者^{マニア}にとってはたまらない駆動方式であると断言してもいいだろう。

そして倫子の愛車『MR・S』は、日本市場で安価に入手することの出来るMR車の中では“最上^{ベストバイ}の商品”に位置するクルマであった。

それは「トヨタ自動車」という世界に冠たるメーカーが制作・販売していたことからわかるように、安価であるだけでなく機械的信頼性に長け、それでいて扱いやすい気性をも備えている。

確かにパワーという面では明らかに格落ちするクルマであったかもしれないが、その徹底した軽量化^{MR・S}が彼女に与えた運動性能は間違いなく高い評価を得てしかるべき代物に違いない。

真琴は、三澤倫子という女性が「MR・S」というクルマを自身の相棒に選んだ理由がそのあたりにあるのではないかと予想した。

なぜなら、本来競技者^{アスリート}たる者は自らが高みに登るため、使用する道具^{アイテム}の資質に対し滅多な妥協などしないものだからだ。

真琴にとって三澤倫子とは、中途半端な陸上選手だった自分よりもはるかに求道者^{ストイック}的な、ある意味で目標とすべき女性であった。

その“強さ”を突き詰めようとする姿勢は、憧れの対象ですらあった。

だからこそ、真琴は自分がそうあるべしという姿を投影した倫子の立場で推測を下した。

疑うべき要素は何もないとさえ思っていた。

だが、当の倫子はそんな真琴の予想をあっさりと否定した。彼女は言った。

「ひと目ばれだったのよ。わたしの」

そのひと言を聞いてあ然とする真琴の表情をいたずらっぽく眺めながら、倫子は語った。

「当時、まだ高校生だったわたしの眼に映った青色のオープンカー。それはもう一気にはれ込んだわ。ろくに試乗もしないで卒業と同時に即契約。いまから思えばかなり無謀な話よね」

そして、愛車が出来れば当然のごとく走りたくなる。

当時は“道を攻める”なんて考えはなくて、普通にのんびりドライブするのがあたりまえだった。

本格的にクルマへはまったのは、それから随分経つてのことよ。

後先考えず勢いだけで仕事を辞めて、夜のアルバイトをしながら自動車整備の専門学校に通い、「MR-S」にすべてを注ぎ込む毎日が始まった。

峠を攻めだしたのはその頃だったかな。

案の定、それまで友だちだった面々からは呆れられ、親からはすっぱりと縁切りされたわ。

でも、後悔だけはしていない。

だって、自分が求めたものがこの手に入ったのだもの。

「人生つてさ、そんなものじゃないかな」

ふと真顔になった倫子が言った。

「損得だけで選んだ人生を嫌々歩くよりも、苦労するけど自分の脚で自分の決めた道を歩く方が全然楽しいと、少なくともわたしは思ってる」

「真琴ちゃんはどう思うかしら？」という質問で台詞を締め括った倫子に対し、真琴は完全な同意の意思を示して答えた。

「そのとおりだと思います」

彼女は言った。

しかしその直後、やや弱々しく否定的な発言をも付け加える。

「でも、なかなか思うとおりにもいかないんですよね。自分が選んだものが、本当に自分の求めているものかどうかの保証もない訳で――」

「そんな時はね」

聞きようによっては弱音にも取れる真琴の言葉に割り込むように、

倫子はきっぱりと言いつた。

「チューニングしちゃうのよ」

「チューニング……ですか？」

「そう」

ぱちりと右眼をウィンクさせて、ふたたび倫子は語り出した。

そもそも「チューニング」という言葉は、機械や道具を目的に合わせて調整するという意味を持つ。

これが自動車に関しては、しばしばパワーアップなどの「カスタム」、すなわち「改造」と同義に受け止められる訳なのだが、本来「チューニング」には「改造」という意味は存在しない。

あえて日本語に直すなら「同調」や「調整」という言葉が当てはまるつか。

その意味するところには、数値で表現される絶対的な性能を求めるのではなく、あくまで使用者が納得する感覚に近付けることこそを最終目標とする思想が明確に織り込まれていた。

倫子は自身の愛車「MR-S」を例にあげ、目の前で好奇心いっぱい

の眼をしている真琴に向かって自説を述べた。

「『MR-S』はね、決して速さを求めるクルマじゃない。もし純粹にわたしが速さをクルマに求めていたら、もっと有利な選択肢があつたことに間違いはないわ。実際、彼に注ぎ込んだお金があればずつと高性能なクルマが新車で買っていた訳だし」

でも、わたしは「MR-S」にこだわった。

足回りは総取っ替え、軽量化はこれでもかとかばかりに施し、しいにはエンジンそのものまで載せ替えたわ。

非効率なのはわかっている。

多分、そんなこだわりはモータースポーツの世界じゃ真っ先に排除すべき考えなんだと自分でも思う。

「だけど、わたしはそうしなかった。その道を選ばなかった。なぜならそれは、わたしが『MR-S』にぞっこんだったから」

当然、あのこを手放すなんて選択肢、わたしの中にはこれっぽつ

ちもありはしなかった。

とはいえ、当時の彼がわたしのドライビングに^{MR・S}応えてくれなかったのも明らかな事実。

つまり、このままではわたしと「MR・S^{かれ}」とが同じ道を歩いていくのは不可能になってしまふという瀬戸際だったのよ。

もちろん、わたし自身が走りを諦めるなんて路線は、言うまでもなく最初から考慮の外だった。

「現状をおとなしく受け入れることも出来ず、さりとて相方を捨てて自分の道に行くことも嫌となると、もう成すべきことはひとつしかなかったわ」

力強く倫子は言い切った。

「だからわたしは、相方の方を自分に合わせて“調整”^{チューニング}しちゃったという訳」

そこまで熱弁を振るった倫子は、ひと呼吸置いて手元の番茶をひとくちすすった。

そして、そのことにより自らを落ち着かせたのか、静かな口調に一転して真琴に告げる。

「それは、人間の世界でも同じことが言えるんじゃないかしら」と。

倫子はこの時、自分なりの言葉で真琴を激励したつもりであった。いや、むしろ尻を叩いたと言った方が適切かもしれない。

倫子は真琴の真意を理解した瞬間、自分がこの娘に求められている役割がまさにそれであるのだと自覚したのだった。

沢渡真琴という拳銃の安全装置を解除して、その引き金^{トリガー}を引くこと。

倫子は、彼女と翔一郎との関係を自身と愛車とのそれに例えることで、自らの役割を果たそうと試みた。

ひょっとしたらそれは、ややあいまいな例えであつたかもしれない。

しかし倫子が目論んだその企みは、今回完全な成功をもって報い

られた。

「ありがとうございます！」

倫子の言葉が終わると同時に、真琴はがばつと身体ごと倫子に向かつて一礼し、目の前に置かれた茶碗の中身を一気に飲み干した。

我が意を得たりとでも言いたそうな表情を浮かべながらその眼をきらりと輝かせる。

彼女は言った。

「ボクが間違っていました。いまのリンさんの言葉でそれがはっきりわかった気がします」

そして楽しげにその様子をうかがっている倫子に向けて、真琴は決定的なひと言を言い放つ。

「ボク、いまから『壬生翔一郎』の首根っこをひっつかまえてきます！」

そんな言葉を置き残し跳ね起きるように立ち上がった彼女は、文字どおり脱兎のごとき勢いで倫子の部屋から飛び出していった。

けたたましい足音を轟かせながら廊下を抜け階段を駆け下った真琴がアパートの玄関を後にする姿を、ひとり残された倫子は自室の窓からのんびりと見下ろしていた。

時を置かずに真琴の愛車、EF-7「CR-X」が軽快な排気音エクゾーストノートを放ちながら眼下の公道を疾走していく。

なんだか羨ましいわね、と倫子は思った。

わたしにもあの娘と同じくらいエネルギーがあつたら云々、などという他愛ない妄想にしばしの間浸りきる。

「もしかしたら」

ふと、倫子はひとりつぶやいた。

「敵に塩を送っちゃったのかしら、わたし」

そして小さく自嘲した彼女は、既にいずこへともなく走り去っていった真琴に向けて心の中で応援の言葉を贈りながら、自室の窓をゆっくりと閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1254z/>

ミッドナイトウルブス

2012年1月12日21時55分発行